

一般国道9号（青谷・羽合道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

鳥取県東伯郡泊村

石 脇 第 3 遺 跡

— 森末地区・操り地区 —

石 脇 8 ・ 9 号 墳

寺 戸 第 1 遺 跡

寺 戸 第 2 遺 跡

石 脇 第 1 遺 跡

1998

財団法人 鳥取県教育文化財団

建設省 倉吉工事事務所

一般国道9号(青谷・羽合道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 I

鳥取県東伯郡泊村

石 脇 第 3 遺 跡

— 森末地区・操り地区 —

石 脇 8 ・ 9 号 墳

寺 戸 第 1 遺 跡

寺 戸 第 2 遺 跡

石 脇 第 1 遺 跡

1998

財団法人 鳥取県教育文化財団

建設省 倉吉工事事務所

序

泊村は、自然環境にも恵まれ、また、丘陵地には多くの埋蔵文化財が存在しています。なかでも、小浜地内にある池ノ谷第2遺跡では、昭和初期に古式の銅鐸が、国内では数例しか確認されていない銅製舌を伴って出土しています。また、石脇地内にある石脇2号墳（尾尻古墳）からは、仿製斜線獣帯鏡1面が出土しているなど、泊村内には当時の歴史を考える上で大変貴重な資料があります。

当財団では、建設者の委託を受け、「一般国道9号（青谷・羽合道路）改築工事に伴う発掘調査」として、平成8及び9年度の二か年にわたり、石脇第3遺跡森末地区をはじめ計8遺跡を調査しました。

その結果、古代交通関係の遺構が出土した石脇第3遺跡森末地区、壺形埴輪が多数出土した石脇8号墳、朝鮮半島との交流が考えられる石脇第1遺跡など、大変貴重な遺跡を調査することができました。

今回、これらの調査成果を報告書にまとめることができましたが、本報告書が教育および学術研究のため広く活用され、郷土の歴史を解き明かしていく一助になればと期待するとともに、文化財に対する理解や認識がより深まり、その成果が長く後世に伝えられれば幸いです。

最後に、建設省倉吉工事事務所ならびに交通の不便な所にもかかわらず調査に参加して下さった地元の方々をはじめ、ご協力いただいたの方々に対し、心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成10年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団
理事長 田 淵 康 允

序 文

建設省が管理する一般国道9号は、京都市を起点として福知山を経由し、蒲生峠から山陰地方へ入り、日本海に沿って鳥取・島根両県を西走し、山口県下関に至る延長約609kmの路線であり、山陰地方の産業・経済活動の動脈として大きな役割を果たしています。

このうち建設省倉吉工事事務所では、東伯郡泊村から米子市（鳥取・島根県境）まで76.4kmを管理しており、各種の道路整備事業を実施しています。その中の一つに東伯郡羽合町及び泊村地内において、将来の国土開発幹線道路として、当面活用できる機能を有する高規格な自動車専用道路である青谷・羽合道路の整備を進めています。

羽合工区は、泊村原地内にてインターチェンジにより現国道9号及び（主）倉吉青谷線とアクセスし、羽合町長瀬にてインターチェンジによって北条道路一般部と一部アクセスしますが、途中東郷池が見渡せる位置にサービスエリアが予定されており延長6kmの県中部地方で初めての高規格道路で、昭和61年度に国道9号バイパス事業として事業に着手しましたが、63年度に高規格な機能を持たすように構造変更を行い、同年用地買収に着手しました。平成2年度からは、羽合高架橋下部工事に着手し、平成4年度に下部工を完了し、上部工に着手しました。平成9年度は、泊高架橋下部工事に着手し、羽合町宇野地区から、泊村宇谷地区までの改良工事を促進します。

このルートには、全部で10か所の古墳・散布地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づき文化庁長官へ通知した結果、事前に発掘調査を行い、記録保存を行うこととなりました。このうち泊村地内では、石脇第3遺跡森末地区、同操り地区、寺戸第1遺跡、寺戸第2遺跡、石脇第1遺跡、小浜ワラ畑遺跡、小浜小谷遺跡、池ノ谷第2遺跡について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘委託契約を締結し、鳥取県教育委員会の指導のもとに発掘調査が行われました。

本書は、この調査結果に学術的な考察を加え、「記録」として保存するためにまとめられたものです。この貴重な「記録」が文化財に対する認識と理解を深めるため、並びに教育及び学術研究のために広く活用されることを期待するとともに、建設省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持っていることに御理解いただければ幸に存じます。

おわりに、事前の協議をはじめ現地での調査から報告書の編集に至るまで、ご協力いただいた鳥取県教育委員会及び財団法人鳥取県教育文化財団の関係各位のご尽力に対し感謝いたします。

平成10年3月

建設省 倉吉工事事務所長
西 田 和 昭

例 言

1. 本書は、一般国道9号(青谷・羽合道路)改築工事に伴う、鳥取県東伯郡泊村石脇字森末547-1、552-1、552-2、553-2に所在する石脇第3遺跡森末地区、同石脇字寺戸503-1、505-1、506-1に所在する寺戸第1遺跡、同石脇字寺戸513-1、石脇字久塚298、299-1、305に所在する寺戸第2遺跡、同石脇字野羅205-1、210-1、211他6筆に所在する石脇第1遺跡、同石脇字操り753-1、753-2、758-7、小浜字濱山691-1他4筆に所在する石脇第3遺跡操り地区の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、建設省中国地方建設局の委託により、財団法人鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター中部埋蔵文化財青谷・泊道路調査事務所が平成8年度から平成9年度にかけて行った。
3. 石脇第3遺跡操り地区内に立地する、石脇8号墳は周知の古墳であるが、石脇9号墳は新発見のため古墳群一連の名称をつけた。
4. 本報告書で示す標高は、基準点ABM1のH=51.576m、BBM1のH=32.604m、BBM2のH=63.528m、KBM6のH=67.690mを起点とする標高値を使用し、方位は磁北を示す。X、Yの数値は国土座標第V系の座標値である。
5. 本報告書に記載の地形図は、国土地理院発行の1/50000地形図「青谷・倉吉」、泊村1/5000地形図「地区再編農業構造改善事業樹立現況平面図1」を使用した。
6. 報告書の作成は、調査員の討議に基づくものである。報告書本文については、調査員が協議のうえ分担して執筆し、執筆担当者名を目次・文末に記載した。
遺構図の浄写は、中部埋蔵文化財青谷・泊道路調査事務所、遺物の実測・浄写は、鳥取県埋蔵文化財センターで行った。
遺構・遺物写真は発掘担当調査員が撮影した。
本書の編集は牧本・原田・八峠が行った。
7. 遺構実測は基本的に調査員が行ったが、調査前および最終の地形測量については、測量コンサルタント会社に委託して行った。
8. 平成8年度石脇第3遺跡操り地区SX03出土の人骨の取り上げ・鑑定を鳥取大学医学部井上晃孝助教授にお願いしたところ、多忙にも関わらず御寄稿いただいた。
9. 寺戸第2遺跡、石脇第3遺跡操り地区、石脇第1遺跡出土炭化材の樹種同定を、鳥取大学農学部古川郁夫教授にお願いしたところ、多忙にも関わらず御寄稿いただいた。
10. 石脇8号墳出土埴輪および石脇第1遺跡出土初期須恵器、土師器の胎土分析を奈良教育大学三辻利一教授にお願いしたところ、多忙にも関わらず御寄稿いただいた。
11. 遺跡内出土石器の石材鑑定を鳥取大学赤木三郎名誉教授、山名巖氏にお願いした。
12. 寺戸第1遺跡、寺戸第2遺跡、石脇第3遺跡操り地区、石脇第1遺跡の¹⁴C年代測定を京都産業大学理学部山田治教授などに委託した。
13. 出土遺物、図面、写真等は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されているが、出土遺物は将来、泊村教育委員会に移管する予定である。
14. 現地調査および報告書の作成に当たって、下記の方々に御指導・御協力して頂いた。

足利健亮 池田満雄 稲田孝司 岩本次郎 上原真人 植野浩三 内田律雄 大谷晃二 小田和利
亀田修一 川上昭一 岸田哲夫 木本雅康 木下良 小池信彦 真田廣幸 矢道年弘 杉谷愛象
關川 妥 高橋美久二 田中義昭 中野知照 西尾克己 錦織 勳 丹羽野裕 根鈴智津子 根鈴輝雄
藤本隆之 前田義人 松之倉文雄 松本美佐子 松山智弘 木瀬正恒 森 郁夫 守岡正司 山崎純男
吉村正親 渡辺貞幸 和田晴吾

(敬称略)

凡 例

1. 発掘調査時における遺構番号と報告書記載の遺構番号は、基本的に一致するが、以下のものは変更したものである。

石碕第3遺跡森末地区

調査時	報告書	調査時	報告書	調査時	報告書
S B02	S B02-05	S B03	S B06	S B04	S A01-07

石碕第3遺跡掃子地区

調査時	報告書	調査時	報告書
S X06 ⁽¹⁹⁹⁶⁾	S X04	S X07 ⁽¹⁹⁹⁶⁾	S X05

寺戸第1遺跡

調査時	報告書	調査時	報告書	調査時	報告書
S I01	S S05	S I02	S I01	S I03	S I02
S I04	SS06・SS04				

寺戸第2遺跡

調査時	報告書	調査時	報告書	調査時	報告書
S S03	S I08	S K05	S I09	S K14	S K05

なお、竪穴住居跡及び孤立柱建物跡のビット番号は、調査時のものから変更したものがある。

2. 本報告書における遺構記号は次のように表す。

S I：竪穴住居跡 S B：孤立柱建物跡 S K：土坑・土壌 S D：溝状遺構 S S：段状遺構

S A：横列 S X：埋奉施設 P：柱穴・ビット

3. 本報告書における実測図は下記の縮尺で掲載した。

- (1)遺構図-竪穴住居跡：1/60、孤立柱建物跡：1/60、土坑・土壌：1/20・1/40、溝状遺構：1/60・1/80・1/100・1/160
段状遺構：1/60・1/80、ビット群：1/60・1/80・1/100、床面・ビット遺物出土状況：1/10・1/20
土器溜まり：1/20、埋奉施設：1/40、古墳：1/150・1/200、主体部：1/40
- (2)遺物実測図-土器：1/3・1/4・1/6、金属製品：1/2・1/3、石器：1/1・1/3・1/4・1/8、玉製品：1/1、
古銭：1/1・1/2

4. 遺構の測定値のうち、ビットの規模は(長軸×短軸-深さ)cmで表した。竪穴住居跡の規模は、壁溝を除いた床面の規模である。古墳墳丘の規模は、墳頂(縮部)までの計測値である。

5. 遺構図における表示は以下のとおりである。

●：焼土、■：貼床、□：焼土、■：炭化物、■：粘土、■：礫
●：土製品、△：金属製品、□：石製品、□：玉製品、□：炭化材、□：スラグ

6. 本報告書における遺物記号は次のように表す。

Po：土器・土製品、S：石器、F：鉄製品、J：玉製品、B：銅製品、C：古銭

7. 土器実測図のうち、縄文土器、弥生土器、土師器は断面白抜き、須恵器、陶磁器は断面黒塗り、瓦質土器は網かけで表現した。

遺物実測図中における記号は以下のとおりにする。

→：ケズリの方向(砂粒の動きで判断した)、-----：擦り範囲、——：敲打範囲、

■：赤色塗彩、■：敲打面、■：擦り面・砥面、■：炭化物、■：黑色処理
床面・ビット内出土遺物には、遺物番号の前に●印をつけた。

8. 遺跡名には略号を用い、石碕第3遺跡森末地区=I W 3、石碕第3遺跡掃子地区=I W 3 k、寺戸第1遺跡=I T D 1、寺戸第2遺跡=I T D 2、石碕第1遺跡=I W 1とした。

遺物には、遺跡名略号、地区名、遺構名もしくはグリッド名、取り上げ番号、取り上げ年月日を基本的に明記した。実測した遺物については、実測者番号をシールに記し、それを個体ごとに貼り付け、実測原因にもその番号を記した。

9. 遺物観察表については以下のとおりとする。

- (1)法量は、土器については基本的に口径、器高、胴部最大径、底部径を記載した。石器、鉄器及び玉製品については基本的に最大長、最大幅、最大厚、重さを記載した。その他の計測値については、その都度計測位置を記載した。また、実測の際に復元した計測値には数値の前に※印、残存値は同様に△印を付した。
- (2)手法の欄に記載されている成形、調整及び施文の方向は、実測図で表された方向である。
- (3)石碕第3遺跡掃子地区のT、S、P、は、SITE IIで取り上げた遺物番号である。

10. 文章中で触れる土器形式名及び年代(年代観)は、縄文時代については『縄文土器大観』、弥生時代後期から古墳時代中期の弥生土器及び土師器については南谷大山編年、古墳時代中期から奈良及び平安時代の須恵器については陶色田辺編年を参考にした。

目 次

序	文	
序	文	
例	例	
目	次	
第1章	調査の概観	
第1節	調査に臨む概観	教本 1
第2節	調査の経過と方法	教本 4
第3節	調査体制	原田 4
第2章	位置と環境	
第1節	地理的環境	八神 8
第2節	歴史的環境	岩崎 7
第3章	石籠第1遺跡調査地区の調査	
第1節	調査の概要	教本 10
第2節	壘穴住居跡	原田 教本 17
第3節	竪立柱建物跡	原田 教本 24
第4節	溝	原田 教本 26
第5節	土坑・土壌	井上 長尾 原田 教本 43
第6節	溝状遺構	原田 教本 54
第7節	段状遺構	教本 65
第8節	ピット群	井上 岩崎 72
第9節	遺構外遺物	岩崎 76
第4章	石籠第3遺跡横り地区、石籠第1・2号墳の調査	
第1節	調査の概要	原田 教本 76
第2節	平成8年度調査結果	
1.	石籠1号墳	井上 岩崎 原田 80
2.	壘穴住居跡	井上 108
3.	土坑・土壌	井上 岩崎 原田 109
4.	溝状遺構	井上 岩崎 111
5.	ピット群	岩崎 116
6.	遺構外遺物	岩崎 118
第3節	平成9年度調査結果	
1.	壘穴住居跡	教本 123
2.	竪立柱建物跡	井上 126
3.	土坑・土壌・石積遺構	井上 教本 126
4.	溝状遺構	井上 教本 132
5.	段状遺構	井上 135
6.	ピット群	井上 136
7.	石籠1号墳	教本 136
8.	遺構外遺物	教本 142
第5章	中戸第1遺跡の調査	
第1節	調査の概要	教本 143
第2節	壘穴住居跡	教本 146
第3節	段状遺構・竪立柱建物跡	教本 八神 148
第4節	土 坑	教本 八神 153
第5節	ピット群	教本 八神 165
第6節	溝状遺構	長尾 169
第7節	溝状遺構	八神 172
第8節	石 列	教本 172
第9節	土器溜まり	八神 173
第10節	遺構外遺物	八神 175
第6章	中戸第2遺跡の調査	
第1節	調査の概要	教本 183
第2節	壘穴住居跡	長尾 原田 教本 八神 184
第3節	段状遺構	長尾 教本 八神 223
第4節	土坑・土壌	井上 岩崎 長尾 原田 教本 八神 228
第5節	ピット群	井上 岩崎 237
第6節	遺構外遺物	教本 242
第7章	石籠第1遺跡の調査	
第1節	調査の概要	八神 248
第2節	壘穴住居跡	井上 岩崎 教本 八神 251
第3節	土 坑	八神 261
第4節	段状遺構	井上 八神 252
第5節	溝状遺構	教本 八神 256
第6節	溝 列	八神 260
第7節	ピット群	八神 265
第8節	遺構外遺物	八神 302
第8章	遺構・遺物の検討	
第1節	古墳時代の土器について	教本 八神 304
第2節	古墳時代墓郭の概観	岩崎 309
第3節	石籠8号墳出土土器について	原田 315
第4節	古代の遺構について	八神 318
第5節	鳥取県出土土器の分類と土器について	八神 319
註・参考文献		321
むすびにかえて		348
遺物観察表		322
特録1	石籠8号墳出土土器の炭素X線分析	奈良教育大学 三辻一男 343
特録2	石籠8号墳埋没内埋蔵品について	パリア・サーヴェイ株式会社 351
特録3	沿岸石籠第1遺跡横り地区S×E遺構出土土器	鳥取大学医学部 宇上長生 352
特録4	中戸第2遺跡出土土器材の形態測定結果	鳥取大学医学部 吉川英夫 354
特録5	中戸遺跡の ¹⁴ C年代測定結果	京都産業大学理学部 山田 治 354
特録6	石籠第1遺跡出土土器の炭素X線分析	奈良教育大学 三辻一男 353
特録7	放射性炭素年代測定結果報告書	株式会社 古墳研究所 357
特録8	石籠第1遺跡及び第3遺跡から出土した炭化材の附屬	鳥取大学農学部 吉川英夫 358
特録9	石籠第1遺跡出土土器の調査	日立金属株式会社社会研究所 和瀬博樹 358

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

山陰地方では、国道9号線の交通混雑緩和及び将来の国土幹線道路整備として、山陰自動車道の整備事業が行われている。このうち、鳥取県中部地域の青谷・羽合道路は、泊村原のインターチェンジから青谷町青谷のインターチェンジ間15.6kmの自動車専用の高規格道路である。

計画地区とその周辺は、石鷗地区においては周知の石鷗第1遺跡、石鷗第3遺跡、寺戸第1遺跡、寺戸第2遺跡が、小浜地区には周知の小浜ワラ畑遺跡、小浜小谷遺跡、小浜千速遺跡、池ノ谷第2遺跡などがあり、遺跡が密集する地域であるため、建設に先立ち、計画地内の遺跡及び遺構の広がりを確認する必要性が生じた。そして、平成6から平成8年度に亘って泊村教育委員会によって、国庫補助事業として各丘陵上を中心に試掘調査が行われ、各遺跡で遺構及び遺物が検出された。

この結果を受け、建設省中国地方建設局（倉吉工事事務所）は、鳥取県教育委員会文化課と協議し、文化財保護法第57条の3に基づく通知を行った上、文化庁長官の指示により財団法人鳥取県教育文化財団に記録保存のための事前調査を委託した。これにより、当財団が文化財保護法第57条に基づく発掘調査届を提出し、文化庁長官から発掘調査実施の指示を受けたので、中部埋蔵文化財青谷・泊道路調査事務所が、発掘調査を担当することとなった。

平成8年度は、石鷗第3遺跡森末地区4762.4㎡、寺戸第1遺跡1806㎡、寺戸第2遺跡5450.6㎡、石鷗第1遺跡4127.6㎡を調査する予定であった。このうち、石鷗第1遺跡は用地買収の進捗状況を勘案し、石鷗第3遺跡掘り地区の一部4215㎡に振替えとなり、発掘調査面積も、石鷗第3遺跡森末地区が5244㎡、寺戸第1遺跡が1590㎡、寺戸第2遺跡が4540㎡、石鷗第3遺跡掘り地区の一部が4590㎡に変更となった。

平成9年度は、石鷗第1遺跡4128㎡、石鷗第3遺跡掘り地区の残りの部分4143㎡、小浜千速遺跡3900㎡、池ノ谷第2遺跡4193㎡を調査する予定であった。このうち、小浜千速遺跡の調査の年度内実施が困難となったために、急遽小浜ワラ畑遺跡2509㎡、小浜小谷遺跡512㎡に振替えになり、発掘調査面積も、石鷗第1遺跡3929㎡、石鷗第3遺跡掘り地区4623㎡、小浜ワラ畑遺跡2699㎡、小浜小谷遺跡602㎡、池ノ谷第2遺跡4473㎡に変更となった。

なお、平成9年度調査地のうち小浜ワラ畑遺跡、小浜小谷遺跡、池ノ谷第2遺跡については、鳥取県教育文化財団調査報告書55を参照されたい。

(牧本)

第2節 調査の経過と方法

各調査地は、丘陵上及び丘陵斜面に立地し、また、周辺は耕作地となっているため、必要に応じて排土等が流失しないよう、工事範囲内に土留め柵を設置した後調査に取りかかった。排土は、ベルトコンベヤー・重機によって調査区外へ搬出し、一部の排土を、ダンプで場外搬出した。

平成8年度は、石鷗第3遺跡森末地区、寺戸第1遺跡、寺戸第2遺跡、石鷗第1遺跡の順で調査を行う予定であったが、諸般の事情から石鷗第1遺跡の調査は平成9年度に延期されることになり、急遽石鷗第3遺跡掘り地区の一部を調査することになった。よって、調査地区は石鷗第3遺跡森末地区、寺戸第1遺跡、寺戸第2遺跡、石鷗第3遺跡掘り地区となり、調査進行上、寺戸第1遺跡及び石鷗第3遺跡掘り地区は同時並行して調査を行なった。

石鷗第3遺跡森末地区では、調査前地形測量及びラジコンヘリコプターによる調査前写真撮影を業者委託した後、調査区を国土座標軸に載るよう10mグリッドに区画し、基準杭を設定した。その結果、南北軸は西から1～12、東西軸は南からA～Kとなった。グリッド名は、東西南北軸の交点の北東側の杭の名称をとって呼称することとし、座標はA1杭（X：-54.390km、Y：-33.860km）、K11杭（X：-54.280km、Y：-33.760km）となった。

調査は、重機による表土剥ぎ作業を4月4日から5月13日にかけて行い、検出作業は4月10日から、表土剥ぎ作業が終了した部分から行った。

その結果、古代交通関連施設と思われる遺構を検出した。その他に縄文時代と考えられる落とし穴7基、弥生時代後期から古墳時代中期の竪穴住居跡4基、奈良時代の竪穴住居跡1基、古墳時代中期の土坑1基、古墳時代終末期の土坑1基、中世の土坑1基、中世の段状遺構3基、中世の掘立柱建物跡2基が検出された。

この地区の発掘作業は8月1日に終了し、その後調査後地形測量を業者委託し、8月7日にすべて終了した。

石脇第3遺跡掘り地区では、調査前地形測量及びラジコンヘリコプターによる調査前写真撮影を業者委託した後、調査区を国土座標軸に載るように10mグリッドに区画し、基準杭を設定した。その結果、南北軸は西から1～13、東西軸は南からA～Gとなった。グリッド名は、他地区と同様に東西南北軸の交点の北東側の杭の名称をとって呼称することとし、座標はA1杭(X: -54.260km, Y: -33.820km)、E13杭(X: -54.220km, Y: -33.700km)となった。

調査は、重機による表土剥ぎ作業を7月17日から7月29日にかけて行い、検出作業は重機表土剥ぎと並行して7月17日から、石脇8号墳丘部分から行った。

その結果、縄文時代と思われる落とし穴2基、古墳時代後期の全長約30mの前方後円墳である石脇8号墳、時期不明の竪穴住居跡1基、溝状遺構5条、土坑及び不明土壌計4基を検出した。

この地区の発掘作業は10月17日に終了し、その後完掘状況写真撮影、調査後地形測量を業者委託し、10月28日にすべての作業を終了した。

寺戸第1遺跡では、調査前地形測量及びラジコンヘリコプターによる調査前写真撮影を業者委託した後、同様に調査区全体を10mグリッドに区画し、基準杭を設定した。その結果、南北軸は西から1～6、東西軸は南からA～Fとなった。グリッド名は、東西南北軸の交点の北東側の杭の名称をとって呼称することとした。座標はA2杭(X: -54.620km, Y: -34.060km)、F6杭(X: -54.570km, Y: -34.020km)となった。

調査は、重機による表土剥ぎ作業を6月19日から7月4日にかけて行い、検出作業は7月15日から行った。

検出作業の結果、古墳時代中期の掘立柱建物跡1基、段状遺構1基、奈良時代から平安時代にかけての竪穴住居跡2基、段状遺構5基、掘立柱建物跡3基、土坑6基、集石遺構3か所、溝状遺構5条、土器溜まり2か所、その他に石列1基、ピット群2か所を検出した。

この地区の調査は、9月27日に現地調査・調査後地形測量を終了し、調査区完掘状況写真撮影を12月4日に行いすべての作業を終了した。

寺戸第2遺跡では、調査前地形測量及びラジコンヘリコプターによる調査前写真撮影を業者委託した後、調査区を国土座標軸に載るように10mグリッドに区画し、基準杭を設定した。その結果、南北軸は西から1～12、東西軸は北からA～Kとなった。グリッド名は、他地区と同様に東西南北軸の交点の北東側の杭の名称をとって呼称することとし、座標はA3杭(X: -54.730km, Y: -34.150km)、K11(X: -54.630km, Y: -34.070km)となった。

調査は、重機による表土剥ぎ作業を7月8日から9月26日にかけて行い、検出作業は表土剥ぎ作業が終了した部分を、9月3日から12月7日にかけて行った。

その結果、縄文時代の土坑3基、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡9基、土坑3基、段状遺構4基、その他に時期不明の土坑7基、ピット群3か所を検出した。

この地区の発掘作業は12月7日に終了し、その後完掘状況写真撮影、地形測量を業者委託し、12月18日にすべての作業を終了した。

平成9年度は、石脇第1遺跡、石脇第3遺跡掘り地区の一部、小浜千速遺跡、池ノ谷第2遺跡を調査する予定であったが、用地買収の関係上石脇第1遺跡、石脇第3遺跡掘り地区の一部、小浜ワラ畑遺跡、小浜小谷遺跡、池ノ谷第2遺跡に変更となった。

石脇第1遺跡では、調査区中央に農道が走っており、新たに迂回路を用地内に設置しなければならなかった。このため、調査前地形測量を業者委託した後に迂回路を設け、調査に取りかかった。調査区全体は、国土座標に

載るように10mグリッドに区画し、基準杭を設定した。その結果、南北軸は西から1~10、東西軸は南からA~Jとなった。グリッド名は、東西南北軸の交点の北東側の杭名をとって呼称した。座標は、A1杭(X:-54.890km、Y:-34.390km)、J7杭(X:-54.800km、Y:-34.330km)となった。

調査は、4月8日から5月6日にかけて重機による表土剥ぎ作業を行い、検出作業は4月9日から6月14日にかけて行った。

その結果、竪穴住居跡14基、段状遺構4基、土坑1基、溝状遺構2条、欄列2基を検出した。このうち、竪穴住居内から陶質土器(高坏)、須恵器模倣土師器(應彩土器)が出土し、集落の性格、交易関係を考える上で大変貴重な資料を提供できた。

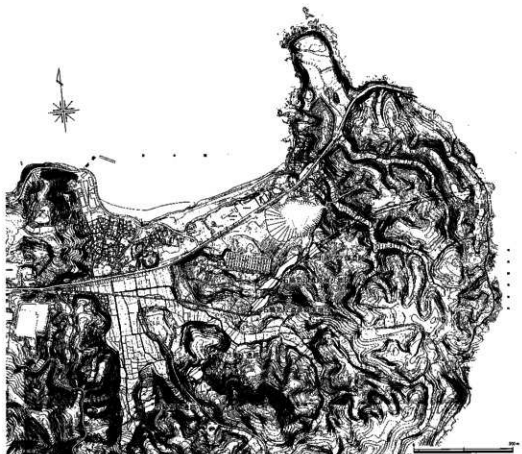
この地区の調査は、6月26日で現地作業を終了し、その後完掘状況写真撮影、地形測量を業者委託して7月4日ですべての作業を終了した。

石脇第3遺跡掘り地区のうち、平成9年度は前年度調査区の北東側部分が調査対象区となった。調査区全体を前年度同様国土座標に載るように10mグリッドに区画し、基準杭を設定した。その結果、南北軸は11~22、東西軸はG~Rとなった。グリッド名は、東西南北軸の交点の北東側の杭名をとって呼称した。座標は、G11杭(X:-54.200km、Y:-33.720km)、R22杭(X:-54.090km、Y:-33.610km)となった。

調査は、調査前地形測量・ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影終了後、重機による表土剥ぎ作業を5月6日から5月30日にかけて行い、検出作業を5月12日から7月23日にかけて行った。

その結果、弥生時代後期と思われる貯蔵穴2基、古墳時代前期の竪穴住居跡1基、古墳時代後期の円墳(石脇9号墳)1基、埋葬施設1基、時期不明の獨立柱建物跡1基、土坑3基、溝状遺構5条を検出した。

その後、完掘状況写真撮影及び地形測量を業者委託し、8月29日にすべての作業を終了した。(牧本)



挿図1 調査区位置図

第3節 調査体制

調査は、下記の体制で実施された。

1996（平成8）年度

○調査主体 財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 田淵 康允（鳥取県教育委員会教育長）
常務理事 森田 哲彦（鳥取県教育委員会次長）
事務局長 岩本 武夫

財団法人鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター

所長 宮谷 正信（鳥取県教育委員会文化課長）
次長 八木谷 昇

調整係

係長 久保穰二郎（県埋蔵文化財センター調査指導係長）

調査員 亀井 照人、小谷 修一

庶務係

主任事務職員 欠部 美恵、橋崎 康春

○調査担当 財団法人鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター中部埋蔵文化財青谷・泊道路調査事務所

所長 更田 怜治
主任調査員 牧本 哲雄、原田 雅弘、八峠 興
調査員 長尾 智明、岩崎 康子、井上 達也
整理員 小椋 美佳、清水 里美

1997（平成9）年度

○調査主体 財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 田淵 康允（鳥取県教育委員会教育長）
常務理事 森田 哲彦（鳥取県教育委員会次長）
事務局長 岩本 武夫

財団法人鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター

所長 古井 喜紀（県埋蔵文化財センター所長）
次長 八木谷 昇

調整係

係長 松田 潔

調査員 亀井 照人、小谷 修一

庶務係

主任事務職員 欠部 美恵、橋崎 康春

○調査担当 財団法人鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター中部埋蔵文化財青谷・泊道路調査事務所

所長 更田 怜治
主任調査員 牧本 哲雄、八峠 興
調査員 岩崎 康子、井上 達也
整理員 小椋 美佳

○調査指導 鳥取県教育委員会文化課、鳥取県埋蔵文化財センター、高橋美久二（滋賀県立大学）、
田中義昭（鳥根大学）

○調査協力 泊村、泊村教育委員会、建設省中国地方建設局倉吉工事事務所

○発掘調査・整理作業従事者

青地庄藏 秋久勝義 新 泰信 新 豊 足立実鈴 荒井啓一 生田敏江 井坂幸枝 石原清子
 石本敏子 市橋貴志子 井手尾ひさの 伊藤恵美子 伊藤博之 植田祐子 宇佐美玉恵 大嶋昌子
 大場 茂 尾川登津子 尾川美佐子 尾坂 忠 尾坂富美子 尾高千代子 小原富士子 表 明美
 加嶋福枝 加嶋三枝子 加嶋義則 勝田美登里 加藤やよひ 河口智津子 河口優子 河原義雄
 蔵常 正 蔵常芳子 蔵本重信 桑田範子 坂本俊和 桜井敏夫 佐々木瑞恵 嶋崎アツ子
 嶋崎久子 清水房子 進木和美 杉村秀吉 陶山勝利 陶山富恵 高野祥子 高浜とし子
 田中 進 田中恒代 谷本 登 谷本美智恵 津島時三 角田磨智子 津村重男 戸崎 文
 戸崎 巖 鳥飼 瞳 中田 都 中原千恵 中村まきえ 南條孝子 西村 巖 西水てる子
 西山 裕 野崎悦子 野島尚子 羽田政夫 浜口みち子 浜崎俊子 林 公通 林 八千代
 原田満子 福田弥千代 福永一明 福永俊輔 藤田広子 藤田泰人 古谷京子 堀 世美子
 前田重弘 真壁 均 牧田理恵 間谷貴子 松井久雄 松尾冊子 松下清敏 松田アイコ
 松田澄子 松田正己 松田八重子 松本敬子 光井芳子 村口いつ子 森 信季 森 福江
 森下美子 柳井厚子 山口良子 山崎 巖 山下清範 山下節子 山田美幸 山根 都 山本清子
 山本久美恵 山本礼二 安田成行 山田暉美 渡辺芳江

(五十音順、敬称略)

調査日誌抄

平成8年度	10月22日	石臨第3遺跡掘り地区ラジコンヘリコプターによる空撮	
4月10日	石臨第3遺跡森末地区調査開始		
5月13日	S S01、S D01を完掘、重機表土剥ぎ終了	11月7日	寺戸第2遺跡S S03完掘
5月24日	S D02、S K01・02を完掘	11月19日	寺戸第2遺跡S K04・06完掘
6月6日	S I01・02掘り下げ	12月4日	寺戸第2遺跡ラジコンヘリコプターによる空撮 写真撮影
6月20日	悪天候が続き作業中止が続く(～26日)	12月7日	寺戸第1・2遺跡現地説明会開催 平成8年度現地調査終了
7月1日	S D04・05検出、寺戸第1遺跡の重機表土剥ぎ開始(～19日)	平成9年度	
7月8日	寺戸第2遺跡の重機表土剥ぎ開始	4月9日	石臨第1遺跡調査開始
7月15日	寺戸第1遺跡調査開始、高橋美久二氏、百瀬正恒氏、現場を指導	4月14日	寺戸第1遺跡掘り・初期須恵器出土、S S01検出
7月16日	石臨第3遺跡森末地区ラジコンヘリコプターによる空撮	4月22日	S I02遺物取り上げ・隠形土師器出土
7月18日	石臨第3遺跡掘り地区調査開始	5月2日	S D01、S I06完掘
7月19日	台風接近のため作業中止、小池信彦氏来所	5月7日	石臨第3遺跡掘り地区重機表土剥ぎ開始
7月27日	石臨第3遺跡森末地区現地説明会開催	5月19日	石臨第1遺跡S I01・S I07炭化物出土
8月1日	寺戸第1遺跡S S01より製塩土器出土	5月27日	石臨第3遺跡掘り地区S I02検出・掘り下げ、 石臨9号墳検出
8月7日	石臨第3遺跡森末地区最終地形測量終了	6月9日	石臨第1遺跡S I07完掘、石臨第3遺跡掘り地区S I07炭化物多量出土
8月20日	石臨8号墳周溝内埴輪片等多数遺物出土	6月14日	石臨第1遺跡現地説明会開催(40名参加)
8月28日	鳥取県文化財保護審議会、稲田孝司氏、錦織勤氏、現場を視察	6月19日	石臨第1遺跡ラジコンヘリコプターによる写真撮影
9月3日	寺戸第2遺跡調査開始、厳しい残暑続く	6月27日	石臨9号墳より須恵器片多数出土
9月6日	石臨8号墳主体部検出	7月7日	悪天候が続き作業中止が続く(～11日)
9月19日	石臨8号墳ラジコンヘリコプターによる空撮	7月16日	石臨9号墳主体部・周溝・周溝内土壌完掘
9月25日	和田晴吾氏来所、寺戸第1遺跡最終地形測量終了	7月24日	石臨第3遺跡掘り地区ラジコンヘリコプターによる空撮
10月5日	石臨第3遺跡掘り地区現地説明会開催	9月29日	石臨第3遺跡掘り地区最終地形測量終了
10月9日	寺戸第2遺跡S I01・03より製塩土器出土		
10月18日	北原中学校文化祭遺跡発掘クラブ体験発掘		

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

今回調査の行なわれた東伯郡泊村は、鳥取県中央部にある東伯郡の東端に位置している。東は気高郡青谷町、西は東伯郡羽合町、南は東郷町に接し、北は日本海に面している。

泊村の地形は、平野部は総面積のわずか30%程で、海岸付近まで、標高100～300mの比較的低い山地がのびている。水田はわずかで、産業は漁業や畑作、果樹栽培が中心である。

泊の地名は、戦国時代に泊城の名がみえ、毛利方の拠点であったとされる。明治22年(1889)の町村制施行により、河村郡久津賀村、泊村、三橋村が成立、明治29年に郡の合併により東伯郡に所属、大正7年(1918)に三村が合併し、現村域となる。泊とは船の停泊する場所、港のことである。

泊付近の地質は、平地の大半は、沖積層と砂丘である。丘陵地帯は火山灰層におおわれ、溶岩台地地形を残している。その間を小浜川・石脇川・園川・原川・宇谷川の各小河川が流れ、尾根を分岐し、平地を造り出している。海岸は甲亀山が海に突出しており、その西側には泊砂丘が発達している。この砂丘は北からの強い季節風により形成されたもので、古砂丘と新砂丘がみられる。

主な産業は、平地が少ないため、梨の栽培と漁業に負うところが大きい。江戸時代には、農業の他に山林を利用したとうはぜ・こうぞ・みつまたなどの栽培や、浜を利用した製塩業が行われていた。明治年間には養蚕が盛んに行なわれた。二十世紀梨は、大正のはじめ頃に植え付けられ、現在も斜面を中心に広く栽培されている。泊港は、江戸時代から藩直轄の舟番所が置かれ、海産物資の水揚港として重視されてきた。

調査地周辺の地形は、いずれも南北にのびる丘陵尾根付近にある。今回調査の行なわれた石脇第3遺跡森東地区は、谷を見下ろす南東斜面にある。同遺跡操り地区は尾根頂部にあり、最高位の石脇8号墳からは、日本海を直下に望み、大山及び隠岐島を見渡すことができる。寺戸第1遺跡は、谷の向いの南東斜面にあり、寺戸第2遺跡はその尾根上に位置している。石脇第1遺跡は、北西向きの斜面に位置し、下を石脇川が流れている。

付近は、旧国名の伯耆の国の東端にあたり、因幡の国との国境である。石脇地内の平地の地割り、南北に軸を取る区画を基本としており、条里の名残りともみられる。また、寺戸第1遺跡の北西隣には久塚という字があり、周辺は古代山陰道笏賀駅の推定地とされている。東郷荘地下地中分絵図の中にも笏賀の名が見える。

江戸時代には伯耆街道(米子往来)の宿場町で、御茶屋・制札場・馬籠・御番所があった。当時の街道は、因幡の国、長和瀬から西坂峠をぬけ、園村地内から原村を通り、倉吉に向ったとされる。現在は、国道9号線が東西方向を、青谷方面には県道泊・網見・青谷線が、倉吉方面にはJR山陰線および主要地方道倉吉・青谷線が走っている。

(八時)



挿図2 泊村の位置図

第2節 歴史的環境

現在までのところ、鳥取県内では遺構を伴う旧石器時代の遺跡は確認されていないが、大山山麓では旧石器がいくつか見ついている。県中部では、関金町野津三第1遺跡、倉吉市中尾遺跡・長谷遺跡でナイフ型石器がローム層中より出土している。その他に、倉吉市和田の石刃、倉吉市上神51号墳下層・鋤の細石刃石核、倉吉市岡野の搔器などがある。また、長谷遺跡では槍先型尖頭器も出土している。

鳥取県内で縄文時代草創期の土器の出土例はないが、この時期の石器類がいくつか確認されている。このうち県中部では、関金町笹ヶ平、伝大栄町穂波、東伯町規下などで有舌尖頭器が見ついている。縄文時代早期の遺跡も、引き続き丘陵・台地上で確認されている。倉吉市取本遺跡では押型土器とともに竪穴住居跡、屋外炉跡が見ついている。また、東郷池周辺の南谷19号墳の調査中にスクレイパーが出土している。その他、倉吉市中田遺跡・野口遺跡、大栄町築山遺跡、東伯町大法3号墳下層などで土器や石器が出土している。

縄文時代前期は気候が温暖であったため海進が進み、入り江が形成されていった。遺跡もこの周辺で確認されるようになる。当時のラグーンに面した湖岸に立地する北条町島遺跡では、前期から晩期の土器、石器、丸木舟、動物骨、人骨、貝塚などが見ついている。縄文時代中期は遺跡の密度が少なく、倉吉市平川林遺跡、北条町船渡遺跡、などが知られるにすぎない。後期になるとラグーン周辺や河川流域で遺跡数は増加する。丘陵部では倉吉市津田峰遺跡、東伯町森第2遺跡、関金町横峯遺跡などで、中央に石組の炉をもつ住居跡が見ついている。また、倉吉市天神川下流遺跡、東郷町北福第3遺跡で、この時期の土器が採集されている。晩期の遺跡では、弥生時代前期の遺跡との連続性が見られる。倉吉市松ヶ坪遺跡、羽合町長瀬高浜遺跡、北条町北尾遺跡、大栄町後口谷遺跡などで縄文時代晩期と弥生時代前期の土器が共存して出土している。

泊村内では、宮の山遺跡で縄文時代晩期の土器とともに石鍾などの石器類が出土している。また、時期ははっきりしないが、村内数カ所で石皿、石鍾などが見ついている。


鳥取県内には、弥生時代の早い段階で弥生文化が流入したと考えられ、米子市目久美遺跡では弥生時代前期の水田跡が確認されている。県中部では、天神川河口の北条砂丘上に立地する長瀬高浜遺跡で、他地域に先行して集落が成立し、玉造り工房跡や住居跡のほか、土壌墓が見ついている。弥生時代中期では、長瀬高浜遺跡で土壌墓がわずかに見られる以外に、現在のところ東郷池周辺で遺跡は見つからない。この時期の遺跡は天神川を遡った丘陵や台地上にあり、特に倉吉市後中尾遺跡では環濠集落が営まれる。後期も遺跡は丘陵上に集中し、東郷池周辺では泊村宇谷第1遺跡、羽合町南谷大山遺跡、倉吉市福庭遺跡をはじめとして、多くの遺跡で竪穴住居跡が調査されている。低地では、羽合町和助北遺跡で赤色塗彩された脚付注口土器がみられるのみである。またこの時期になると、木棺墓や土壌墓のほかに墳丘墓が出現してくる。なかでも倉吉市阿弥大寺1-3号墳丘墓、東郷町宮内1号墳丘墓、藤和墳丘墓などは四隅突出型墳丘墓の形態をとるものである。

また、県中部は銅鐸の出土例が多い地域で、泊村池ノ谷第2遺跡でも一口（外縁付鈕I式）出土している。この銅鐸は身の流水文を人物や動物を描いた横帯で上下に分けており、神戸市桜ヶ丘1号銅鐸、滋賀県新庄銅鐸などと同范である。また、いっしょに青銅の舌が2本出土しており、この銅鐸は舌を使って音を出したものであることがわかる。

古墳時代前期、東郷池周辺は、橋津古墳群(馬ノ山古墳群)、長瀬高浜古墳群をはじめとして、県下でも有数の古墳密集地である。主な前期古墳には、復元全長100mを測る前方後円墳である橋津(馬ノ山)4号墳があり、三角縁神獣鏡を含む多数の副葬品が出土している。泊村には、全長33mと小規模な前方後円墳ではあるが石脇2号墳(尾尻古墳)があり、仿製斜縁帯鏡が1面出土している。長瀬高浜遺跡では、古墳時代前期に230棟ほどの竪穴住居、45棟の獨立建物をもつ大集落が出現する。この集落は中期中頃にはその規模が縮小し、集落廃絶後は古墳時代後期まで古墳が築造される。

中期も引き続き大型前方後円墳が築造される。東郷池東岸には全長90m以上の宮内狐塚古墳、南岸には全長110mの野花北山1号墳など、県内でも最大規模の前方後円墳が築造されており、古墳時代前期から中期にかけて、



四隅突出型墳丘墓 古墳 古墳群 遺跡 寺院跡 城跡
     

挿圖 3 周辺遺跡分布圖

1. 石脇第1遺跡 2. 石脇第2遺跡 3. 石脇第3遺跡 4. 寺戸第1遺跡 5. 寺戸第2遺跡 6. 寺戸第3遺跡 7. 池ノ谷西平第1遺跡 8. 池ノ谷西平第2遺跡 9. 池ノ谷第1遺跡 10. 池ノ谷第2遺跡 11. 池ノ谷銅鑄出土地 12. 小浜ワラ畑遺跡 13. 笹谷遺跡 14. 小浜1号墳 15. 尾後遺跡 16. 宮の山遺跡 17. 石脇2号墳(尾尻古墳) 18. 岡古墳群 19. 河口城跡 20. 原第1遺跡 21. 浜山第2遺跡 22. 原第2遺跡 23. 宇谷第1遺跡 24. 宇谷古墳群 25. 宇野第1遺跡 26. 北福古墳群 27. 漆原古墳群 28. 北福第3遺跡 29. 北福第1遺跡 30. 伯耆一宮経塚 31. 宮内遺跡群 32. 宮内1号墳丘墓 33. 宮内孤塚古墳 34. 藤津古墳群 35. 野方古墳群 36. 野方・弥陀ヶ平廃寺 37. 中興寺古墳群 38. 久見古瓦出土地 39. 久見古墳群 40. 川上古墳群 41. 白石第1遺跡 42. 長谷古墳群 43. 古川古墳群 44. 釜ノ口古墳群 45. 露谷古墳群 46. 亀尻古墳群 47. 鳴滝古墳群 48. 石脇城跡

東郷池周辺が東伯耆の中心地であったと考えられる。この時期の集落としては、宇谷第1遺跡で中期前葉から中葉、南谷大山遺跡で中期後半の竪穴住居跡が見ついている。後期になると、大型前方後円墳は姿を消し、小規模な古墳が盛んに築造され、群集墳を形成するものが見られるようになる。また、従来の竪穴系の埋葬施設に代わり横穴式石室が導入され、以後主流となっていく。泊村内では、岡古墳群、宇谷古墳群、石臨古墳群など扁平板石組石室をもつものが知られている。古墳以外では、埴見中ノ谷古窯群がある。6世紀前葉の窯跡で、この地域で須恵器を生産した数少ない遺跡の一つである。

白鳳期には仏教思想の高まりとともに、多くの寺院が建立される。7世紀中頃に倉吉市大御堂廃寺、東郷町野方・弥陀ヶ平廃寺が、後半には東伯町斎尾廃寺、倉吉市大原廃寺が造営される。

奈良時代になると現在の倉吉市国府に伯耆国衙がおかれ、その周辺に伯耆国分寺、国分尼寺も建立される。この時代の集落跡には、掘立柱建物を中心とする倉吉市観音堂遺跡・大栄町向野遺跡が、竪穴住居を中心とする倉吉市平林遺跡などがある。この地域は、律令体制下では伯耆国河村郡にあたり、笏賀、舎人、多駄、埴見、日下、河村、竹田、三朝の8郷からなり、泊村は笏賀郷に属する。笏賀郷は、「延喜式」にみえる笏賀駅のあったところで、「平城宮跡出土木簡」にも「笏賀郷」の銘がみられる。郡衙の所在地は不明である。また、羽合平野や北条平野を中心に、古代律令体制の名残としての条里遺構が残っている。長瀬高浜遺跡ではこの条里にのらない畠跡が確認されている。

平安時代末期になると末法思想が広まり、経塚がつくられるようになる。倭文神社境内に隣接したなだらかな丘陵からは、伯耆一の宮経塚が見ついている。石棚内から出土した金銅製経筒、金銅製観音菩薩立像、銅製千手観音菩薩立像、銅版線刻弥勒立像はいずれも国宝に指定されている。

鎌倉時代には地頭の勢力が次第に強力になり始める。正嘉2(1258)年銘の「伯耆国河村郡東郷莊下地中分給図」からは、地頭の荘園侵略の様子や当時の東郷池周辺の地理等が窺われる。集落跡としては倉吉市今倉遺跡の住居跡があり、また、中世貝塚が東郷町門田遺跡、羽合町南谷貝塚遺跡でみついている。長瀬高浜遺跡では、鎌倉から安土桃山時代の火葬墓や土壇墓と水田跡が調査されている。

南北朝時代には山名時氏が伯耆国守護職につき、倉吉市田内に田内城を築き伯耆国統治の拠点とした。山名氏はその後打吹山に城を移したが、1524年尼子経久により落城した。室町時代には1336年南条貞宗により羽衣石城が築かれている。また天正9(1581)年、羽柴秀吉と吉川元春が対陣したが、このとき元春が築いた土塁が馬ノ山に残っている。泊村内には石臨城(久塚)と、山名氏の居城である河口城があり、南北朝時代から慶長5(1600)年まで存続している。現在、圓字西前には河口城跡として東西40m、南北60mの平坦地が残っている。中部地区の城は、1615年の一國一城令に伴いすべて取り壊された。

山間地には製鉄関連遺跡が多く、関金町内で約40か所、三朝町でも約100か所のタタラ、鍛冶場の跡が確認されている。天神川上流の上小嶋地区では5軒の鋳物師が営業しており、そのうちの斎江家に残る江戸末期の文書からは、周辺のタタラ場から鋳鉄を購入していたことがわかり、その関係が窺われる。

江戸時代末期には日本海沖にも外国船が頻繁に出没しはじめる。鳥取藩でも沿岸防備のため、文久3(1863)年から砲台設置に着手し、海岸線に8基の台場が建設された。県中部では赤崎、由良、橋津に築かれている。このうち由良台場は西洋式の城塞プランが取り入れられており、藩築造の台場としてはきわめて異色で貴重なものである。(岩崎)

第3章 石脇第3遺跡森末地区の調査

第1節 調査の概要

石脇第3遺跡森末地区は、泊村石脇宇森末・稲荷前に存在し、標高32～52mの南側に傾斜する斜面に立地する。現況は畑地となっており、標高46～47m付近、標高38m付近及び標高40m付近で大きくカットされ、崖面を形成していた。畑地以前は梨畑・柿畑となっていたようで、調査区のはほぼ全域に肥料穴が掘り込まれており、遺構検出面が攪乱されていた。

その関係により、ほとんどの遺構は遺存状態は悪かった。検出した遺構は、竪穴住居跡5基、掘立柱建物跡9基、段状遺構4基、土坑15基、溝状遺構6条、櫛列7基、ピット群3か所である。

遺物は出土していないが、縄文時代と考えられる落とし穴は7基（SK02～04・07・08・10・15）検出された。S I 01埋土中から出土している無斑品安山岩製石鏃はこの時期のものと考えられ、この地が狩猟の場であったものといえる。

古墳時代前期の遺構には、竪穴住居跡2基（S I 01・05）がある。S I 01は隅丸方形を呈すが、S I 05は方形となっている。出土している遺物を比較すると、S I 01の方が古相を示している。

古墳時代中期のものには、竪穴住居跡2基（S I 02・03）、祭祀土坑1基（SK12）がある。竪穴住居跡は、いずれも方形を呈すものである。この住居跡についても、出土している遺物を比較するとS I 02の方が古いものといえる。SK12は、S I 02と同時期のものと考えられる。

古墳時代終末期には、廃棄土坑と考えられる溝状のSK13がある。

奈良時代のもは、竪穴住居跡1基（S I 04）のみ検出されている。

平安から中世と推定されるものには、掘立柱建物跡6基（SB01～06）がある。このうち、SB01は梁行き3間×桁行き4間を測り、柱穴掘り方も1m程度と、大型でしっかりした作りのものである。その他のものは重複しており、複数の時期に建て替えられたものと考えられるが、SB02・04はSB01と主軸をそろえており、同時に存在していた可能性がある。

溝状遺構は、途切れ途切れに検出されているが、SD04・05はほぼ一直線に並び、さらにSD06はSD05から直角に東方向へ折れて調査区外へ延びている。これから推定される範囲は、一辺約54mの区画であるが、SD02・03は直線とはならず、他の辺とも平行とはならないため、いびつな方形区画となるものと推定される。これらの溝内には、複数のピットが掘り込まれ、さらに、SD02・03・05からは瓦片がまとまって出土していることから、瓦葺きの坪または櫛列が存在していたものと推察される。

この時期の遺構は、遺跡の立地状況、出土している瓦などの遺物、遺跡周辺に遺存している地名（久津賀・久塚）が延喜式に記載されている「勢賀駅」に類似していることなどを考え合わせると、駅家との関連が深いものといえよう。また、SB01は方形区画内での中心施設の可能性がある。

中世ごろは、掘立柱建物跡2基（SB07・08）、段状遺構3基（SS01・03・04）、ピット群01がある。このうち、SS04にはSB07・08が伴っている。SS01についても、なんらかの建物に伴うものと考えられる。

その他時期が不明なものに、不明土坑5基（SK01・05・06・11・14）、段状遺構1基（SS02）、櫛列7基がある。

(牧本)

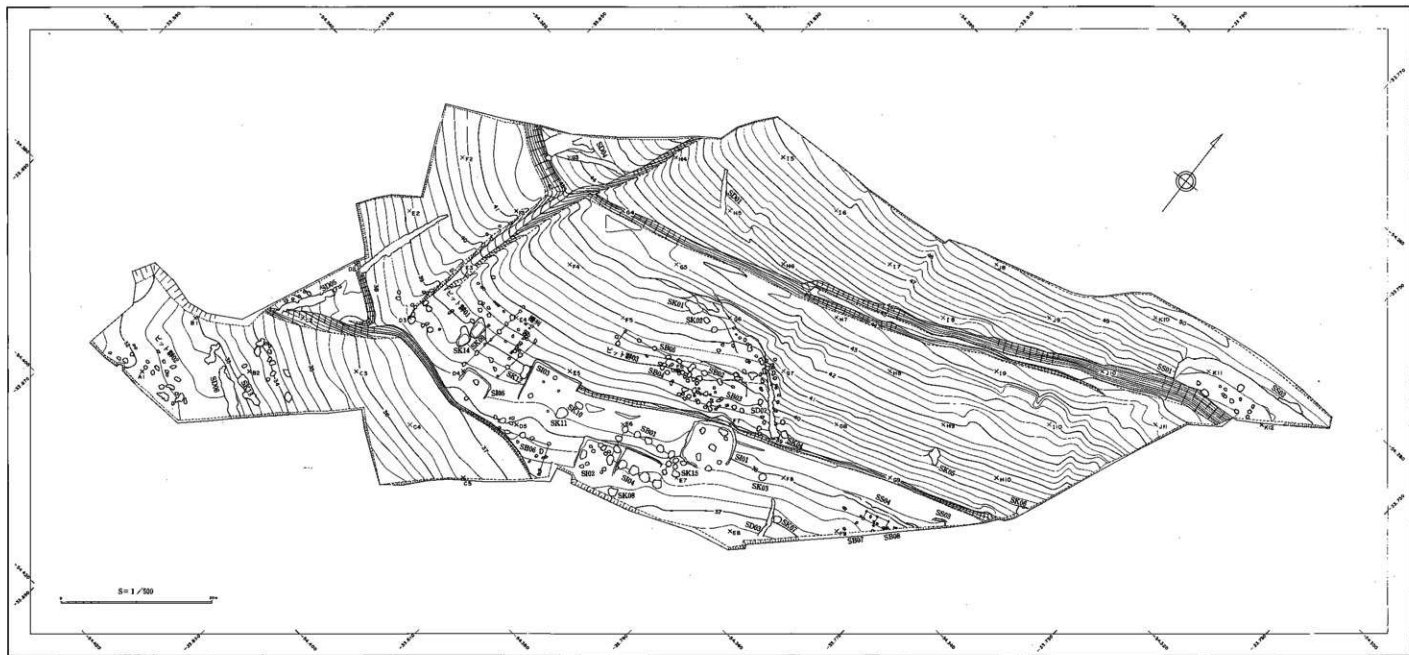
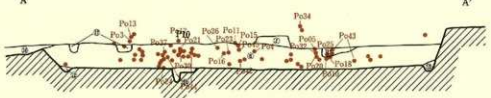
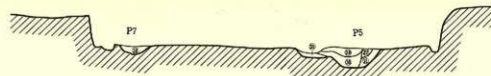
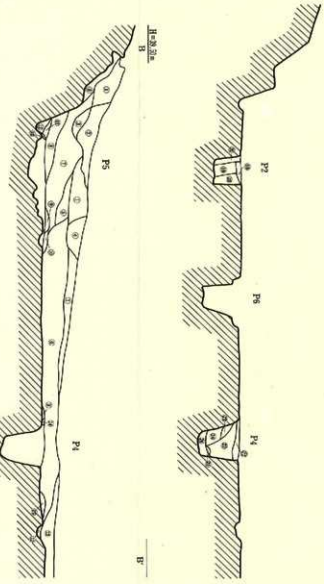
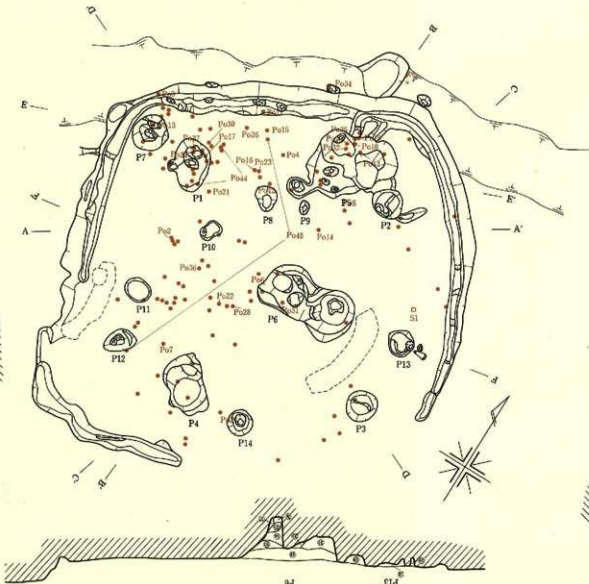
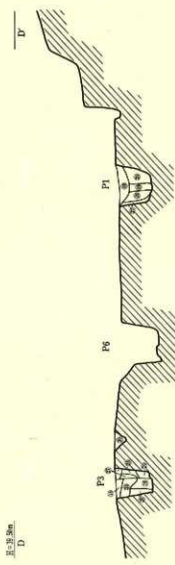


插图5 石脑第3道尾端地区道桥全图



- ①洗堀褐色土
- ②灰褐色土
- ③灰褐色土(洗堀褐色土小ブロック、灰褐色土粒を含む)
- ④明灰褐色土
- ⑤灰茶褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ⑥赤茶褐色土(洗堀褐色土ブロック、灰粒を含む、⑤より細かい)
- ⑦灰褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ⑧暗灰褐色土
- ⑨暗灰褐色土(洗堀褐色土粒を含む)
- ⑩暗灰褐色土(洗堀褐色土粒を含む)
- ⑪暗灰褐色土(洗堀褐色土粒を含む)
- ⑫暗灰褐色土
- ⑬暗灰褐色土
- ⑭暗灰褐色土(洗堀褐色土小ブロック、灰粒を含む)
- ⑮暗灰褐色土(⑬より細かい)
- ⑯灰茶褐色土(洗堀褐色土小ブロック、灰粒をわずかに含む)
- ⑰洗堀褐色土
- ⑱洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ⑲洗堀褐色土
- ⑳洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㉑洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㉒洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㉓洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㉔洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㉕洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㉖洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㉗洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㉘洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㉙洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㉚洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㉛洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㉜洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㉝洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㉞洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㉟洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㊱洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㊲洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㊳洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㊴洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㊵洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㊶洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㊷洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㊸洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㊹洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㊺洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㊻洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㊼洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㊽洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㊾洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)
- ㊿洗堀褐色土(洗堀褐色土ブロックを含む)



挿図6 石路第3遺跡森地区S101遺構図

第2節 竪穴住居跡

S101 (押図6-10、図版1・12・13)

調査区の中央南側のE7・8、F7・8グリッドにあり、標高37.7~38.5mの南側へ傾斜する緩斜面に立地する。畑地の造成により北側は掘削されている。

南東側の一部は削平されていたが比較的遺存状態はよく、平面形は隅丸方形を呈す。規模は東西5.71m、南北5.33mを測り、床面積は30.2㎡である。壁高は、最も遺存状態のよい北壁で最大0.65mである。

壁溝は四壁のそれぞれで検出された。規模は幅12~34cm、深さ2~12cmを測り、断面逆勾形を呈す。北側壁溝内で小ビットが数個検出されたが、これは壁溝内に立てたと考えられる板を支える枕状のものと思われる。

主柱穴はP1~P4の4個と思われ、それぞれの規模はP1(84×57-56)cm、P2(53×47-47)cm、P3(53×51-60)cm、P4(97×59-67)cmを測る。主柱穴間距離はP1~P2間から順に3.24m、3.26m、2.78m、3.62mである。

床面北側隅で特殊ビットP5が検出された。埋土の状況から、このP5は掘りかえられた可能性が考えられ、当初は平面形が楕円形を呈していたものが切り合っているものと思われる。平面規模は(1.44×1.08)mで、深さは深い部分で32cm、浅い部分で14cmをそれぞれ測る。埋土は4層に分層できた。また、このP5に向かって壁溝から延びる幅14~20cm、深さ5~8cmを測る2本の溝が検出されたが、これもP5の掘りかえに伴い、掘りかえられたものと考えられる。

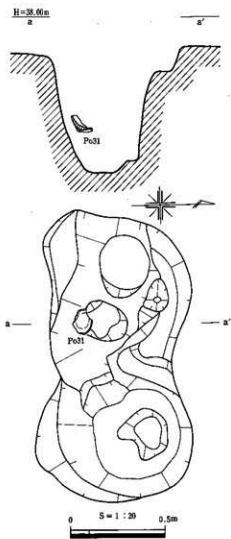
床面中央のやや東に寄った位置で中央ビットP6が検出された。底面形態からP5と同様に掘りかえられた可能性が考えられ、当初は円形もしくは楕円形を呈していたものが切り合っているものと思われる。平面規模は(1.52×0.85)mで、深さは東側で43cm、西側で68cmをそれぞれ測る。埋土は主に粘質土で8層に分層できた。西側部分の底面から浮いた位置で高環部Po31が出土している。

埋土は15層に分層できた。このうち、②、③層は畑地造成の際の清埋土である。⑥、⑦層には炭片を含んでいる。

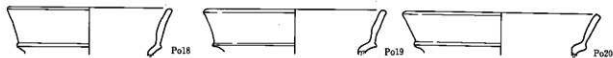
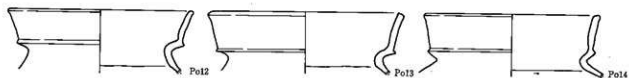
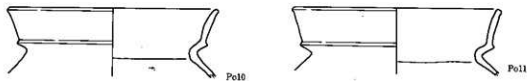
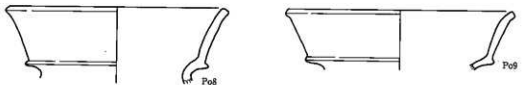
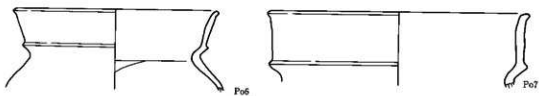
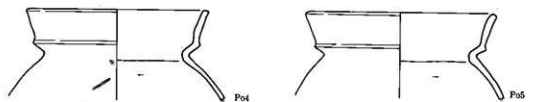
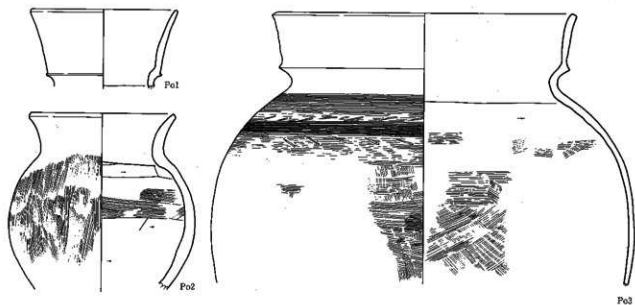
出土遺物には、図化できたものに土師器直口壺Po1、壺Po2、甕Po3-23、高環Po24-34、鼓形器台Po35-37、低脚環Po40-42、甔Po43-45、須恵器壺Po38、甕Po39、石鏡S1がある。

このうち、高環Po24はP1上面で出土している。他はいずれも埋土中から出土したものである。その他に、埋土中から軽石が出土している。

出土遺物から南谷大山VI期古相、古墳時代前期半ばごろのものと考えられる。
(原田)



押図7 石船第3遺跡森末地区S101P6
内土器出土状況図



S = 1 : 3
0 10cm

插图 8 石路第 3 遗址森末地区 S101 出土遗物实测图(1)

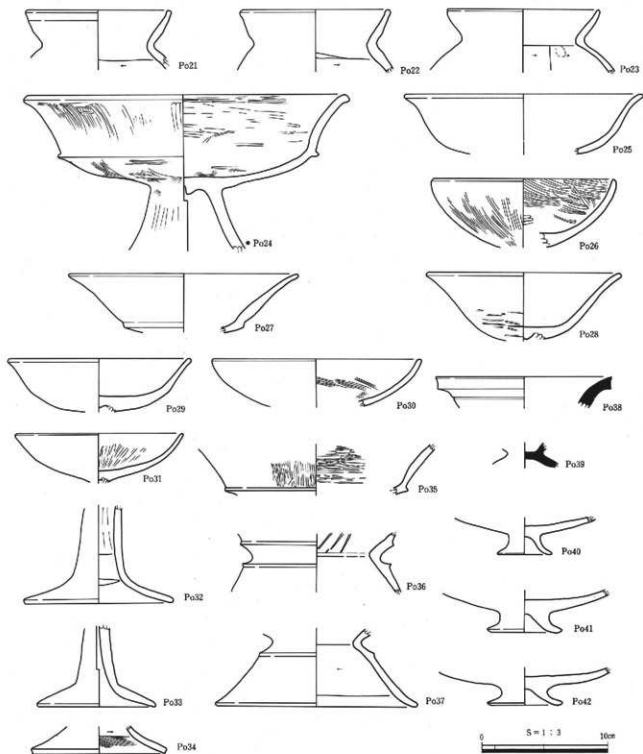


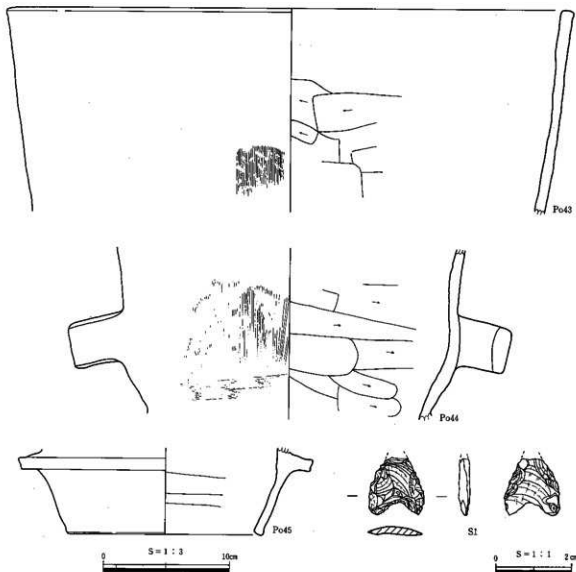
图9 石鹼第3遺跡森末地区S101出土遺物実測図(2)



写真① 石鹼第3遺跡森末地区
重機表土制り作業



写真② 石鹼第3遺跡森末地区
遺構全景



挿図10 石胎第3遺跡森末地区S101出土遺物実測図(3)

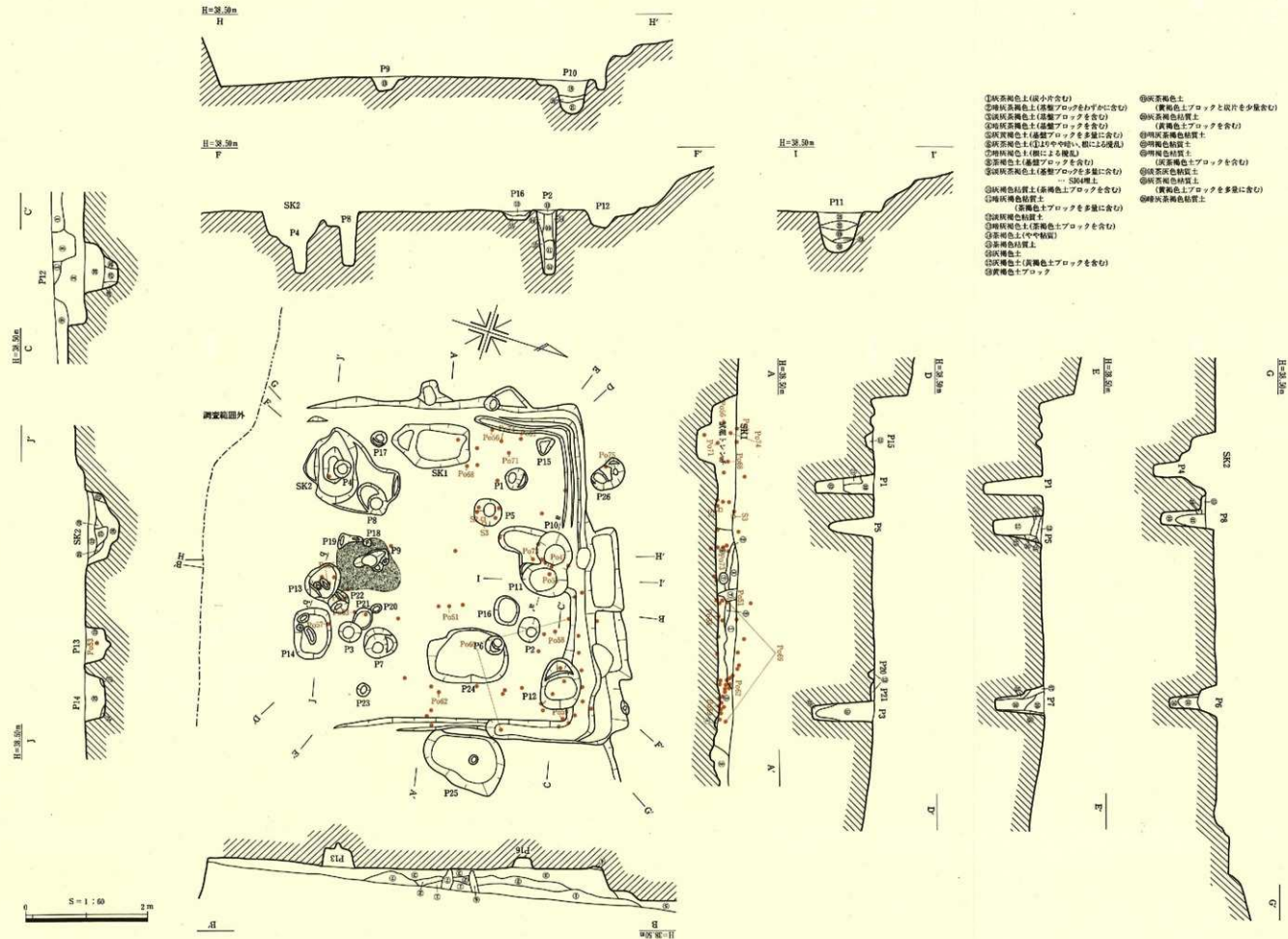
S102 (挿図11~15、図版2・13・14)

調査区は中央南端のE6・7グリッドにあり、標高37.3~38.0mの南側へ傾斜する緩斜面に立地する。S104、SB01のそれぞれと東側で切り合う。

南側は削平されているが、比較的遺存状態はよく、検出された三壁から平面形は方形を呈す。なおこの住居は建て替えに伴い縮小されており、それぞれの規模は建て替え前で東西4.88m、南北4.66m以上、建て替え後で東西4.68m、南北4.43m以上を測り、床面積はそれぞれ23.1㎡以上、21.6㎡以上である。壁高は、最も遺存状態のよい北壁で最大0.50mである。

壁溝は三壁のそれぞれで検出できたが、建て替え後の壁溝は東壁では検出できず、建て替え前のものと共有している可能性もある。また、北東部分については幅がかなり広いことから、両者の壁溝が重なっており、結果的に一連のものとして掘り下げた結果とも捉えうる。壁溝の規模は建て替え前後とも、幅14~21cm、深さ4~8cmを測り、断面逆台形を呈するが、北東部分では幅24~44cm、深さ2~4cmとなり、断面形は浅い皿状を呈している。

主柱穴は建て替え前がP1~P4、建て替え後がP5~P8のそれぞれ4個と思われる。規模は以下の通りであるが、これらのうちP4は建て替え後住居に伴うSK2底面で、P6はSB01の柱穴であるP24底面で検出し



挿図11 石廊第3遺跡森末地区S102遺構図

ているため、P4・P6については、平面規模は検出時でのものとし、深さは床面からの深さで表すことにする。P1 (36×36-97) cm, P2 (42×35-105) cm, P3 (36×33-103) cm, P4 (30×28-100) cm, P5 (48×48-81) cm, P6 (32×31-76) cm, P7 (55×50-79) cm, P8 (53×51-87) cmを測る。主柱穴間距離はP1-P2から順に2.54m、3.00m、2.56m、2.80mと、P5-P6から順に2.20m、1.97m、2.34m、1.87mである。

なお、P24・P25はS B01の柱穴である。

床面中央の南端および、北壁際で特殊ビットP9-13が検出された。P9は焼土面がP9を中心にして広がっており、焼土面を掘り込んでいないことから特殊ビットと判断した。平面形、底面形とも不定形で、規模は(60×37-24) cmを測り、埋土は1層であった。

P10は上縁部の一部を深さ9cm掘って二段掘りしており、規模は(126×54以上-56) cmを測る。埋土はほぼ水平堆積する3層に分層できた。この埋土中から直口壺Po49が出土した。

P11はP10を切るように掘り込まれており、規模は(80×53以上-63) cmを測る。埋土は5層に分層でき、レンズ状の堆積が一部に認められる。このP11内から拳大の礫と高環部Po55、妻Po47が底面より浮いた位置で出土している。

P12は上縁部の一部を深さ27cm掘って二段掘りしており、規模は(82×66-54) cmを測る。埋土は4層に分層でき、上層から高環部Po54が出土している。

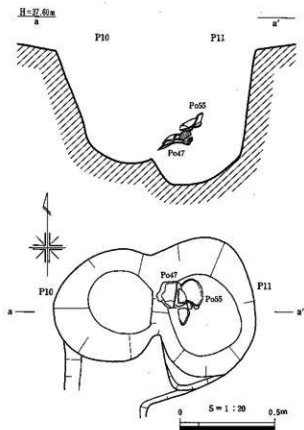
P13は焼土面を一部切るようにして掘り込まれており、規模は(63×53-39) cmを測る。埋土は1層である。このほぼ底面で、伏せた状態の完形の高環Po53と妻胴部片が出土した。

以上の特殊ビットは、それぞれの切り合いなどから、P9・10が建て替え前、P11-13が建て替え後の住居に伴うものと考えられる。また、P13の東にあるP14 (85×62-39) cmは、形態と埋土の状況がP13と似通っており、建て替え前の住居に伴う特殊ビットの可能性が考えられる。

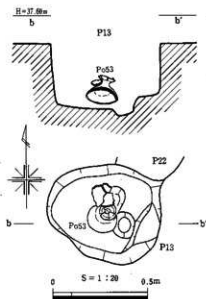
P9の周囲で焼土面を検出した。この焼土面はP13によって切られていることから、建て替え前の住居に伴うものと考えられる。

床面西壁際でSK1・2が検出された。SK1は上縁部の一部を深さ16cm掘って二段掘りしており、規模は(1.28×0.73-0.28) mである。試掘時に既に完掘されており埋土の状況は不明である。

SK2はP8を取り囲むように深さ10cm程度に掘って二段掘りしており、その底面でP4を検出した。規模は(1.58×1.15-0.54) mである。埋土は粘質土で5層に分層できた。



挿図12 石窯第3遺跡森末地区S102P10・11内遺物出土状況図



挿図13 石窯第3遺跡森末地区S102P13内遺物出土状況図

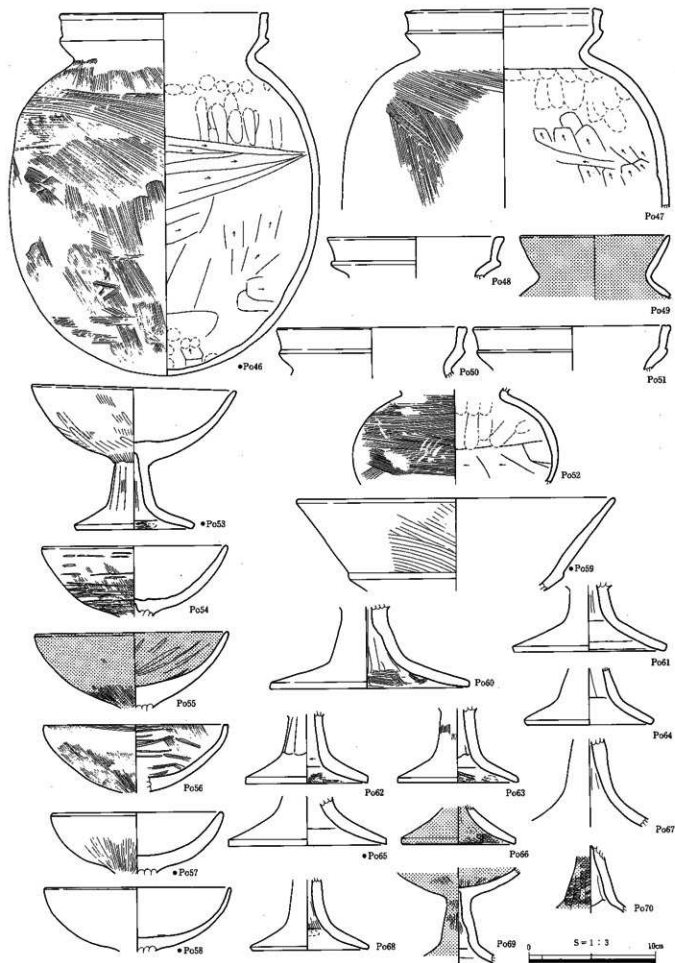


插图14 石胎第3道赫森末地区S102出土遗物实测图(1)

これらは屋内貯蔵穴と考えられ、SK1は建て替え前、SK2は建て替え後の住居にそれぞれ伴うものと思われる。

埋土は8層に分層できた。②～⑤層には基盤ブロックが、下層のものほど多く含まれており、流れ込みによる自然堆積の様子が窺える。また、③層は埋土上面から掘り込まれており、SB01の柱穴であると考えられる。

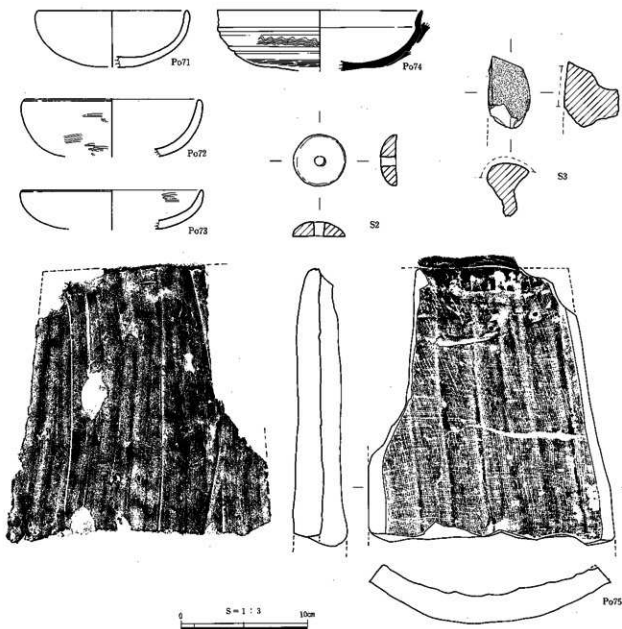
出土遺物には、図化できたものに土師器甕Po46～48・50～52、高坏Po53～70、直口壺Po49、椀Po71～73、須恵器高坏Po74、紡錘車S2、砥石S3がある。

このうち、土師器甕Po46、高坏57～Po59、Po65は床面で出土している。他はいずれも埋土中から出土したものである。

また、S102の北側で検出されたP26内から平瓦Po75が出土している。S102と直接的には関係はないが、ここで触れておくことにする。

出土遺物から南谷大山曜期、古墳時代中期後半ごろのものと考えられる。

(原田)



挿図15 石鳥第3遺跡森末地区S102出土遺物実測図(2)

S 103 (挿図16・17、図版3・14)

調査区中央やや西より南側のE5・6グリッドにあり、標高38.2~39.3mの南側へ傾斜する緩斜面に立地する。地地の造成により、かなりの部分を削平されており、遺存状態は悪い。検出された北、西の二壁と東壁の一部から平面形は方形を呈す。規模は東西6.30m、5.38m以上を測り、床面積は11.3m²以上である。壁高は、最も遺存状態のよい北壁で最大0.68mである。

壁溝は北壁と東西壁の一部で検出された。規模は幅15~18cm、深さ2~7cmを測り、断面浅いU字状を呈す。主柱穴はP1~P4の4個で、それぞれの規模はP1(32×31-61)cm、P2(33×31-51)cm、P3(42×35-36)cm、P4(82×55-35)cmを測る。主柱穴間距離はP1~P2間から順に2.36m、2.43m、2.70m、2.50mである。

床面北側で特殊ビットP5が検出された。規模は(51×46-31)cmを測り、埋土は1層であった。

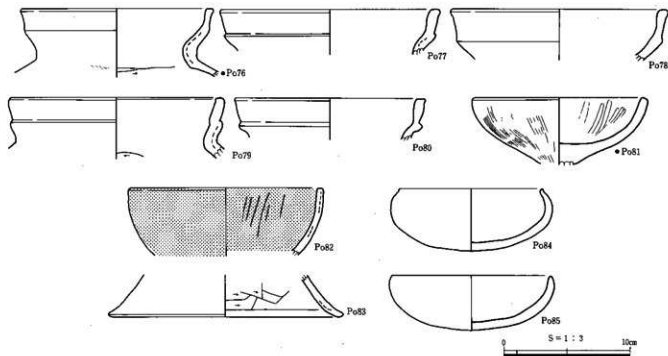
埋土は5層に分層でき、①、②層には炭片が含まれていた。

出土遺物には、図化してきたものに土師器甕Po76-80、高坏Po81・82、鼓形器台Po83、椀Po84・85がある。

このうち高坏Po81は床面で出土したものである。他はいずれも埋土中からの出土である。

出土遺物から南谷大山区期、古墳時代中期後半のものと考えられる。

(原田)



挿図16 石島第3遺跡森末地区S103出土遺物実測図

S 104 (挿図18・19、図版4・14)

調査区中央南側のE7グリッドにあり、標高37.4~38.3mの緩やかに南側へ傾斜する斜面に立地する。周辺は、耕作等の掘削によりかなり削平され、さらにSB01に切られている。

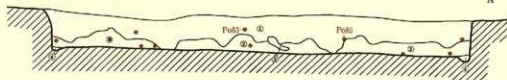
平面形は、遺存する壁から方形を呈すものと思われる。規模は東西5m以上、南北4.6m以上を測り、床面積は23m²以上である。壁高は、最も遺存状態のよい北壁で最大0.27mである。

柱穴は床面上で5個検出された。このうち、主柱穴はP1・P2で、それぞれの規模は(42×38-5)cm、(51×36-24)cmを測る。

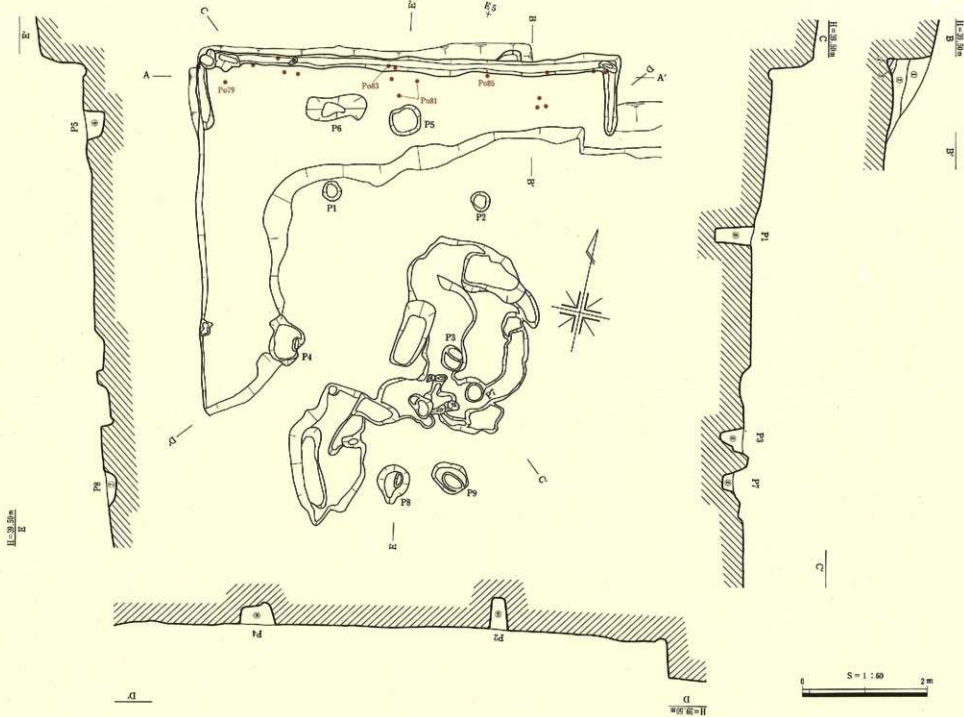
II-39 50m

A

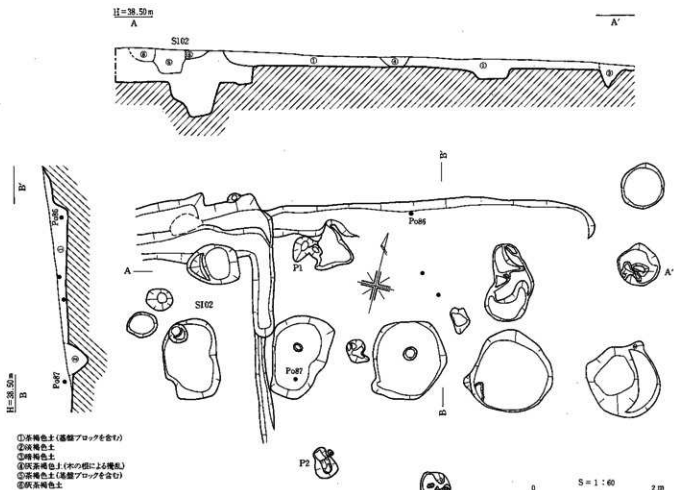
A'



- ①灰系褐色土(黄褐色土ブロックと混在をわずかに含む)
 ②地味灰褐色土(黄褐色土ブロックを多量に混在をわずかに含む)
 ③灰褐色土
 ④灰黄褐色土(明灰系褐色土ブロックをわずかに含む)
 ⑤灰褐色土
 ⑥灰黄褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
 ⑦灰褐色土



挿図17 石鳥第3遺跡跡末地区S103遺構図



挿図18 石籠第3遺跡森末地区S104遺構図

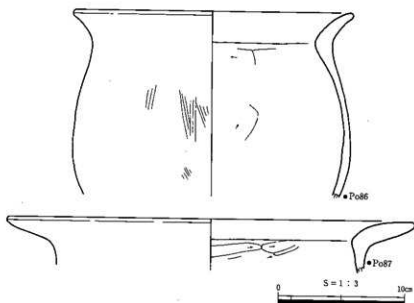
主柱穴間距離は3.6mである。

壁溝は、壁の残存する北側でわずかに検出された。規模は幅34cm、深さ4～6cmを測り、断面U字形を呈す。

埋土は茶褐色土単層である。西側は、S I 02に切られているように見えるが、土層断面を観察すると、S I 02の埋土を切り込んで作っていることがわかる。

出土遺物には、図化できたものに土師器類Po86・87がある。いずれも北側壁溝付近の、床面からやや浮いた状態で出土している。

出土遺物より、奈良時代ごろのものと考えられる。(牧本)



挿図19 石籠第3遺跡森末地区S104出土遺物実測図

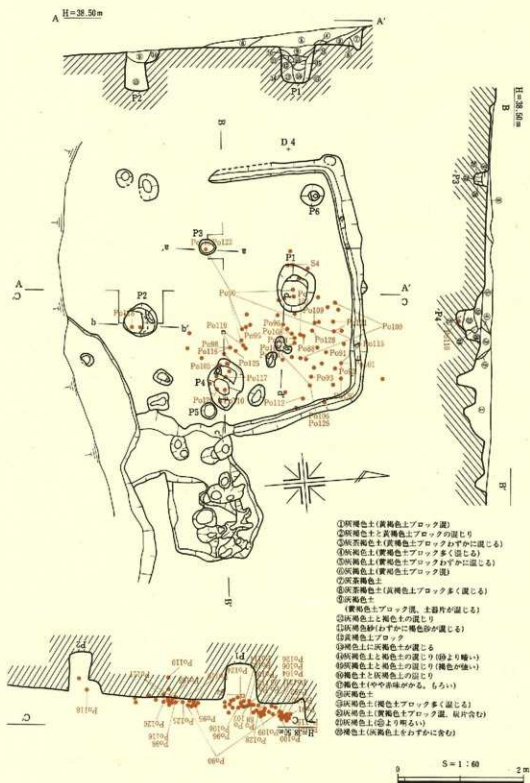
S I 05 (挿図20～24、図版3・15)

調査区南東側のD5・E5グリッドにあり、標高37.9～38.4mのわずかに南側に傾斜する斜面に立地する。北東側4mにはS I 03がある。

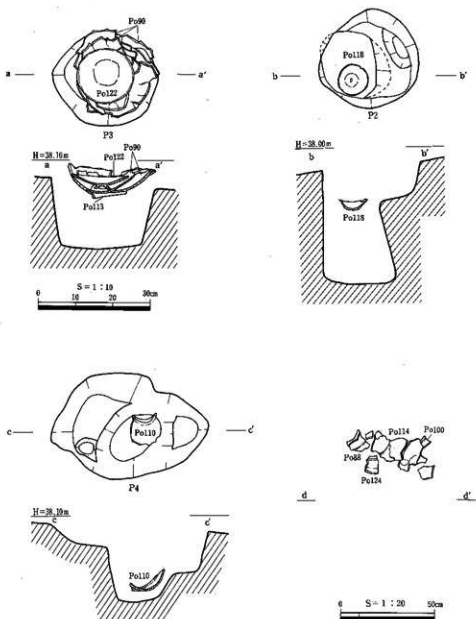
S I 05は、南側の遺存状態が悪いが、主柱穴から東西3.8m、南北不明の方形あるいは長方形を呈すと考えられる。床面積は14.4㎡以上である。壁高は、最も遺存状態のよい北側中央付近で最大0.28mを測る。

壁溝は、南側で途切れているものの、さらに続くものと考えられ、幅11~13cm、深さは最大で6.1cmを測り、断面逆台形状を呈す。

主柱穴は、P1・P2の2本で、それぞれP1(79×60-59)cm、P2(54×51-61)cmを測る。主柱穴間距離は、2.6mである。



挿図20 石籠第3遺跡南東地区 S I 05遺構図



押図21 石籠第3遺跡森地区S105床面・ピット内遺物出土状況図

埋土は、6層に分層できた。このうち①②は後世に掘られたものと考えられる。

凶化できた遺物は、土師器壺Po88・89、甕Po90～112、胴部Po113・114、高坏Po115～120・125、低脚坏Po121～123、
 钵形器台Po124・126～130、須恵器甕Po131、砥石S4である。このうち、Po90・93・95・96・98・103・105・107・
 108・112・114・116・117・119・120・125、S4は床面上から出土した。また、P2からPo118、P3からPo90・
 113・122、P4からはPo110が出土した。Po118は高坏の坏部、Po122は低脚坏で、それぞれ内側を上に向けた状
 態で出土し、特にPo122はPo90およびPo113の上で出土しており、何らかの意図をもって置かれたものと考えられ
 る。なおPo90は、他の破片が床面に散乱しており、住居廃絶時のものとみられる。

床面・ピット出土遺物から南谷大山VI期新相、古墳時代前期後半ごろのものと考えられる。

(八時)

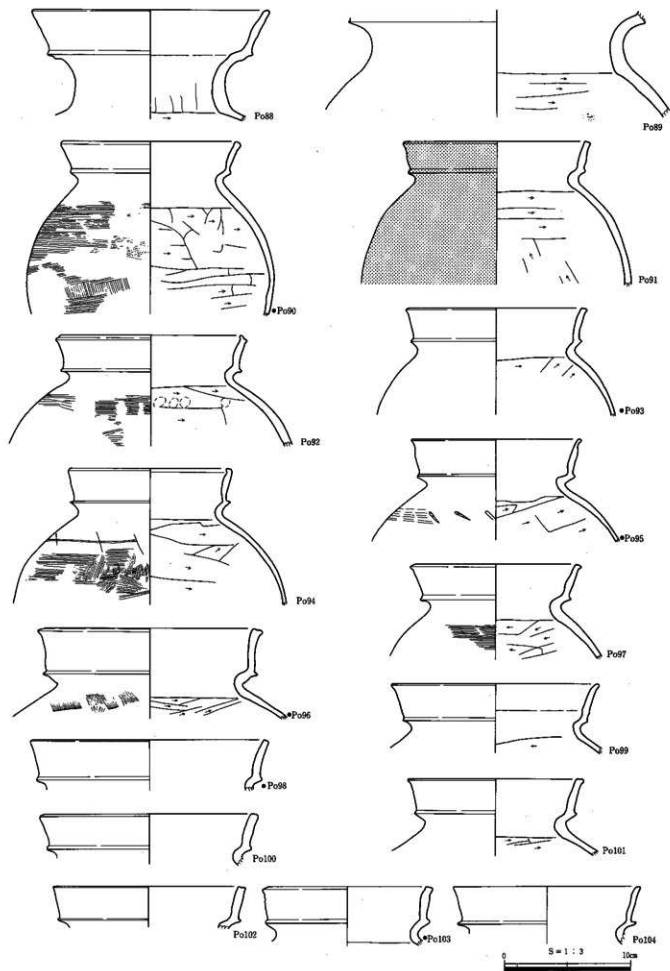


插图22 石髓寮3遺跡森末地区S105出土遺物実測図(1)

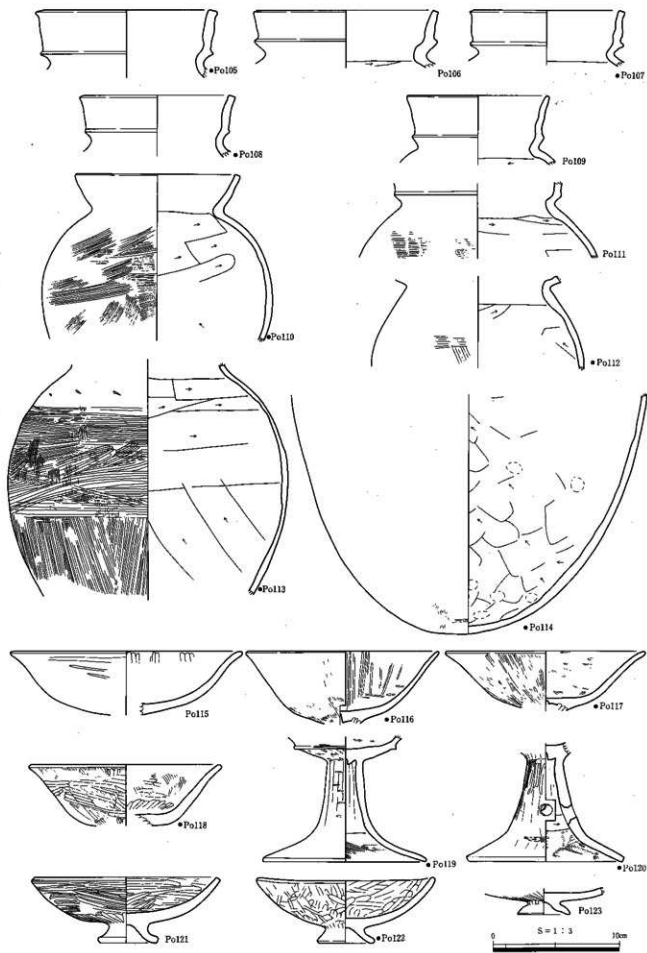
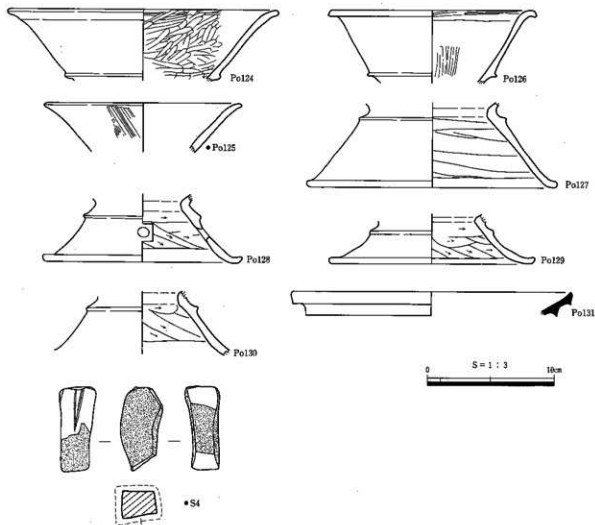


插图23 石胎第3遗址森末地区S105出土文物实测图(2)



挿図24 石脇第3遺跡森末地区S105出土遺物実測図(3)

第3節 掘立柱建物跡

S B01 (挿図25、図版4)

調査区中央南側のF7・E7グリッドにあり、標高37.4~38.3mの緩やかに南側へ傾斜する斜面に立地する。周辺は、耕作等の掘削により、かなり削平されている。重複するように、S I 02・04がある。

梁行き3間4.4m、桁行き4間7.0mを測る掘立柱建物跡である。主軸方向は、N-80°-Eとおおよそ東西方向を向く。

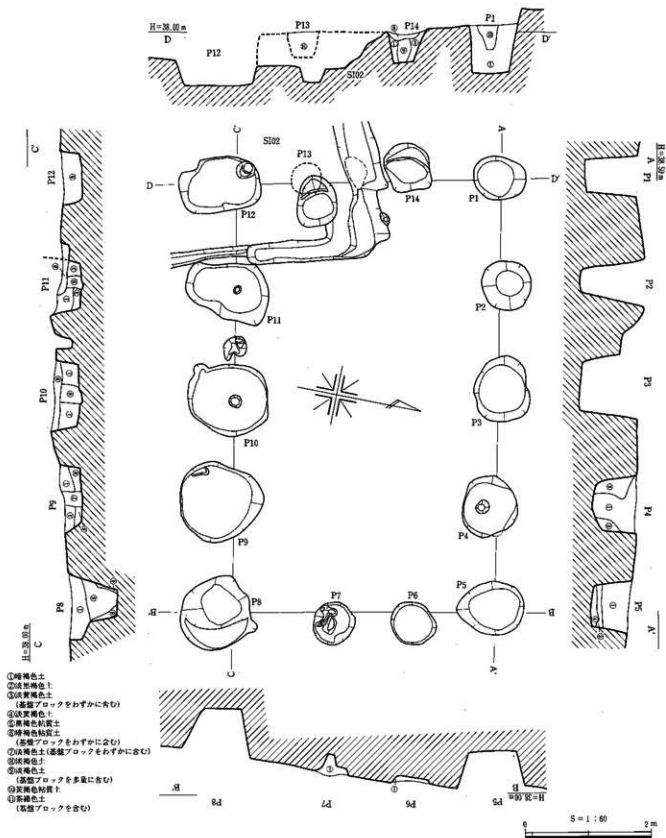
柱穴はP1~P14を確認することができ、それぞれの規模はP1(86×69-103)cm、P2(82×80-104)cm、P3(107×85-99)cm、P4(95×86-69)cm、P5(110×86-61)cm、P6(70×68-15)cm、P7(70×64-15)cm、P8(120×108-84)cm、P9(130×126-49)cm、P10(124×119-50)cm、P11(128×99-57)cm、P12(128×88-38)cm、P13(48×?-40)cm、P14(75×69-57)cmを測る。

桁行きの柱穴は非常に大型であるのに対し、梁行きの柱穴は規模が小さいのが特徴である。なお、P12はS I 02床面上で検出され、またP13はS I 02掘り下げ中の土層断面で確認されたため、本来の規模は不明である。

柱穴間距離は、P1~P2間から順に、1.7m、1.7m、1.9m、1.7m、1.3m、1.3m、1.3m、1.8m、1.8m、1.8m、1.8m、1.4m、1.5m、1.4mである。

堀土の状況を見ると、P4、P9、P10、P11、P14には、それぞれ柱痕を思わせる土層が確認でき、柱が立ったまま腐朽したものと考えられる。

時期を比定できる遺物が出土していないために、時期は不明であるが、前述の奈良時代ごろと考えられるS I



挿図25 石船第3遺跡森末地区SB01遺構図

04の床面を掘り込んでいることから、奈良時代以降のものと考えられる。

後述するSD02~06に囲まれた一辺約54mの範囲にあり、また大型の建物になると推定されることから、中心的な施設である可能性がある。
(牧本)

SB02・03 (挿図26、図版4)

調査区はほぼ中央G6・7グリッドにあり、標高39.8~40.3mの南側へ傾斜する斜面に立地する。南側にSB04、西側にSB05がある。

SB02・03とも柱穴を3個しか検出できなかったが、これらの柱穴の規模、および主軸方向がSB01とはほぼ同じであることから、それぞれ桁行き2間・3.8mと3.6mの掘立柱建物跡と判断した。また、SB02・03はP1とP4、P2とP5が切り合っており、切り合い関係からSB03からSB02へ位置、規模を同じくして建て替えたものと考えられる。なお、これら検出できた柱穴に対応する柱穴は、後世の造成により削平されたものと考えられる。

主軸方向はそれぞれN-76°-EとN-82°-Eである。

検出できた各柱穴の規模は、P1 (67×49以上-36) cm、P2 (66×60-55) cm、P3 (75×62-32) cm、P4 (52×34以上-24) cm、P5 (60×56以上-23) cm、P6 (67×57-10) cmを測る。

柱穴間距離は、SB02がP1~P2間から順に2.00m、1.80mを測り、SB03がP4~P5間から順に1.90m、1.70mを測る。

柱穴の埋土は基本的に褐色系の埋土であった。

時期を比定できる遺物が全くないため、時期は不明であるが、SB01と軸をほぼ同じくしていることなどから、SB02・03とも奈良時代以降のものと考えられる。

SD02~06で区画された中にあること、SB01と軸をほぼ同じくしていることなどから、これらと関連のある施設になり得ると考えられる。
(原田)

SB04 (挿図26、図版4)

調査区はほぼ中央F6・7、G7グリッドにあり、標高39.9~40.1mの南側に傾斜する斜面に立地する。北側にSB02・03があり、西端でSB05と切り合う。

柱穴を4個しか検出できなかったが、主軸方向と、立地する場所から桁行き3間・5.48mの掘立柱建物跡と判断した。なお、これら検出できた柱穴に対応する柱穴は、後世の造成により削平されたものと考えられる。

主軸方向はN-79°-Eである。

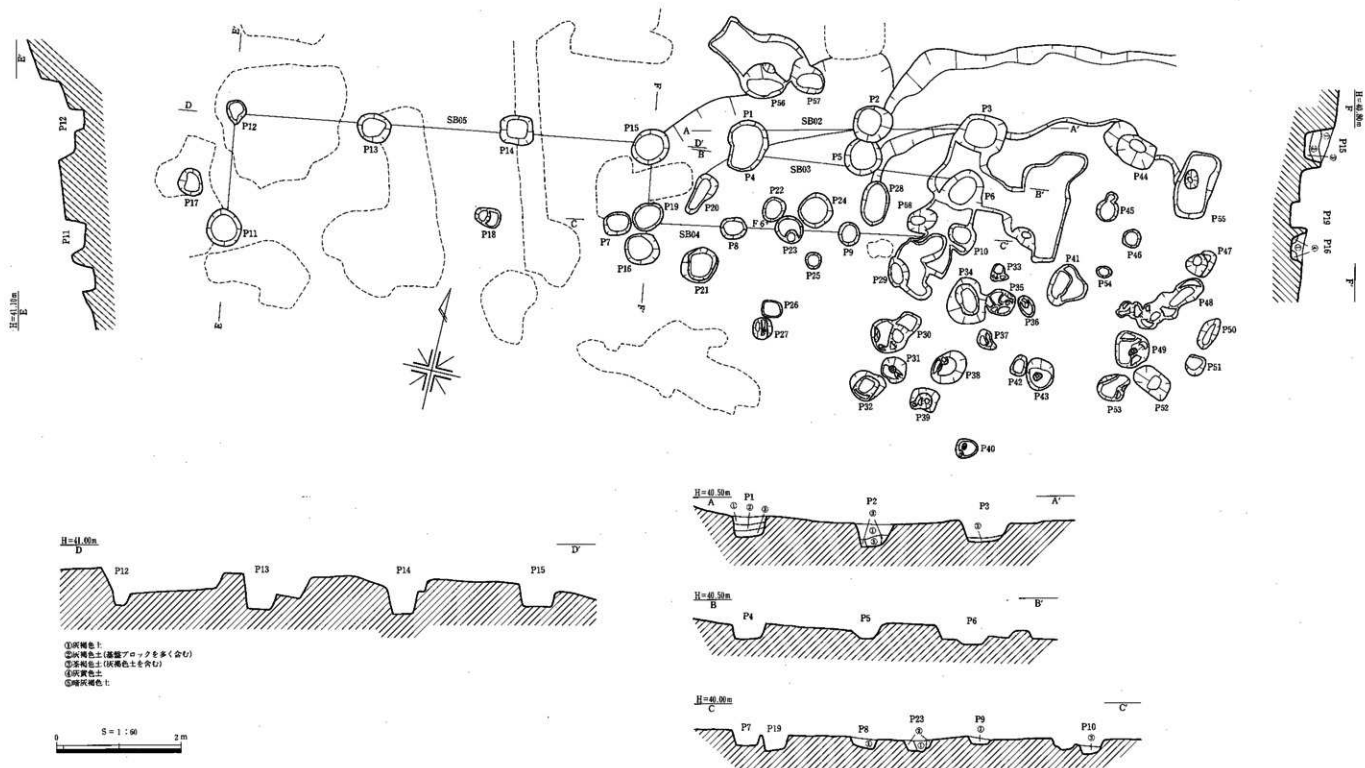
検出できた各柱穴の規模は、P7 (41×35-23) cm、P8 (39×33-16) cm、P9 (37×34-11) cm、P10 (44×33-18) cmを測る。

柱穴間距離は、P7~P8間から順に1.85m、1.85m、1.78mを測る。

柱穴の埋土は基本的に褐色系の埋土であった。

時期を比定できる遺物が全くないため、不明であるが、他の掘立柱建物跡との関係から、奈良時代以降のものと考えられる。

SD02~06で区画された中にあること、他の掘立柱建物跡との関係から、これらと関連のある施設になり得ると考えられる。
(原田)



挿図28 石鳥第3遺跡森末地区 S B02-05、ピット群03遺構図

SB05 (挿図26、図版4)

調査区は中央F、G 6グリッドにあり、標高39.9～40.5mの南側に傾斜する斜面に立地する。東側にSB02・03があり、東端でSB04と切り合う。

柱穴を6個しか検出できなかったが、桁行き3間・6.65m、梁行き1間以上の掘立柱建物跡で、南側の柱穴は後世の造成により削平されたものと考えられる。

主軸方向はN-82°-Eである。

検出できた各柱穴の規模は、P11 (63×54-31) cm、P12 (37×31-26) cm、P13 (54×45-55) cm、P14 (53×46-47) cm、P15 (61×56-43) cm、P16 (56×53-22) cmを測る。

柱穴間距離は、P11～P12間から順に1.90m、2.20m、2.30m、2.15m、1.68mを測る。

柱穴の埋土は基本的に褐色系の埋土であった。

時期を比定できる遺物が全くないため、不明であるが、他の掘立柱建物跡との関係から、奈良時代以降のものと考えられる。

SD02～06で区画された中にあること、他の掘立柱建物跡との関係から、これらと関連のある施設になり得ると考えられる。(原田)

SB06 (挿図27、図版4)

調査区中央やや西よりの南端D5・6、E6グリッドにあり、標高37.2～37.9mの南側に傾斜する緩斜面に立地する。

東側は調査区外となり、南側は後世の造成により削平されているため遺存状態は悪いが、柱穴が鈎状に配されていることから掘立柱建物跡と判断した。なお、P2～P3間とP6～P7間にSB06の柱穴があったと考えられるが、検出できなかった。よって、この検出できなかった柱穴を含めると、SB06は、桁行き3間以上、梁行き2間以上の掘立柱建物跡であろう。

主軸方向はN-68°-Eである。

軸線上で検出されたピットは9個あるが、これらの内、SB06の柱穴は、P1・4・5・9の4個であると考えられる。これら4個の柱穴の規模は、P1 (34×32-56) cm、P4 (48以上×48-75) cm、P5 (47×40-56) cm、P9 (34×27-29) cmを測る。

柱穴間距離は、P1～P4間4.60m、P4～P5間2.30m、P5～P9間4.40mを測る。よって1間の距離は2.20～2.30mあったものと考えられる。

柱穴の埋土は灰褐色土、淡灰茶褐色土のいずれか1層であった。

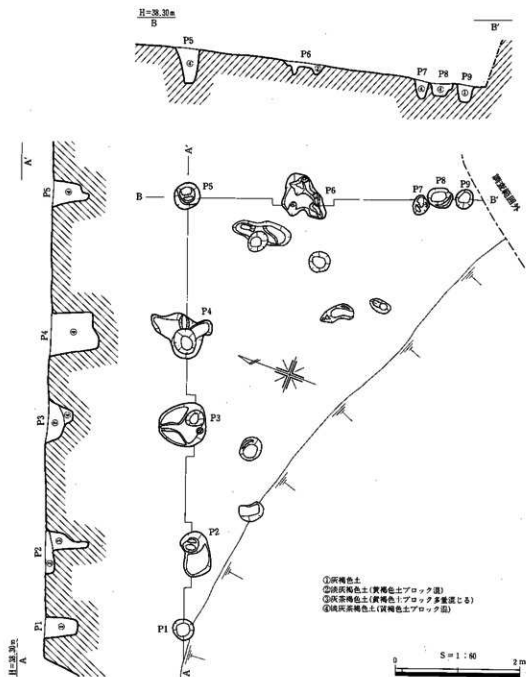
時期を比定できる遺物が全くないため、不明であるが、他の掘立柱建物跡との関係から、奈良時代以降のものと考えられる。

SD02～06で区画された中にあること、他の掘立柱建物跡との関係から、これらと関連のある施設になり得ると考えられる。(原田)

第4節 柵 列

SA01～07 (挿図28、図版4)

E4・5、F4グリッドにあり、標高38.4～40.1mの南に傾斜する斜面に立地する。SK09・14が、SA02・03の間にある。



挿図27 石胎第3遺跡森地区 S B 06遺構図

SA01以外は、いずれも南北方向に軸を持つもので、SA02-05・07は、ほぼ平行に並び、SA01は、SA02・04・05北端のピットを共有する形で直交している。これらは鏡状にピットが配されている様子が窺える。

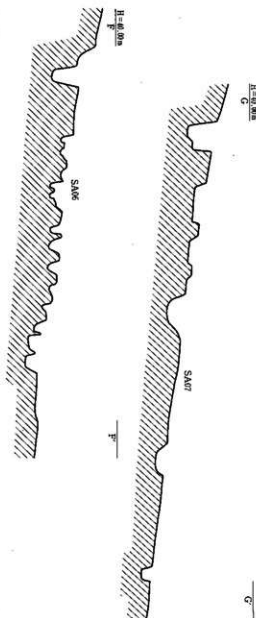
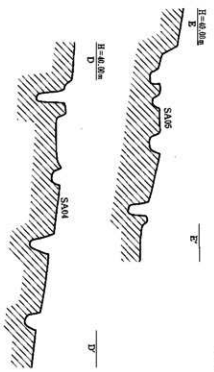
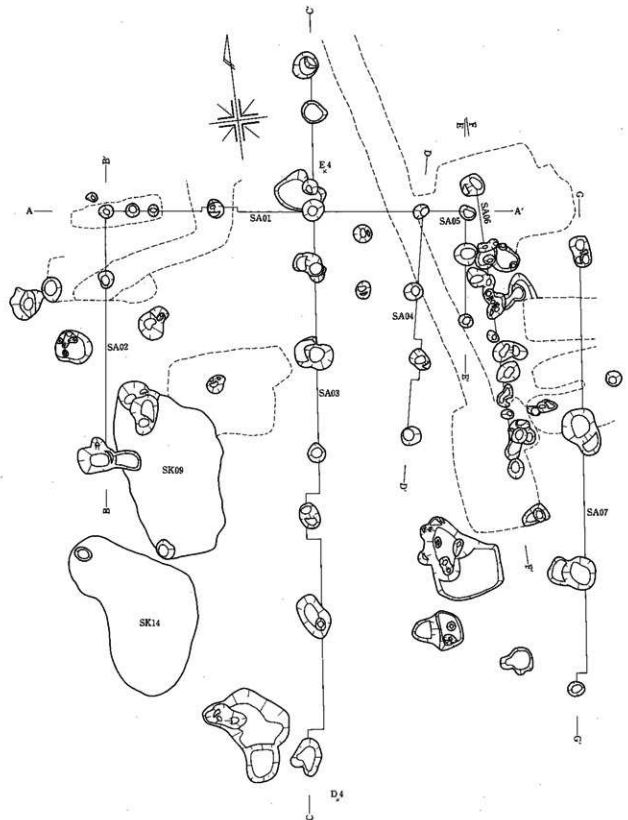
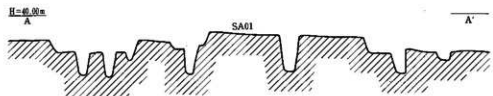
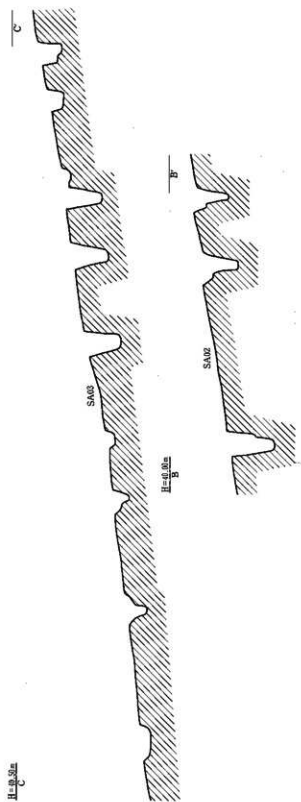
SA06は、複数のピットが切りあうように連なっており、同一箇所数回の建て替えがあったものと考えられる。

これらSA01-07のピットは径約20-50cm、深さ約20-70cmを測る。また、各横列のピット間距離には規則性が見られず、それぞれにおいて、まちまちである。

ピットの埋土は基本的に褐色系の埋土であった。

遺物は全く出土していない。

各横列には時期差があるものと想定されるが、時期を比定できる遺物がなため不明である。しかし、鏡状に配されるSA01・02・04・05と、それに平行して並ぶSA03・07は同時期であると考えられ、鎌倉時代のもものと



挿図28 石島第3遺跡森末地区 S A 01～07遺構図

思われるSK09と切りあうピットが、SA02のピットより古いことから、これらは鎌倉時代以前の可能性がある。

SA06については、その方向が、SB01-05の桁方向とほぼ同じであることから、これらの櫛列の中では最も古く、奈良時代にまで遡れるものかも知れない。

時期的に新しいと考えられるものもあるが、SD02-06で区画された中にあり、SA06は掘立柱建物跡の桁方向とほぼ同じ向きに並んでいることから、掘立柱建物跡などと関連した性格を否定しきれない。(原田)

第5節 土坑・土壌

SK01 (挿図29、図版5)

調査区中央のG6グリッドにあり、標高41.5~41.7mの南側へ傾斜する緩斜面に立地する。SD02と北側で切り合う。

東側の一部を後世の攪乱により削平されているが、比較的遺存状態はよい。平面形は、上縁部・底部とも不定形を呈し、規模は、上縁部長軸2.60m×短軸1.40m、底部長軸2.30m×短軸1.25mを測る。深さは最大0.21mを測り、断面形は逆台形状を呈す。

埋土は3層に分層できた。

土師器片が②層中より出土したが、図化できなかった。

出土した土師器片と、SD02以前に掘り込まれたと考えられることから、古墳時代のもと考えられる。

性格は不明である。

(原田)

SK02 (挿図30、図版5)

調査区中央のG6グリッドにあり、標高41.5m付近の緩斜面に立地する。

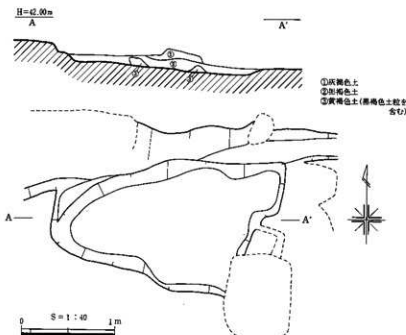
平面形は、上縁部・底部とも隅丸長方形を呈するが、底部北側は内側に挟るように掘り込まれており、特に北東隅で顕著である。規模は、上縁部長軸0.84m×短軸0.62m、底部長軸0.95m×短軸0.72mを測り、底部北東隅は0.25m奥に掘り込まれる。深さは最大0.64mを測り、断面形は袋状を呈す。

底面上縁部長軸0.25m×短軸0.18m、深さ0.34mを測る底面ピットを検出した。

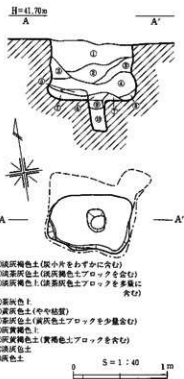
埋土は10層に分層できた。

遺物は全く出土していないが、形態的特徴から縄文時代の落とし穴と考えられる。

(原田)



挿図29 石籠第3遺跡森末地区SK01遺構図



挿図30 石籠第3遺跡森末地区SK02遺構図

S K03 (挿図31、図版5)

調査区中央南側のF8グリッドにあり、標高37.7~37.9mの緩やかに南側へ傾斜する斜面に立地する。西側約5mにはS I 01、北側約5mにはS K04、南東側約5mにはS K07がある。

平面は上縁部・底部とも不整形円形、断面不整形長方形を呈す。上縁部で長軸1.08m×短軸0.92m、底部で長軸0.88m×短軸0.85m、深さ最大1.39mを測る。底面はフラットである。

埋土は6層に分層できた。いずれも粘質土である。

遺物は出土していないが、形態的特徴から、縄文時代の落とし穴と考えられる。(牧本)

S K04 (挿図32、図版5・6)

調査区中央南側のG8グリッドにあり、標高39.1~39.4mの緩やかに南側へ傾斜する斜面に立地する。南側約5mにはS K03があり、西側にはS D02-2が隣接している。

平面は上縁部・底部とも不整形円形、断面はやや斜めに掘り込まれ不整形長方形を呈す。上縁部で長軸0.82m×短軸0.62m、底部で長軸0.86m×短軸0.71m、深さ最大1.43mを測る。底面は一部深く掘り下げられており、フラットではない。

埋土は10層に分層できた。いずれも粘質土である。

遺物は出土していないが、形態的特徴から、縄文時代の落とし穴と考えられる。(牧本)

S K05 (挿図33・34、図版6)

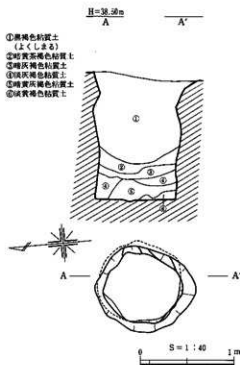
調査区東側のH10グリッドにあり、標高40.2~41.0mの緩やかに南側へ傾斜する斜面に立地する。東側約13mにはS K06がある。

平面は上縁部不整形長円形、底部不整形、断面は二段に掘り込まれ不整形を呈す。上縁部で長軸1.97m×短軸1.3m、底部で長軸1.54m×短軸0.5m、深さ最大0.86mを測る。底面は平坦であるが、やや傾斜している。

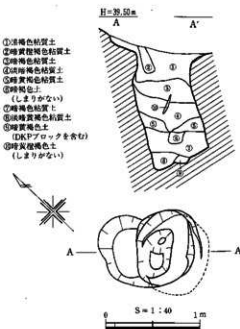
埋土は3層に分層できた。いずれも粘質土である。

埋土中から土師器皿Po132が出土している。その他に、埋土中から弥生土器が出土しているが、図化できなかった。

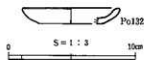
出土物から平安時代以降のものと考えられるが、性格は不明である。(牧本)



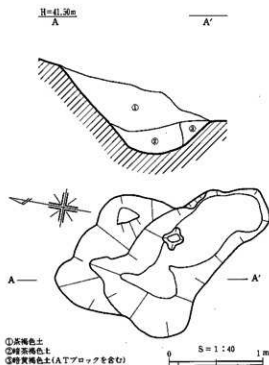
挿図31 石籠第3遺跡森末地区S K03遺構図



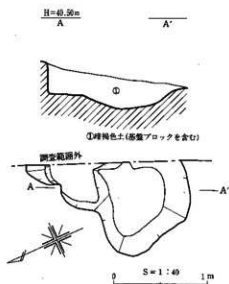
挿図32 石籠第3遺跡森末地区S K04遺構図



挿図33 石籠第3遺跡森末地区S K05出土遺物実測図



押図34 石船第3遺跡森末地区SK05遺構図



押図35 石船第3遺跡森末地区SK06遺構図

S K06 (押図35、図版6)

調査区東側中央部のH11グリッドにあり、標高39.3~40.0mの緩やかに南側へ傾斜する斜面に立地する。西側約13mにはSK05がある。

調査区際内にあり、平面形は不明である。断面は二段に掘り込まれ不整形を呈す。検出部分で上縁部長軸1.5m×短軸1.0m以上、深さ最大0.48mを測る。

埋土は暗褐色土単層である。

埋土中から土器片が出土しているが、図化できなかった。

時期・性格とも、不明である。

(牧本)

S K07 (押図36、図版6)

調査区南側中央部のF9グリッドにあり、標高37.0~37.1mのごく緩やかに南側へ傾斜する斜面に立地する。北西側の5mにはSK03がある。

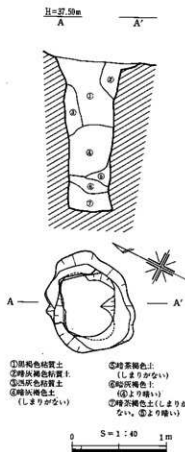
平面は、上縁部不整形丸長方形、底部不整形、断面は長方形を呈す。上縁部で長軸1.06m×短軸0.85m、深さ最大1.86mを測る。

埋土は7層に分層できた。上層は粘質土であるが、下層は締まりがないものである。

遺物は出土していない。

遺物は出土していないが、形態的特徴から縄文時代の落とし穴と考えられる。

(牧本)



押図36 石船第3遺跡森末地区SK07遺構図

SK08 (押図37、図版6)

調査区は中央南端のE7グリッドにあり、標高37.2m付近に立地する。

平面形は、上縁部不定形、底部不整な楕円形を呈し、規模は上縁部長軸1.28m×短軸1.18m、底部長軸1.01m×短軸0.65mを測る。深さは最大1.72mを測り、断面形は南北軸で長方形、東西軸で逆台形状を呈す。

底面の上縁部長軸0.18m×短軸0.15m、深さ0.33mを測る底面ピットを検出した。

埋土は6層に分層できた。

遺物は全く出土していないが、形態的特徴から縄文時代の落とし穴と考えられる。(原田)

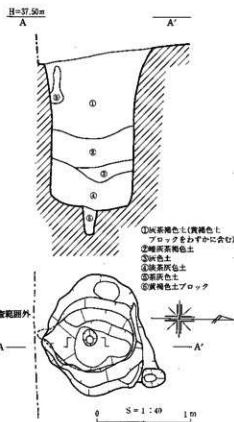
SK10 (押図38、図版7)

調査区中央南側のF5グリッドにあり、標高38.4~38.5mの緩やかに西側へ傾斜する斜面に立地する。周辺は、耕作等の掘削により、かなり削平されている。北西側約4.2mにS103が位置する。

遺存状態は比較的よい。平面形は上縁部・底部とも楕円形を呈す。規模は上縁部長軸1.10m×短軸0.73m、底部長軸0.90m×短軸0.59mを測る。深さは最大0.99mを測り、断面は長方形を呈す。底面で長軸0.22m×短軸0.18m、深さ0.40mを測る底面ピットを検出した。

埋土は4層に分層できた。

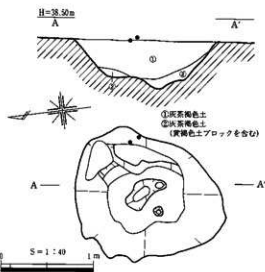
遺物は出土していないが、遺構の形態から、SK10は縄文時代頃の落とし穴と考えられる。(井上)



押図37 石籠第3遺跡森末地区SK08遺構図



押図38 石籠第3遺跡森末地区SK10遺構図

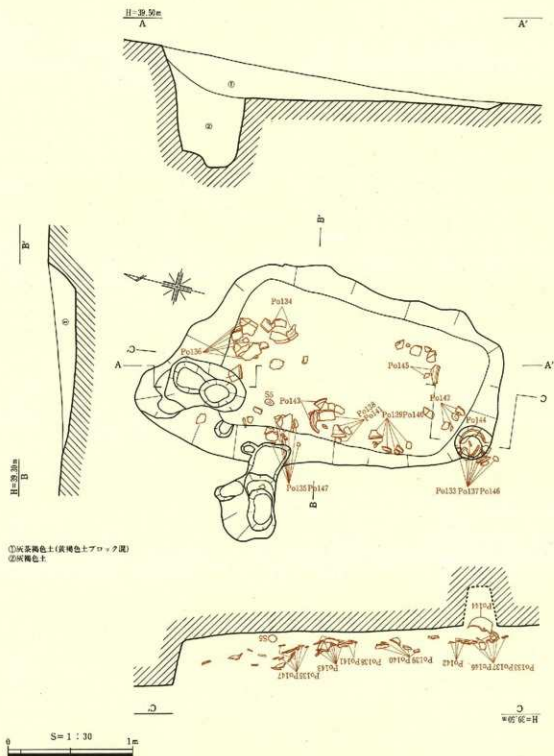


押図39 石籠第3遺跡森末地区SK11遺構図

S K11 (挿図39、図版7)

調査区中央南側のF5グリッドにあり、標高約38.2~38.3mのほぼ平坦面に立地する。周辺は、耕作等の掘削により、かなり削平されている。北東側約1.8mにはS K10が位置する。

遺存状態は比較的良好、平面形は上縁部・底部とも不整形円形を呈す。規模は、上縁部長軸1.48m×短軸1.26m、底部長軸0.81m×短軸0.58mを測る。深さは最大0.50mを測り、断面は不整な逆台形形状を呈す。なお、底部には一部、木の根による攪乱を受けている部分が見られる。



挿図40 石輪第3遺跡森末地区SK09遺構図

埋土は2層に分層できた。

遺物としては、土師器片・瓦・石材などが出土しているが図化できなかった。これらはすべて遺構上面からの出土である。

底部出土遺物がないたため、時期・性格とも不明である。

(井上)

SK09 (挿図40~42、
図版6・7・15・16)

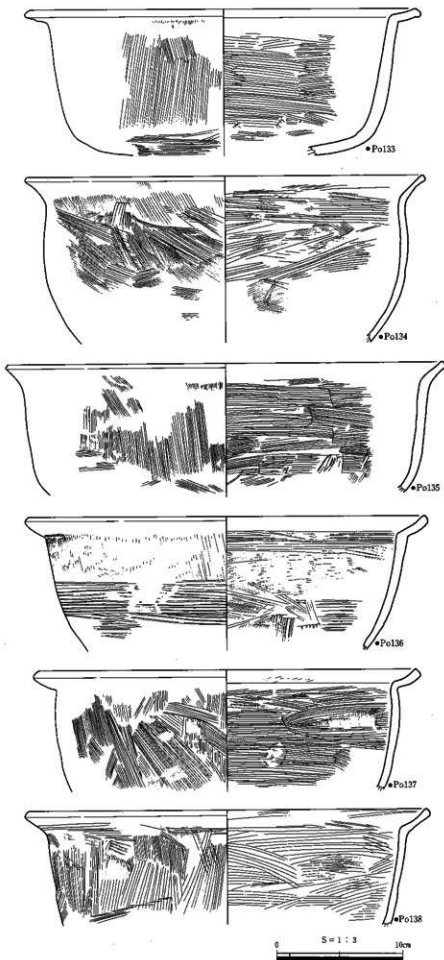
調査区南西のE4グリッドにあり、標高38.8~39.3mの南に傾斜する緩斜面に立地する。南側にSK14が隣接し、西側0.1mにSA02、東側1.2mにSA03、東側3mにSA04、北側2.9mにSA01がある。

遺存状態はやや悪く、南側の壁が削られている。平面は、上縁部は不整形、底部はほぼ長方形を呈し、上縁部長軸2.4m×短軸1.4m、底部長軸2.0m×短軸1.1mを測る。深さは0.4mを測り、断面は不整形を呈する。南北にそれぞれビットが1個ずつ掘り込まれ、北側のビットは(62×34-55)cm、南側のビットは(30×26-31)cmで、南側のビットは、遺物の出土状況から、SK09に伴うものと考えられる。

埋土は、灰茶褐色土(黄褐色土ブロック泥)が単層で入り、北側のビットには灰褐色土が単層で入る。

出土遺物には、図化できたものに、土師器土鍋Po133~142、瓦質土器土鍋Po143、土師器把手付土鍋Po144、瓦質土器羽釜Po145、土師器椀Po147、土師器把手Po146、敲石S5がある。

これらのうち、南側ビットから



挿図41 石尾第3遺跡森末地区SK09出土遺物実測図(1)

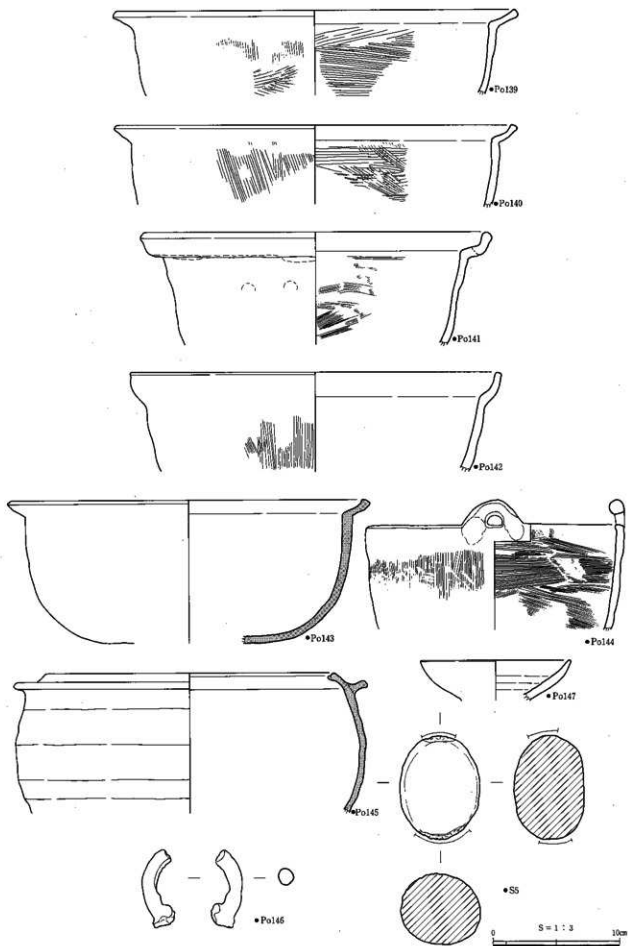


插图42 石胎第3 造部森末地区SK09出土物实测图(2)

は瓦質羽釜Po145が出土している。他はすべて底面からの出土である。

出土遺物から、SK09は平安時代末から鎌倉時代初めごろのものと考えられる。

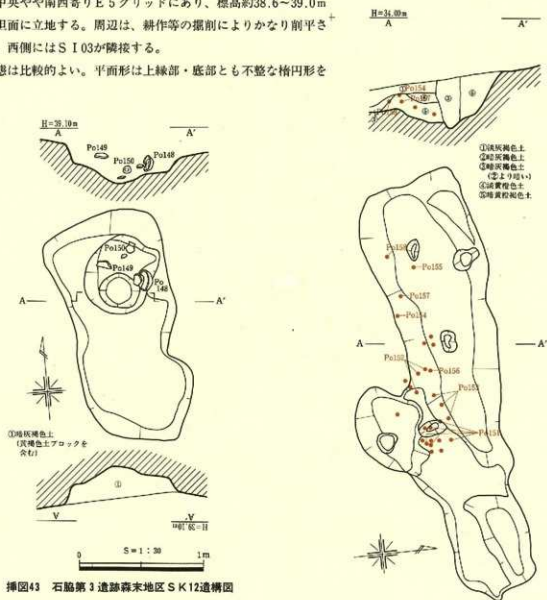
遺物は破片で出土しており、SK09の用途は廃棄土坑と考えられる。

(長尾)

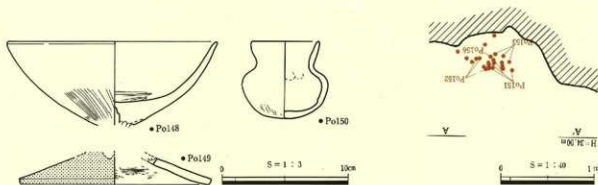
SK12 (挿図43・44、図版7・16)

調査区中央やや南西寄りE5グリッドにあり、標高約38.6~39.0mのはほぼ平坦面に立地する。周辺は、耕作等の掘削によりかなり削平されている。西側にはSI03が隣接する。

遺存状態は比較的よい。平面形は上縁部・底部とも不整な楕円形を



挿図43 石鳥第3遺跡森末地区SK12遺構図



挿図44 石鳥第3遺跡森末地区SK12出土遺物実測図

挿図45 石鳥第3遺跡森末地区SK13遺構図

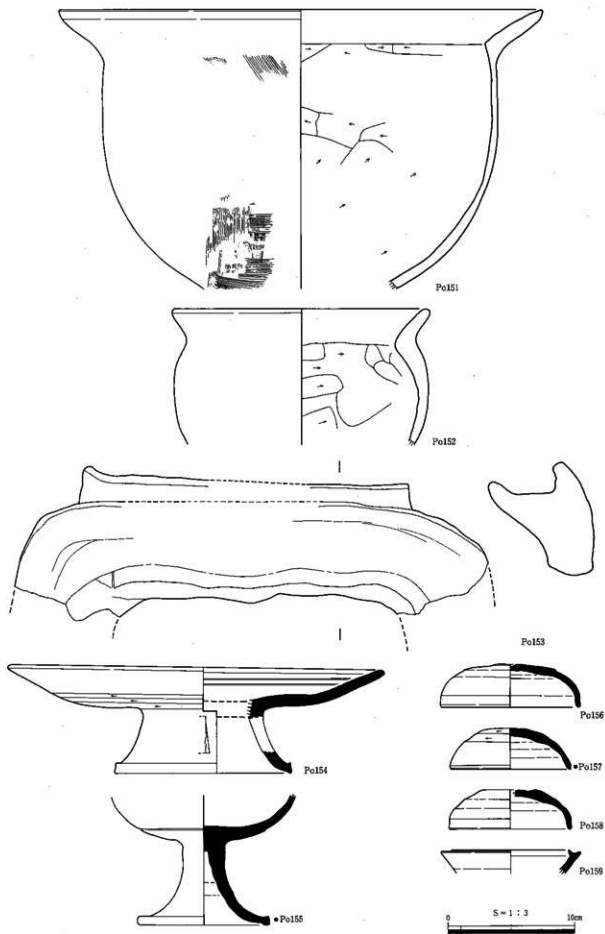


插图46 石路第3道跡森木地区SK13出土文物实测图

呈す。北側が二段に掘り込まれて一段深くなり、深さの浅いピットが1個掘り込まれる。規模は上縁部長軸1.79m×短軸0.72m、底部長軸1.41m×短軸0.57mを測る。深さは最大0.27mを測り、断面は不整な逆台形状を呈す。埋土は暗灰褐色土が単層ではいる。

出土遺物には、凶化できたものに土師器高坏坏部Po148、土師器高坏坏部Po149、土師器小型丸底蓋Po150がある。これらは、いずれも底面から出土したものである。

出土遺物から南谷大山Ⅷ期、古墳時代中期後半ごろのものと思われる。

SK12は、出土遺物から何らかの祭祀的な意味合いをもつ土坑であった可能性が考えられる。(井上)

SK13 (挿図45・46、図版8・10・16)

調査区南西端のB2・C3グリッドにあり、標高約32.9~33.4mの緩やかに南側へ傾斜する斜面に立地する。周辺は、耕作等の掘削により、かなり削平されている。南側約0.6mにSD06が、北側約13.7mにSD05が、それぞれ位置する。

遺存状態はあまりよくない。平面形は上縁部・底部とも不整な帯状を呈し、規模は上縁部長軸4.40m×短軸0.96m、底部長軸2.84m×短軸0.58mを測る。深さは約0.53mを測り、断面形は皿状を呈す。東側及び南側上縁部と、底部の一部では木の根による擾乱を受けている。

埋土は5層に分層できた。

出土遺物には、凶化できたものに土師器甕Po151、Po152、土師器甕Po153、須恵器罏付盤Po154、須恵器高坏Po155、須恵器坏蓋Po156、Po157、Po158、須恵器坏身Po159がある。これらのうち、底面付近からPo155・Po157が出土している。その他のものは埋土中からのものである。

須恵器はTK217(古相)併行期と考えられ、古墳時代終末期ごろのものと考えられる。

SK13の性格は不明である。(井上)

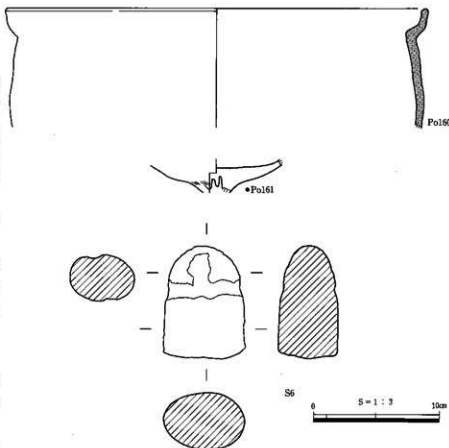
SK14 (挿図47・48、図版8・16)

調査区の南西E4グリッドにあり、標高38.7m~38.9mの南に傾斜する緩斜面に立地する。北側にSK09が隣接し、北側1.1mにSA02、5.2mにSA01、東側1.9mにSA03、北東側4mにSA04がある。

遺存状態は比較的よい。平面は、上縁部は不整形、底部は不整形円形を呈し、上縁部長軸2.7m×短軸1.5m、底部長軸1.7m×短軸1.0mを測る。深さは0.55mを測り、断面は不整形を呈す。北側にピットが1個ある。

埋土は5層に分層できた。

出土遺物には、凶化できたものは、瓦質土器土鍋Po160、高坏Po161、有溝石鏡S6がある。これらのうち、底面から、Po161が出土している。他は埋土上層か



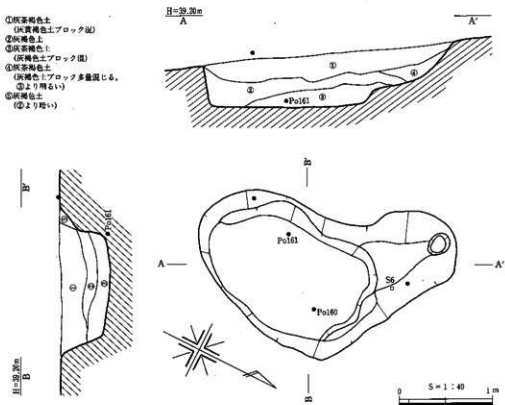
挿図47 石籠第3遺跡森末地区SK14出土遺物実測図

らの出土である。

床面出土遺物は古墳時代中期のものと考えられるが、この遺構に伴うものとは考えられず、埋土中遺物から鎌倉時代初めごろのものと考えられる。

S K14の性格は不明である。

(長尾)



挿図48 石島第3遺跡森末地区 S K14遺構図

S K15 (挿図49、図版8)

調査区はほぼ中央南側のF7グリッドにあり、標高37.6m付近に立地する。

平面形は、上縁部が不整な隅丸長方形、底部が不整な楕円形を呈し、規模は上縁部長軸1.02m×短軸0.78m、底部長軸0.61m×短軸0.43mを測る。深さは最大1.32mを測り、断面形は逆台形状を呈す。

底面上縁部長軸0.22m×短軸0.18m、深さ0.39mを測る底面ビットを検出した。

埋土は2層に分層できた。

遺物は全く出土していないが、形態的特徴から縄文時代の落とし穴と考えられる。

(原出)



挿図49 石島第3遺跡森末地区 S K15遺構図

第6節 溝状遺構

SD01 (挿図50、図版8)

調査区中央北側のH5、I5グリッドにあり、標高45.2~46.3mの南に傾斜する斜面に立地する。

斜面に対して、やや西に振るかたちで、北西-南東方向に直線的に延びる。南北両端を後世の攪乱により切られており、全体を検出することはできなかったが、検出できた規模は、長さ約5.8m、幅約0.25~0.68m、深さ3~17cmを測る。断面は逆台形状を呈する。

埋土は2層に分層できた。

遺物は全く出土しておらず、時期・性格ともに不明である。

(原田)

SD02 (挿図51~53、図版9・16・17)

調査区中央のH6、G6・7・8グリッドにあり、標高39.1~42.5mの緩やかに南側へ傾斜する斜面に立地する。周辺は、耕作等の掘削により、かなり削平されている。

SD02は、異なる形態の2本の溝に分けることができ、北西側の二股に分かれるものをSD02-1、南東側のほぼ直線状に延びるものをSD02-2として述べることにする。

SD02-1は、Gラインに添うようにはほぼ直線状に走るが、G6グリッドで二股に分かれる。長さ18.0m以上、幅0.49~3.27m、深さ19~73cmを測る。西側は耕作により削平されている。底面北側には、径20~50cm、深さ10~25cmの不整形なピットが掘り込まれており、構状のものが立っていた可能性がある。

SD02-2は、02-1の東側に接続し、南東方向にはほぼ直線状に走る。長さ9.5m以上、幅0.5~1.15m、深さ10~26cmを測る。南東側は耕作により掘削されている。底面及び周辺には、不整形なピットが重複するように多数掘り込まれている。

埋土は、SD02-1と02-2では異なり、02-1のものは4層に分層でき、比較的締まりがないものである。SD02-2のものは3層に分層でき、02-1のものと比較してやや締まりがあり、特に⑥層は砂質土層でよく締まる。

出土遺物には、SD02-1で図化できたものに土師器壺Po164、土師器埴Po165、土師器甕Po166、須恵器蓋Po162、陶器Po167がある。これらのうち、底面からPo162・Po165が出土し、その他のものは埋土中からの出土である。

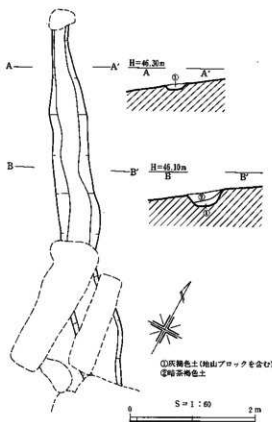
SD02-2では、図化できたものに須恵器壺Po163、平瓦Po168、不明瓦片Po169がある。いずれも、底面からの出土である。その他にも図化はできなかったが、多数の瓦片が底面及び周辺ピット内から出土している。

Po163は、SD04検出作業中出土の土器片及びSD03周辺出土の土器片と接合しており、SD02・03・04が同時に機能していたものと考えることができよう。

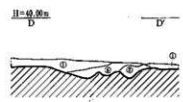
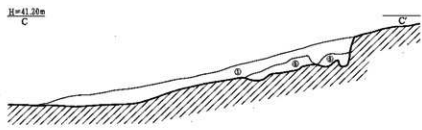
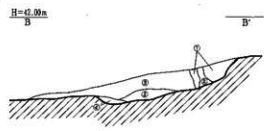
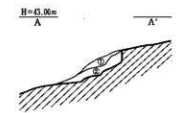
出土遺物から、奈良時代から中世ごろのものと考えられる。

底面にピットが掘り込まれていること、また、SD02-2からは瓦片がまとまって出土していることから、瓦葺きの構状のものが建てられていた可能性がある。遺物が示す時期は幅をもつが、数次にわたって建て替えられたものと考えられる。

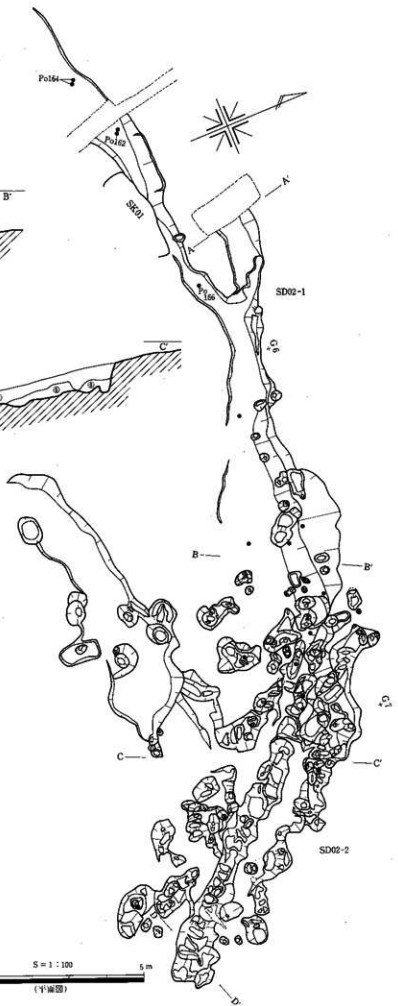
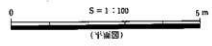
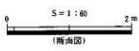
(牧本)



挿図50 石島第3遺跡森末地区SD01遺構図



- ①暗灰褐色土
- ②暗褐色土
(多数アロックをわずかに含む)
- ③暗茶褐色土
(多数アロックを多量に含む)
- ④暗灰褐色土
(多数粘土多量に含む)
- ⑤暗灰褐色砂質土
(よくしまる。炭化物をわずかに含む)
- ⑥木の根の痕跡

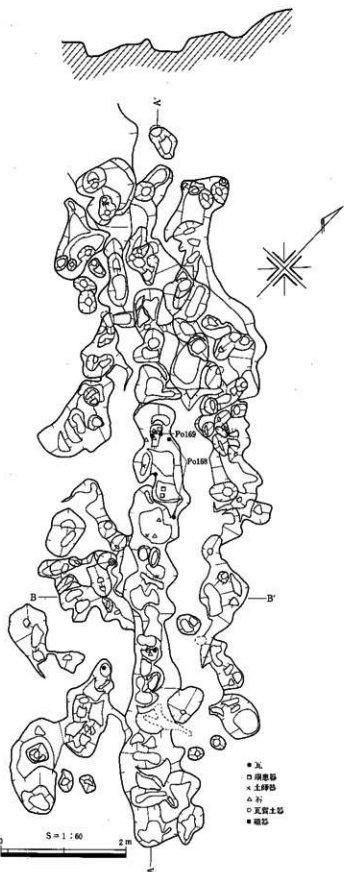
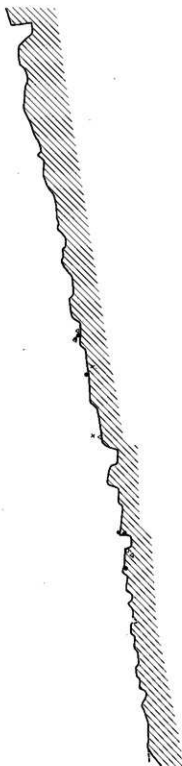


挿図51 石輪第3遺跡森東地区SD02遺構図

H=42.0m
B

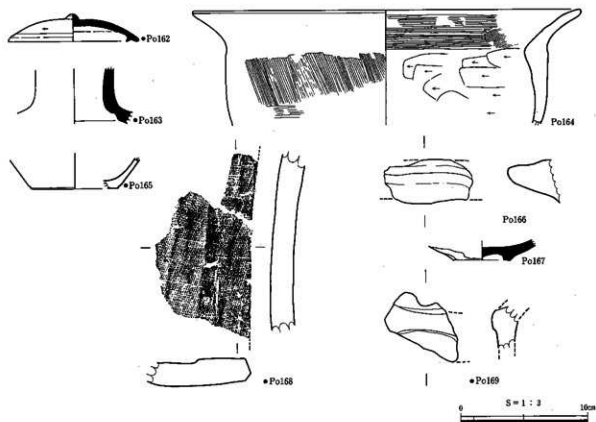
B'

A



H=42.0m
A

插图52 石胎第3遺跡森末地区S D 02-2遺構図



挿図53 石輪第3遺跡森末地区SD02出土遺物実測図

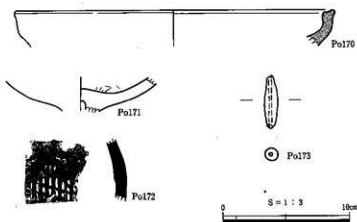
SD03 (挿図54・55、図版9)

調査区中央南側のF9グリッドにあり、標高37.2~37.8mの緩やかに南側へ傾斜する斜面に立地する。周辺は、耕作等の掘削により、かなり削平されている。北西約8mにはSD02がある。

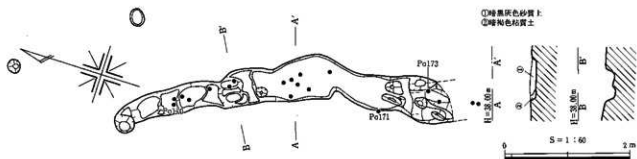
SD03は等高線に直交するように、やや湾曲しながら南北方向に走る。長さ5.4m以上、幅0.35~0.7m、深さ7~10cmを測る。南側は調査区外へ延びている。

溝内には、中央部に深さ10cm程度の不整形なビットが掘り込まれており、前述のSD02同様に柵状または板壁といったものが立っていた可能性がある。

埋土は、基本的に2層に分層でき、砂質のよく締まっ



挿図54 石輪第3遺跡森末地区SD03出土遺物実測図



挿図55 石輪第3遺跡森末地区SD03遺構図

た埋土である。

出土遺物には、図化できたものに、埋土中及び底面から瓦質土器土銅片Po170、土師器高坏Po171、常滑焼埴Po172、土鉢Po173が出土している。その他に、図化できなかったが瓦片も出土している。

出土遺物から、中世ごろには埋没していたものと考えられる。

底面にピットが掘り込まれていること、また、SD02同様瓦片が出土していることから、瓦葺きの塚状のものが立っていた可能性がある。遺物が示す時期は新しいものであるが、数次にわたって建て替えられたものと考えられると、創建時期はかなり遡る可能性もある。

(牧本)

SD04 (挿図56・57、
図版9)

調査区北西側のG3・G4・H3・H4グリッドにあり、標高43.4~44.8mの緩やかに南側へ傾斜する斜面に立地する。後世の耕作等により南側は大きく掘削され、崖面となっている。南側約15mにはSD05がある。

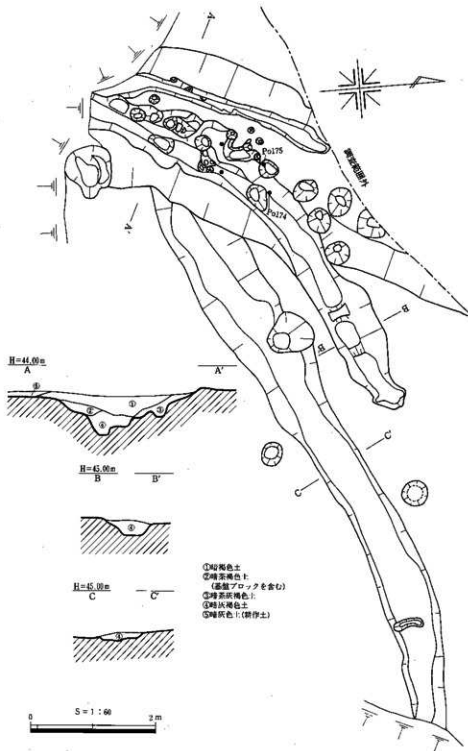
SD04は、計3本の溝が重複しており、西側からSD04-1、-2、-3として述べることにする。

SD04-1は、等高線に直交するように、ほぼ直線状に南北方向に走る。後述するように、SD04-2によって掘削されているものと考えられ、遺存状態は悪い。長さ5.6m以上、幅推定1.3m、深さ15~47cmを測る。北側は調査区外へ延び、南側は大きく掘削されている。

溝内には、底面西側に深さ約10cmの溝、東側に径約40cm前後のピットが掘り込まれている。

前述のSD02同様に棚状または板塚状のものが立っていた可能性がある。

SD04-2は、土層断面の切り合い関係から、SD04-1を掘り込み南西から北西方



挿図56 石籠第3遺跡森末地区SD04遺構図

向に走る。北側はやや北東側に曲がっている。長さ7.1m以上、幅0.54~1.44m、深さ7~54cmを測る。北側になつてだんだん浅くなっている。南側は大きく掘削されている。

溝内には、04-1同様径20cm前後のビットがあり、柵状のものが立っていた可能性がある。

SD04-3は非常に浅く、長さ9.2m以上、幅0.55~1.1m、深さ9~14cmを測る。

形態も、上記のものと異なり、底面にはビット等は検出されていない。

埋土は、SD04-2は3層に分層できた。SD04-1、-3については単層のみ確認できた。

土層の切り合い関係から、SD04-1→04-2の順に掘り込まれたものと考えられるが、04-3との切り合い関係は不明である。

出土遺物には、図化できたものに、SD04-2の埋土中から土師器高杯Po174、円筒埴輪片Po175が出土している。これらの遺物は古墳時代中期末から後期にかけてのものと思われ、これらの遺構に伴うものとは考えられない。南側にはSD04につながるものと考えられるSD05があり、また検出作業中出土の須恵器片がSD02出土のものと同接していることから、SD02・05と同時期、中世ごろには埋没していたものと考えられる。

瓦は出土していないが、後述するSD05と同様に瓦葺きの塚状のものが立っていた可能性がある。(牧本)

SD05 (挿図58-63、図版9・10・17)

調査区西端のC2、D2・3、E3、F3グリッドにあり、標高35.5~40.0mの緩やかに南側へ傾斜する斜面に立地する。

周辺は、梨耕作等の掘削によりかなり削平されており、D2枕付近で大きく掘削を受け、2本に分断されている。ここでは北側のものをSD05-1、南側のものをSD05-2として述べることにする。

SD05-1は、南北方向にほぼ直線状に走る。長さ13.7m、幅0.35~1.14m、深さ6~17cmを測る。底面には、不整形なビットが重複するように多数掘り込まれており、柵状または板状の施設が立っていた可能性がある。

SD05-2は、SD05-1から南側へ約3m離れ、やや南西方向に振れて直線状に走る。このためSD05-1とは一直線とはならず、やや蛇行するように走る。長さ9.5m以上、幅0.5~1.15m、深さ10~26cmを測る。南西側は耕作により大きく掘削されている。

底面及び周辺には、SD05-1同様不整形なビットが重複するように多数掘り込まれている。

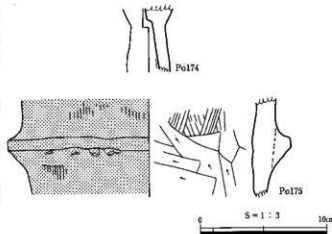
埋土は、5層に分層できた。下層の②層は砂質土層で、よく締まるものである。

SD05-1では、図化できたものに、須恵器壺Po177、須恵器甕片Po180、須恵器提瓶または横瓶片Po181、軒丸瓦片Po183、丸瓦Po185~Po189、平瓦Po190~Po200がある。いずれも底面からの出土であるが、平瓦Po200はやや離れたもの同士が接合している。

SD05-2では、図化できたものに、白磁碗Po176、平行叩きのある須恵器甕片Po179、格子日叩きをもつ須恵器甕片Po182、軒丸瓦Po184、平瓦Po192がある。いずれも底面からの出土である。

出土遺物は古墳時代後期から中世にかけてのものであるが、大半は平安末期から鎌倉時代前半と考えられる。

底面にビットが掘り込まれていること、また、瓦片がまとまって出土していることから、瓦葺きの塚状のものが建てられていた可能性がある。遺物が示す時期は幅をもつが、数次にわたって建て替えられたものと考えられる。(牧本)



挿図57 石籠第3遺跡森末地区SD04出土遺物実測図

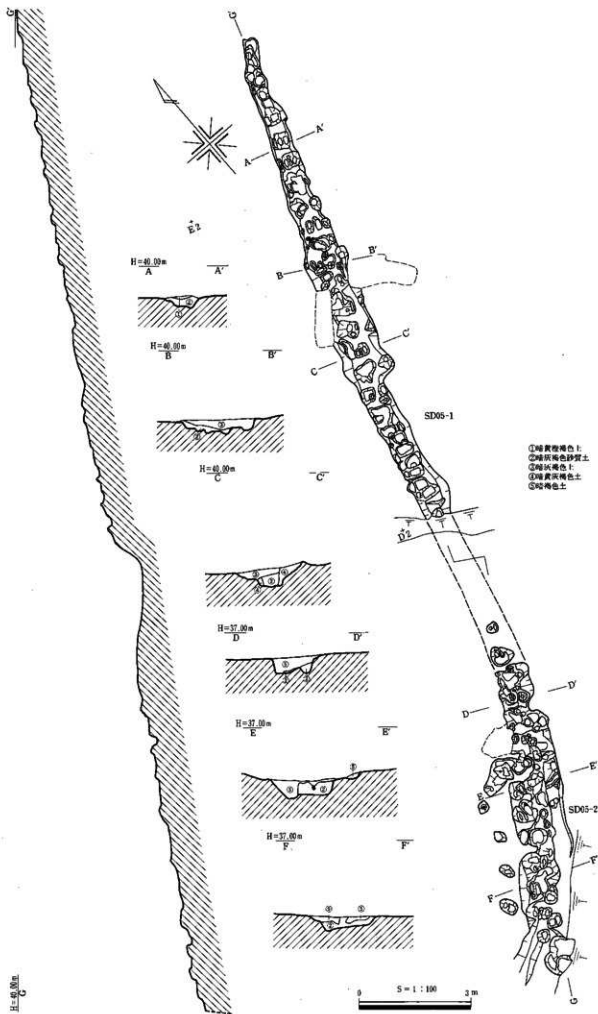


插图58 石髓第3遺跡森末地区SD05遺構図

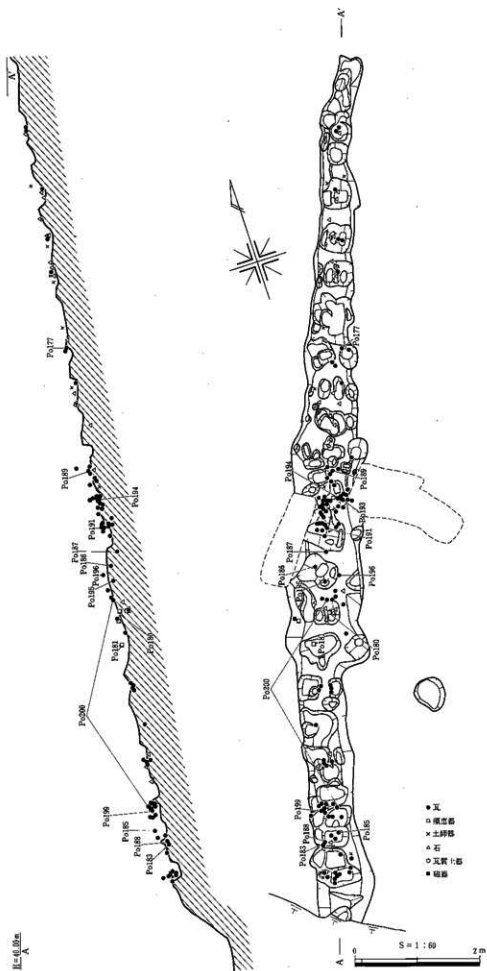


插图59 石胎第3道踪森末地区SD05-1 遗物出土状况图

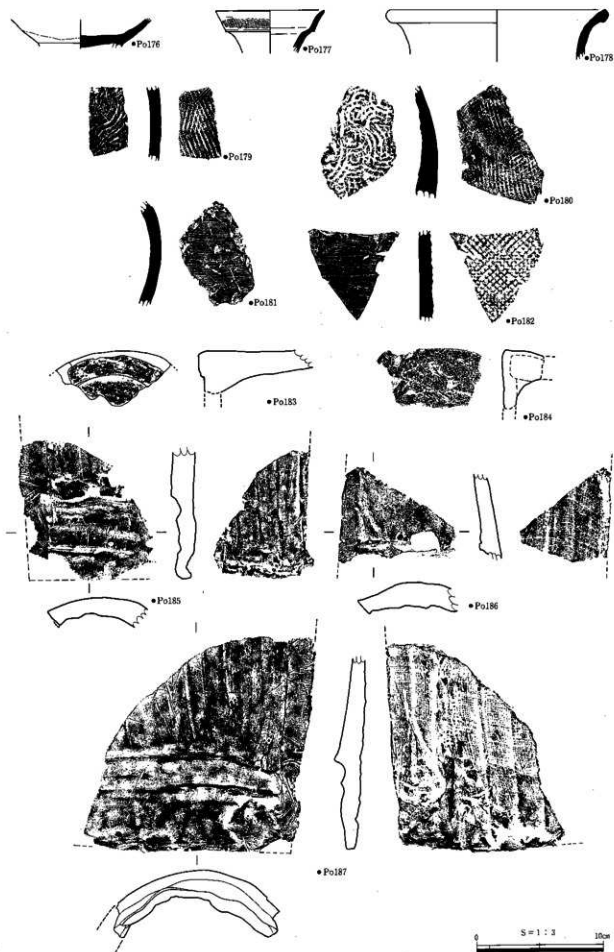


插图80 石胎第3 遗址森末地区 S D05出土遗物实测图(1)

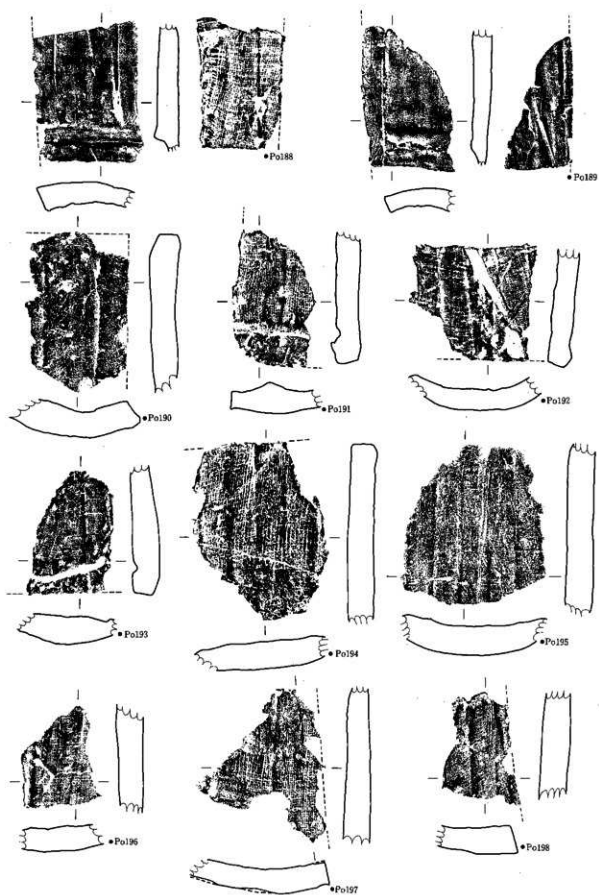


插图61 石胎第3道脉森末地区S D05出土遗物实测图(2)



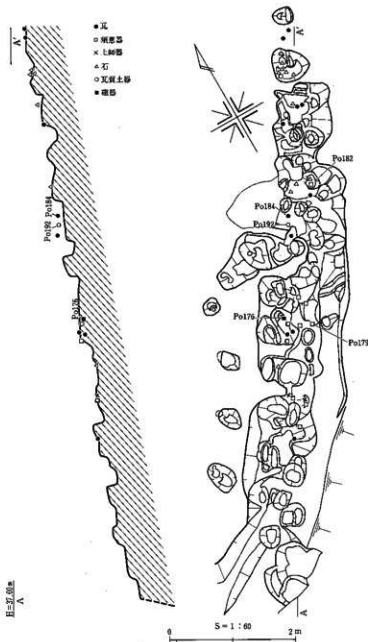
挿図62 石鳥第3遺跡森末地区SD05
出土遺物実測図(3)

SD05 (挿図64・65、図版10・17・18)

調査区南端のB2、B3グリッドにあり、標高32.3~32.9mのご緩やかに南側へ傾斜する斜面に立地する。北側約8mにはSD05-2、北側約3mにはSK13がある。

巻壁層はDKP層で非常に軟弱であるとともに、周辺は梨耕作等の掘削によりかなり削平され、一部途切れている。

この溝は、SD05-2の延長線上から直角に東へ折れ曲がり、東側は調査区外へ伸びている。一部途切れているが、長さ9.8m以上、幅0.6~1.2m、深さ18~37cmを測る。底面には、不整形なビットが重複するように多数掘り込まれており、特に、東端部分ではビットが2列に掘り込まれている。このことから、柵状または板敷状の施設が立っていたものと思われる。



挿図63 石鳥第3遺跡森末地区SD05-2遺物出土状況図

埋土は3層に分層できたが、純粋な埋土は③層のみである。

図化できたものに、土師器甕Po201、瓦質土器土鍋Po202、須恵器器蓋Po203、須恵器甕片Po204・Po205、平瓦片Po206がある。いずれも埋土中からの出土で、Po203～Po205はS D06の北側に隣接するS K13からの転落遺物と考えられる。

その他に、埋土中から藍澤が出土している。

出土遺物から、平安時代後半から中世ごろのものと考えられる。

他の溝状遺構同様底面にビットが張り込まれ、また、瓦片がわずかながらも出土していることから、瓦葺きの塼状のものが建てられていた可能性がある。遺物が示す時期は幅をもつが、数次にわたって建て替えられたものと考えられる。(牧本)

第7節 段状遺構

S S01・02 (挿図66～68、図版10・11・18)

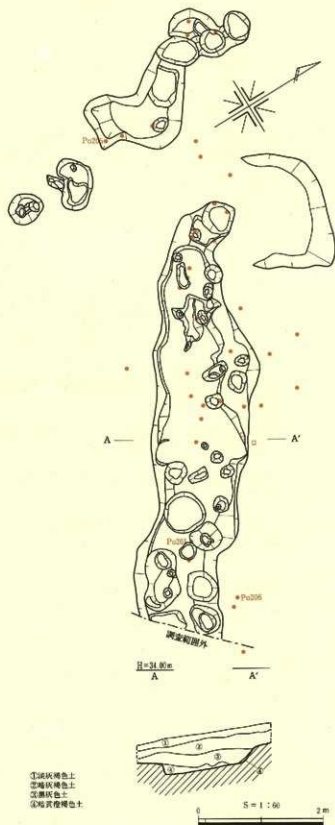
調査区の最も北東側のK11・12、L11・12・13グリッドにあり、標高48.0～49.5mの南側へ傾斜する斜面に立地する。S S01の北側肩部にわずかに遺存しているものをS S02とする。S S01は畑地の造成により南側は大きく掘削され、崖面となっている。

S S01は斜面を二段にカットし、長さ13.8m、幅3.4m以上にわたって平坦面を作っている。掘り込みの深さは最大1.76mを測る。東側は調査区外へ延び、南側も大きく掘削されていることから、実際の規模はかなり大きなものと考えられる。

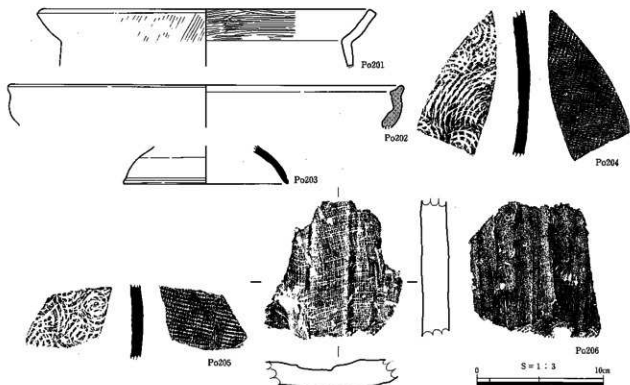
上段テラスのほぼ中央部から後述するS K1、底面及び上段テラスで計16個のビットを検出した。ビットのそれぞれの規模は挿表1を参照されたい。これらのビットはP4・5・6・8・10・12・14と間隔、深さは不整ではあるが鈎状に並ぶものがあり、何らかの建物が建っていた可能性がある。

S K1は、平面は不整な隅丸台形を呈し、長軸0.98m、短軸0.84m、深さ最大0.56mを測る。埋土は、2層に分層できた。床面上から鉄刀1、短刀1、砥石2が出土している。

S S02は、S S01の北側肩部にあり、切り合い関係からS S01に切られているものである。遺存状態は非常に悪く、わずかに平坦面を検出した。規模は不明である。



挿図64 石籠第3遺跡森末地区S D06遺構図



挿図65 石籠第3遺跡森末地区SD08出土遺物実測図

S S01の埋土は計7層に分層できた。埋土は中央部に向かって堆積しており、自然堆積したものと考えられる。SK1についても、S S01と同時に埋まっていたものと考えられる。

S S02の埋土は2層に分層できた。⑧層は炭化物・焼土粒をわずかに含むもので、S S01の埋土とは異なる。

S S01の出土遺物には図化できたものに、埋土中から格子目叩きを有する須器器袋Po207、底部に回転糸切りをもつ土師器小皿Po209、播鉢Po210、円筒埴輪片Po208がある。

SK1の底面からは、鉄刀F1、短刀F2、砥石S7が重なるように出土している。また、砥石S8はやや離れて出土している。

S S02からは遺物は出土していない。

S S01は埋土中遺物から中世初頭ごろのものと考えられ、これに伴うSK1についても同時期と考えられる。

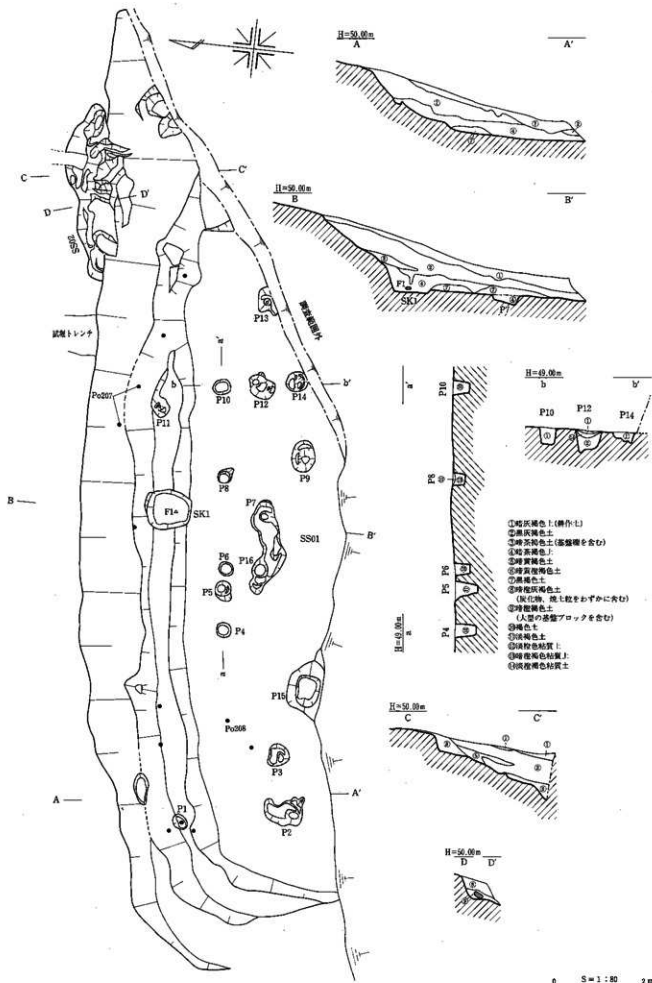
S S02については、遺物が出土していないため時期は不明であるが、切り合い関係からS S01に先行するものである。

S S01は建物にかかわるものと考えられ、SK1は埋納施設と考えられる。

(牧本)

ピット番号	現 横 (cm) 長軸×短軸-深さ	備考	ピット番号	現 横 (cm) 長軸×短軸-深さ	備考	ピット番号	現 横 (cm) 長軸×短軸-深さ	備考
P 1	36×26-28		P 7	34×22-56		P13	48×32以上-15	
P 2	40×32-23		P 8	40×29-27		P14	46×42-12	
P 3	48×40-12		P 9	66×50-32		P15	56×51-33	
P 4	30×28-45		P10	38×30-37		P16	43×35-37	
P 5	44×32-49		P11	50×34-32				
P 6	39×28-34		P12	57×44-50				

挿表1 石籠第3遺跡森末地区S S01ピット一覧表



挿図06 石籠築3遺跡跡末地区 S S01・02遺構図

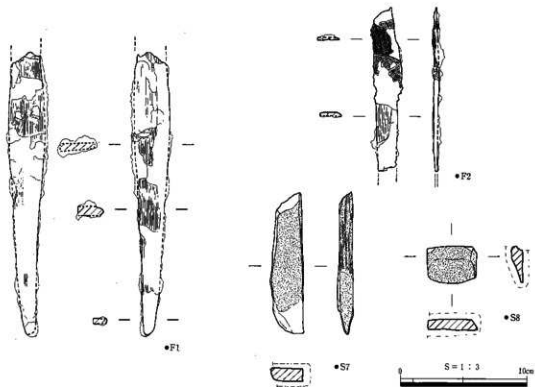
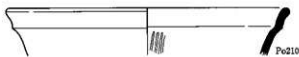
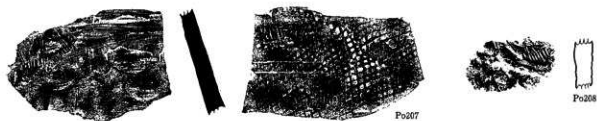
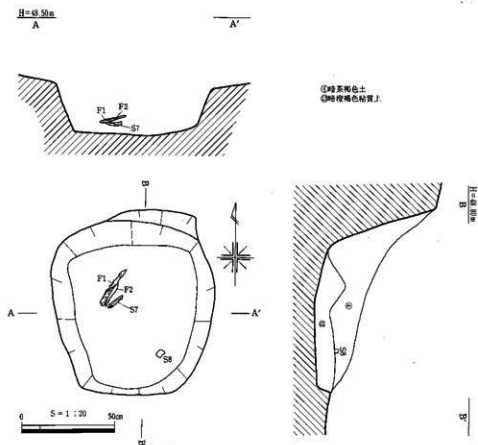


插图67 石路第3遗址森末地区S S01出土遗物实测图



挿図68 石輪第3遺跡森末地区SS01内SK1遺構図

SS03・04、SB07・08 (挿図69-72、図版11・18)

調査区南側のG9・10グリッドにあり、標高37.4~38.4mのごく緩やかに南側へ傾斜する斜面に立地する。調査区際に残るものをSS03、SS03の南側約3mにあるものをSS04とした。

SS03周辺は梨耕作等により大きく攪乱を受けており、また東側は調査区外へ延びており遺存状態は非常に悪い。床面上には、P1(33×19-39)cm、P2(28×23-35)cm、P3(19×19-47)cmが掘り込まれ、壁際には幅23cm、深さ8~15cmの溝が1.7m遺存し、鉤状に走っている。

SS04は、SS03同様後世の攪乱を受けており遺存状態は悪いが、一段低く平坦面が作り出されている。壁際には幅42~66cm、深さ15~30cmの溝が長さ10.8m以上にわたってほぼ一直線に遺存している。

平坦面には計29個のピットが掘り込まれているが、このうちP19・P25・P5・P8・P16・P30からなるSB07、P7・P11・P12からなるSB08が作られている。

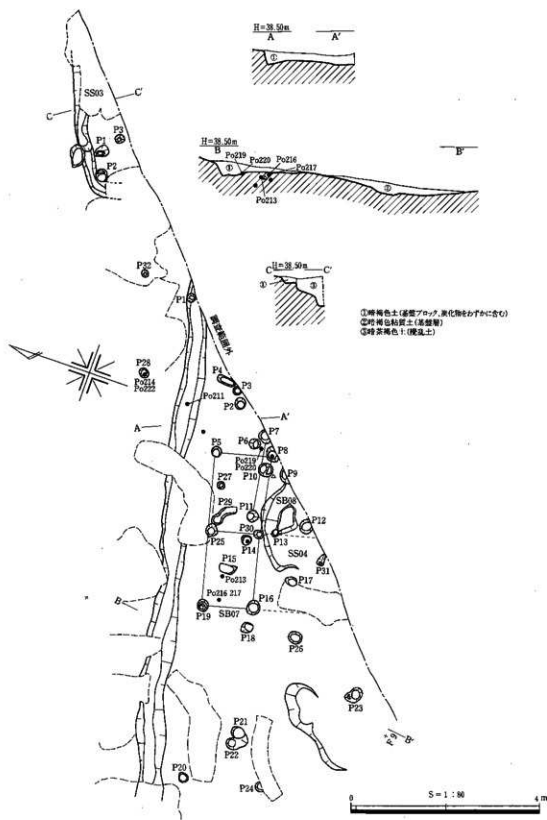
その他に、溝内にはP1が、周辺にはP28、P32がある。それぞれのピットの規模は挿表2を参照されたい。

SB07は、梁行き2間(3.3m)×桁行き2間以上(1.2m以上)の小規模な総柱建物になると考えられる。主軸方向はN-14°-Wとほぼ南北方向を向くものと思われる。柱穴間距離はP19~P25が1.6m、P25~P5間が1.7m、P19~P16間が1.1m、P5~P8間が1.2mを測る。

ピット内埋土は、P8のみ2層に分層できたが、他のものは①層単層である。

SB08は、梁行き1間以上(1.7m)×桁行き1間以上(1.2m以上)の小規模な掘立柱建物跡である。主軸方向は、N-8°-Wとほぼ南北方向を向くものと思われる。

ピット内埋土は、①層単層である。

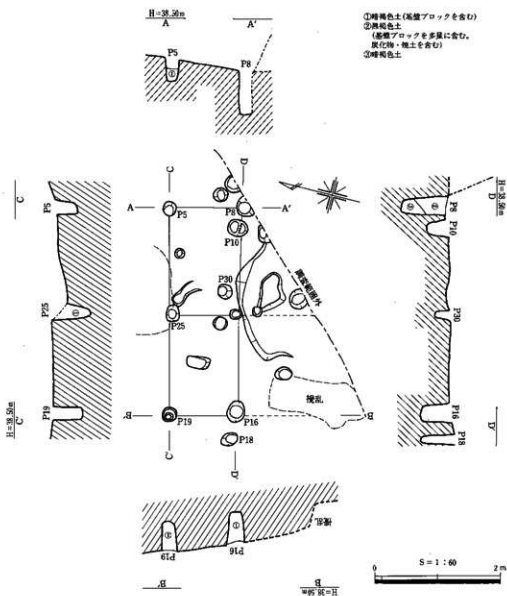


挿図08 石鳥第3遺跡森末地区 S S03・04、SB07・08遺構図

S S03・04とも、埋土は暗褐色土単層である。切り合い関係は不明である。

S S03からは、埋土中で上器片が出土しているが、炭化する事はできなかった。

S S04・SB07からは、炭化できたものの上器器土鍋Po211、土師器坏Po212、土師器小皿Po213~Po221、小型丸底壺Po222、不明鉄器F3がある。

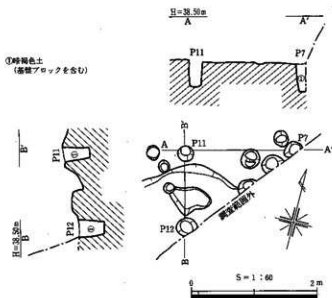


挿図70 石籠第3遺跡森末地区SB07遺構図

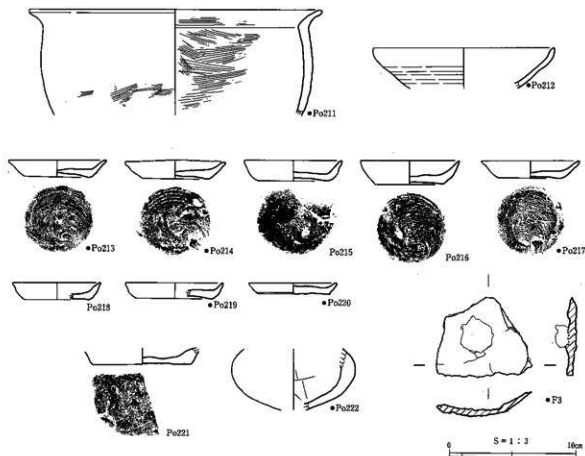
このうち、Po211はSB07のP8及びSS04溝内出土の遺物が接合している。Po213・217・219・220、F3は平坦面上で、Po212はP2内から出土している。Po214・222はP28から出土している。

SS04・SB07・SB08は、平坦面及びピット内遺物から中世初頭ごろのものと考えられる。SB07とSS08の先後関係は不明である。SS03は遺物が出土していないため時期は不明であるが、SS04と同時期のものと思われる。

SS04は、平坦面上にSB07・08と掘立柱建物跡が作られ、さらに、平坦面の周囲には浅い溝を巡らしている。SS03は平坦面上では明らかな建物跡は検出されなかったが、周囲に溝が巡っていること、同様のSS04上で掘立柱建物跡が検出されていることから、なんらかの建物にかかわるものと考えられる。(牧本)



挿図71 石籠第3遺跡森末地区SB08遺構図



挿図72 石鳥第3遺跡森末地区SS04出土遺物実測図

ピット 番号	縦 長軸×短軸-深さ	備考	ピット 番号	縦 長軸×短軸-深さ	備考	ピット 番号	縦 長軸×短軸-深さ	備考
P 1	19×19-20		P12	32×27以上-43		P23	39×27-40	
P 2	23×21-42		P13	16×16-20		P24	22×15以上-26	
P 3	16×15-17		P14	22×21-29		P25	28×22-61	
P 4	38×13-11		P15	36×20-40		P26	31×26-45	
P 5	23×22-49		P16	34×29-53		P27	16×16-8	
P 6	24×22-34		P17	35×20以上-46		P28	21×19-45	
P 7	30×17以上-45		P18	27×20-43		P29	19×19-11	
P 8	34×21以上-75		P19	23×23-56		P30	20×17-31	
P 9	32×15以上-55		P20	21×20-36		P31	27×14-36	
P10	32×28-49		P21	29×26-60		P32	18×13-33	
P11	24×24-45		P22	29×26-18				

挿表2 石鳥第3遺跡森末地区SS04ピット一覧表

第8節 ピット群

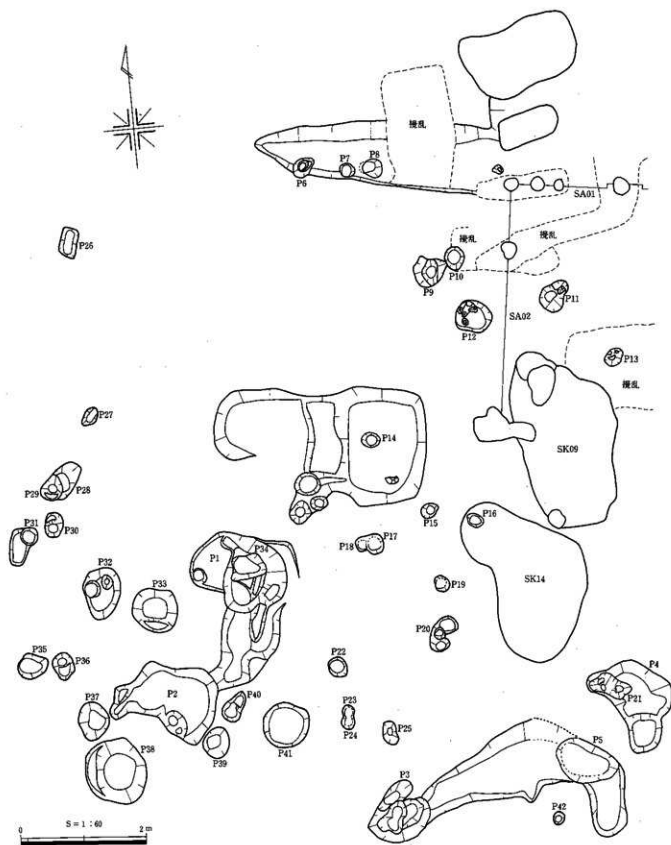
ピット群01 (挿図73)

調査区中央西側のE3・4グリッドにあり、標高38.3~40.0mの緩やかに南側へ傾斜する斜面に立地する。ほとんどのピットは、SA02、SK09、SK14の周辺および南西側に位置する。

ピットは計42個検出された。その広がり、東西×南北で約11m×12mである。平面形は不整形を呈するものがほとんどで、径は100cm前後のもの、おおむね30~50cmのものがある。規模は挿表3を参照されたい。

埋土は暗灰褐色土、灰茶褐色土、暗灰褐色土と地山のまじりのうちいずれかが単層で入るものが多い。
遺物が出土していないため、時期・性格は不明である。

(岩崎)



挿図73 石橋第3遺跡森末地区ビット群01遺構図

ビット 番号	規 長軸×短軸-深さ	備考	ビット 番号	規 長軸×短軸-深さ	備考	ビット 番号	規 長軸×短軸-深さ	備考
P1	150×120-46		P15	37×23-28		P29	38×33-37	
P2	141×115-31		P16	27×19-41		P30	39×28-16	
P3	98×78-35		P17	(25)×32-23		P31	28×28-40	
P4	112×91-27		P18	(18)×22-19		P32	81×56-29	
P5	99×65-19		P19	26×24-29		P33	73×68-21	
P6	39×26-51		P20	19×18-25		P34	57×40-48	
P7	25×23-64		P21	50×28-38		P35	48×41-36	
P8	33×28-57		P22	34×30-26		P36	38×31-39	
P9	55×43-51		P23	(20)×20-14		P37	60×51-62	
P10	49×32-28		P24	21×(18)-19		P38	102×95-92	
P11	53×44-23		P25	35×22-37		P39	49×41-41	
P12	58×50-21		P26	47×27-21		P40	51×32-31	
P13	31×25-47		P27	32×22-28		P41	76×70-24	
P14	30×23-38		P28	63×40-32		P42	20×19-7	

挿表3 石鳥第3遺跡森末地区ビット群01一覽表

ビット群02 (挿図74・75、図版19)

調査区南西側端近くのA1・2、B1・2・3、C2グリッドにあり、標高約31.9-34.5mの緩やかに南側へ傾斜する斜面に立地する。周辺は、耕作等の掘削により、かなり削平されている。A1杭とB2杭を結ぶ直線とその周辺に、SD06とSK13を挟むように位置している。

総数34個検出されている。不整形を呈するものがほとんどで、大きさ・深さはさほど大きくない。規模等は挿表4を参照されたい。

埋土は5層に分層でき、①・②・③・④・⑤層のいずれかが単層で入り込むものである。

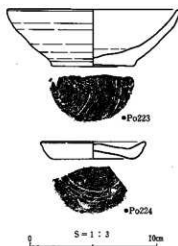
図化できたものにP10から出土した土師器皿Po224、P18から出土した土師器杯Po223の2点がある。これらはいずれも、ビット埋土の中程から出土したものである。

出土遺物から平安時代ごろのものと考えられるが、埋土中出土のため正確な時期・性格は不明である。

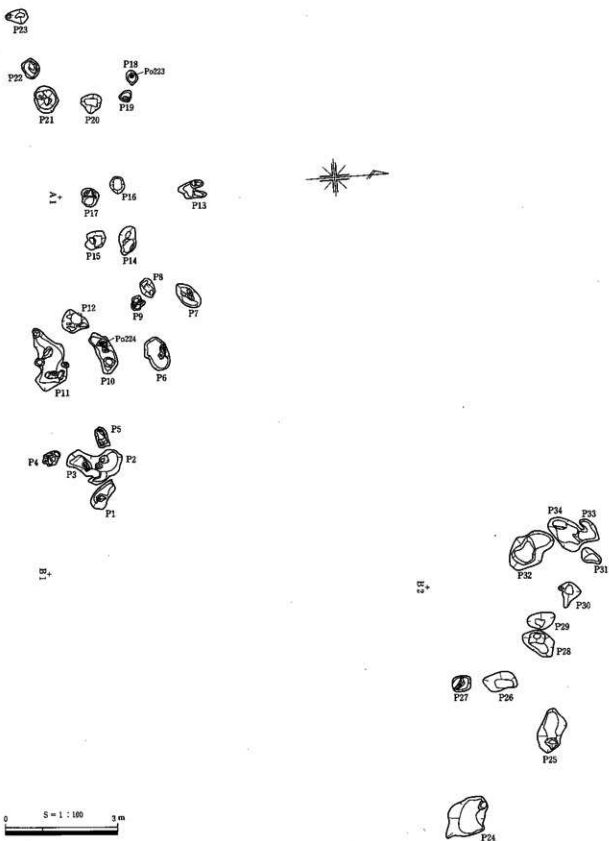
(井上)

ビット 番号	規 長軸×短軸-深さ	備考	ビット 番号	規 長軸×短軸-深さ	備考	ビット 番号	規 長軸×短軸-深さ	備考
P1	87×36-26.6		P13	76×43-10.9		P25	129×63-37.9	
P2	106×62-21.2		P14	77×43-17.8		P26	89×47-27.1	
P3	(64)×47-31.7		P15	62×46-11.2		P27	47×40-32.6	
P4	49×35-47.5		P16	42×38-10.9		P28	94×54-38.8	
P5	54×26-42.1		P17	44×40-33.2		P29	71×31-29.2	
P6	89×53-16.4		P18	37×30-17.4	杯	P30	65×42-19.3	
P7	80×43-18.3		P19	30×26-12.6		P31	58×34-22.4	
P8	53×33-16.2		P20	54×51-24.1		P32	129×90-31.6	
P9	32×30-15.8		P21	70×62-33.2		P33	55×(25)-23.0	
P10	115×42-24.8	皿	P22	48×43-17.0		P34	109×67-32.6	
P11	152×67-30.6		P23	64×32-31.3				
P12	71×56-50.0		P24	127×98-34.4				

挿表4 石鳥第3遺跡森末地区ビット群02一覽表



挿図74 石鳥第3遺跡森末地区
ビット群02出土遺物実測図



挿図75 石鳥第3遺跡森末地区ビット群02遺構図

ビット群03 (挿図26、図版11)

調査区は中央のF5・6・7、G6・7グリッドにあり、標高約39.2~40.1mの緩やかに南側へ傾斜する斜面に立地する。周辺は、耕作等により、かなり削平されている。このビット群内にはSB04が、また北側にSB

02・03、同じく西側にSB05などがそれぞれ位置している。そのため、これらの掘立柱建物跡のビットとならないものをビット群03のものとしている。

総数は46個検出された。不整形を呈するものがほとんどで、大きさ・深さはさほど大きくない。規模等は挿表5を参照されたい。

埋土は主に灰褐色系のものであった。

出土遺物が少ないため、ビット群03の時期・性格は不明である。

(井上)

ビット 番号	規 模 (cm) 長軸×短軸-深さ	備考	ビット 番号	規 模 (cm) 長軸×短軸-深さ	備考	ビット 番号	規 模 (cm) 長軸×短軸-深さ	備考
P17	42×39-29.5		P31	43×41-25.3		P45	47×34-12.0	
P18	39×27-31.6		P32	50×48-20.9		P46	26×26-16.2	
P19	65×55-23.6		P33	28×28-18.0		P47	49×40-23.5	
P20	71×25-23.8		P34	74×60-36.8		P48	122×24-27.2	
P21	57×55-24.8		P35	(45)×38-11.4		P49	58×52-35.7	
P22	43×41-12.7		P36	35×23-11.2		P50	55×27-28.6	
P23	46×41-28.0		P37	32×30-21.0		P51	32×31-27.8	
P24	55×55-20.2		P38	60×45-28.5		P52	63×38-22.5	
P25	25×24- 5.6		P39	49×37-22.8		P53	51×42-23.3	
P26	31×26-21.9		P40	36×30-20.0		P54	24×18-10.8	
P27	34×31-19.6		P41	68×59-27.3		P55	110×56-33.0	
P28	69×40-13.5		P42	33×32-14.6		P56	75×56-24.0	
P29	52×31-24.6		P43	49×45-34.6		P57	57×43- 8.3	
P30	84×34-23.2		P44	88×44-40.8				

挿表5 石籠第3遺跡森末地区ビット群03一覧表

第9節 遺構外遺物 (押図76・77、図版11・19)

遺構外からは、図化できたものに壺Po225、甕Po226-Po228、高坏Po229-Po232、脚部Po233、椀Po234、須恵器坏身Po253・256、須恵器坏蓋Po237・238、須恵器高台付坏Po239、須恵器壺Po240、須恵器高坏Po241、須恵器椀Po242、土師器甕Po243・244、土師器Po245・246、土師器皿Po247・248、土師器坏Po249・250、平瓦Po251、陶器皿Po252、土師器Po253、砥石S9・10、煙管B1がある。

このうち、Po225は、F8グリッド包含層中で転倒した状態で出土している。その他のものは、表土・耕作土中からの出土である。

Po225-233は、特にF7・8・9グリッド中心に出土しており、時期は古墳時代前期から中期のものである。Po235-238は7世紀代、古墳時代後期に比定される。Po239-241・243・244は奈良・平安時代ごろのものであろう。Po247-250は底面回転糸切りで、平安時代末ごろと考えられる。Po245は土師で、鎌倉時代ごろのものと思われる。

(岩崎)



写真③ 石籠第3遺跡森末地区記者発表風景



写真④ 石籠第3遺跡森末地区現地説明会風景

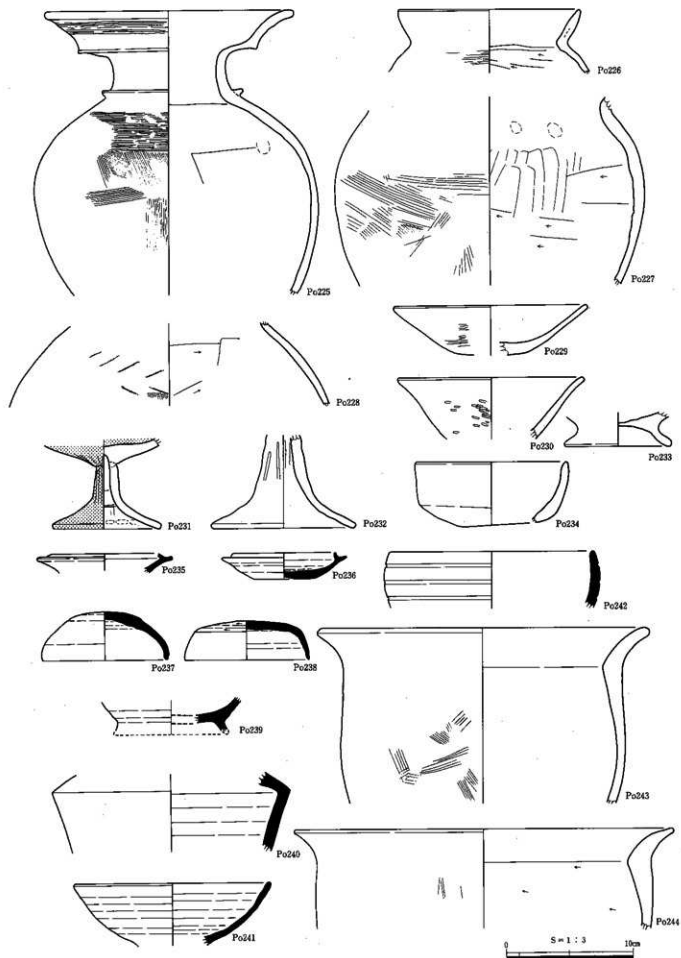


插图76 石胎第3道跡森木地区遺構外遺物実測図(1)

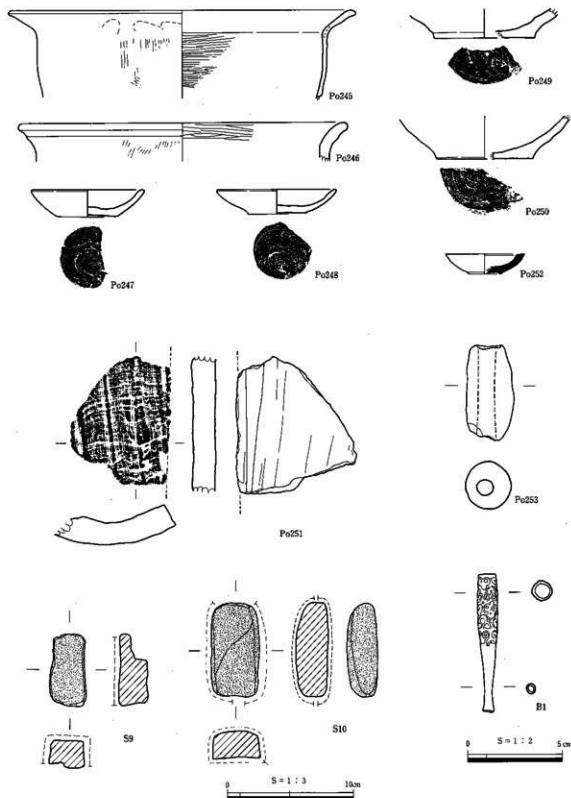


插图77 石胎第3遺跡森末地区遺構外遺物実測図(2)

第4章 石脇第3遺跡操り地区、石脇8・9号墳の調査

第1節 調査の概要

石脇第3遺跡操り地区は、泊村石脇字操り・小浜字浜山に所在し、人手状に東西に延びる丘陵尾根に展開する。調査の進行上、2か年にわたって調査を実施し、総面積9213㎡を測る。

平成8年度調査区は、標高60～68mを測る東西に延びる尾根頂部4590㎡が対象となった。調査区を南北に二分するように農道が走っている。現況は東側の一部が畑地として利用されていたが、そのほとんどは休耕地で、笹等が殖生しており、北側の標高64m付近では大きくカットされ、崖面を形成していた。また、畑地造成時及び農道改修時に、尾根頂部をかなり削平し、その際の上を利用して南側斜面を造成していた。

検出した遺構は、削平を受けているため、ほとんどのものが遺存状態は悪かった。検出した遺構は、竪穴住居跡1基、土坑2基、不明土坑2基、溝状遺構5条、ピット群1か所、前方後円墳（石脇8号墳）1基、周溝内土壕3基である。

石脇8号墳後円部盛土下で検出されたピット群は、ピット内に縄文土器を含んでいるものがあり、縄文時代後期前半のものと考えられる。建物等を復元するには至らなかったが、その可能性をもつものであろう。また、遺物は出土していないが、平面形態からS I 01は、この時代のものと考えられ、この地は当時集落であったといえる。

古墳時代後期に至ると、全長約30mを測る、泊村内では最大規模の前方後円墳・石脇8号墳が築造される。墳丘はかなり削平されていたが、周溝内から、多量の円筒埴輪・朝顔形埴輪とともに、倉吉地方をその分布の中心とする壺形埴輪が多数出土している。

平安時代の明確な遺構は検出されていないが、石脇8号墳周溝内で、この時代の遺物がまぎって出土していることから、墳丘に対する何らかの祭祀行為が、行われていた可能性もある。

平成9年度調査区は、前年度調査区の北東方向に延びる標高59～66mの尾根頂部4623㎡が対象となった。現況は、南側部分が畑地、中央部分が以前梨畑となっていた。前年度調査区同様削平が著しく、遺構の遺存状態は非常に悪い。

検出した遺構は、竪穴住居跡1基、掘立柱建物跡1基、貯蔵穴と考えられる土坑2基、不明土坑3基、埋葬施設2基、溝状遺構3条、段状遺構1基、方墳（石脇9号墳）1基である。

縄文時代の遺構は検出されなかったが、後期と思われる土器片がわずかに出土しており、当時は遺構が存在していたものと推察される。

弥生時代後期には、貯蔵穴と考えられる土坑（SK04・06）が2基検出されており、周辺にはこの時期の集落の存在が窺われる。

続く古墳時代前期では、竪穴住居跡1基が検出された。S I 02は焼失住居で、炭化材が良好に遺存しており、上層構造を復元する貴重な資料である。

古墳時代後期には、石脇9号墳が築造される。主体部は横穴式石室と考えられるが、畑造成の際に完全に破壊されていた。また、箱式石棺SX06が9号墳北側に作られている。棺外で須恵器坏身3点、环蓋1点がまぎって出土している。

石脇9号墳の周溝内から、平安時代ごろの遺物がまぎって出土している。1間×4間のSB01は、時期は不明であるが、この時期の建物の可能性がある。（原田・牧本）

第2節 平成8年度調査結果

1. 石脇8号墳 (押図82-103、図版20-25・36-41)

調査区のはほぼ中央、C・D6～9、E7～9グリッドにあり、標高65.0～68.0mの、調査地の中で最も高い地点に立地する。8号墳の立地する丘陵は、尾根が東西に延びており、南北両側は、比較的急峻な斜面となっている。この尾根の北東約24mには方墳である石脇9号墳が平成9年度調査で検出されている。

調査前の墳丘は、現況から径12.6m、高さ1mの円墳とされていた。これは、当該箇所が、後世に畑地・果樹園として造成した際に削平されていたためと考えられる。その後、今回の調査に先立ち行われた事前調査で確認された周溝から、前方後円墳である可能性が考えられ、現況地形から、全長約30m、後円部径約20m、前方部端部幅約10m、高さは墳丘北側からの比高で1～1.5mの墳丘を想定した。

表土・耕作土及び造成時のかき出し土を除去したところ、墳丘北側は遺存状態がよく、墳裾ラインがきれいに残っていた。墳丘南側及び東側は、カットされ、また、前方部頂部は既に盛土を失っていたが、墳裾の遺存状態はよい。しかし、前方部南北両端は、陸橋状を呈しており、その部分については、盛土を失っているために当初の墳裾は不明である。墳丘規模は、全長33.3m、後円部南北径22m、東西径21m、前方部長12.3mで、端部は西側周溝部分で幅9.4mを測り、陸橋部分を含めて想定される幅は16m前後であろう。後円部の高さは最も高いところで、北側周溝底から3.5m、前方部が北側周溝底から2.0mを測る。後円部は南側を大きく削平されており、東側も削平されているが、墳裾はよく残り、ほぼ円形を呈している。前方部は上述したように前面の墳裾は不明であるが、後円部径よりも大きく開くことはないと思定され、長さも後円部径より短い。前方部盛土を失っているため、前方部は後円部に比して墳丘が低くなっているが、当初は高低差があまりなかったものと考えられる。墳丘斜面に段築は見られない。外表施設としては、埴輪が出土していることから、当初は墳丘上に並んでいたと考えられるが、全て転落しており、原位置を保っているものはなかった。また、葺石等は認められなかった。墳丘から見ると後期古墳の様相を呈している。

周溝は、大きく削平を受けている南側を除けば、比較的残りはよく、くびれ部で幅、深さとも最大となる。規模は後円部北・東側で、幅2.1～4.4m、深さは北側外縁部で最大0.3mを測り、断面U字状を呈す。後円部南側は幅1.7～2.9m、深さは外縁部で最大でも0.1m程度で、断面U字状を呈す。くびれ部では、北側で最大幅7.5m、深さは外縁部で最大0.75mを測り、断面U字状を呈す。南側は外縁部を削平されているが、幅は最大で7m以上、深さは西側外縁部で0.25mを測る。前方部西側は、幅2.2～3.6m、深さは西側外縁部で0.1mを測り、断面U字状を呈す。周溝は楕形の形態を呈すが、前方部南北両端で陸橋状となり、全周しない。また、南側に比して北側のくびれ部は、かなり深く掘り込んでおり、海に面した北側を意識した様子が窺える。

墳丘は、地山の削り出しと盛土によって形成されている。8号墳築造場所は調査区尾根上の中で最も高いところに位置しており、地山は8号墳を中心に各方向へ傾斜している。墳丘基盤は、周溝底からの比高差が後円部で1.2～2.1mを測る高さまで削り出している。前方部は盛土を失っており、当初の比高差は不明であるが、後円部と同様に、ある程度の高さまで削り出していたと考えられる。盛土に先立っての地山成形成は、後円部に関してはされておらず、旧表土(⑥層)が一面に残っている。前方部については、旧表土も削平されており明らかではないが、おそらく後円部と同様に地山成形成はなされていなかったものと考えられる。

盛土は、後円部の最も厚いところで70cm残っている。盛土の状況は、まず⑤層を後円部中央付近に盛り、次に中央部が高くなるように④・⑬・⑭・⑮層を盛っている。その際、後円部東側に比べて西側前方部よりの方が厚く盛られている様子が窺える。これは、地山の傾斜が、東側に比べ西側が若干急であったことが影響しているものと考えられ、前方部の高さを補うことも考慮して盛ったものであろう。次に④・⑬層を盛り、前方部側には⑭層を盛っており、この層が前方部盛土の最下層になっていたと思われる。このことは、後円部は前方部に先立って盛土が行われていた状況を示している。

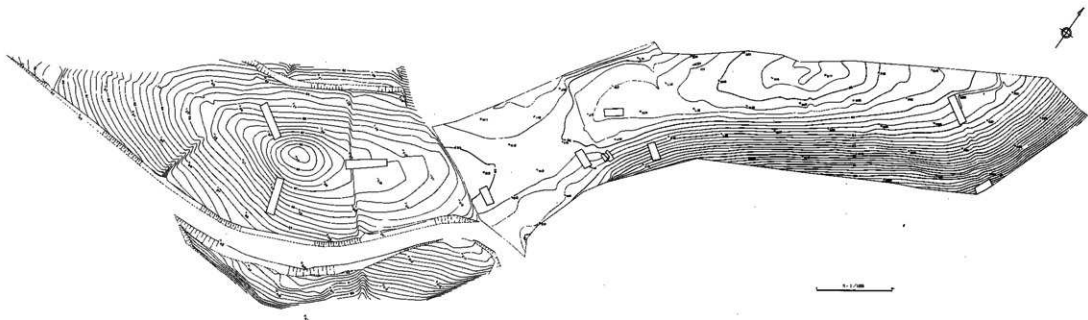


插图78 石脇第3遺跡掘り地区調査前地形測量図



插图79 平成8年度石脇第3遺跡掘り地区調査前地形測量図

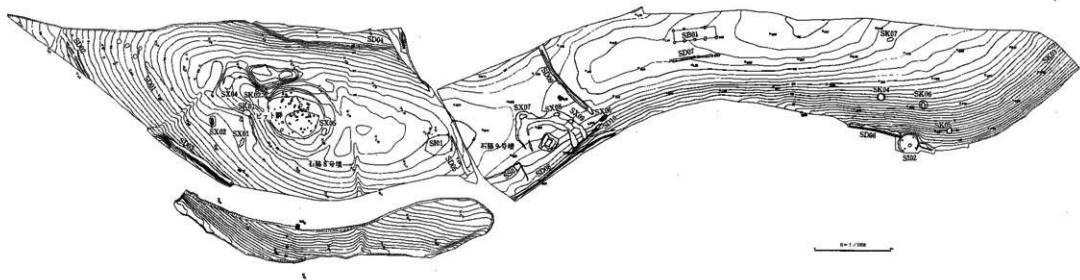


插图00 石路第3遺跡掘り地区遺構全体図

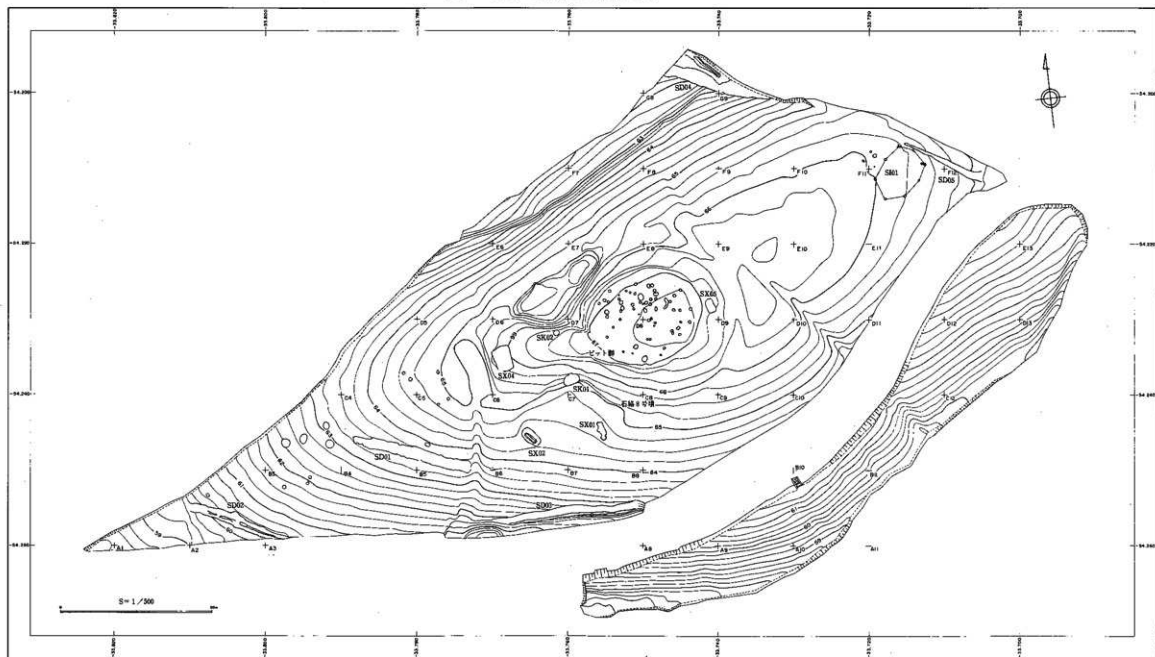
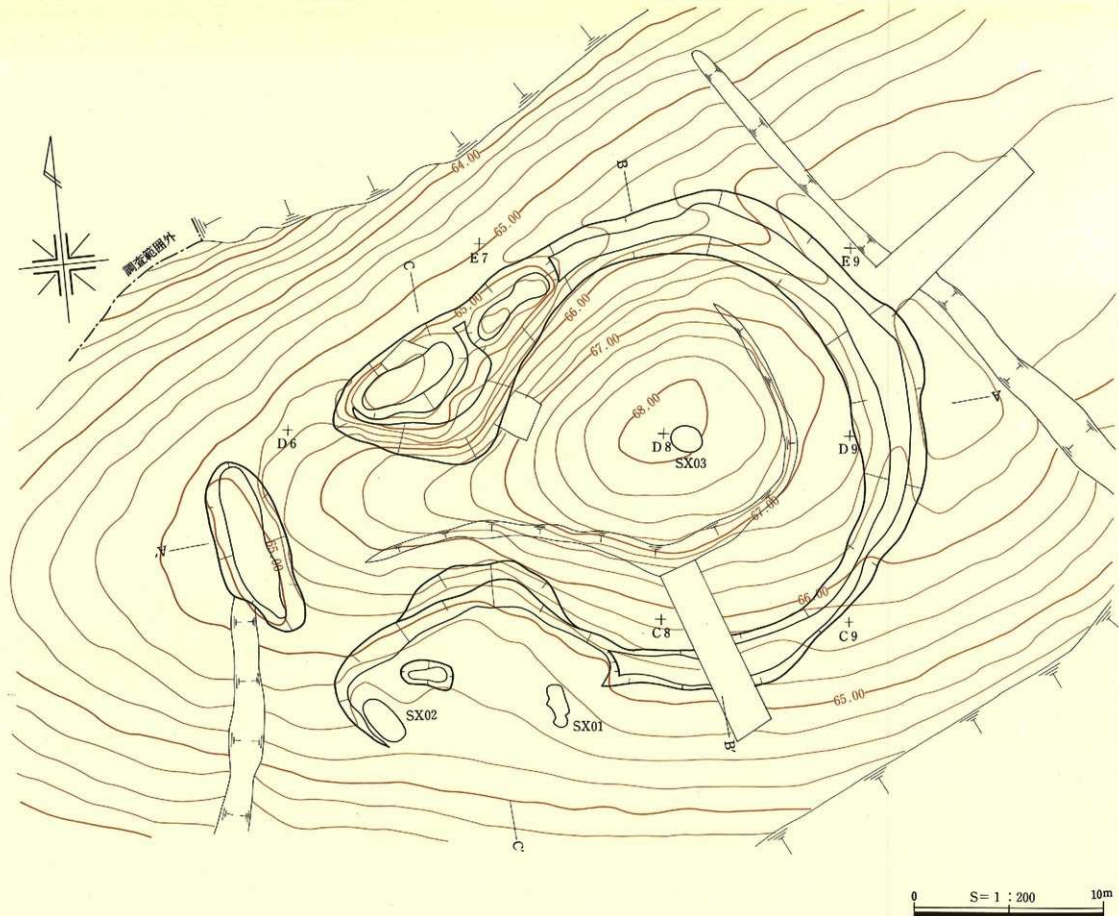


插图01 平成1年度石路第3遺跡掘り地区遺構全体図



神圖02 石龍8号墳丘測量圖

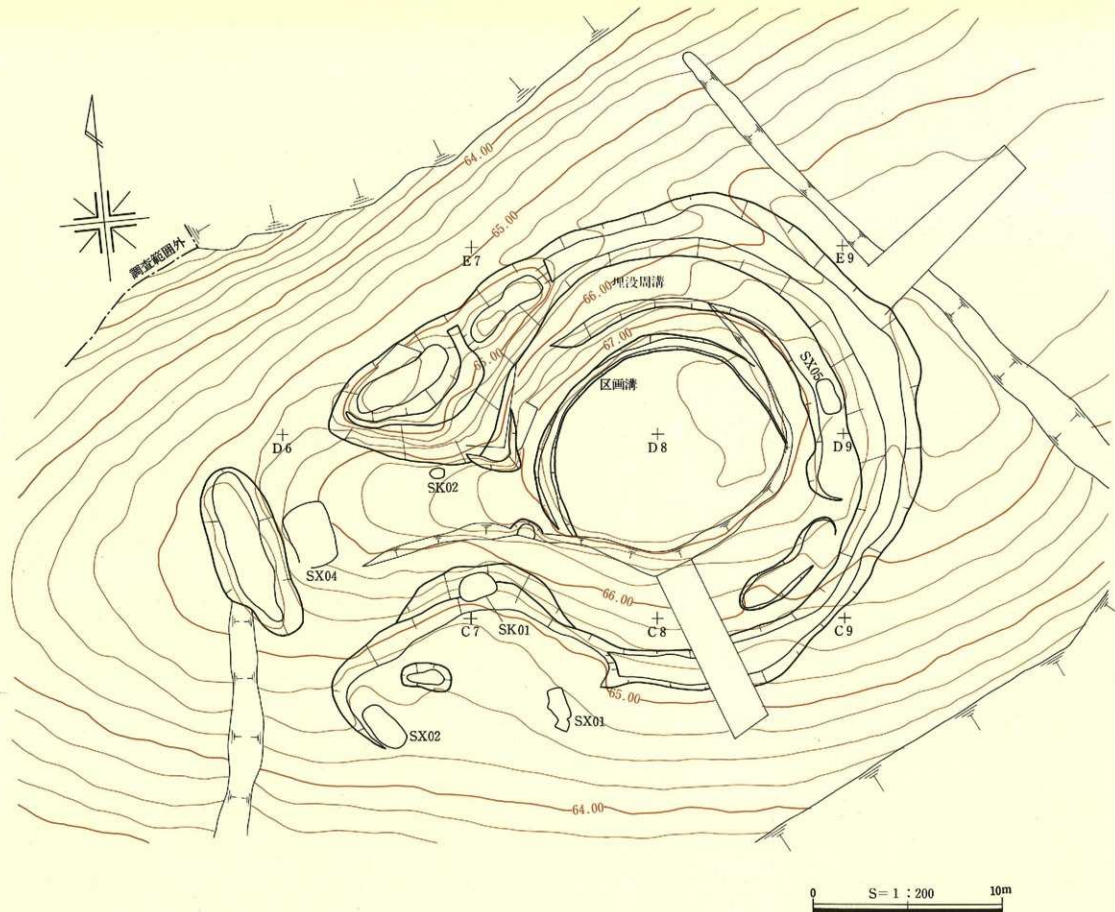
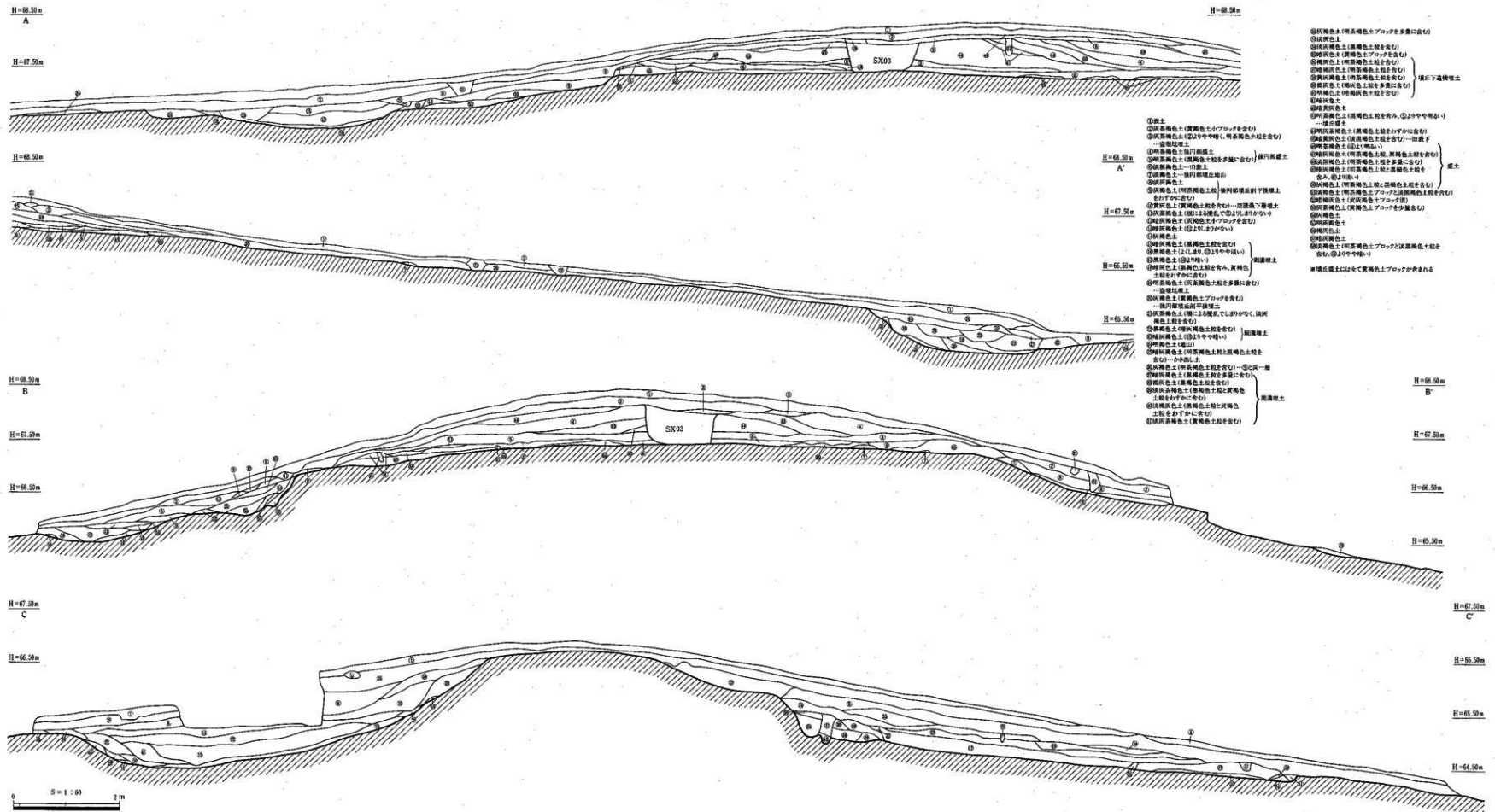


插图13 石胎8号墳境丘除去後測量圖



挿図84 石跡8号墳填丘土層断面図

後円部盛土を除去したところ、旧表土面上で後円部の円弧には沿うかたちで、幅0.46~1.1m、深さ3~8cmを測る浅い溝を検出した。埋土は㊟層1層で、断面は浅い皿状を呈している。なお、この埋土とはほぼ同じ上層(㊟層)を、盛土断面で、旧表土を切り込む形で、確認している。㊟層は断面上で、旧表土上面で検出できた溝と、位置的に近いことから、この溝は、当初は検出時よりも幅が広がった可能性がある。

この溝は、後円部盛土除去後の平坦面の端に位置しており、後円部北側ではこの溝の位置から㊟層が高く盛られ始め、西側では㊟層が盛られ始めている。溝の位置と、㊟・㊟層が、それぞれその場所での盛土最下層にあたることから、後円部はこの溝を目安にして、周囲を削り出し、盛土した区画溝と考えられる。

後円部北・東側で、底面幅1.4~2.2mを測るテラス状の部分を検出した。検出時の填丘側上縁部から底面までの比高差は、北側で0.4~0.7m、東側で0.2mを測る。また、南側では上縁部の幅が1.5m、深さ0.1~0.2mを測る溝状の落ち込みを検出した。これらはいずれも後円部の円弧に沿う形で周囲を巡っており、同一円周上をたどったくびれ部でも落ち込みを検出した。くびれ部で検出された落ち込みはつながっておらず、南北両側とも周溝、削平により一部しか残っていない。深さは北側で0.8m、南側で0.4mを測る。

以上のテラスと溝は、削平等により全周していないが、埋土がほぼ同じで、1~6層に分層でき、下層に暗褐色土(㊟・㊟層)が堆積している。また、黒灰褐色土(㊟層)が堆積している部分も見られる。このことから、テラスと溝は同一のものと考えられる。また、後円部東側断面で㊟層が、周溝埋土の㊟層に切られていることから、周溝掘り下げ前に既に掘り込まれていた状況が窺え、その結果、後円部北・東側でテラス状を呈し、くびれ部北側では周溝に切られた形を呈する状態で検出できたものと考えられる。よって、当初は、後円部墳裾を巡る周溝(埋没周溝)であったと判断する。

主体部は造成時に削平されたものと考えられ、検出することはできなかった。表上、耕作土除去中に板状の石材(板状安山岩)が出土していることから、箱式石棺を内包していたものと考えられる。

周溝内上縁SX01は、南側くびれ部内やや東寄りに位置する。遺存状態は非常に悪い。平面形は、不整な長楕円形を呈す。墓壕は長さ2.36m×幅1.04m、深さ0.15mを測る。底面からは、途中とぎれているものの、深さ約5.2~8.6cmの溝状の窪みを検出した。底部では、筈の根による攪乱を受けた部分が多数みられた。なお、長軸方向は、N-8°-Wである。

埋土は単層で入る。これは黒褐色土と淡灰褐色土の混じりに、地山を含む非常に固く締められたものである。

遺物は、図化できたものに、底部から出土した石枕S1がある。その他、図化できなかったが北側層部からも石片が1点出土している。これら以外の出土遺物はない。

周溝内上縁SX02は南側周溝内にあり、前方部端部とする周溝の最西端に周溝肩部に沿うかたちで位置する。遺存状態はよい。平面形は、北西から南東方向に軸をもつ隅丸長方形を呈す。規模は長さ2.80m×幅1.55m、深さ0.52mを測る。断面形は二段に落ち込む。長軸方向はN-43°-Wである。

埋土は11層に分層できた。このうち①、②層は後世に掘り込まれたもので、非常によくしまる。遺物は出土していない。

後円部東側埋没周溝底面で、SX05を検出した。削平により底部のみ遺存していた。平面形は不整な隅丸長方形を呈し、規模は(1.94×1.10~0.12)mを測る。埋土は3層に分層でき、遺物は出土していない。

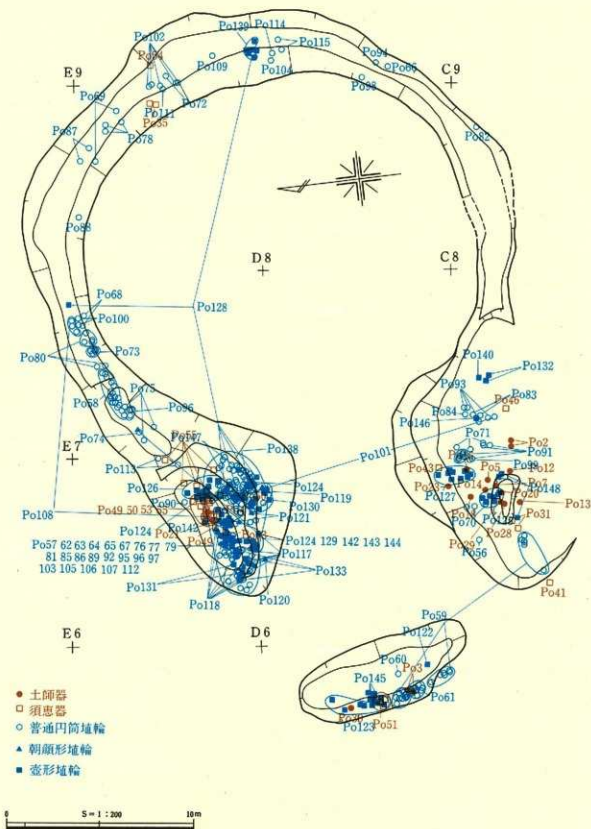
なお、SX02・05については、それぞれの埋土を試料として、リン・カルシウム分析を、業者委託で行った。その詳しい結果は後に掲載するが、SX02・05とも、埋土に含まれるリン酸・カルシウム含有量は、対比試料とした地山よりも、高い数値が得られており、埋葬施設の可能性がある。

出土した遺物は、ほとんど周溝内に転落した形で検出している。その大半は普通円筒埴輪で、朝顔形埴輪、壺形埴輪も見られる。埴輪類の他には、土師器、須恵器、鉄製品が見られる。

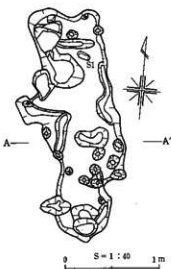
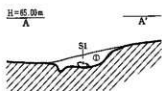
図化したものには、土師器壺Po1・2、脚付椀Po3、椀Po4、杯Po5~8、皿Po9~26、高台杯Po27~29、台付杯Po30、須恵器杯蓋Po31~36、杯身Po37~41、有蓋高杯Po42~43、椀形埴Po44、埴Po45、高杯Po46~48・50、高台杯Po49、壺Po51、広口壺Po52、平瓶Po53、横瓶Po54・55、普通円筒埴輪Po56~116、朝顔形埴輪Po117~121、

壺形埴輪Po122~148、石突F 1、不明鉄器F 2がある。

出土した須恵器は、古墳時代のものとな良から平安時代のものに大別できる。古墳時代のものには、环蓋Po31~36、环身Po37~41、有蓋高环Po42・43、樽形甕Po44、甕Po45、高环Po46~48・50がある。これらの内环蓋、环身、有蓋高环は、概ね陶邑編年MT15、TK10に併行すると考えられる。これは、出土した埴輪類が、そ



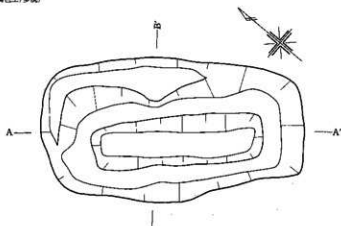
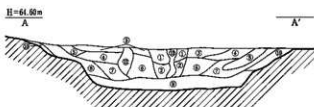
挿図05 石籠8号墳遺物出土状況図



①黒褐色土と淡灰褐色土と地山の混じりに
地山砂を少量含む

挿図08 石籠8号墳 S X 01遺構図

- ①黒褐色土(赤土によくしまる)
- ②暗灰褐色土(赤土によくしまる)
- ③黒褐色土(①よりやや淡くしまりが強い)
- ④灰褐色土(粘質褐色土アロックス層)
- ⑤粘質褐色土(粘質強い)
- ⑥暗灰褐色土(⑤よりしまりが弱くやや赤色がある)
- ⑦暗灰褐色土(赤褐色土アロックス層)
- ⑧灰褐色土(地山アロックス(明茶褐色土)多量)
- ⑨灰褐色土(地山アロックス(黄褐色土)多量)
- ⑩灰褐色土
- ⑪水の流れによる侵蝕



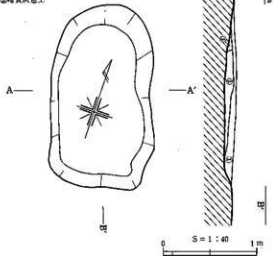
挿図07 石籠8号墳 S X 02遺構図

の形態の特徴、調整技法等から、川西編年のV期の時期に該当すること時代的に符合している。しかし、須恵器の中には以上のものより古相を示すものが含まれており、土師器甕Po1・2、脚付碗Po3も前述の須恵器より古い時期のものである。出土状況が思わしくなく、8号墳の築造に伴うとするには異論もあろうが、埋没周溝と埋没周溝内で検出した土壌の存在から、8号墳の築造計画時期は5世紀後半と考えられ、最終的に墳丘上に埴輪が樹立された時期は6世紀中葉と考えられる。

また、須恵器高坏Po50、高台坏Po49、平瓶Po53、横瓶Po55は北側くびれ部周溝のほぼ底面で出土しており、土師器杯、皿の類も前方部周溝内で出土していることから、前方部墳丘上もしくは周溝内に奈良から平安時代の遺構があったことが考えられる。(原田・岩崎・井上)



- ①灰褐色土(黒褐色土粒を含む)
- ②黒褐色土(灰褐色土粒を多量に含む)
- ③暗灰褐色土



挿図06 石籠8号墳 S X 05遺構図

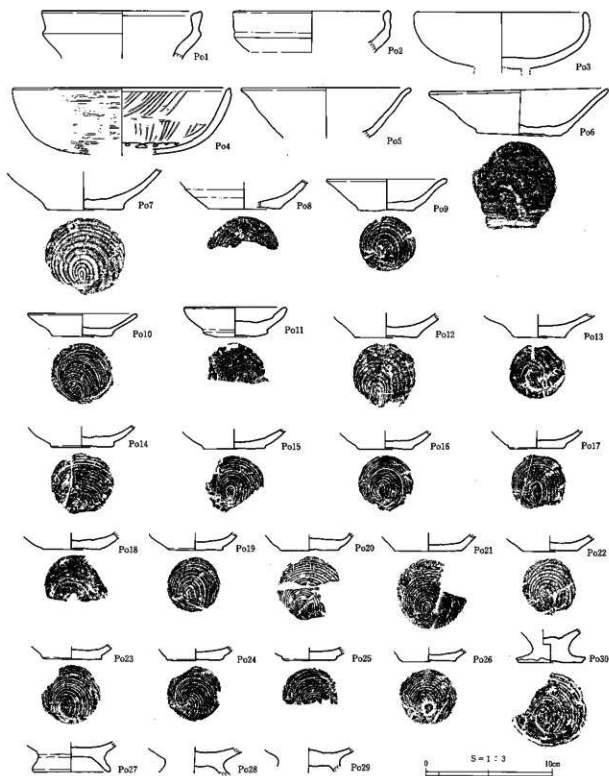


插图89 石胎6号墳出土遺物実測図(1)

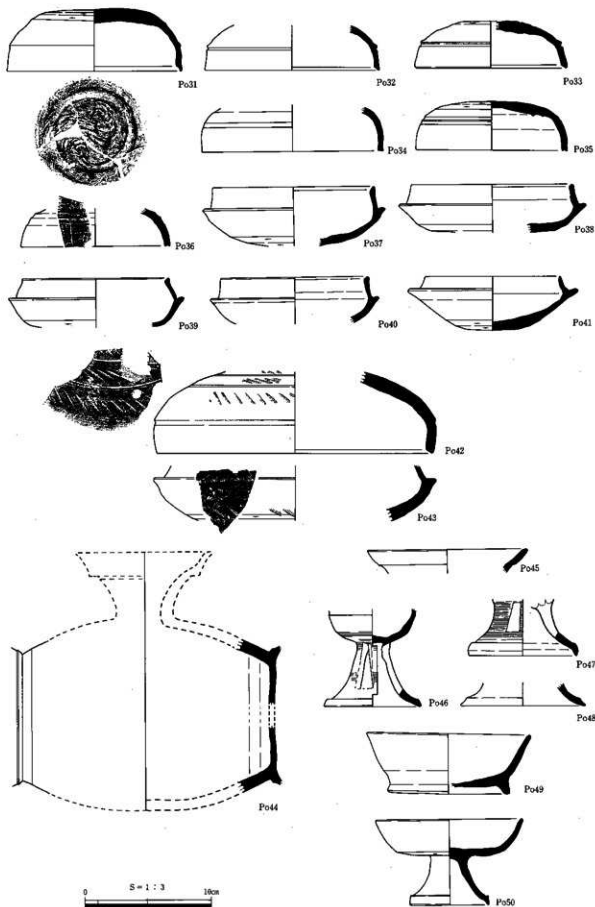


插图80 石路4号墳出土遺物実測図(2)

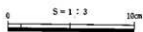
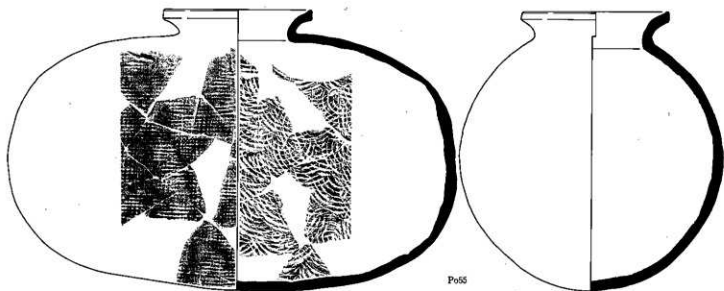
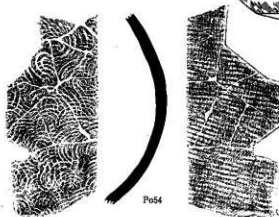
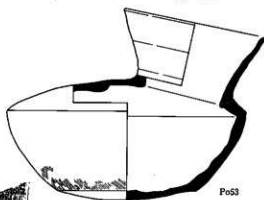
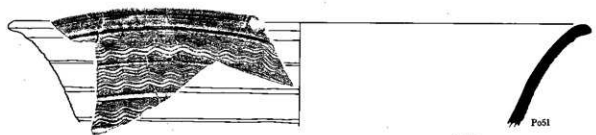
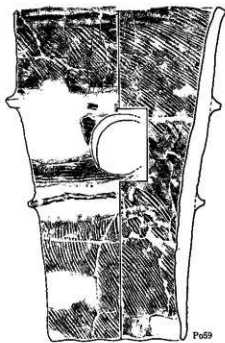
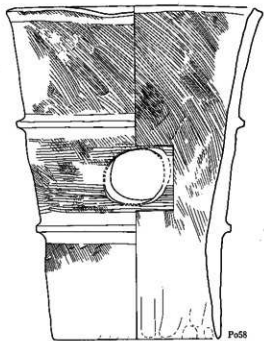
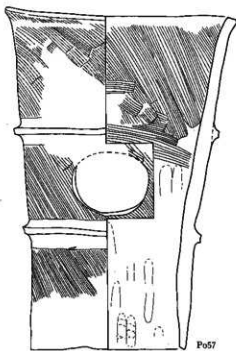
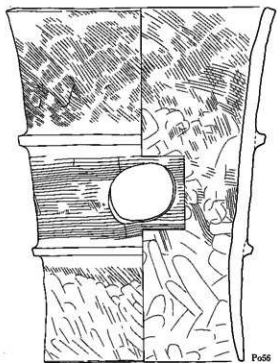
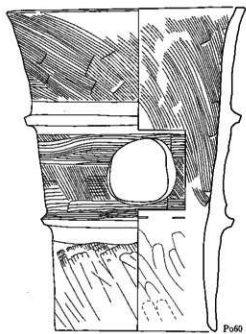


插图91 石胎8号出土文物实测图(3)

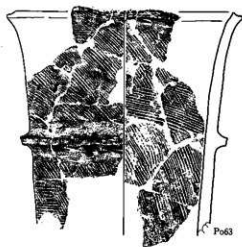


0 S=1:4 10cm

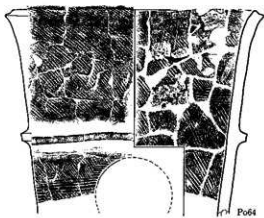
挿図92 石籠Ⅱ号墳出土遺物実測図(4)



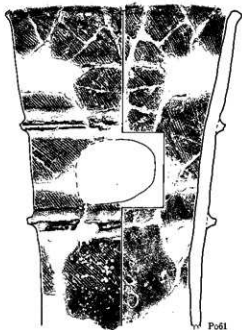
Po60



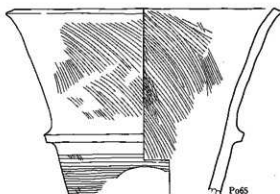
Po63



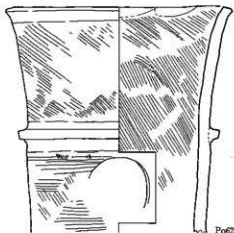
Po64



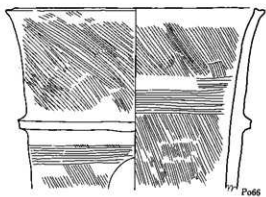
Po61



Po65



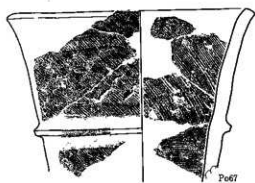
Po62



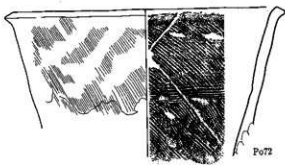
Po66



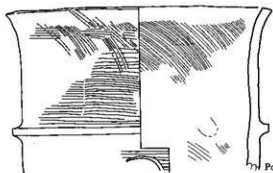
挿図93 石器8号墳出土遺物実測図(5)



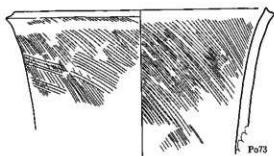
Po67



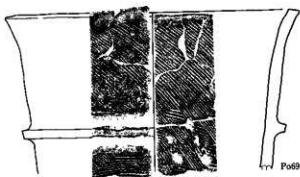
Po72



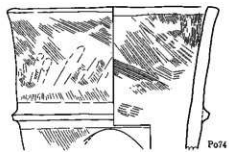
Po68



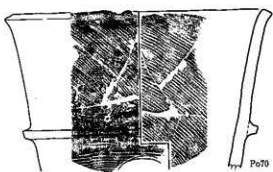
Po73



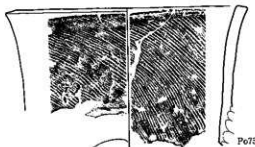
Po69



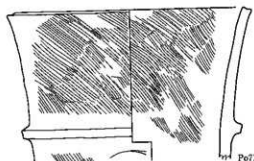
Po74



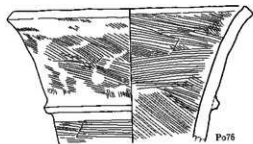
Po70



Po75



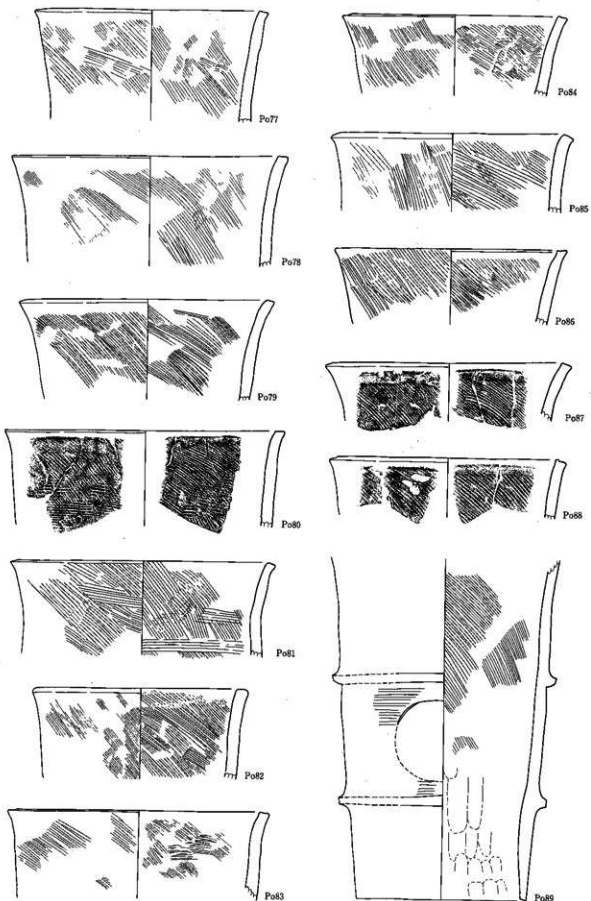
Po71



Po76

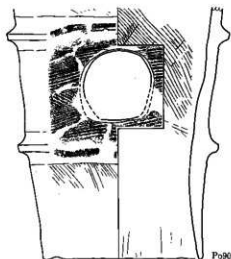
0 S=1:4 10cm

插图84 石墓8号墳出土遺物実測図(6)

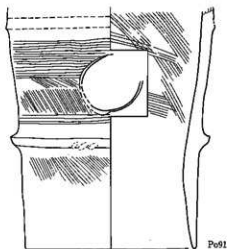


0 S=1:4 10cm

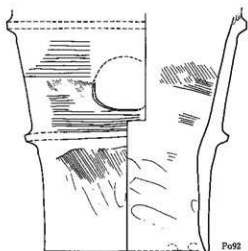
插图95 石胎8号出土文物实测图(7)



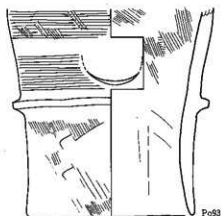
Po90



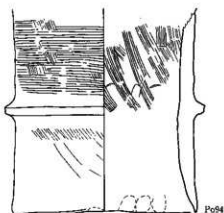
Po91



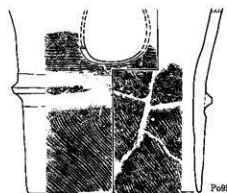
Po92



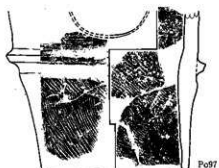
Po93



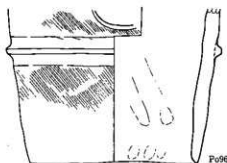
Po94



Po95



Po97



Po96

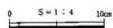
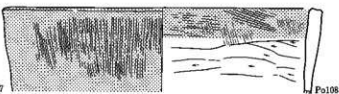
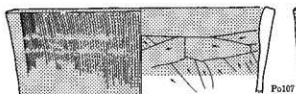
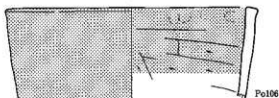
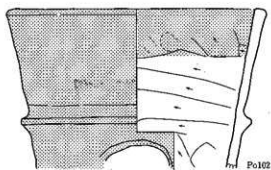
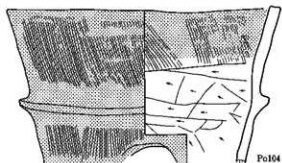
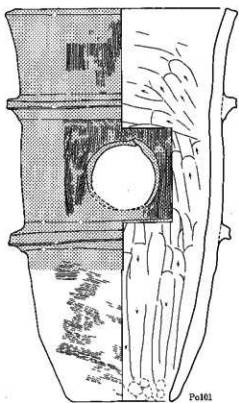


插图96 石路8号墳出土遺物実測図(8)



0 S=1:4 10cm

插图97 石籠8号墳出土遺物実測図(9)

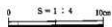
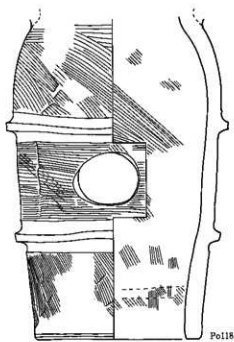
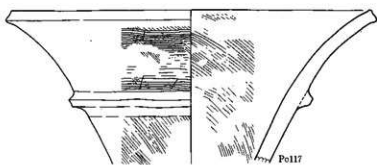
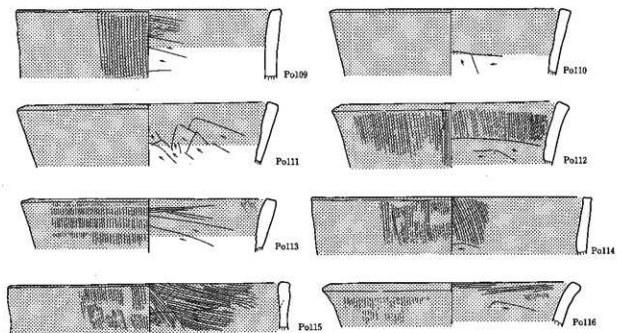


插图98 石路8号出土文物实测图08

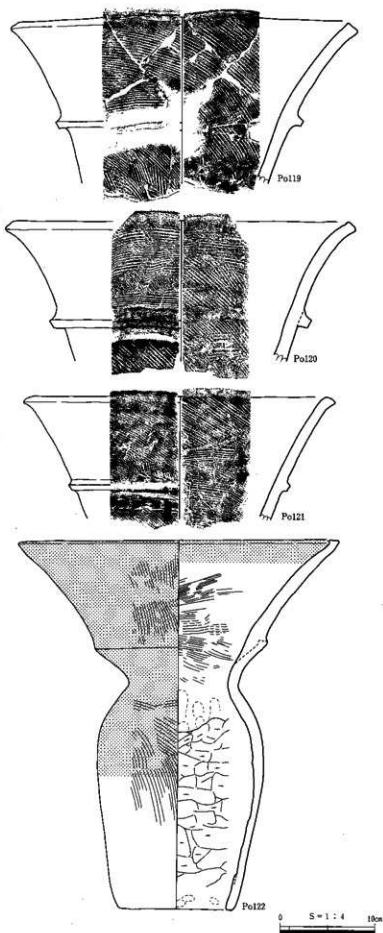
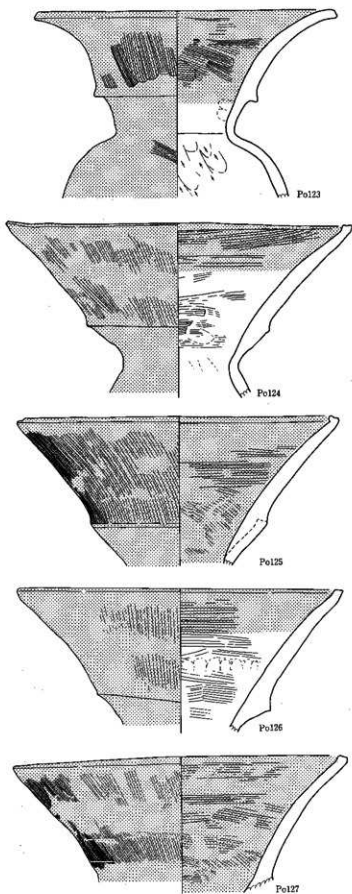
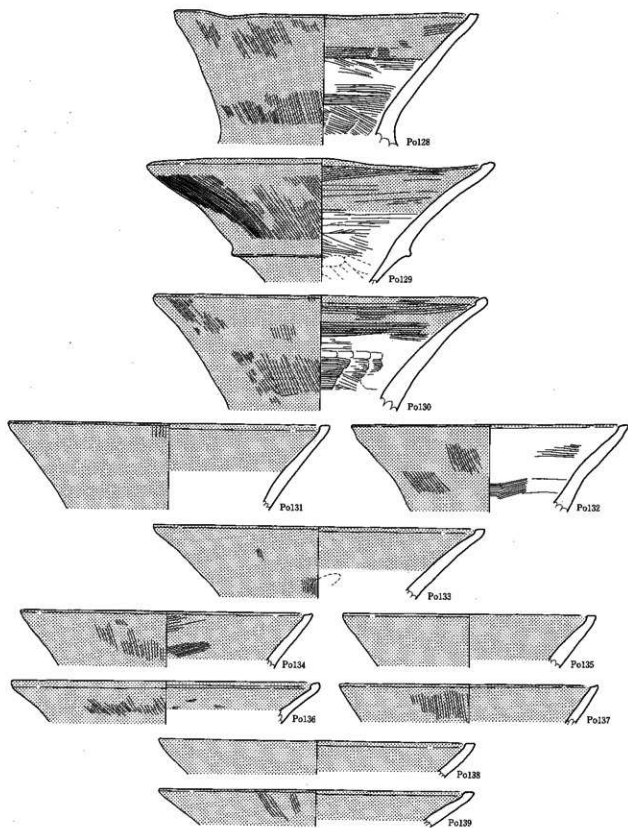


插图99 石胎8号出土遗物实测图(1)



0 S=1:4 10cm

挿図100 石胎8号墳出土遺物実測図⑩



神岡101 石輪8号墳出土遺物実測図11

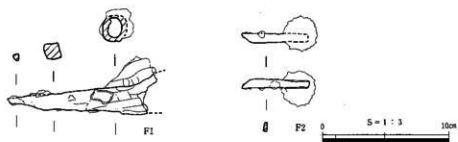
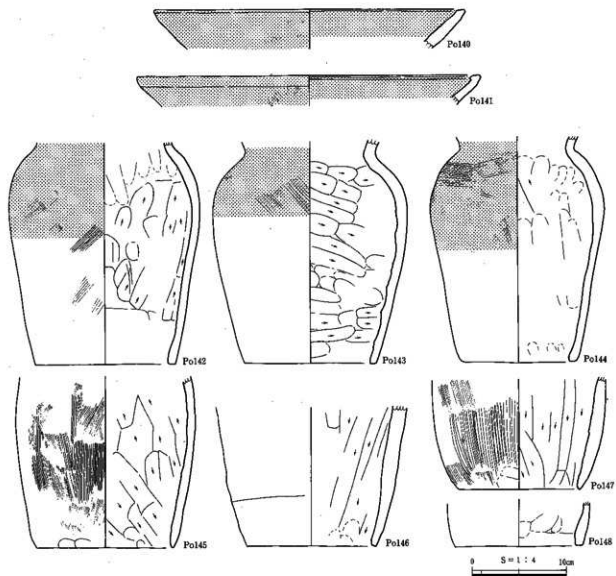


插图102 石胎8号坑出土遗物实测图14

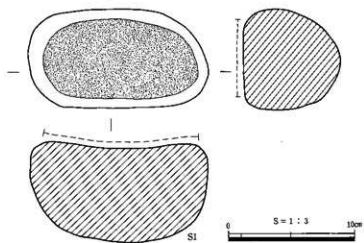


插图103 石胎8号坑S X 01出土遗物实测图

2. 竪穴住居跡

S 101 (挿図104、図版25・27)

調査区北東側端近くのF12、G12グリッドにあり、標高約65.5～66.0mの緩やかに東側へ傾斜する斜面に立地する。北東側約0.9mにSD05がある。

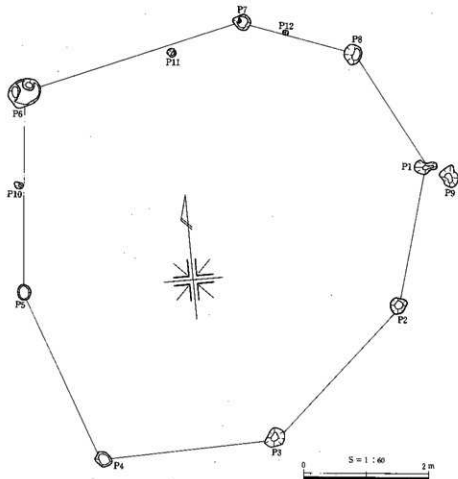
かなりの削平を受けており、遺存状態は非常に悪く、柱穴痕のみ現存する。平面形は北東方向にやや細長い楕円形を呈すと思われる。規模は推定で東西約7.0m以上、南北約6.5m以上を測ると思われる。主柱穴はP1～P9の9個で、それぞれの規模は、P1 (37.0×18.0-14.0) cm、P2 (24.0×22.0-21.5) cm、P3 (36.0×28.0-28.7) cm、P4 (28.0×12.0-12.0) cm、P5 (25.0×21.0-10.6) cm、P6 (52.0×42.0-31.4) cm、P7 (26.0×26.0-45.1) cm、P8 (33.0×28.0-28.0) cm、P9 (32.0×22.0-29.8) cmを測る。主柱穴間距離は、P1～P2間から順に2.24m、2.88m、2.76m、2.94m、3.16m、3.62m、1.90m、2.10mである。主柱穴間にはP10 (15.0×10.0-7.2) cm、P11 (14.0×12.0-20.0) cm、P12 (9.0×8.0-5.9) cmがある。これらは主柱穴に比べて深さが浅く、位置的・規模的に考えて補助柱穴と考えられる。またP9は、主柱穴であるP1の立て替え時に立てられた主柱穴のひとつであると考える。

埋土は単層ではいり、SD05と同様によく締まっているものである。

S 101から遺物は出土しなかったが、付近のG11グリッド・旧表土下層より石鏝S6が1点出土している。

遺物は出土していないが、遺構の形態と、当遺構付近から石鏝が出土していることなどからS 101は、縄文時代ごろのものと考えられる。

(井上)



挿図104 石鏝第3遺跡掘り地区S 101遺構図

3. 土坑・土壌

SK01 (挿図105、図版26)

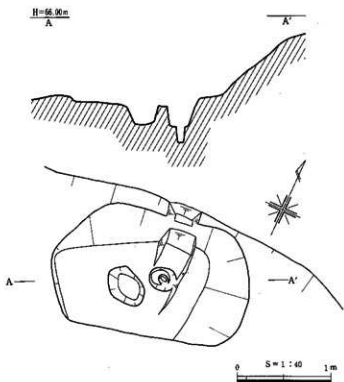
調査区はほぼ中央の石脇8号墳周溝内で、D7・8グリッドにまたがっており、標高65.4~65.5mの南側に傾斜する斜面に立地する。南側は8号墳の周溝により切られており、遺存状態は悪い。北側約6mにはSK02が位置する。

平面形は現存する部分から推定して、上縁部は不整な隅丸長方形、底部は台形を呈すと思われる。規模は上縁部長軸2.06m×短軸1.30m以上、底部長軸1.64m×短軸1.03mを測る。深さは最大0.67mを測り、断面は逆台形を呈す。底面にピットを2つ検出した。西側のものは、長軸46cm×短軸32cm、深さ24cmの不整な楕円形を呈す。東側のものは、長軸28cm以上×短軸25cm、深さ23cmのほぼ円形のものである。

埋土は7層に分層できた。石脇8号墳C-C'ベルト(挿図84)㉔~㉚層を参照されたい。

遺物は出土していないが、石脇8号墳との切り合い関係、および周辺から縄文土器が出土していることより、縄文時代のもと考えられる。

底面よりピットが検出されていることより落とし穴の可能性はあるが、不明な点が多い。(岩崎)



挿図105 石脇第3遺跡掘り地区SK01遺構図

SK02 (挿図106、図版26)

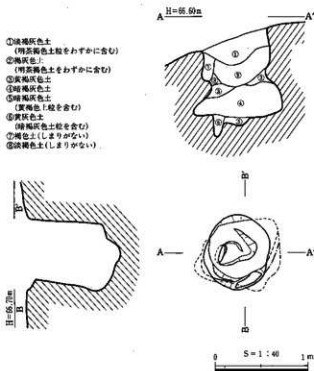
調査区はほぼ中央のD7グリッドにあり、標高65.2~66.5mの北西側に傾斜する斜面に立地する。石脇8号墳のくびれ部北側で、墳丘盛土除去後に検出された。南側約6mにSK01が位置する。

遺存状態は比較的よい。平面形は上縁部はほぼ円形、下縁部不整形を呈す。規模は上縁部長軸0.80m×短軸0.65m、下縁部最大径0.97mを測る。深さは最大1.12mで、断面は途中でくびれた袋状を呈する。底面に長軸21cm×短軸8cm、深さ25cmを測るピットが検出された。

埋土は8層に分層できた。

遺物は出土していないが、石脇8号墳との切り合い関係、および周辺から縄文土器が出土していること、また形態上の特徴から、縄文時代の落とし穴と考えられる。

(岩崎)



挿図106 石脇第3遺跡掘り地区SK02遺構図

S X 03 (押図107・108、図版26・41)

D・E 9 グリッドにあり、石籬 8 号墳後円部の表土・耕作土除去後に、後円部のほぼ中央で検出した。標高は68.0mを測る。

平面形は上縁部・底部とも楕円形を呈し、規模は上縁部長軸1.66m×短軸1.35m、底部長軸1.44m×1.31mを測る。深さは0.54mを測り、断面は逆台形状を呈す。また底部で二段掘りされる径0.7m、深さ0.24mを測る円形の落ち込みと、深さ0.14mを測る溝状の落ち込みを検出した。

埋土は1層で、人為的に埋め戻されたと考えられる。また、この埋土には、しまりがなく、埋め戻されてからの時間の経過は短いと考えられる。

埋土中から須恵器、埴輪、磁器の各破片と掘り鉄刃部F 3、針状鉄製品F 4・5、ガラス小玉J 1・2が出土した。

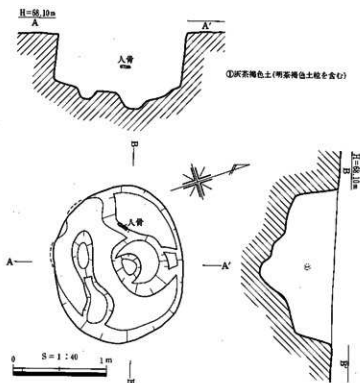
これらの出土遺物は磁器片を除き、8号墳に伴う遺物と考えられる。

東寄りの埋土中程から、人骨が出土した。鑑定の結果、右大腿骨骨体上部の長管骨の一部で、成人男性のものであることが推定されている。また、出土した人骨が1点のみであることと、人骨の状態から、この人骨は、当初からS X 03内にあったものではなく、別の場所から人為的に移動され、それ程歳月が経過していないことが指摘されている。詳しくは、後に掲載する鑑定結果を参照して頂きたい。

埋土の状況や、遺物の中に磁器片が含まれること、人骨の鑑定結果などから、近世～現代のものと考えられる。位置的に8号墳の盗掘坑とも考えられたが、遺物・人骨の出土状況を見ると、盗掘坑とは考え難く、むしろ、畑地・果樹園として利用された際の、ゴミ穴に近いものであろう。

よって、出土遺物・人骨は8号墳主体部が削平もしくは造成された際に、かき出された土の中に含まれていたものが、結果的にS X 03内に埋められたものと推察する。

(原田)



押図107 石籬第3遺跡掘り地区S X 03遺構図



押図108 石籬第3遺跡掘り地区S X 03出土遺物実測図

SX04 (挿図109)

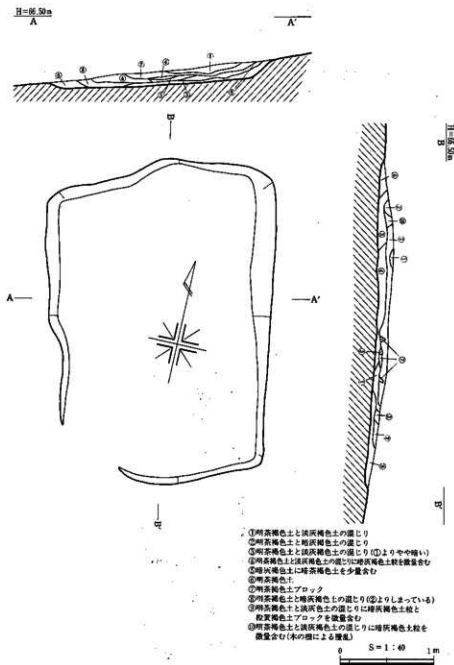
調査区中央西寄りのD6・7グリッドにあり、標高約65.7~66.0mのほぼ南西側へ緩やかに傾斜する斜面に立地し、ほぼ石脇8号墳前方部中央に位置する。

かなり削平されているため、遺存状態は非常に悪い。平面形は南西側でとぎれるものの、ほぼ隅丸長方形を呈すと思われる。規模は長さ3.46m×幅2.35m、深さ約0.18mを測る。

埋土は9層に分層できた。埋土上層から種子が1点出土しているが、その他の出土遺物はない。

遺物がほとんど出土していないのと、墳丘盛土がみられない土層断面などから、SX04のはっきりとした時期は判断できず不明である。

石脇8号墳前方部中央に位置し、石脇8号墳の主体部となる可能性もあるが、はっきりとした性格は不明である。(井上)



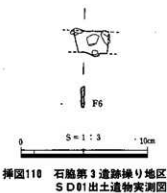
挿図109 石脇第3遺跡掘り地区SX04遺構図

4. 溝状遺構

SD01 (挿図110・111、図版26・41)

調査区西側のC5・6グリッドにあり、標高55.7~62.2mの南側に傾斜する斜面に立地する。溝の東端は後世の掘削により擾乱をうけており確認できなかったが、擾乱溝の東側には検出できなかったことより、その中で終結するものと考えられる。

SD01は、等高線に平行するように、やや南東方向にほぼ直線状に走る。長さ16.0m以上、幅0.7~1.7m、深さ14.6~46.4cmを測る。底面には溝の長軸に沿って3列に多数のピットが掘り込まれている。ピットの規模は径25~50cm、深さ13~86cmの



挿図110 石脇第3遺跡掘り地区SD01出土遺物実測図

ほぼ円形である。特に北側の列のビットは深く、斜めに外側に向かって掘られるものもみられる。

埋土は3層に分層でき、比較的締まりがない。また断面観察からは、ビットを連続して掘ることで溝のようになってい部分があることがわかる。

ビットの埋土中からF6が出土している。また、土器片、陶器片が出土したが図化できなかったため、時期・性格は不明である。(岩崎)

SD02 (挿図112、図版27)

調査区西端のB3グリッドにあり、標高59.4~61.0mの南西側に緩やかに傾斜する斜面に立地する。溝の南東端は農道により、北西端は後世の掘削により擾乱を受けており確認できなかった。

等高線に平行するように、南東方向にはほぼ直線状に走る。SD02は、ほぼ平行して走る2本の溝に分けることができ、北側のものをSD02-1、南側のものをSD02-2とする。

SD02-1は長さ14.8m以上、幅0.4~0.9m、深さ20.1~43.2cmを測る。底面西寄りには、長軸1.1m×短軸0.5m、深さ52.7cmの不整形のビットが掘り込まれているが、性格は不明である。

SD02-2はSD02-1に切られるかたちで平行して走るが、西側では検出されなかった。長さ9.9m以上、幅0.4~0.5m、深さ3.9~33.1cmを測る。

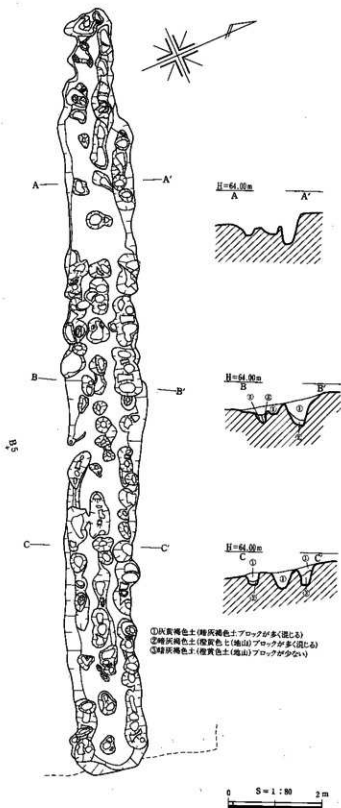
埋土は11層に分層でき、自然堆積の塚相を呈する。このうちSD01-1の底面に堆積する②、⑩層は、粘質性をもち非常によく締まるものである。埋土中から土器片が数点出土しているが図化できなかったため、時期・性格は不明である。

(岩崎)

SD03 (挿図113、図版27)

調査区南側中央のB6・7・8グリッドにあり、標高約62.4~62.9mの緩やかに南側へ傾斜する斜面に立地する。SD03の南側には、調査区内を東西方向から北東方向へ向って延びる道路が隣接している。また、北側約8.6mにSX01が位置する。

SD03は、ほぼ東西方向に一直線に延びる。その南側は、SD03と同じく東西方向に延びる道路と排水溝によって削られ、加えて、笹の根による擾乱も受けているため、遺存状態は非常に悪い。SD03の両端は東側、西側とも道路に向かって延びているため途中でとぎれる。総延長約19.3m以上、幅約0.85m以上~1.45m以上、深さ約



挿図111 石籠第3遺跡掘り地区SD01遺構図

24~32cmを測り、断面は現存するものから判断するとU字状を呈すと思われる。

埴土は4層に分層できた。赤みがかった淡桃褐色土、淡赤褐色土の埴土がSD03内の一部と、その周辺で特によくみられた。

遺構検出時に、石籠8号墳からの流れ込みのものと思われる土器片、埴輪片を数点検出しているが、図化できなかった。この遺構に伴う遺物がないため、時期・性格は不明である。(井上)

SD04 (挿図114、図版27)

調査区北側のG8・9、H9・10グリッドにあり、標高約60.3~64.3mのやや急に北西側へ傾斜する斜面に立地する。北東側、北西側はともに調査区外に続いている。

SD04は北西方向に、ほぼ直線状に走る。長さ14.1m以上、幅0.35m以上~4.50m以上、深さ約25~50cmを測り、断面は現存するものから判断するとU字状を呈すと思われる。底部は北西方向から南東方向へ平行して2列並んで走っている。

埴土は2層に分層でき、①・②層のいずれかが単層で入り込むものである。

遺構検出時に、石籠8号墳からの流れ込みのものと思われる埴輪片を僅かに検出しているが、図化できなかった。この遺構に伴う遺物が出土していないため、時期・性格は不明である。(井上)

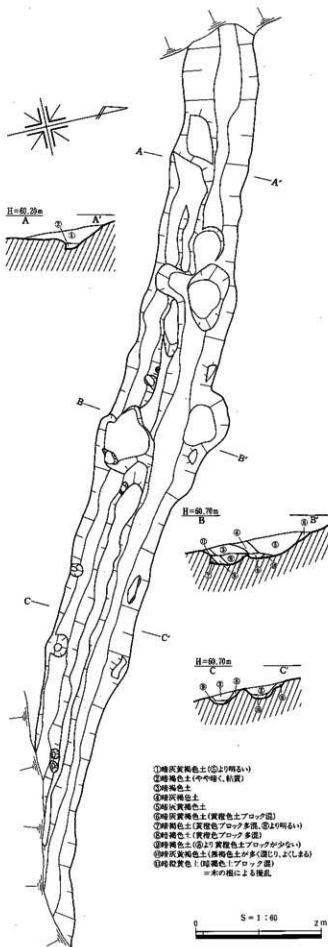
SD05 (挿図115、図版27)

調査区北東側端近くのF13、G12・13グリッドにあり、標高約64.9~65.7mの緩やかに南東側へ傾斜する斜面に立地する。南西側約0.9mにS I 01がある。SD05東側は調査区外に続いている。

SD05は、北西方向から南東方向にほぼ直線状に走る。長さ11.2m以上、幅0.22m以上~1.10m以上、深さ約6cm~16cmを測り、東側は削平されている。また、底面は若干の擾乱を受けている。

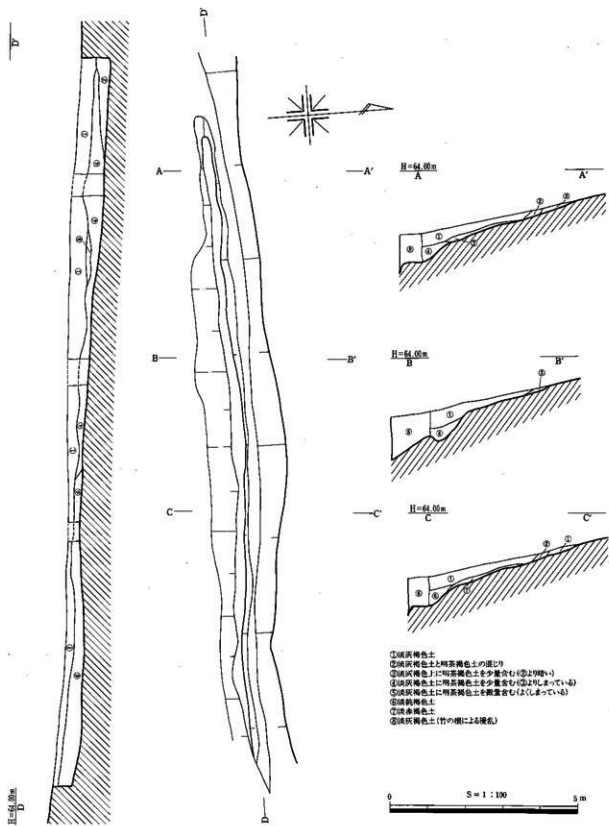
埴土は2層に分層できた。これらは、他の遺構のそれと比較してもよく締まったものであった。

遺物が出土していないため、時期・性格は不明である。(井上)

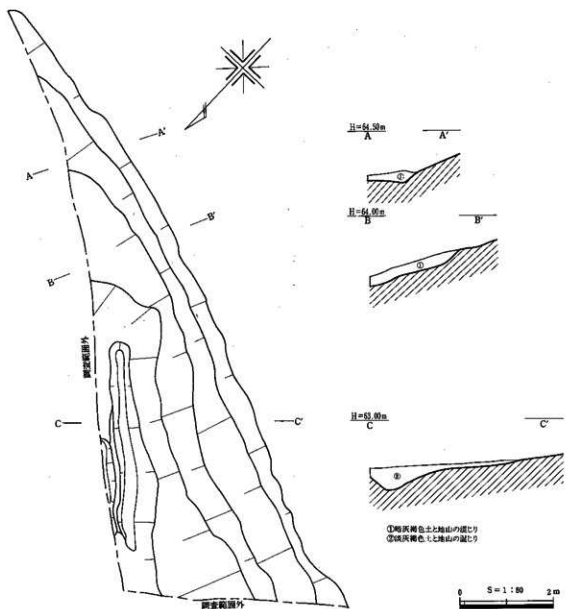


- ①暗灰黄褐色土(⑤より明るい)
 - ②暗褐色土(やや暗く、粘質)
 - ③暗褐色土
 - ④暗灰黄褐色土
 - ⑤暗灰黄褐色土(黄褐色土ブロック多)
 - ⑥暗褐色土(黄褐色土ブロック多塊、⑤より明るい)
 - ⑦暗褐色土(黄褐色土ブロック多塊)
 - ⑧暗褐色土(黄褐色土ブロック多塊)
 - ⑨暗褐色土(⑤より黄褐色土ブロックが少)
 - ⑩暗灰黄褐色土(黄褐色土が多(濃)じり、よ(し)まる)
 - ⑪暗褐色土(暗褐色土ブロック多)
 - ⑫暗褐色土(暗褐色土ブロック多)
- ※木の樫による擾乱

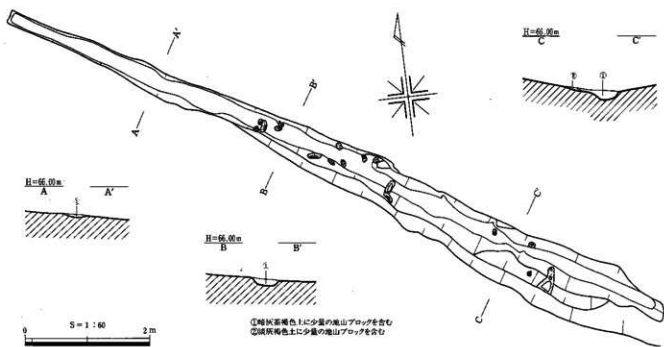
挿図112 石籠第3遺跡跡り地区SD02遺構図



挿図113 石胎第3遺跡跡り地区 S D03遺構図



押図114 石籠第3道跡掘り地区SD04遺構図

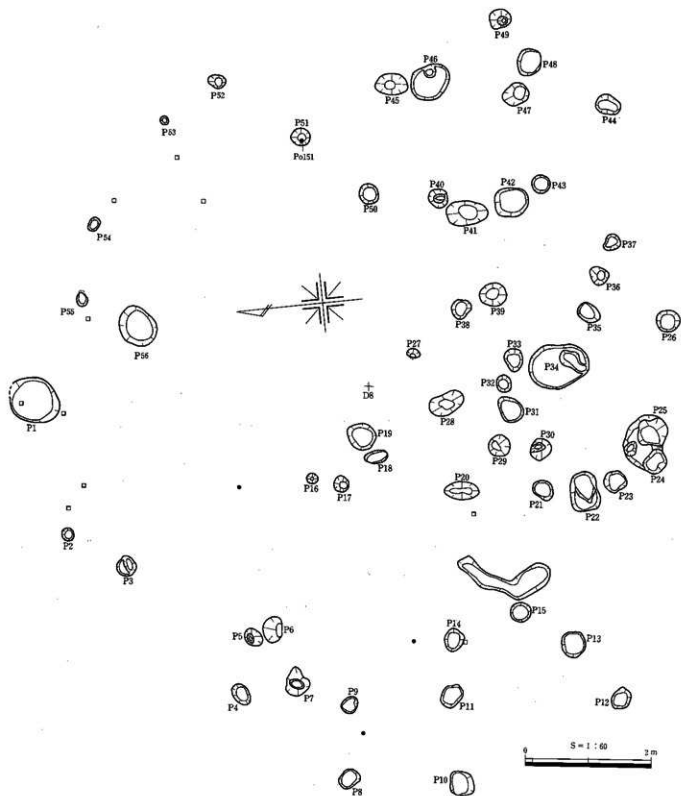


押図115 石籠第3道跡掘り地区SD05遺構図

5. ピット群

石脇8号墳丘下ピット群 (挿図116・117、図版23・40・41)

調査区ほぼ中央のD8・9、E8・9グリッドにあり、標高約66.9～67.3mのほぼ平坦面に立地する。石脇8号墳丘盛土および旧表土除去後に検出された。



挿図116 石脇8号墳丘下ピット群遺構図

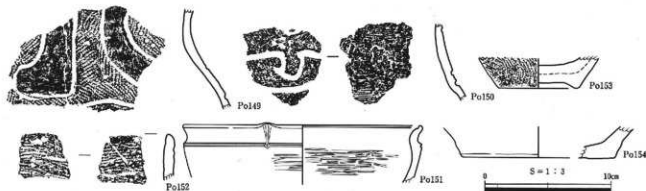
ピットは計56個検出された。その広がり、東西×南北でおよそ12.4m×10.5mであるが、周辺は8号墳築造時に掘削されており、さらに広がるものと思われる。平面形はほぼ円形を呈するものが多く、径は13cm～93cmまでであるが、おおむね30～45cmである。規模は挿表6を参照されたい。

埋土は黒褐色土、黒灰褐色土、灰茶褐色土、淡灰褐色土が単層で入るものが多い。

P51の埋土中より縄文土器浅鉢Po151が出土している。なお、旧表土中からは、磨消縄文をもつPo149・150、縄文土器底部Po153・154が出土している。また、8号墳周溝内から縄文粗製深鉢片も出土している。

出土遺物は中津～福田Ⅱ式併行期と考えられ、縄文時代後期前葉のものと思われるが、性格は不明である。

(岩崎)



挿図117 石籠8号墳丘下ピット群出土遺物実測図

ピット番号	縦 長軸×短軸-深さ	備考	ピット番号	縦 長軸×短軸-深さ	備考	ピット番号	縦 長軸×短軸-深さ	備考
P 1	88×71-30		P20	53×28-19		P39	42×37-19	
P 2	22×20-20		P21	34×28-15		P40	31×31-28	
P 3	31×30-15		P22	63×40-11		P41	67×40-21	
P 4	34×24-24		P23	33×32-13		P42	54×45-23	
P 5	31×24-17		P24	40×31-19		P43	29×27-12	
P 6	41×31-20		P25	46×38-43		P44	40×31-19	
P 7	47×27-26		P26	37×34-18		P45	51×35-23	
P 8	33×26-15		P27	20×14-17		P46	64×52-23	
P 9	24×23-18		P28	56×31-25		P47	40×32-31	
P10	38×35-22		P29	34×34-15		P48	43×37-18	
P11	38×32-14		P30	35×31-20		P49	34×29-24	
P12	35×30-11		P31	45×34-19		P50	34×32-17	
P13	39×36-5		P32	26×23-12		P51	30×29-11	J止器
P14	36×31-17		P33	36×29-14		P52	29×21-14	
P15	33×31-18		P34	93×71-19		P53	13×12-10	
P16	18×16-18		P35	38×28-11		P54	23×17-11	
P17	26×24-21		P36	30×28-14		P55	22×17-16	
P18	36×20-22		P37	28×24-13		P56	64×53-31	
P19	46×41-9		P38	33×28-15				

挿表6 石籠8号墳丘下ピット群一覽表



写真③ 石籠第3遺跡掘り地区
現地説明会風景1



写真④ 石籠第3遺跡掘り地区
現地説明会風景2

6. 遺構外遺物 (挿図118、図版41)

遺構外からは、図化できたものに土師器小皿Po155、土錘Po156・157、煙管吸い口B1、寛永通宝C1、砥石S2、磨製石斧S3、不明石器S4、石鏃S5・S6、小刀F7、切子玉J3、ガラス小玉J4がある。

これらのうち、Po155は回転糸切り未調整で平安時代のものである。

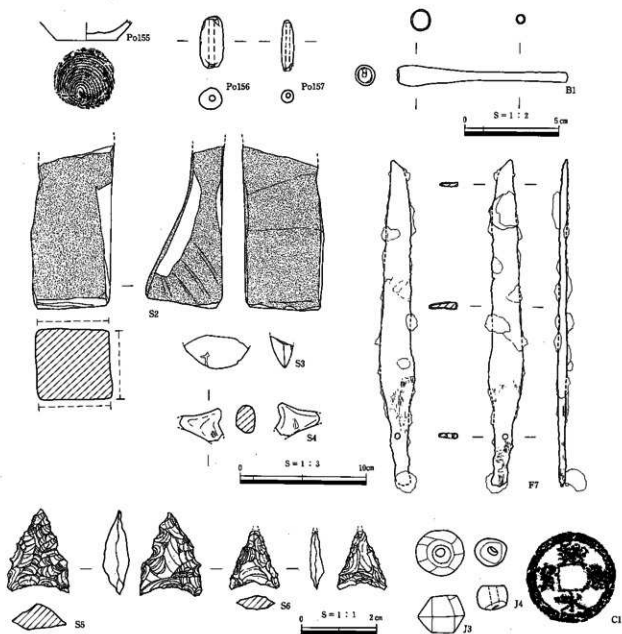
S5は黒曜石製、S6は無斑品安山岩製で、いずれも石脇8号墳旧表土除去中に出土していることから縄文時代のものである。

F7はB4グリッドからの出土で、SD01・02の中間で検出された。

J3・4は調査区北東端のF11・D10グリッドから検出されたが、石脇8号墳の副葬品と考えられ、墳丘削平時に移動したものであろう。

B1・C1は江戸時代のもので、8号墳周溝埋土上面から出土しており、周辺にこの時期の遺構があったものと思われる。

(岩崎)



挿図118 平成8年度石脇第3遺跡跡地地区遺構外遺物実測図

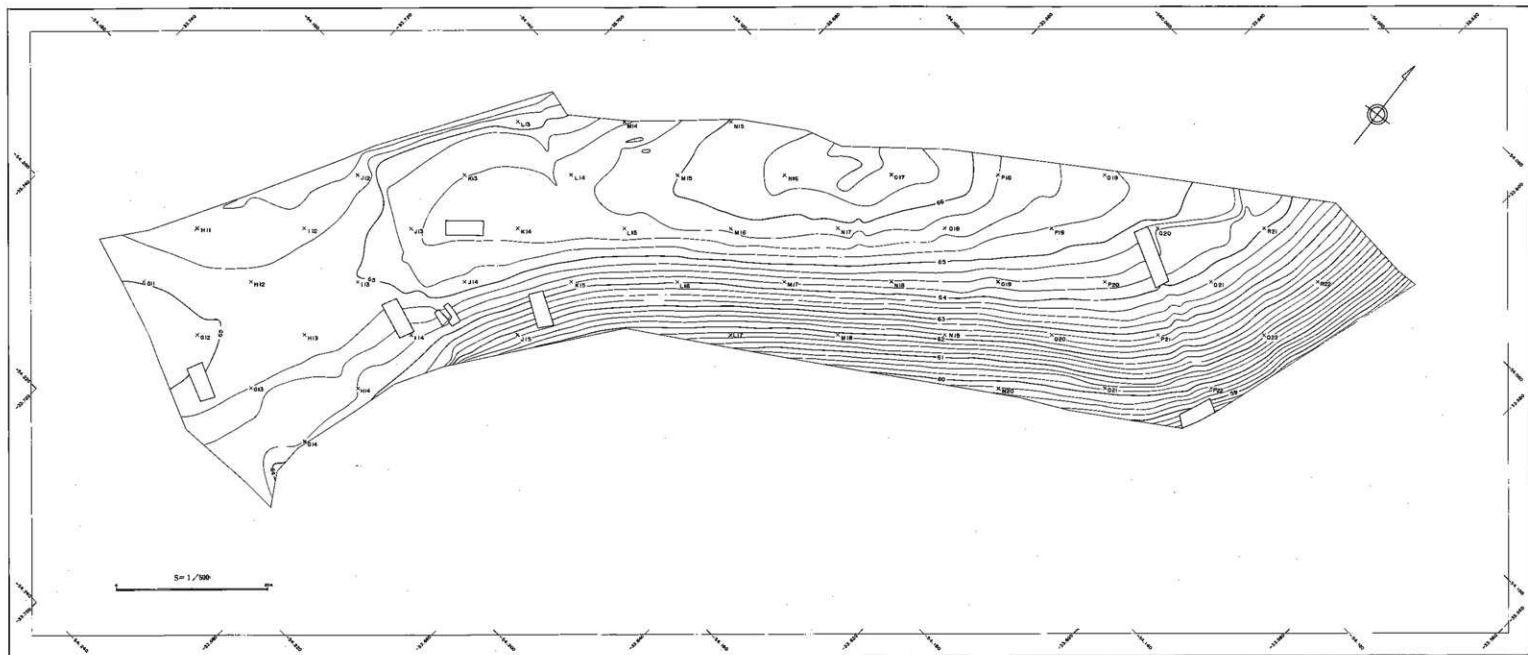


插图119 平成9年度石殿第3道跡排り地区調査前地形測量図



補図120 平成3年度石屋第3遺跡発掘地区遺構全体図

第3節 平成9年度調査結果

1. 竪穴住居跡

S102 (押洞121~124, 図版28~30・41・42)

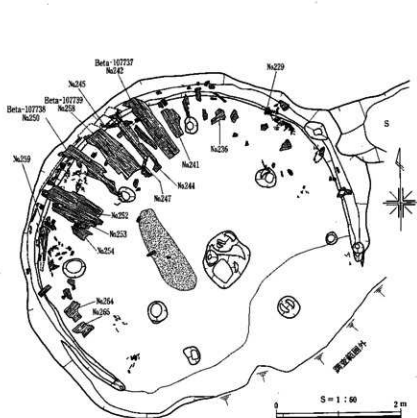
調査区南東側のO21グリッドにあり、標高58.0~58.9mの南側に傾斜する斜面に立地する。北東側約6mにはSK05、北側約8mにはSK06がある。

斜面に立地するために、南側は流失しているが、遺存する壁から平面は、円形を呈するものと考えられる。規模は南北4.86m、東西5.0mを測り、床面積は約18.0㎡である。壁高は、最も遺存状態のよい北側で最大0.74mである。壁際には幅16~22cmの壁溝が、南側は途切れているがほぼ全周するものと考えられる。断面形は、U字状を呈す。

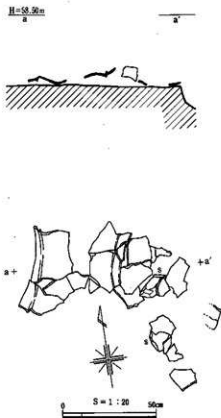
主柱穴はP1~P4の4個で、それぞれの規模はP1(36×30-67)cm、P2(25×20-55)cm、P3(20×17-25)cm、P4(27×20-35)cmを測る。P1・P4で柱痕が検出されており、復元される柱の太さは、15~18cmである。主柱穴間距離は、P1~P2間から順に2.9m、2.9m、2.85m、2.4mである。主柱穴間には、補助柱穴と考えられるP6~P9がある。それぞれの規模は、P6(28×23-14)cm、P7(32×29-21)cm、P8(36×34-17)cm、P9(35×31-14)cmを測る。P8・P9は、主柱穴間からずれている。

床面中央やや東寄りには、中央ピットP5がある。平面は不整形円形を呈し、底面はでこぼこである。(92×71-24)cmを測る。埋土は2層に分層でき、いずれも炭化物を含んでいる。上層は焼土粒を含んでおり、廃絶時は開放されていたものと考えられる。

床面上では、焼土面が3か所検出された。いずれも主柱穴に囲まれる範囲内にあり、P5北側に接するものもある。



押洞121 石輪第3遺跡掘り地区S102炭化材出土状況

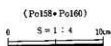
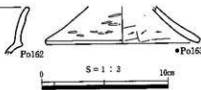
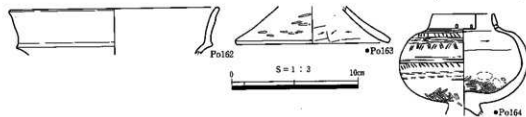
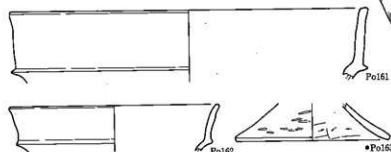
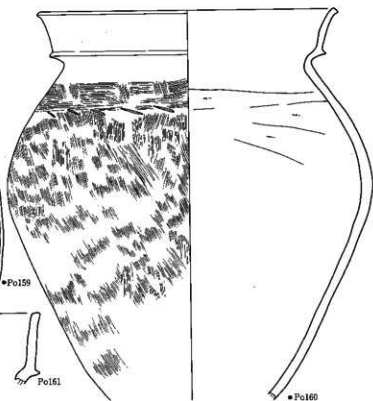
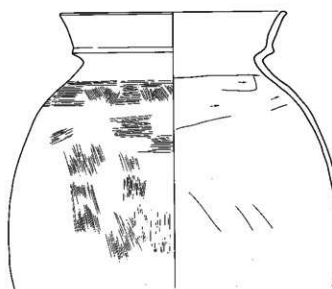
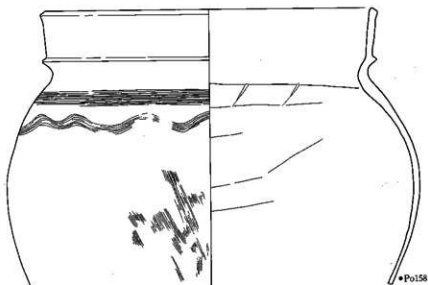


押洞122 石輪第3遺跡掘り地区S102床面遺物出土状況

のは、一部に交互に重なった状況が窺われ、アンベラ状に編まれたものの可能性があり、床面からは若干浮いて出土していることから、壁をアンベラ状の編み物で囲っていた可能性がある。

また、Po158・159の下からも交互に重なった炭化した茅が検出されており、上記のものとは異なり、敷物であった可能性がある。

これら炭化材の樹種同定の結果、板状の垂木と考えられるNo236・241・242・244・250・252・253はスギ、No254



挿図124 石鳥第3遺跡掘り地区S102出土遺物実測図

はシラギ、母尾桁と考えられるNo245はスギ、No247はエノキ、No259はカキと判明した。

埋土は、8層に分層できた。このうち②層はS D06の埋土である。炭化材にかぶる土層は⑦層で、斜面側に厚く堆積している。

斜面側の壁際に炭化材の残りがよく、主柱穴に囲まれた部分には炭化材が遺存していなかったことから、二段伏屋式の構造で、下段部分は上葺き、上段部分は草葺きの構造であったものと考えられる。

床面は、ほぼ全面に⑩層による貼床が施されている。南側はやや深く掘り込まれ、貼床が厚くなっている。

出土遺物には、図化できたものに土師器甕Po158～Po162、脚部Po163、脚付短頸壺Po164がある。このうち、Po158～Po161は床面北側壁際に潰れたような状態で出土している他、Po164は床面中央やや東寄り、また中央ピット内からPo162が出土している。

その他に、軽石が床面・埋土中から多数出土しており、大小合わせて計50個確認できた。

出土遺物から、S I 02は南谷大山縄文V期、古墳時代前期前葉ごろのものと考えられる。また、炭化材の¹⁴C年代測定では、Beta-107737が1910±50B.P. (A.D.100年)、Beta-107738が1660±60B.P. (A.D.410年)、Beta-107739が1690±50B.P. (A.D.390年)、Beta-107740が1920±60B.P. (A.D.90年)と幅広い結果を示したが、測定誤差を考慮すると、およそ3世紀中ごろと推定される。 (牧本)

2. 掘立柱建物跡

S B01 (挿図125、図版30)

調査区中央やや西よりのM15・N15グリッドにかけての標高約65.4mのほぼ平坦面に立地している。南側約6mにS D07が位置している。

耕作による削平が著しく、遺存状態がとても悪いため、柱穴を8個しか検出できなかったが、桁行き4間・11.2m、梁行き1間・3.0～3.2mの掘立柱建物跡と判断した。

各柱穴の規模は、それぞれP1 (70×64-11) cm、P2 (90×68-10) cm、P3 (62×58-8) cm、P4 (78×70-8) cm、P5 (66×62-18) cm、P6 (70×54-20) cm、P7 (54×46-7) cm、P8 (80×54-12) cmである。その他の柱穴は、検出面を削平されていて検出できなかった。

柱穴間距離は、P1～P2間から順に3.0m、2.7m、2.75m、2.7m、3.0m、3.0m、5.5mである。主軸方向はN-47°-Eである。

埋土は、基本的に黒褐色土と暗褐色土の混じりで比較よく締まる。

遺物は全く出土しておらず、時期は不明である。 (井上)

3. 土坑・土墳墓・石棺墓

S K03 (挿図126・127、図版30・42)

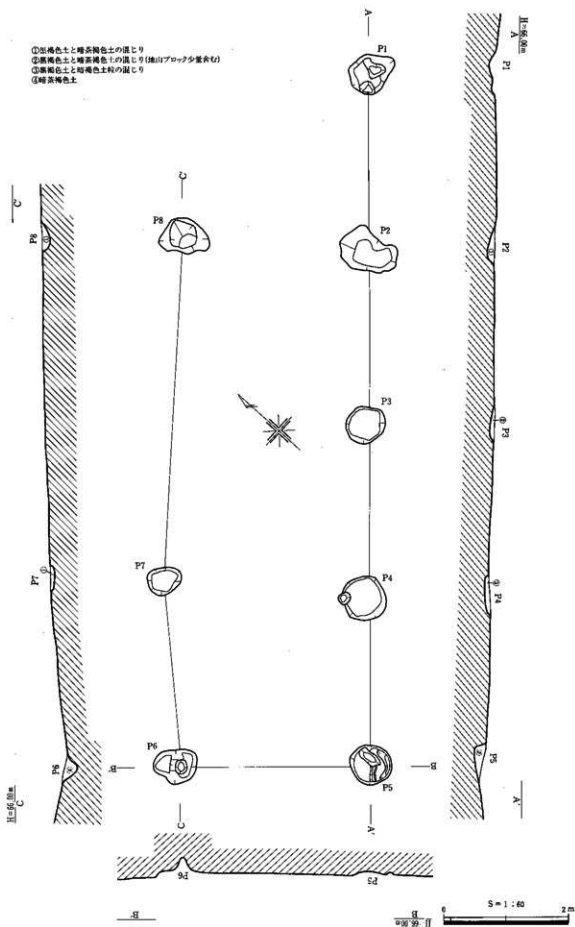
調査区北東側際近くのS22グリッドで標高約62mの緩やかに東側へ傾斜する斜面上の中程に立地している。北東側約45mにS K07が位置している。

形態は、耕作による削平をかなり受けており、遺存状態はあまりよくない。平面形は上縁部、底面部ともに長方形、断面は逆台形状を呈する。

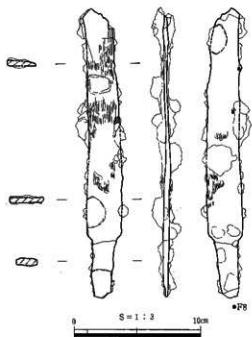
規模は、上縁部で長軸2.15m×短軸0.65m、底面で長軸1.98m×短軸0.58mを測る。深さは、もともと残りのよい南側で上縁部から45cmである。

埋土は4層からなるが、ほとんど黒褐色土を基調としたものである。木棺等の痕跡は認められなかった。

- ① 黒褐色土と暗茶褐色土の混じり
- ② 黒褐色土と暗茶褐色土の混じり(地山ブロック少量含む)
- ③ 黒褐色土と暗茶褐色土の混じり
- ④ 暗茶褐色土



挿図125 石輪第3遺跡掘り地区SB01遺構図



挿図126 石籠第3遺跡跡り地区SK03出土遺物実測図

遺物は、②層と③層の間、底面からやや浮いた状態で鉄刀F8が、切先部分を南側に向けて出土している。

SK03の時期は、出土遺物からは時期判断できないが、古墳時代のものであろう。

SK03は、出土遺物・埋上の状況から上墳墓と考える。(井上)

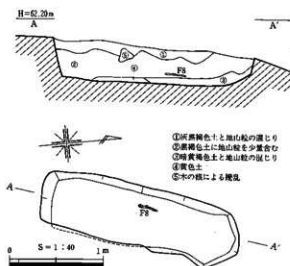
SK04 (挿図128、図版30)

SK04の位置は、調査区中央寄りやや西側O20グリッドで標高約62.7mの緩やかに南東側へ傾斜する斜面上に立地している。北東側約12mにSK06が位置し、南東側約10mにはSD06が位置している。

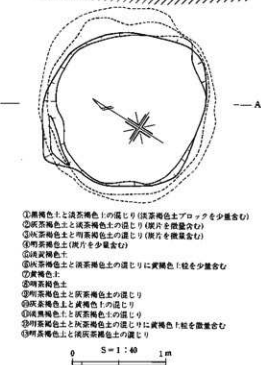
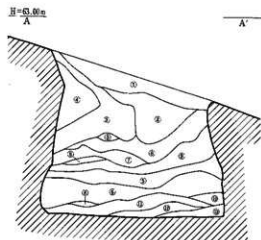
耕作による削平を受けているものの、遺存状態は比較的よい。平面形は上縁部、底面ともに円形であり、断面は上縁部より最大で30cm、最小で5cm掘り込みの壁面が内湾する顕著な袋状を呈する。

規模は、上縁部で長軸1.71m×短軸1.61m、底面で長軸2.06m×短軸1.87mを測る。深さは、最も残りのよい北側で上縁部から1.71mである。

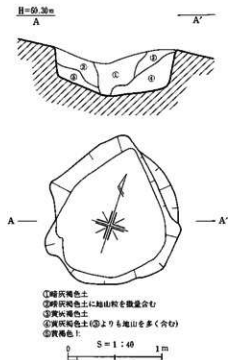
埋土は、13層に分層できたが、これらは壁面の崩れと自然堆積によるものと思われる。なお、②層・③層・④層には微量ながら炭片が含まれていた。



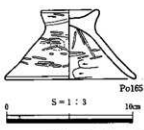
挿図127 石籠第3遺跡跡り地区SK03遺構図



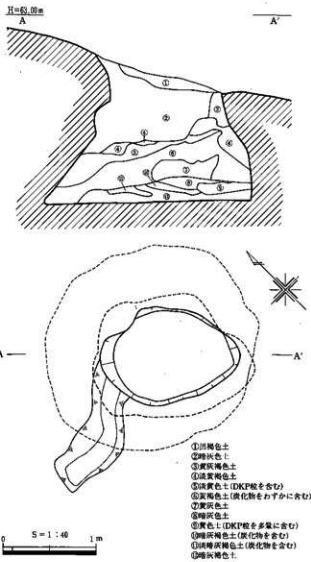
挿図128 石籠第3遺跡跡り地区SK04遺構図



押図129 石籠第3遺跡埴り地区SK05遺構図



押図130 石籠第3遺跡埴り地区SK06出土物実測図



押図131 石籠第3遺跡埴り地区SK06遺構図

遺物は全く出土しておらず、時期は不明である。
形態上の特徴からSK04は貯蔵穴として使用されていたものとする。

(井上)

S K 05 (押図129、図版31)

調査区東寄りO22グリッドで標高約60mの緩やかに南東側へ傾斜する斜面上に立地している。南西側約6mにS I 02が位置し、北東側約10mにはSK06が位置している。

形態は、耕作による削平をかなり受けており遺存状態はあまりよくない。平面形は上縁部、底面ともにやや不整な円形を呈する。断面は逆台形状を呈する。

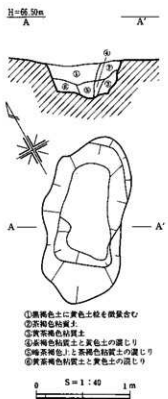
規模は、上縁部で長軸1.56m×短軸1.3m、底面で長軸1.28m×短軸1.16mを測る。深さは、最も残りのよい東側で上縁部から43cmである。

埋土は5層からなる。

遺物は、埋土中から土師器片が1点出土しているが底面からの出土ではない。

SK05の時期・性格とも、不明である。

(井上)



押図132 石籠第3遺跡埴り地区SK07遺構図

SK06の位置は、調査区中央から東側寄りのP21グリッドで標高約62.6mの緩やかに南東側へ傾斜する斜面上に立地している。南西側約12mにSK04が、南東側約8mにはSI02がそれぞれ位置している。

形態は、耕作による削平をかなり受けており、遺存状態はあまりよくない。平面形は上縁部では楕円形を呈し、底面部では円形を呈する。断面は、上縁部より最大で77cm、最小で14cm掘り込みの壁面が内湾する顕著な袋状を呈する。規模は、上縁部で長軸1.5m×短軸1.0m、底面で長軸2.2m×短軸2.16mを測る。深さは、最も残りのよいところで上縁部から1.59mである。

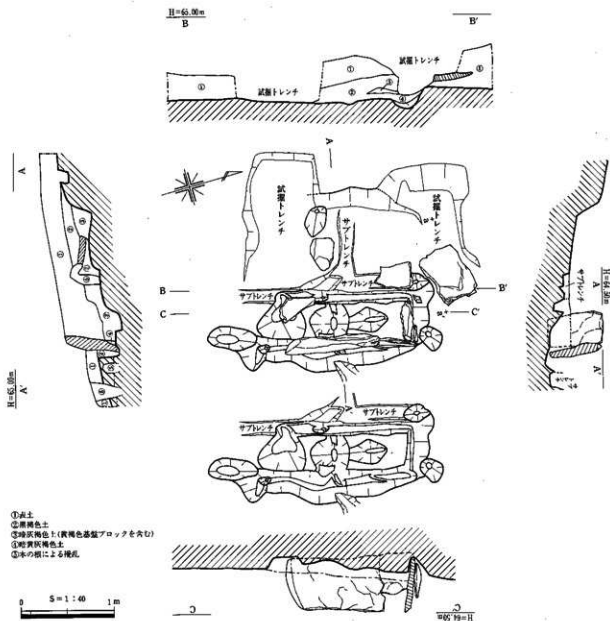
埋土は12層に分層できたが、これらは壁面の崩れと自然堆積によるものと思われる。なお、⑥層・⑨層・⑪層には微量ながら炭片が含まれていた。

埋土中層から弥生土器蓋Po165が出土している。

出土遺物から、SK06の時期は南谷大山編年Ⅲ期、弥生時代後期後半ごろのものと考えられる。

SK06は、形態から貯蔵穴として使用されていたものと考えられる。

(井上)



挿図133 石籠第3遺跡掘り地区SK06遺構図

S K07 (挿図132、図版31)

S K07の位置は、調査区中央からやや北東寄りのP19・Q19グリッドにかけての標高約66mのほぼ平坦面に立地している。南東側約15mにS K04が位置している。

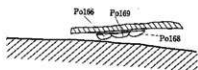
形態は、耕作による削平をかなり受けており、遺存状態はかなり悪い。平面形は上縁部、底面部ともに不整な楕円形を呈する。断面は逆台形状を呈する。

規模は、上縁部で長軸1.81m×短軸0.86m、底面で長軸1.0m×短軸5.1mである。深さは、最も残りのよい南東側で上縁部から38cmである。

埋土は6層からなる。

遺物は全く出土しておらず、時期・性格とも不明である。(井上)

H=65.00m
a



S X06 (挿図133-135、図版31・32・42)

調査区南西側のJ13グリッドにあり、標高64.0~64.5mの緩やかに東側へ傾斜する斜面に立地する石棺墓である。南西側約6mには石脇9号墳、南西側約2mにはS D08、西側約2mにはS D09がある。試掘調査の際に、板状安山岩の石棺小口・側板材が露出しており、存在が確認された。

周辺は耕作のために削平され、遺存状態は悪く、石棺小口1枚、側板2枚のみが遺存していた。石材の組み合わせは、両側板で、小口をはさむものである。底面は、かなり攪乱を受けており、凹凸が著しい。主軸方向は、N-13°-Eとやや東西側に振れるが、ほぼ南北方向を向く。

規模は、蓋石、南側小口が抜き取られていたが、内方で長さ約1.6m、幅0.35m、高さ0.4mを測るものと推定される。墓壕掘り方の規模は不明であるが、石棺材を据えるための、幅7~12cmの溝が検出された。

埋土の状況を見ると、棺内にまで黒褐色土が入り込み、その上に表土が約30cm堆積していることから、かなり初期に盗掘を受け、石材が抜かれたものと考えられる。石棺の裏込の状況は不明である。

周辺には、石棺材の一部と考えられる板石が点在しており、北側小口のすぐ北にある板石の下から、須恵器環蓋Po166、坏身Po167-169が、口縁部を上にした状態で出土した。これらは、盗掘の際に棺内から移動したものと考えられる。棺内からは、遺物は出土しなかった。

出土遺物から、TK217併行期、古墳時代終末ごろのものと考えられる。

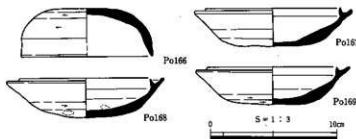
(牧本)

S = 1 : 20 0.5m

挿図134 石脇第3遺跡掘り地区 S X06須恵器出土状況図



写真① 石脇第3遺跡掘り地区作業風景



挿図135 石脇第3遺跡掘り地区 S X06出土遺物実測図

4. 溝状遺構

SD06 (挿図136、図版32)

調査区北東側のN20・O21グリッドにあり、標高58.1~60mの東側へ傾斜する斜面に立地している。途中S I02によって切られている。西端・東端ともに調査区外へ延びている。

調査区際を東西方向へは直線的に延びるが、調査区外へ延びており、全形は不明である。断面は、不整なU字状を呈す。

確認できた規模は、長さ19.4m以上、幅0.47~1.12mを測る。深さは、最も遺存状態のよい西側肩部から27~68cmを測る。

埋土は暗灰褐色土単層で、S I02埋土を切り込んでいる。

遺物は全く出土しておらず、時期・性格とも不明である。
(牧本)

SD07 (挿図137、図版33)

調査区中央部L15・M16グリッドにあり、標高65.3~65.4mのほぼ平坦面に立地している。南西側約4mにはS B01がある。

周辺は耕作による削平をかなり受けており、遺存状態は非常に悪く、途切れる部分もあるが、S B01に平行して直線的に走るものと確認された。断面は、逆台形状を呈す。

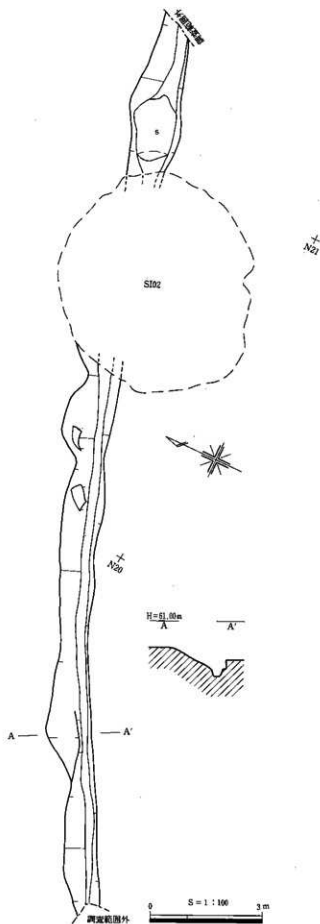
遺存する規模は、長さ14.5m、幅25~50cm、深さ7~10cmを測る。

埋土は2層に分層できたが、上部はかなり削平されており、本来の状況は不明である。

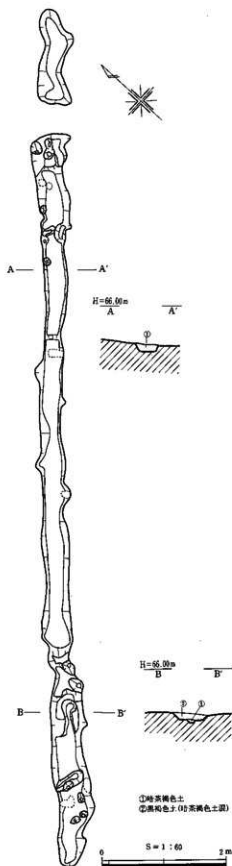
遺物は全く出土しておらず、時期は不明であるが、S B01にそうように、平行に走ることから、S B01に伴うものと考えられる。
(牧本)

SD08・10 (挿図138・139、図版33)

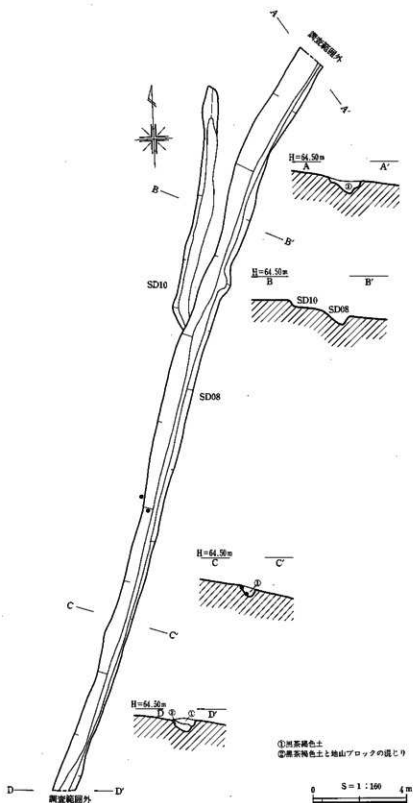
調査区南西端のG14グリッドからJ15グリッドにかけての標高約64.4~64.2mの東方向へ緩やかに傾斜する斜面に立地している。これらはG14グリッドから、さらに南側へ、またJ15グリッドから北東側へそれぞれ



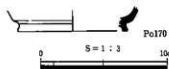
挿図136 石鳥第3遺跡掘り地区SD06遺構図



挿図137 石脇第3遺跡操り地区SD07遺構図



挿図138 石脇第3遺跡操り地区SD08・10遺構図



挿図139 石脇第3遺跡操り地区SD08出土遺物実測図

れ調査区外にはほぼ直線状に延びる。またSD10は、SD08中程から向きを変え、北側にはほぼ直線状にJ14グリッドからJ15グリッドにまたがるように位置している。

形態については、SD10が耕作による削平をかなり受けていて遺存状態はかなり悪く、また、SD08についても両端が調査区外に延びて途切れているため全体の規模は不明である。

遺存する規模は、SD08が長さ約32.6m、幅38~64cm、深さ85~39cmを測り、南西から北東の方向に走る。一方SD10は長さ約10.3m、幅0.52~0.72m、深さ7~24cmを測り、北から南の方向に走る。

埋土はSD08・10ともに2層に分層できた。

遺物は、SD08では凶化できたものに、埋土中からの須恵器高台環Po170がある。その他に、清屑部からも須恵器片が出土しているが、これらは、後述する石籠9号墳周溝内のうちの、新しい時期のもので、SD08に伴うものとは考え難い。

SD10においては遺物は全く出土していない。

SD08出土のPo170は、奈良から平安時代ごろのものと考えられるが、遺構の時期を示すものとは考えられない。また、SD10の時期は、検出状況等から判断してSD08より古いと考えるが、いずれの遺構も、はっきりとした時期を特定するまでには至らず、不明である。

性格についても、不明である。(井上)

SD09 (挿図140・141、図版33・42)

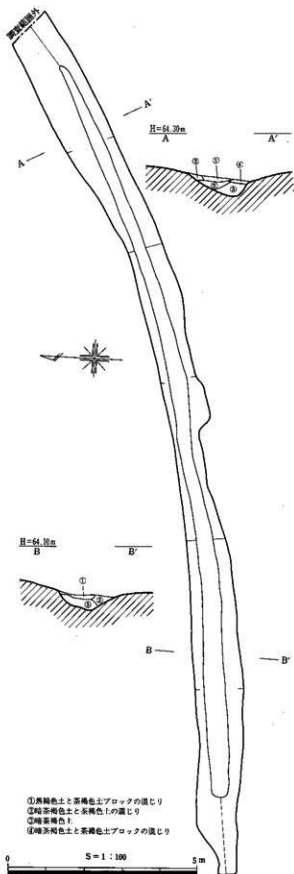
SD09の位置は、調査区南西側のJ12グリッドからJ14グリッドにかけての標高約62.9~63.3mのほぼ平坦面に立地し、丘陵頂部を横断するように走っている。この遺構はJ12グリッドからさらに西側に調査区外へほぼ直線状に延びているため、全体の規模は不明である。

形態は、耕作による削平をかなり受けているため遺存状態は非常に悪い。規模は遺存する部分で、長さ約22.2m以上、幅0.74~1.36m、深さ6~27cmを測り、東から北西の方向に走る。

埋土は4層からなる。

遺物は、埋土中からサヌカイト剥片S7が出土している。

時期は不明であるが、出土遺物から、縄文時代に至る可能性がある。(井上)



挿図140 石籠第3遺跡掘り地区SD09遺構図

5. 段状遺構

S 501 (挿図142、図版33)

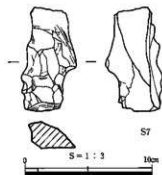
調査区南端のG13・G14グリッドにかけての標高約63.7~64.4mのほぼ平坦面に立地する。約7m北側には石脇9号墳がある。

遺存状態は非常に悪く、また、南側が調査区外にのび、東側はSD08によって切られており、全形は不明であるが、平坦面は方形を呈すと考える。

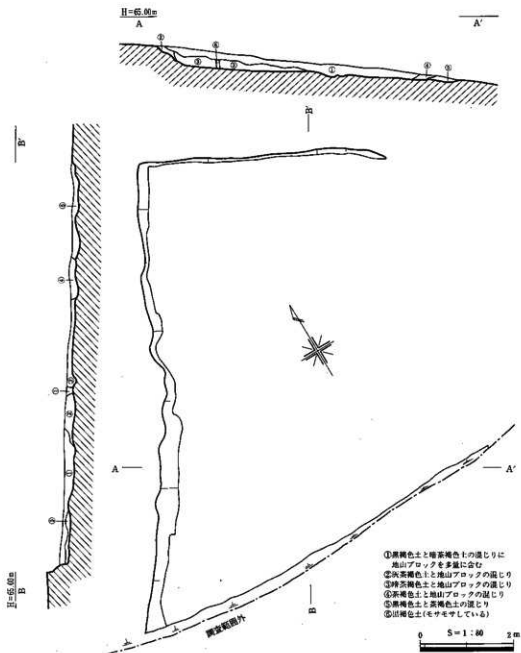
規模は、東西約7m、南北約9.9m以上、深さ最大0.36mを測る。床面は凹凸が激しく、ピットも確認できなかった。

埋土は6層からなり、ほとんどの層に地山ブロックがしっかり含まれていた。

遺物は全く出土していない。S 501の時期は、検出状況から判断して、SD08より古いと考える。(井上)



挿図141 石脇第3遺跡跡地地区 S501出土遺物実測図



挿図142 石脇第3遺跡跡地地区 S501遺構図

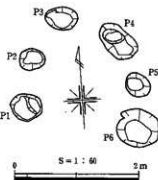
6. ビット群

石脇9号墳丘下ビット群 (押図143、図版34)

調査区南側のI14グリッドにあり、標高63.6~63.9mの緩やかに東側に傾斜する斜面に立地する。後述する石脇9号墳南東側墳丘下に当たる。

計6個のビットを検出した。いずれのビットも規則性はない。それぞれの規模は挿表7を参照されたい。埋土は単層から2層に分層できた。

石脇9号墳旧表土中から縄文土器が出土しており、縄文時代後期から晩期のものと考えられるが、性格は不明である。(牧本)



押図143 石脇9号墳丘下ビット群遺構図

ビット番号	規模 (cm)		備考	ビット番号	規模 (cm)		備考	ビット番号	規模 (cm)		備考
	長軸	短軸-深さ			長軸	短軸-深さ			長軸	短軸-深さ	
P 1	43	48-28		P 3	54	44-11		P 5	44	35-37	
P 2	40	36-33		P 4	66	52-36		P 6	70	66-26	

挿表7 石脇9号墳丘下ビット群一覧表

7. 石脇9号墳 (押図144~151、図版34・35・42・43)

調査区の南東側H13・14、I13・14グリッドにあり、標高63.4~64.6mの緩やかに東側へ傾斜する斜面に立地する。東側はかなり急な斜面となっており、尾根の傾斜変換点付近に築かれたものである。現況は畑地となっているが、墳丘状の高まりは確認されていなかった。

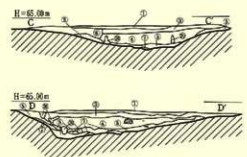
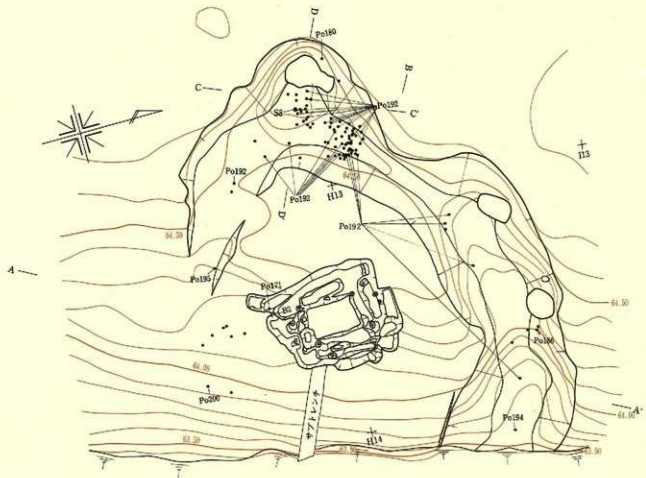
遺存状態は非常に悪く、墳丘はすでに削平され、また、東側はSD08によって掘削されている。耕作土を約20cm程度除去したところで周溝・主体部を確認でき、古墳と判断された。当初径10m程度の円墳と考えていたが、掘り下げの結果、いびつではあるが一辺約15m程度の方墳と判断された。

盛土は遺存していなかったが、南東側で旧表土と思われる黒褐色土の範囲が確認され、本来はかなりの盛土が施されたものと推定される。現状での墳丘の高さは、北側周溝底から30cmである。

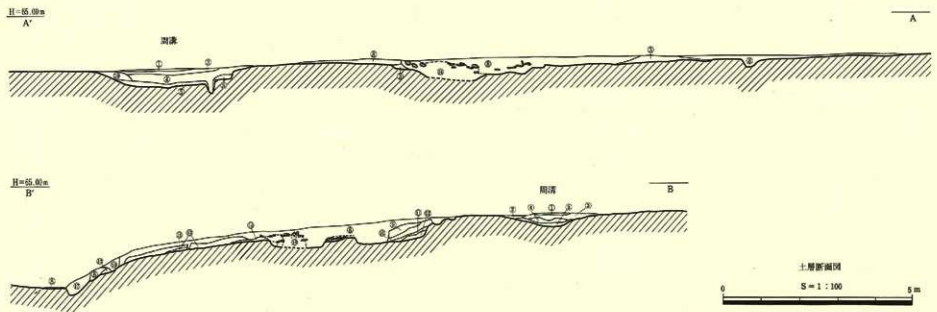
周溝は南西側・南側がすでに削平されており、遺存状態は良好ではない。北西側コーナー外縁、北側外縁がいびつに飛び出している部分があるが、この部分には、後述する周溝内土壌SX07~09が作られていた。周溝の幅は、北側中央部が1.0mと狭くなっており、その他は約3.0mを測る。深さは、北側が浅く約0.2m、東側が約0.4mとやや深くなっている。埋土は、4層に分層できた。いずれも自然堆積したものと考えられる。上層は耕作による攪乱を受けている。

主体部は、横穴式石室と考えられるが、すでに破壊されており、墓室内に構築材の安山岩片が、攪乱土とともに多数散在するのみであった。石室は、S-6°-Eとほぼ南側に開口するが、墳丘主軸とは平行にならない。玄門部には、玄門石を立てたと考えられる掘り方が東壁寄りにあり、片袖の形態であったものと考えられる。玄室各壁は、石材掘り方・裏込土の状態から一枚石で構成されていたものと考えられ、西側壁の石材は長さ約3.3mと推定される。羨道部には、明確な石材の掘り方は認められず、もともとなかったか、あっても前庭側壁を構築した程度のものと考えられる。推定される石室の規模は内法で長さ1.9m、幅1.4mを測る、玄室比1.3のやや長方形の玄室プランであったものと考えられる。

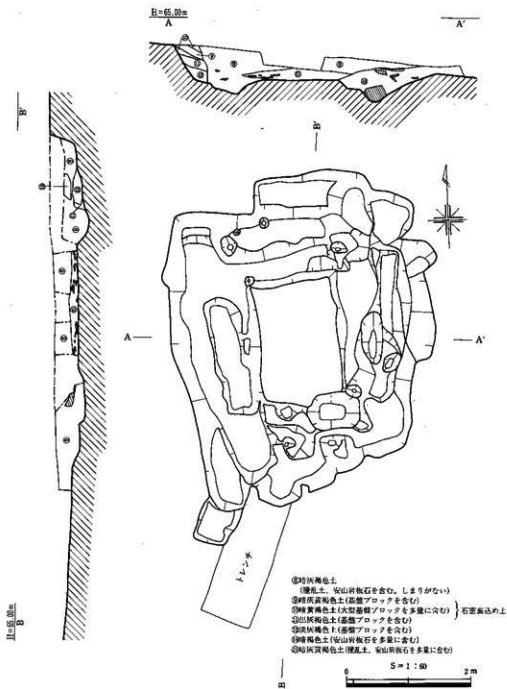
墓室は、長さ4.7m、幅3.3~4.18mを測り、奥側壁が幅広くなっている。底面には石材を据えるための溝状の



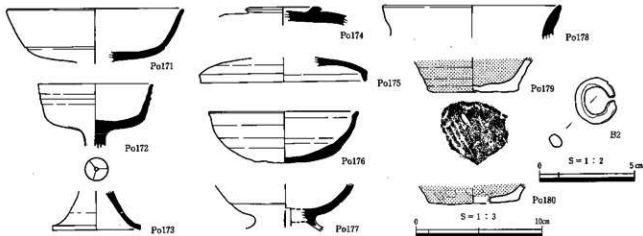
- ①輝沢色土
- ②輝沢褐色土
- ③輝沢灰褐色土
- ④輝沢褐色土(基礎アロップ多数含む)
- ⑤輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ⑥輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ⑦輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ⑧輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ⑨輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ⑩輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ⑪輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ⑫輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ⑬輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ⑭輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ⑮輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ⑯輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ⑰輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ⑱輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ⑲輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ⑳輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㉑輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㉒輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㉓輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㉔輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㉕輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㉖輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㉗輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㉘輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㉙輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㉚輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㉛輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㉜輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㉝輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㉞輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㉟輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㊱輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㊲輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㊳輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㊴輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㊵輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㊶輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㊷輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㊸輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㊹輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㊺輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㊻輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㊼輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㊽輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㊾輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)
- ㊿輝沢褐色土(基礎アロップを多く含む)



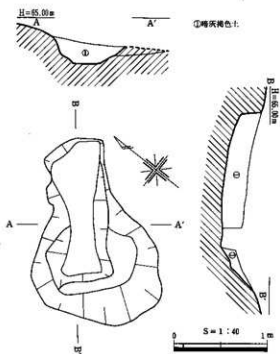
神岡144 石輪9号墳墳丘測量図



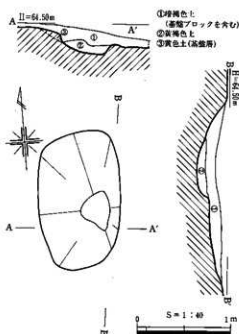
挿図145 石籠9号墳主体部実測図



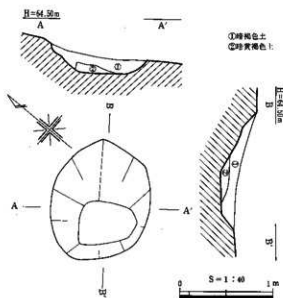
挿図146 石籠9号墳主体部出土遺物実測図



挿図147 石甕9号墳周溝内土壌S X 07遺構図



挿図148 石甕9号墳周溝内土壌S X 08遺構図



挿図149 石甕9号墳周溝内土壌S X 09遺構図

掘り方が認められ、使用された石材は厚さ50～60cmの安山岩板石であったものと推定される。また、西側壁・奥壁側では墓壁と石材との間に、黄褐色土と黒褐色土の互層となった④-⑤層で表込めされていた。

北側周溝内、周溝内土壌が3基検出された。S X 07は、西側コーナーの外縁部側の底部にある。平面は不整長方形を呈し、長さ1.65m、幅0.63m、深さ0.3mを測る。S X 08は、北側周溝の外縁部側の底部にあり、平面は長楕円形を呈す。長さは1.45m、幅0.87m、深さ0.28mを測る。S X 09は、北東側コーナー付近の外縁部側にあり、平面は不整楕円形を呈す。長さ1.26m、幅1.03m、深さ0.38mを測る。埋土は、いずれも単層～2層に分層できただけで、木棺等の痕跡は認められなかった。また、いずれの土壌も、周溝底中央ではなく外縁部側に偏って掘り込まれている。

これら周溝内土壌は、いずれも周溝埋土を切り込んで作られた形跡がないこと、周溝外縁がいびつに膨らんだ部分に作られていることから、9号墳築造に伴って作られたものと考えられる。

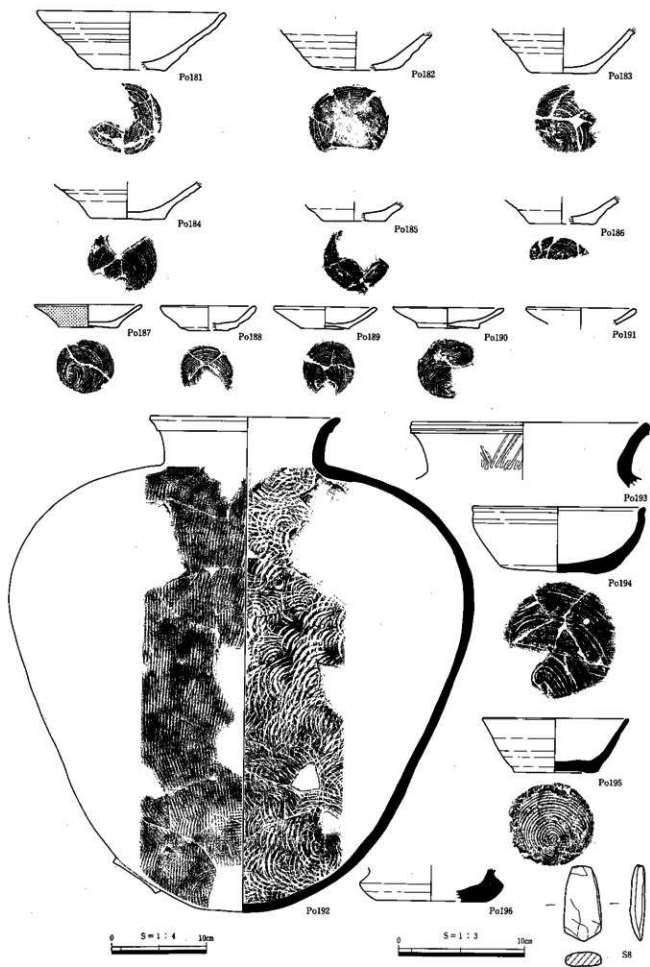


插图150 石脑9号墳周溝内出土遺物実測図

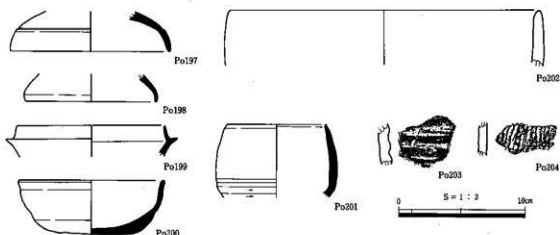
出土遺物には、玄室内攪乱土中で須恵器高環Po171、環蓋Po174・175、坏身Po176、口縁部Po178、土師器環Po179・180、羨道付近で須恵器高環Po172・173、耳環B 2 が出土している。

また、周溝埋土中から回転糸切り未調整の土師器環・小皿Po181~191、須恵器甕Po192・193、回転糸切り未調整の環Po194・195、播鉢と思われるPo196、小型磨製石斧S 8 が、また、墳丘内では須恵器環蓋Po197・198、坏身Po199・200、高環Po201、旧表土内から縄文土器Po202~Po204がそれぞれ出土している。

周溝内遺物のうちPo192は破砕された状態で、広範囲にわたって西側周溝から出土したものが接合した。縄文土器を除くこれらの遺物の内、Po171・172・173・192・193・197~199・201などはTK 209~217併行期と考えられ、石籠9号墳は、古墳時代後半から終末に築造されたものと考えられる。

その他の玄室内・周溝内から出土したほとんどの須恵器・土師器類のうち、Po174・175・194は奈良時代後期、8~9世紀ごろ、Po181~191は平安時代後期、11~12世紀ごろのもので、周辺に長期にわたる遺構の存在が想定される。

(牧木)



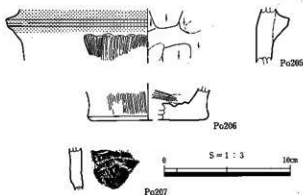
挿図151 石籠9号墳墳丘出土遺物実測図

8. 遺構外遺物 (挿図152、図版43)

遺構外からの出土遺物には、岡化できたものには、普通円筒埴輪片Po205、縄文土器底部Po206、縄文土器片Po207がある。

Po205は、石籠8号墳から移動したのと考えられる。また、Po206・Po207は石籠8・9号墳旧表土中遺物と同様、縄文時代後期から晩期ごろのものと考えられる。

(牧木)



挿図152 平成9年度石籠第3遺跡埴輪地区遺構外遺物実測図

第5章 寺戸第1遺跡の調査

第1節 調査の概要

寺戸第1遺跡は、泊村石監字寺戸に存在し、標高25~44mの丘陵に挟まれた、東側に傾斜する谷地形及び北面に傾斜する斜面に位置する。現況は畑地・梨畑となっており、標高28~30m付近で大きく段差がつき、また、南側の斜面部にはコンクリートの排水溝が2か所設けられていた。

立地する地形が谷地形であることから、二次堆積土が非常に厚く、調査区西側土層断面を観察すると、耕作土を含めた厚さ(①~⑤層)が深いところで約1.3mを測る。⑥層以下が遺構に伴う埋土または基盤層と考えられ、⑥層上面ではほぼ平坦面をなしている。また、後述するSB03が⑦層を掘り込んで作られており、この層はSB03部分で厚く堆積し、SB03を作る時の整地層と考えられる。

SB03以前の遺構基盤層についても、土器溜まり02、SI02は⑦層中で検出されており、層位的に遺構の新旧関係がわかる。

また、遺構検出中及び⑥層中でも、出土量は少ないものの弥生時代後期の遺物が出土している。この時期の遺構は検出されていないことから、遺跡西側部分及び上方の丘陵上から流れ込んだ堆積土であると考えられる。

検出した遺構は、竪穴住居跡2基、掘立柱建物跡4基、段状遺構5基、土坑6基、溝状遺構3条、ピット群2か所、土器溜まり2か所、集石3か所、石列1か所である。

古墳時代中期後半では、掘立柱建物跡1基(SB01)、段状遺構1基(SS04)がある。SB01は梁行き2間×桁行き2間の総柱建物である。段状遺構SS04に伴うものである。

古墳時代終末期(白鳳期)では、竪穴住居跡1基(SI01)がある。

その他の遺構は奈良から平安時代のもものがほとんどで、竪穴住居跡1基(SI02)、掘立柱建物跡3基(SB02~04)、段状遺構4基(SS01・02・05・06)、溝状遺構1条(SD01)、不明土坑3基(SK01・02・06)、ピット群02、土器溜まり2か所、集石2か所(集石01・02)がある。

SI02は、隅丸方形を呈するものであるが、周辺の遺構のあり方から掘立柱建物の可能性もある。

掘立柱建物跡のうち、SB02は2間以上×3間以上を測るものである。SS02を伴うものである。SS02の肩部に集石01がある。SB03は、大半が調査区外へ延びており正確な規模は不明であるが梁行き2間×桁行き1間以上を測るものである。規模が他の掘立柱建物に比べると一回り大きく、大型の掘立柱建物であった可能性がある。SB04は2基重複しており、SB04-2→SB04-1の順で建て替えられたものと考えられる。いずれも2間×4間を測るもので、SB04-1が一回り大きくなっている。SS06を伴っている。ピット群02もこの時期と考えられる。

段状遺構のうち、SS01のP1内からは、完形の須恵器環とともに完形の2個を含む計4個体の製塩土器(焼き塩土器)が出土した。この遺跡の性格を考える上でも重要な資料である。

SD01は、遺存状態は悪いが、底面に焼土面がある。

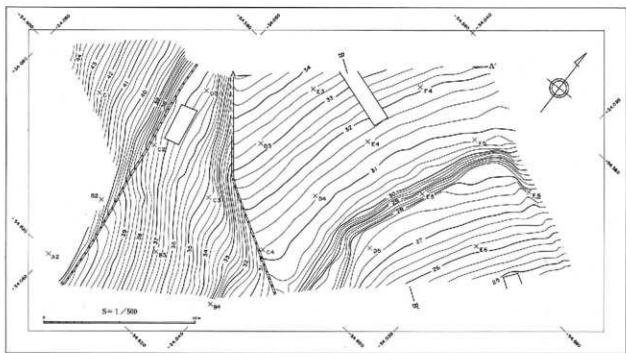
SK01はSS01に伴うものと考えられる。用途は不明であるが、集石02を伴う。

2か所ある土器溜まりのうち、土器溜まり02からは大量の土師器・須恵器が破棄されたような状況で検出された。中には、移動式竈、8個体以上の土製支脚、製塩土器片なども含まれていた。

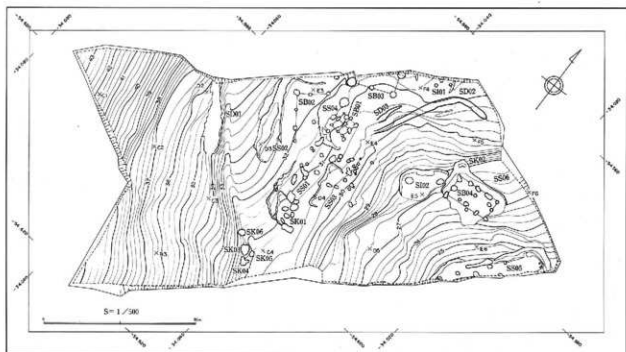
その他のものについては、SD02・03は時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から、平安時代以降のものと考えられる。

土坑SK03~05、集石03は、遺物が出土しておらず、時期は不明である。石列は、この遺跡内では最も新しい遺構のひとつで、標高28m付近の段の際に一抱えもある石材が列をなしていた。用途は不明であるが、この段差にかかわるものと思われる。

(牧本)



挿図153 寺戸第1遺跡調査前地形測量図



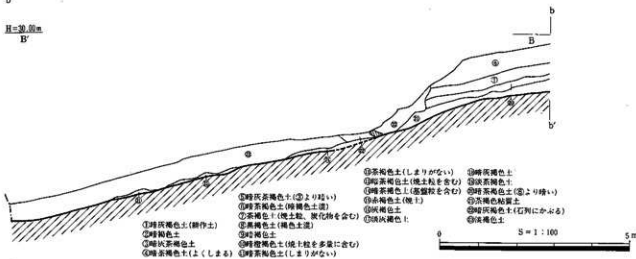
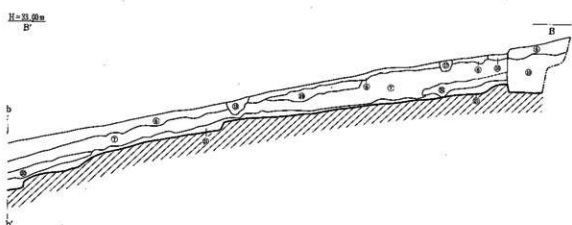
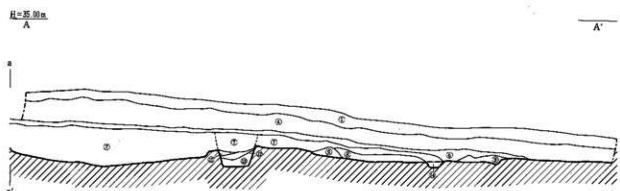
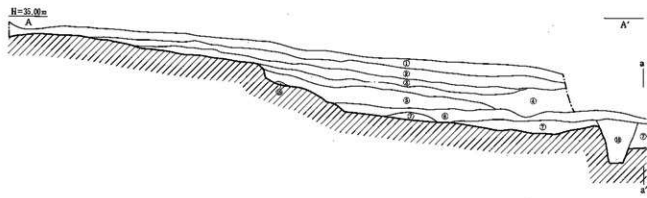
挿図154 寺戸第1遺跡遺構全体図



写真① 寺戸第1遺跡おおい風景



写真② 寺戸第1遺跡作業風景1



挿図155 寺戸第1遺跡調査区西壁及び中央部土層断面

第2節 竪穴住居跡

S 1 01 (押図156・157、図版44・50)

調査区北東側のG 4・5グリッドにあり、標高31.1~31.3mの極わずかに東側に傾斜する上段テラス部分に立地する。東側にはピット群02がある。

遺存状態は非常に悪く、検出された壁溝によって竪穴住居と判断した。平面は、南側は流失し、北側も調査区外へ延びているが残存する壁より方形と考えられる。規模は、東西4.75m、南北1.7m以上を測る。床面積は7.3㎡以上である。壁高は、最も遺存状態のよい北東側で最大0.1mを測る。

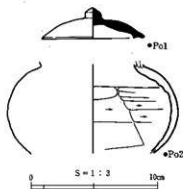
床面上で4個のピットを検出したが、支柱穴であるかどうか不明である。それぞれの規模は、P 1 (40以上×44-22) cm、P 2 (45×43-35) cm、P 3 (44×31-33) cm、P 4 (65×52-15) cmである。

壁溝は、北東側のみ検出された。幅12cm、深さ5cmを測る。

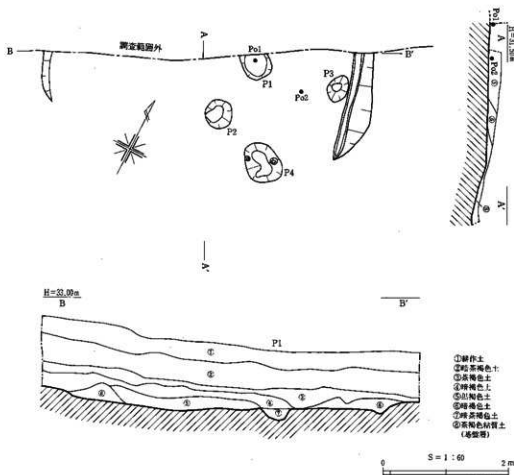
埋土は、③-⑥層の4層に分層できた。前述のS B 03は④層を切り込んでいる。

図化できた遺物には、須恵器坏蓋Po1、土師器丸底壺Po2がある。須恵器はP 1埋土上、土師器は床面上で検出された。

Po 1はTK48併行期と考えられることから、S 1 01は白鳳期ごろのものと考えられる。(牧本)



押図156 寺戸第1遺跡S 1 01
出土遺物実測図



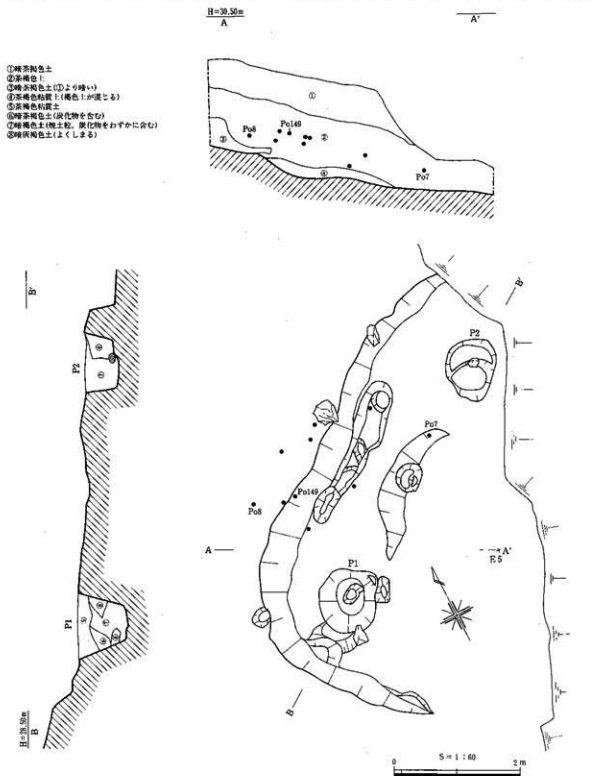
押図157 寺戸第1遺跡S 1 01遺構図

S 102 (挿図158・159、図版44)

調査区北東側のE 5、F 5・6グリッドにあり、標高27.5-28.2mの東側に傾斜する斜面に立地する。東側はSS06に接している。

東側はすでに流失しており、遺存状態は悪い。平面は、残存する壁より隅丸方形と考えられる。規模は、東西4.4m以上、南北6m以上を測る。床面積は18.8㎡以上である。壁高は、最も遺存状態のよい北西側で最大0.42mを測る。

支柱穴は床面上で検出したP 1、P 2で、それぞれの規模はP 1 (108×100-78) cm、P 2 (98×77-60) cm



挿図158 寺戸第1遺跡S 102遺構図

を測る。主柱穴内から土器片が出上しているが、図化できなかった。

壁溝は、北西側のみ部分的に検出された。幅26~51cm、深さ2cmを測る。壁溝内には、径20cm前後の小ピットが掘り込まれている。

埋土は、3層に分層できた。

図化できた遺物には、土師器甕Po3・6、把手Po5、須恵器台付壺底部Po4、弥生土器長頸壺Po8、壺Po7、土玉Po9がある。このうち、Po6・Po9は床面から、その他は埋土中および西側周辺からの出土である。

床面遺物は遺構基盤層中の遺物と考えられ、埋土中の遺物から考えると、S102は奈良時代後半ごろのもつと考えられる。S102は、SS06・SB04の埋土を切り込んで作っていることから、SS06・SB04→S102の順で作られたものである。

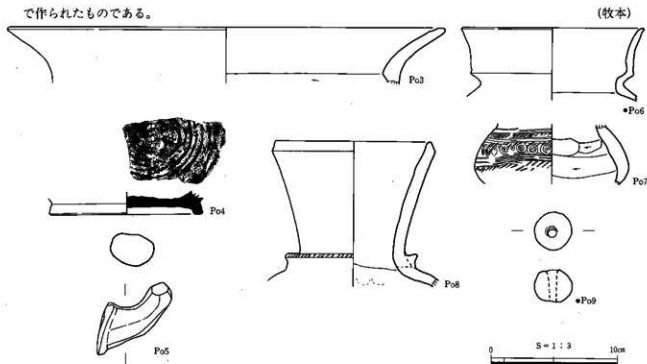


図159 寺戸第1遺跡S102出土遺物実測図

第3節 段状遺構・掘立柱建物跡

SS01・SK01・集石02 (押込160~162、図版45・50)

調査区のほぼ中央のD4・D5・E4グリッドにあり、標高30.7~31.7mの東側に傾斜する斜面に立地する。東側の斜面の下側1mにSS03がある。

SS01は、北側および西側の遺存状態が悪いために形態・規模とも不明な点が多いが、長さ9.7m以上、幅4.9m以上にわたり西側の斜面をカットしているが、平坦面とはならず、緩やかな斜面をもって東斜面側に続き、その後急斜面となる。掘り込みの深さは最大0.64mを測る。

SS01の中央付近からSK01が、北側にP1~3が確認できたが、それ以外ははっきりとせず、擾乱と考えられる。また、南側で集石遺構02が確認されている。

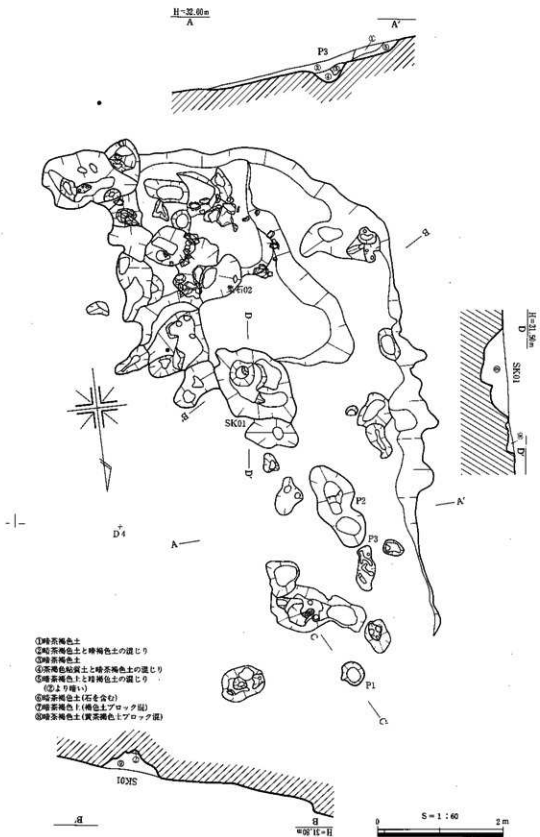
SS01を掘り下げたところ、SK01を確認した。遺存状態はよい。平面形は上縁部、下縁部ともに不整形を呈す。規模は、上縁部長軸1.63m×短軸1.09m、下縁部長軸1.03m×短軸0.67mを測る。南側がピット状に掘り込まれ、上縁部からの深さは44.5cmで、断面は不整形を呈する。

P1は、SS01西端に位置し、規模は、(37×34~28)cmで、ピット中から須恵器環および製塩土器が出土した。須恵器環Po10は内側を上に向け、製塩土器はその下から、Po11は内面を南東方向に向け、その北側にPo14が内面

を上に向けた状態で出土した。さらにその下からPo12が内面を上に向け、その北からPo13が出土した。Po11・12はほぼ完存であった。

P 2・3は、SS01北西に位置している。規模はP 2 (85以上×65-35) cm, P 3 (51以上×50-39) cmを測る。

SS01内南側から集石遺構02を検出した。石はいずれも塚上上層から出土している。大きさは大小あり、並び



挿図160 寺戸第1遺跡SS01、SK01、集石02遺構図

は不規則である。付近は擾乱が著しい。また、焼土面や炭化物もなく、石も二次焼成を受けた痕跡などはみられなかった。

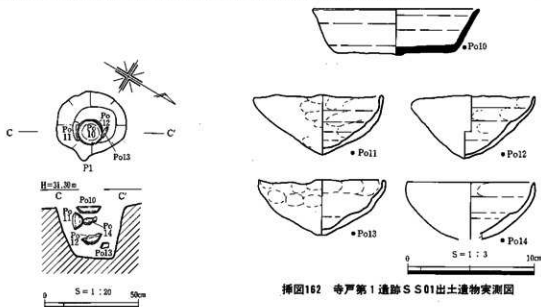
埋土は、3層に分層できた。いずれも斜面の下側に向かい堆積している。

遺物は、SS01内東側から須恵器片が、西側から土師器片が出土したが、図化できなかった。P1内出土のPo10は須恵器の無高台環である。製塩土器Po11~14はいずれも逆門錐形で、内面に段をもつ。外面に二次焼成痕がみられた。内面には布目痕は確認できなかった。

この製塩土器は、器形から煎然用ではなく、焼き塩用のものと考えられる。島根県鹿蔵山遺跡⁸²に類例がみられる。製塩土器が完存の状態出土することは稀で、出土の状態からこの遺構は祭祀のためのものであると考えられる。

P1出土の須恵器環がTK53併行期、奈良時代中葉ごろのものと考えられ、遺構についても同時期のものと考えられる。

建物とみられる遺構は確認できず、SS01の性格は不明である。P1については、出土状況から祭祀的なものと考えられる。集石遺構02については、製塩にともなうものかどうかは不明である。 (八幡)



挿図162 寺戸第1遺跡SS01出土遺物実測図

挿図161 寺戸第1遺跡SS01
P1内遺物出土状況図

SB02・SS02・集石01 (挿図163~166、図版46・50)

調査区中央北西側のE3・4、F3・4グリッドにあり、標高31.8~33.5mの南東側に傾斜する斜面に立地する。東側にはSS04が接している。

斜面を二段にカットし、長さ8.7m以上、幅5.5m以上の長方形の平坦面を作っている。掘り込みの深さは最大1.39mを測る。南東側は流失し、西側は調査区外へ延びている。

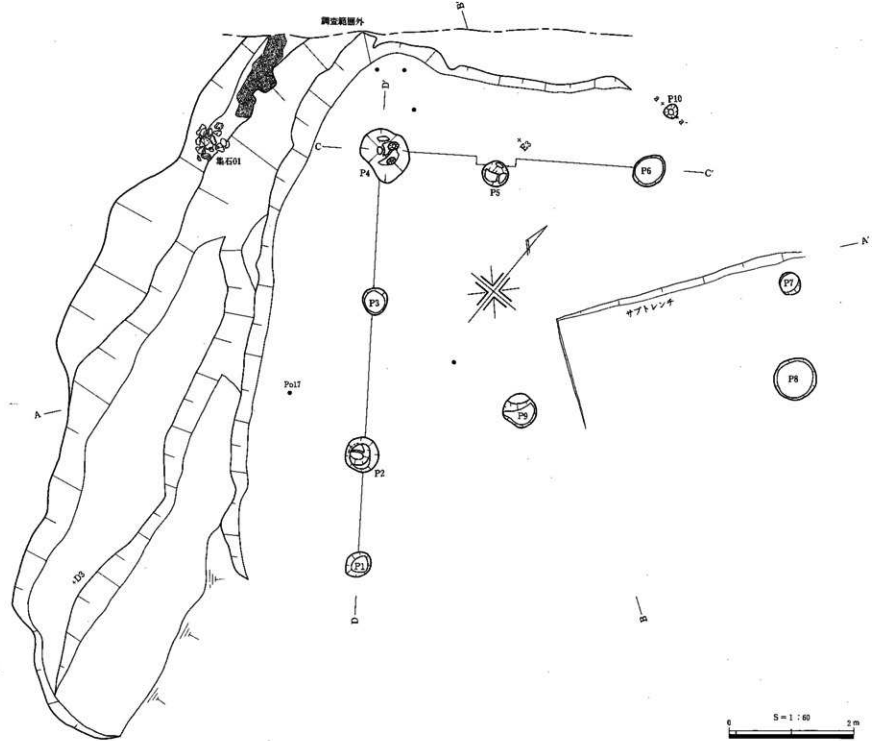
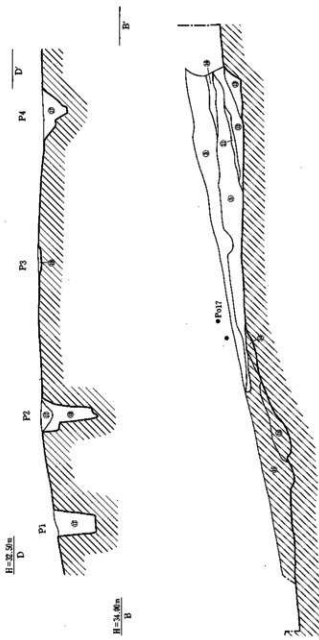
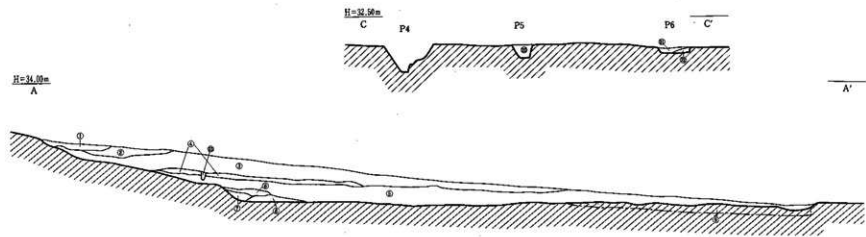
北西側の上段のテラスには、非常によく焼けた焼土面が長さ1.5m、幅約0.4mにわたって存在している。

平坦面上には、SB02以外に4個のビットが検出された。それぞれの規模はP7(34×34-27)cm、P8(67×66-30)cm、P9(51×48-12)cm、P10(21×20-11)cmを測る。P10から土師器甕Po15がほぼ完形で出土している。

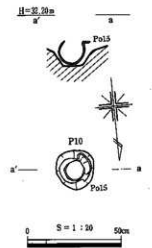
平坦面上には、SB02が作られている。築行き2間以上(4.3m以上)×桁行き3間以上(6.6m以上)を測る。主軸方向はN-36°-Wと、北西方向をむく。

柱穴はP1~P6を確認することができた。それぞれの規模はP1(44×37-70)cm、P2(54×52-89)cm、P3(52×40-4)cm、P4(82×68-43)cm、P5(40×39-17)cm、P6(54×44-14)cmを測る。

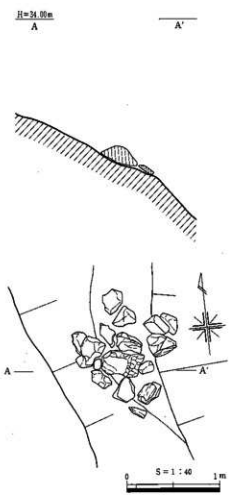
- ①黄褐色土
- ②赤褐色土(①より厚く)
- ③赤褐色土(小石をわずかに含む)
- ④暗灰茶褐色土
- ⑤赤褐色土(灰化物を含む)
- ⑥赤褐色土(灰化物を含む)
- ⑦赤褐色土(灰化物を含む)
- ⑧赤褐色土(赤褐色土混じり)
- ⑨黄褐色土
- ⑩黄褐色土
- ⑪赤褐色土
- ⑫赤褐色土(角土をわずかに含む)
- ⑬暗褐色灰土
- ⑭赤褐色土(小石をわずかに含む)] 遺物層
- ⑮赤褐色土
- ⑯赤褐色土
- ⑰赤褐色土
- ⑱赤褐色土(灰化物、地土砂を多量に含む)
- ⑲赤褐色土
- ⑳木の根の痕跡



挿図163 寺戸第1遺跡S S02・S B02・集石1遺構図



挿図164 寺戸第1遺跡S S02 P10内遺物出土状況図



挿図165 寺戸第1遺跡集石1遺構図

柱穴間距離は、P1～P2間から順に、1.8m、2.5m、2.4m、1.9m、2.4mである。

焼上面の南側には、塊石・板石からなる集石遺構01が検出された。石材には、焼けた痕跡は認められない。

SS02の埋土は、13層に分層できた。このうち、B-B'土層断面を観察すると、⑤層下面で平坦面になっており、この部分で整地されたものと考えられる。また、壁際には中央部に向かって傾斜する堆積状況となっており、自然堆積したものと考えられる。

SB02の柱穴埋土は、おおむね1層であるが、深く掘られたP1・2は2層に分層できた。柱痕は確認されなかった。

SS02からは、P10内から土師器甕Po15が出土している。また、埋土中から須恵器短頸壺Po16、形象埴輪片と思われるPo17が出土している。その他に土師器片・須恵器片が出土しているが、図化できなかった。

SB02柱穴内からは、土器片が出土しているが、図化することはできなかった。

出土している土器から、SB02・SS02とも平安時代ごろのものと考えられる。

SS02は、SB02に伴うもので、集石遺構01の性格は不明である。(牧本)

SS03 (挿図167・168、図版46・50)

調査区はほぼ中央のD4・D5・E4・E5グリッドにあり、標高29.4～30.7mの東向きの斜面に立地する。南西側1mにSS01、北西側2mにSS04がある。

SS03は、東側の斜面下側の遺存状態が悪いために形態・規模とも不明な点が多いが、長さ6.3m、最大幅2.4mにわたり西側の斜面をカットしているが、平坦面とはならず、緩やかな斜面をもって東斜面側に続き、その後急斜面となる。掘り込みの深さは最大0.21mを測る。SS03付近からは、ビット状の掘り込みは確認されたものの、はっきりとしないために擾乱と考えられ、遺構に伴うビットは確認されていない。

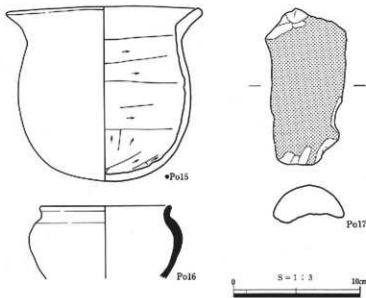
ただし、中央部付近で焼上面が検出されており、遺構に伴うものとみられる。

埋土は3層に分層できた。いずれも斜面の下側に向かい堆積している。遺構の埋土は①で、②層は焼土層である。

SS03検出中に、土師器甕Po18、須恵器高台坏Po19、須恵器环蓋Po20が出土した。

Po20はTK217、Po19はMT21併行期と考えられ、古墳時代終末期から奈良時代ごろと考えられる。

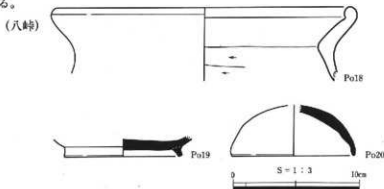
焼土面が確認されているが、性格は不明である。



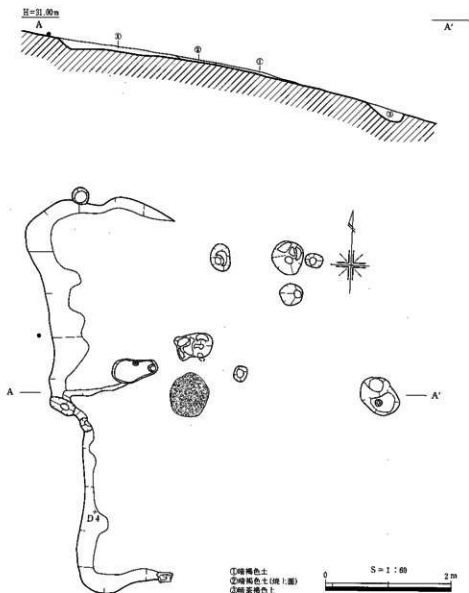
挿図166 寺戸第1遺跡SS02出土遺物実測図



写真⑤ 寺戸第1遺跡作業風景2



挿図167 寺戸第1遺跡SS03出土遺物実測図



挿図168 寺戸第1遺跡S S 03遺構図

S B 03 (挿図169)

調査区北東側のF 4、G 4グリッドにあり、標高30.4m付近の緩やかに東側へ傾斜する上段テラス部分に立地する。周囲にはピット群02がある。

北側は調査区外へ延びており、規模は不明であるが残存するピットから、梁行き2間(5.8m)×桁行き1間以上(2.9m以上)を測るものと考えられる。主軸方向は、N-20°-Wとやや東西に振れる。

支柱穴は4個確認できたが、P 3はF 4グリッド掘り下げ中のベルトで確認されたもので、正確な規模は不明である。それぞれの規模は、P 1(117×112-103)cm、P 2(60×36-50)cm、P 3(86×86-64)cm、P 4(102×64以上-44)cmを測る。ピットの検出面はそれぞれ異なるため、深さはまちまちであるが、底面のレベルはP 2

を除き他のものはほぼ同じである。

主柱穴間距離は、P1～P2間から順に3.0m、2.8m、2.9mである。

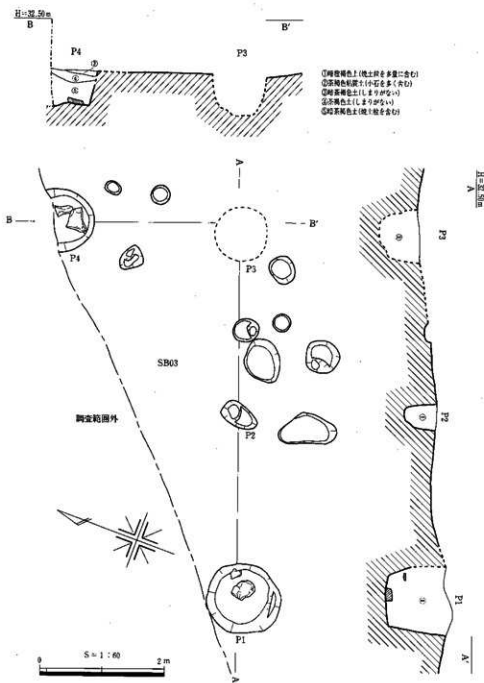
柱穴埋土は、おおむね単層であるが、P4は3層に分層できた。①・⑤層中には焼土粒が含まれている。柱痕は検出されていない。

ピット内から土器片が出土しているが、図化できなかった。

時期を比定できる遺物が出土していないため、正確な時期は不明である。周辺の遺構との関係を見ると、検出面が調査区西側土層断面の⑦層を掘り込んでいることから、SB02・SS02と同時期、SI01が埋没してから作られたものといえ、平安時代ごろのものと考えられる。

SB03は、大型の孤立柱建物と推定されることから、この遺跡内では中心的な施設である可能性がある。

(牧本)



挿図169 寺戸第1遺跡SB03遺構図

調査区の西端付近のE4・F4グリッドにあり、標高30.7~31.9mの東向きの斜面に立地する。西側でSB02と、北側でSB03と切り合い、南側2mにSS03がある。

SS04は、北側が調査区外になり、SB03と切り合っているため、形態・規模とも不明な点が多いが、斜面を段状にカットし、長さ8.3m以上、幅5.8m以上の平坦面を作っている。掘り込みの深さは最大82cmを測る。

カット面および平坦面で、SB01にともなわないとみられるピットを3個検出した。それぞれの規模は、P11 (56×47-23) cm、P12 (40×38-14) cm、P13 (42×39-15) cmである。

また、SB01の南東で焼土面が1か所検出されている。

SB01は梁行き・桁行きともに2間、2.0~2.3mを測る総柱の建物である。主軸方向は、N-6°-Wで、東西方向を向く。

柱穴は、P1~P10を確認した。それぞれの規模は、P1 (36×33-26) cm、P2 (58×37-41) cm、P3 (66×58-36) cm、P4 (82×55-42) cm、P5 (47×41-29) cm、P6 (30×26-57) cm、P7 (39×31-40) cm、P8 (76×44-36) cm、P9 (85×43-48) cmである。P4・P5がそれぞれ西側に傾くもの、平面形は正方形になるものとみられる。また、P5の南東側にP10 (52×48-43) cmがある。

柱穴間距離は、P1~P2間から順に1.2m、1.2m、1.2m、1.2m、0.7m、1.3m、1.0m、1.0m、1.0mである。また、P8~P11は1.3m、P2~P9は1.2m、P4~P9は0.9m、P6~P9は1.1mである。

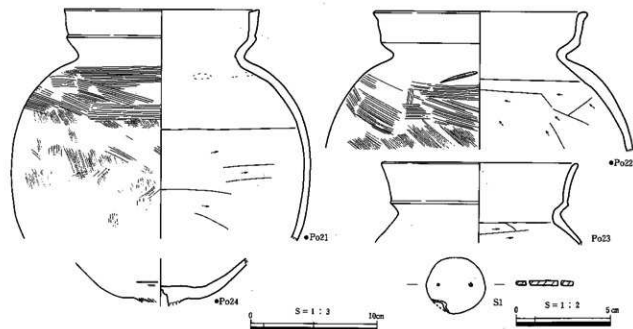
SS01の埋土は1層であったが、SB01の埋土は7層に分層できた。ピットの埋土からは、柱痕は確認できなかった。

SS04の埋土中からPo23と炭化物が、北側で有孔円盤S1および土師器甕Po21・22、高坏Po24が出土した。また、SB01周辺からは土師器片、鉄滓が、P9からは須恵器片が出土したが図化できなかった。

SS04は、出土遺物から南谷大山Ⅷ期、古墳時代中期後半ごろのものと考えられる。なお、埋土中出土炭化物物(KSU-2751)の¹⁴C年代測定では、B.P.1350±100であった。

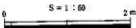
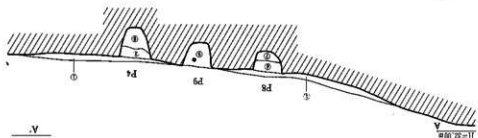
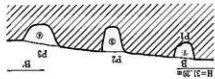
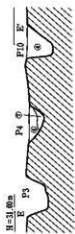
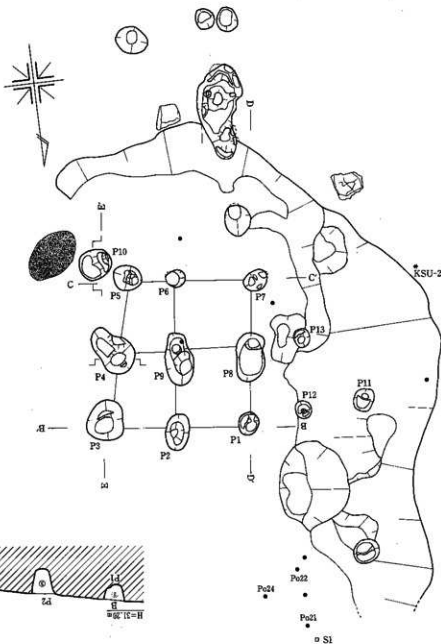
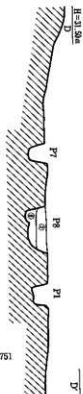
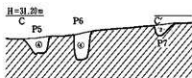
SS04は、SB01を建てるために作られたのと考えられる。

(八峠)



押図170 寺戸第1遺跡SS04出土遺物実測図

- ①暗茶褐色土(褐色土少量混)
- ②暗茶褐色土と赤褐色土の混じり
- ③暗茶褐色土(やや明るい)
- ④暗茶褐色土と褐色土の混じり
- ⑤暗茶褐色土
- ⑥暗茶褐色土(炭化物を含む)
- ⑦暗茶褐色土と赤褐色土の混じり
(炭化物を含む)
- ⑧赤褐色土(暗茶褐色土が少量混じる)



挿図171 寺戸第1遺跡SS04・SB01遺構図

調査区東側隅のE6・7、F7グリッドにあり、標高24.0-25.9mの南東側に傾斜する斜面に立地する。東側は調査区外へ延びている。西側約5mにはSS06・SB04がある。

大半が遺構外へ延びており、形態・規模とも不明な点が多いが、斜面を段状にカットし、長さ14.3m、幅2.2m以上の隅丸長方形の平坦面を作っている。掘り込みの深さは最大1.19mを測る。

平坦面上で、計11個のピットが検出された。いずれも不規則に並んでいる。しかし、大半が東側調査区外へあることから建物になる可能性もある。それぞれの規模は挿表8を参照されたい。

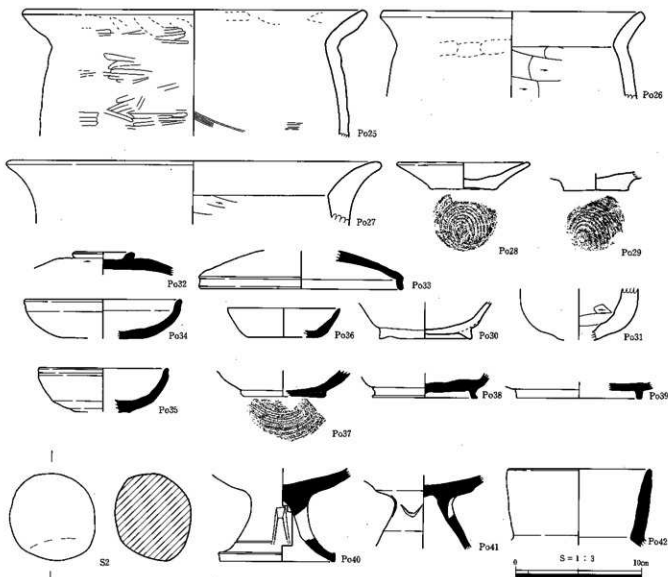
壁際には幅0.22-0.6m、深さ2-8cmを測る溝が検出された。溝内には径10-30cmのピットが掘り込まれている。

また、焼土面が2か所検出されており、ピットと合わせて何らかの建物に伴う可能性がある。

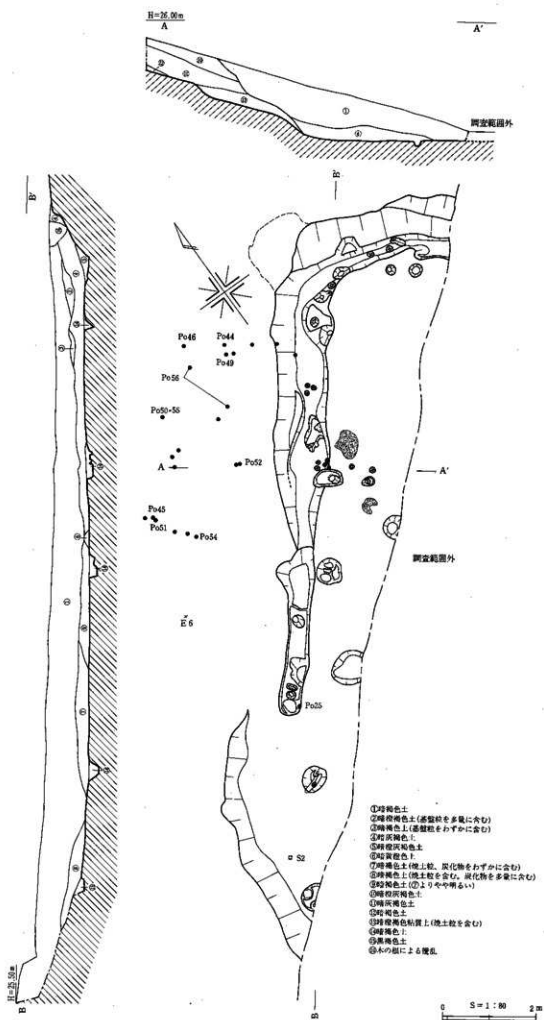
埋土は、5層に分層できた。このうち、A-A'土層断面を観察すると、⑩層以下を掘り込んでいることがわかる。

図化できた遺物には、埋土中から土師器甕Po25-Po27、皿Po28・29、高台杯Po30、手捏ね土器Po31、須恵器杯蓋Po32・33、杯Po34-37、高台杯Po38・39、高杯Po40・41、提瓶Po42、磨石S2がある。

また、北西側周辺から土師器甕Po43・44、高台杯Po45-47、杯Po48、高台付皿Po49、皿Po50、須恵器甕Po51・52、杯Po54、高台杯Po55、平瓶Po56、勝間田焼系甕Po53がある。



挿図172 寺戸第1遺跡SS05出土遺物実測図



挿図173 寺戸第1遺跡SS05遺構図

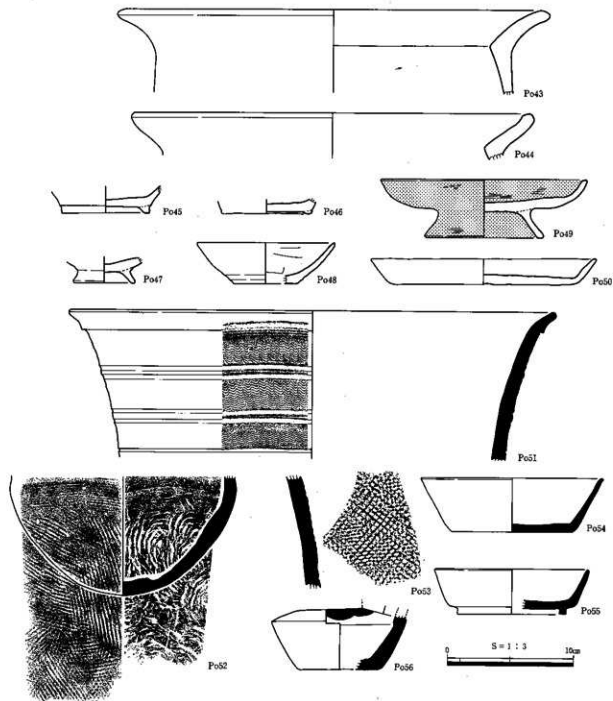
出土している土器は、奈良から平安時代ごろのものと考えられるが、埋土中出土のため、SS05の確実な時期は不明である。

他の掘立柱建物跡は、段状遺構を伴っていることから、SS05についても、建物にかかわるものと思われる。

(牧本)

ピット 番号	規 長軸×短軸-深さ	横 (cm)	備考	ピット 番号	規 長軸×短軸-深さ	横 (cm)	備考	ピット 番号	規 長軸×短軸-深さ	横 (cm)	備考
P 1	37×27以上-41			P 5	18×13-47			P 9	44×36-28		
P 2	44×26-36			P 6	11×11-9			P 10	46以上×53-19		
P 3	15×14-41			P 7	10×8-4			P 11	42×40-14		
P 4	22×20-53			P 8	42×24以上-12						

挿表8 寺戸第1遺跡SS05ピット一覧表



挿図174 寺戸第1遺跡SS05周辺出土遺物実測図

調査区北東側のF6グリッドにあり、標高26.4~28.7mの南東側に傾斜する斜面に立地する。南東側約5mにはSS06・SB04がある。

南側は流失しているものの遺存状態は比較的良好で、斜面を段状にカットし、長さ8.2m、幅6.1m以上の長方形の平坦面を作っている。掘り込みの深さは最大1.7mを測る。

平坦面上には、SB04が作られている。SB04は2回の建て替えがあったものと考えられ、一回り大きくなるものをSB04-1、内側にあるものをSB04-2として述べることにする。

SB04-1は、梁行き2間(3.1m)×桁行き4間(6.5m)を測る。主軸方向はN-86°-Eとほぼ東西方向を向く。

主柱穴はP1-1~P11で、それぞれの規模はP1-1(58×55-51)cm、P2(83×72-68)cm、P3-1(54×46-60)cm、P4(72×70-42)cm、P5-1(66×46-57)cm、P6(56×48-48)cm、P7(58×43-15)cm、P8(55×47-29)cm、P9(54×33-20)cm、P10-1(64×44-29)cm、P11(42×35-31)cmを測る。

柱穴間距離はP1~P2間から順に1.4m、1.7m、1.8m、1.6m、1.3m、1.8m、1.3m、1.4m、1.7m、1.6mである。本来P4と対になる部分のピットは検出することができなかった。

SB04-2は、梁行き2間(2.6m)×桁行き4間(6.2m)を測る。主軸方向は、N-95°-Wとほぼ東西を向く。規模はSB04-1より一回り小さいが、主軸方向は同じである。

柱穴はP1-2~P13で、SB04-1と重複するP2・4・6・7・8・9を除くと、それぞれの規模はP1-2(47以上×40-49)cm、P3-2(44以上×58-49)cm、P5-2(48×27以上-35)cm、P10-2(54×46-26)cm、P12(70×52-46)cm、P13(50×37-25)cmを測る。

柱穴間距離は、P1-2~P2間から順に1.2m、1.4m、1.6m、1.3m、1.6m、1.8m、1.3m、1.4m、1.6m、1.6m、1.3m、2.1mである。

SS06の平坦面には厚さ6~19cmの貼床が検出されている。

このうちP1-1部分では貼床が切れ、貼床除去後にP1-2を検出することができたことから、SB04-2→SB04-1の順で作られたものといえる。

貼床面上で焼土面が大小計2か所、貼床下からも焼土面が1か所検出されている。

SK02は、SS06の北西側コーナーに掘り込まれている。平面は上縁部不整形四角形、底部は二段に掘り込まれ不整形である。規模は、上縁部長軸2.05m×短軸1.8m、深さ最大1.56mを測る。

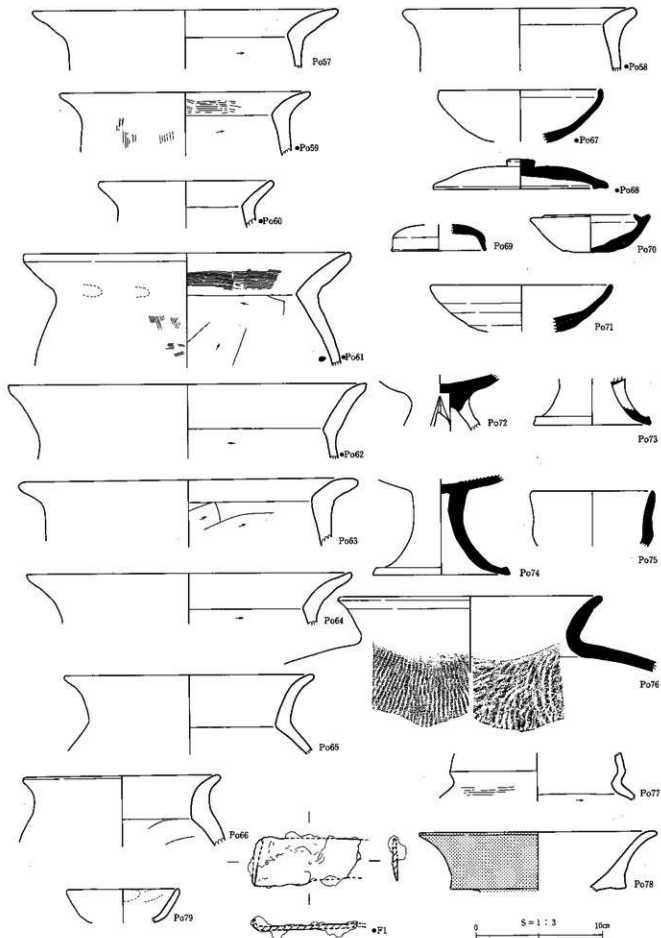
SS06の埋土は、5層に分層できた。また、SK02の埋土は、固く締まった6層に分層できた。

SB04-1では、P4内から土師器甕Po60、P5-1内から土師器甕Po59、須恵器坏Po67、P6内から土師器甕Po58が出土している。また、P2内から鉄線F1も出土している。

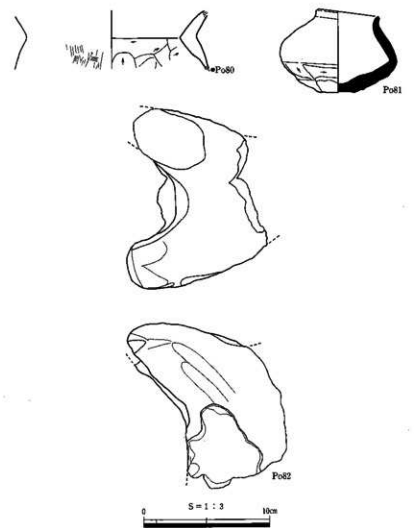
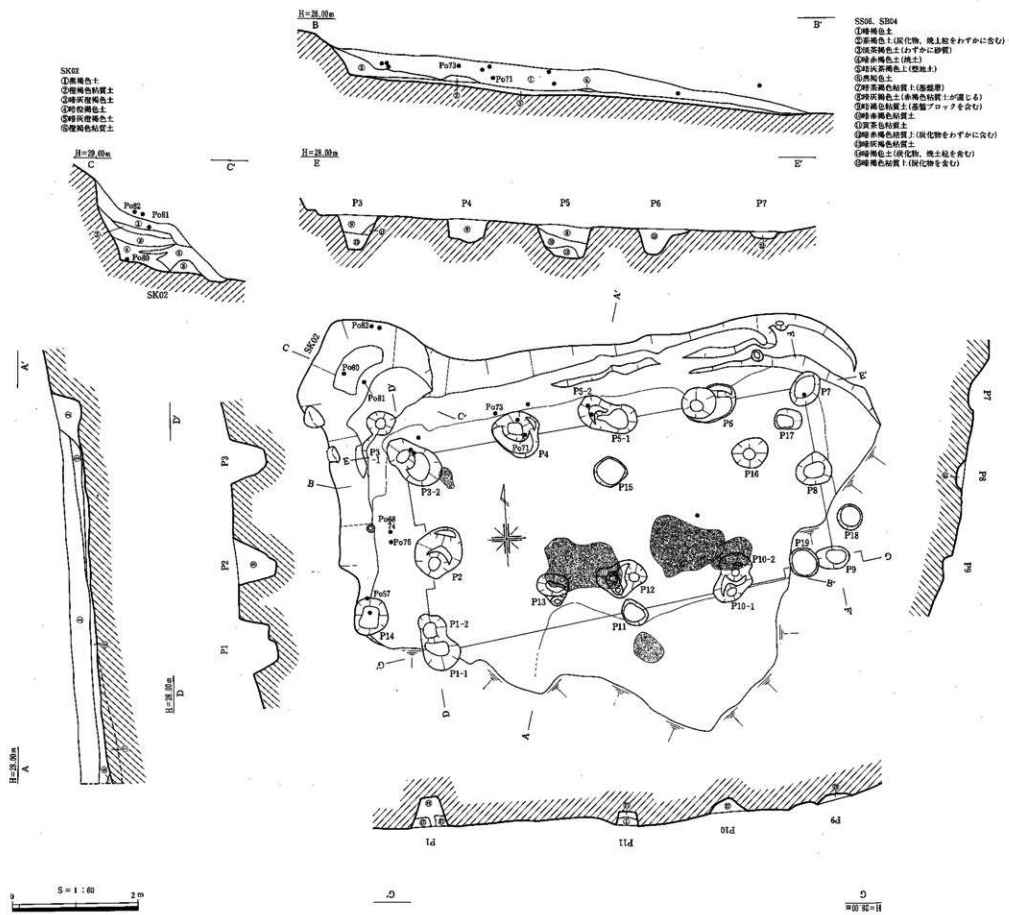
SS06では図化できたものは土師器甕Po57・61~66・77、須恵器甕Po76、蓋Po68・69、坏身Po70、高坏Po71~74、鉢Po75、弥生土器鼓形器台Po78、製塩土器Po79がある。このうち、Po62・68は床面上、Po61はP14内から出土した。その他は埋土中からの出土である。

SK02では、埋土中から須恵器短頸壺Po81、土師器土製支脚Po82、底面から土師器甕Po80が出土している。床面出土の土器から、SB04-1・-2、SS06・SK02とも奈良時代後半ごろのものと考えられ、SK02出土炭化物の¹⁴C年代測定ではB.P.1390±200という結果が得られた。

SB04-1・-2ともに焼土面を伴っていることから、住居として使用されたものと思われる。ピットの切り合い関係から、SB04-2が先行して作られ、一回り拡大してSB04-1となっている。(牧本)



押図175 寺戸第1遺跡SS06・SB04出土遺物実測図



挿図177 寺戸第1遺跡SK02出土遺物実測図

挿図176 寺戸第1遺跡SS06・SB04・SK02遺構図

第4節 土 坑

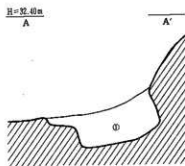
SK03 (挿図178、図版48)

調査区中央南側のC4グリッドにあり、北東向きの斜面からテラス状になる境付近、標高約31.3~31.6mに立地する。付近の斜面部にはSK04~SK06がある。

遺存状態は悪い。平面は、上縁部・底部とも不整な楕円形を呈す。斜面側は、底部が上縁部より外側に掘り込まれる。規模は、上縁部長軸1.4m×短軸1.14m、底部長軸1.14m×短軸1.13mを測る。深さは81cmを測り、断面は不整形を呈する。

埋土は単層であった。

遺物が出土しなかったため、時期・性格ともに不明である。(八峠)



①赤褐色土

挿図178 寺戸第1遺跡SK03遺構図

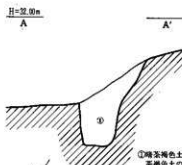
SK04 (挿図179、図版48)

調査区中央南側のC4グリッドにあり、北東向きの斜面からテラス状になる境付近、標高約31.1~31.4m付近に立地する。付近の斜面部にはSK03・05・06がある。

遺存状態は悪い。平面は、上縁部・底部とも不整形である。斜面側は、一部ビット状に上縁部より外側に掘り込まれる。規模は、上縁部長軸1.21m×短軸0.76m、底部長軸0.37m×短軸0.23mを測る。深さは約0.86mを測り、断面は不整形を呈する。

埋土は単層であった。

遺物が出土しなかったため、時期・性格ともに不明である。(八峠)



②暗茶褐色土と
茶褐色土の混じり

挿図179 寺戸第1遺跡SK04遺構図

SK05 (挿図180・181、図版48・53)

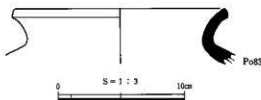
調査区中央南側のC4グリッドにあり、北東向きの斜面からテラス状になる境付近、標高約31.0~31.3m付近に立地する。付近の斜面部にはSK03・04・06がある。

遺存状態は悪い。平面は、上縁部・底部とも不整な楕円形である。規模は、上縁部長軸0.70m×短軸0.59m、底部長軸0.69m×短軸0.30mを測る。深さは約58cmを測り、断面は不整形を呈する。

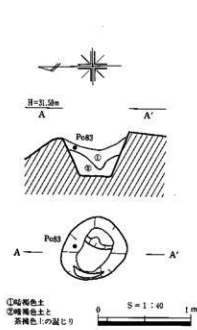
埋土は、2層に分層できた。

図化できた遺物は、須恵器甕Po83で、SS05出土の体部片と接合している。位置的にはSK05の①層から出土した。

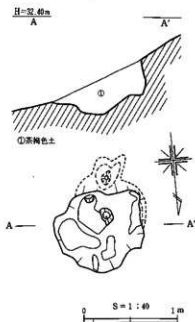
出土遺物から、SK05の時期は古墳時代終末期ごろと考えられるが、性格は不明である。(八峠)



挿図180 寺戸第1遺跡SK05出土遺物実測図



挿図181 寺戸第1遺跡SK05遺構図



挿図182 寺戸第1遺跡SK06遺構図

SK06 (挿図182、図版48)

調査区中央南側のC4グリッドにあり、北東向きの斜面からテラス状になる境付近、標高約31.5~32.2m付近に立地する。付近の斜面部にはSK03~05がある。

遺存状態は悪い。平面は上縁部・底部とも不整形である。斜面側は、底部が上縁部より外側に掘り込まれる。規模は、上縁部長軸0.93m×短軸0.88m、底部長軸0.35m×短軸0.19mを測る。深さは、約65cmを測り、断面は不整形を呈する。

埋土は単層であった。

遺物が出土しなかったため、時期・性格ともに不明である。

(八峰)

第5節 ビット群

ビット群01 (挿図183)

調査区南端のD4グリッドにあり、標高31.7~32.5mの東側に傾斜する斜面に立地する。

P1・2・4~8・10は不整な楕円形、P3・9は不整な円形を呈す。いずれもSS01の上層で確認された。P1・3~6、P7・8・11はそれぞれ直線状になるが、横方向がそろわず、不規則である。その他のビットをみても、建物跡にはならないものと考えられる。それぞれの規模は、挿表9を参照されたい。

埋土はいずれも1層で、P1・8・10は暗褐色土、それ以外は褐色土であった。

ビット内から遺物は出土しなかった。

遺物は出土せず、時期は不明であるが、SS01が奈良時代後半ごろの遺構と考えられ、それよりも新しいとみられる。上段テラスからは、平安時代から近世の遺物が出土している。

性格は不明である。

(八峰)

ビット 番号	規 横 (cm) 長軸×短軸-深さ	備考	ビット 番号	規 横 (cm) 長軸×短軸-深さ	備考	ビット 番号	規 横 (cm) 長軸×短軸-深さ	備考
P 1	54×49-34		P 5	28×19-16		P 9	30×28-14	
P 2	23×18-6		P 6	53×41-19		P10	39×25-13	
P 3	41×37-17		P 7	54×39-19		P11	14×11-6	
P 4	54×45-28		P 8	42×38-16				

挿表9 寺戸第1遺跡ビット群01一覧表

ビット群02 (挿図184・185、図版48・53)

調査区北東側のF4・5、G5グリッドにあり、標高30.4~31.9mの緩やかに東側へ傾斜する上段テラス部分に立地する。周囲にはSB03・SD02があるが、P16・17・24はSD02によって切られている。

計33個のビットが検出された。いずれのビットも不規則に並んでおり、建物になるものとは考えられない。それぞれの規模は、挿表10を参照されたい。

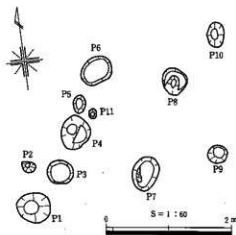
埋土は、おおむね暗褐色土単層である。

P8内から、須恵器環Po84が出土している。その他にP2・4・5・16・23・25から土師器片・須恵器片が出土しているが図化することはできなかった。

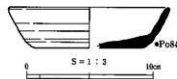
Po84は奈良時代ごろのものと考えられるが、同一検出面で平安時代ごろのものと考えられるSB03が検出されていることから、遺物が示す時期より下るものと思われる。

性格は不明である。

(牧本)



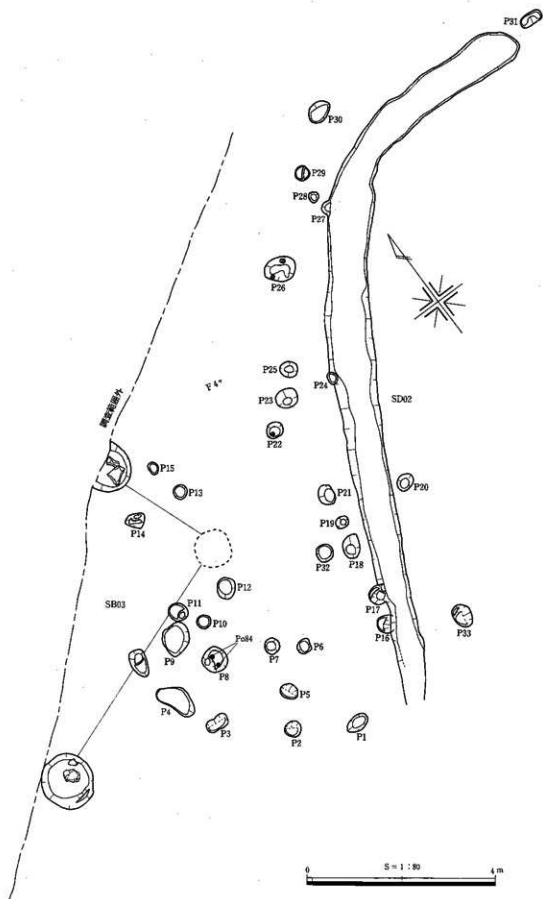
挿図183 寺戸第1遺跡ビット群01遺構図



挿図184 寺戸第1遺跡ビット群02出土遺物実測図

ビット 番号	規 横 (cm) 長軸×短軸-深さ	備考	ビット 番号	規 横 (cm) 長軸×短軸-深さ	備考	ビット 番号	規 横 (cm) 長軸×短軸-深さ	備考
P 1	51×32-14		P12	44×39-25		P23	50×42-22	
P 2	35×34-23		P13	30×29-13		P24	28×23-13	
P 3	50×31-26		P14	41×34-17		P25	40×35-14	
P 4	91×50-28		P15	26×20-19		P26	67×55-16	
P 5	40×33-17		P16	38×30以上-16		P27	33×20以上-17	
P 6	34×31-14		P17	40×38以上-17		P28	23×21-8	
P 7	35×34-15		P18	32×33-20		P29	33×31-12	
P 8	54×51-35		P19	29×24-16		P30	55×40-9	
P 9	74×57-42		P20	40×33-23		P31	52×25-14	
P10	29×28-12		P21	47×37-18		P32	39×37-17	
P11	40×39-18		P22	38×33-9		P33	52×42-18	

挿表10 寺戸第1遺跡ビット群02一覧表



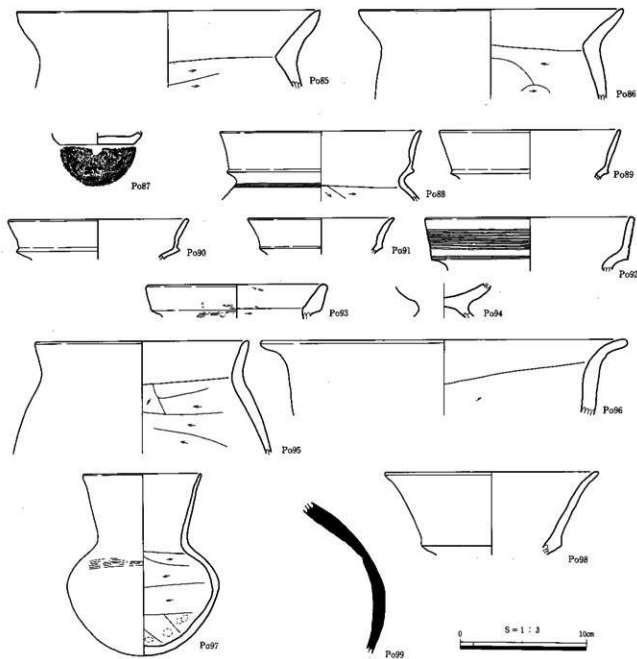
挿図185 寺戸第1遺跡ピット群02遺構図

第6節 溝状遺構

SD01 (挿図186・187、図版48・53)

調査区西部のD3・E3グリッドにあり、標高34.0～35.7mの北東側へ傾斜する急斜面に立地する。北東7.7mにSS02、東9.3mにSS01がある。

ほぼ北西方向に直線状に走る。北東側は擾乱を受けて削られ、北側は調査区外に続いているため正確な規模はつかめないが、長さ9.5m以上、幅1.18～1.78m、深さは最大74cmを測り、断面は不整形を呈する。底面にはピットが複数掘り込まれている。

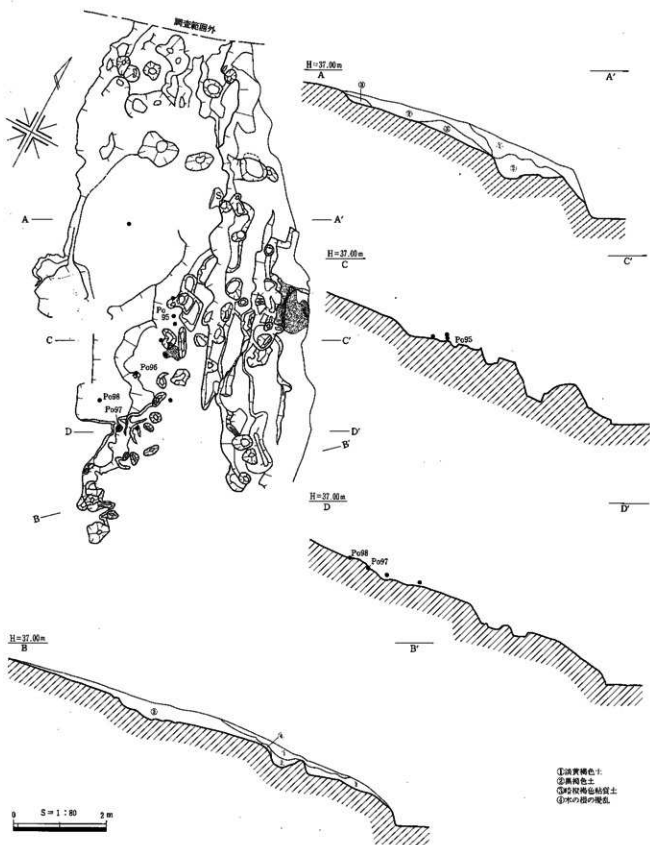


挿図186 寺戸第1遺跡SD01出土遺物実測図

また、SD01の上部と下部の底面に、それぞれ1か所ずつ焼土面が検出された。

SD01中の埋土は2層に分層できた。

出土遺物には、図化できたものは、土師器甕Po85・86・88-91・95・96、土師器皿Po87、弥生土器甕Po92・93、



挿図187 寺戸第1遺跡SD01遺構図

土師器低脚杯Po94、土師器直口壺Po97、土師器鼓形器台Po98、須恵器横瓶Po99である。

これらのうち、Po95～99はSD01の周辺部からの出土で、他は埋土中からの出土である。

出土遺物から、奈良時代ごろのものと考えられるが、性格は不明である。（長尾）

SD02 (挿図188、図版48)

調査区北部のF5・G5グリッドにあり、標高30.4～31.1mの東側へ傾斜する緩斜面に立地する。西側0.4mにSD03がある。南側でP16、P17を、北側でP27を切っている。

F5グリッドからG5グリッドに向かってほぼ北東方向に直線状に走った後、G5グリッドに入ると東に屈曲する。長さ14.8m、幅54～100cm、深さ2.3～24.5cmを測り、断面は皿状を呈する。

埋土は2層に分層できた。

埋土中から弥生土器片・土師器片・須恵器片が出土しているが、図化できなかった。

層位的にみて、平安時代ごろのものと考えられるが、性格は不明である。（長尾）

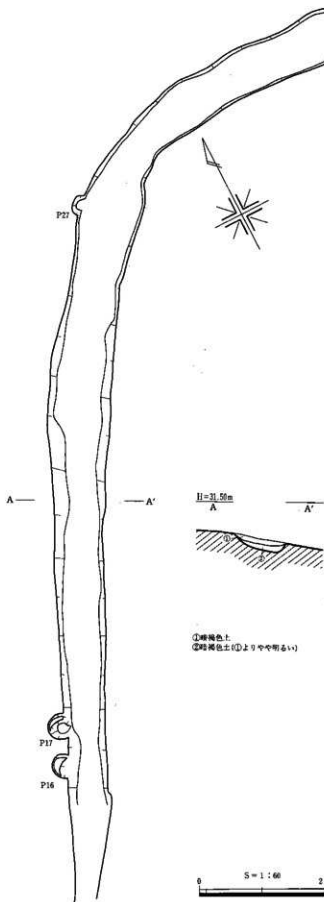
SD03 (挿図189、図版48)

調査区北部のF4グリッドにあり、標高30.9～31.2mの東側へ傾斜する緩斜面に立地する。東側0.4mにSD02がある。南側でP1に切られている。

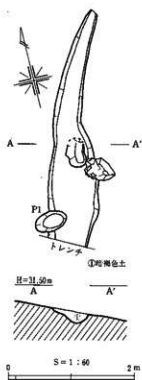
ほぼ北東方向に直線状に走る。長さ3.8m、幅14～80cm、深さ1.9～13.8cmを測り、断面は皿状を呈する。

埋土は暗褐色土が単層ではいる。

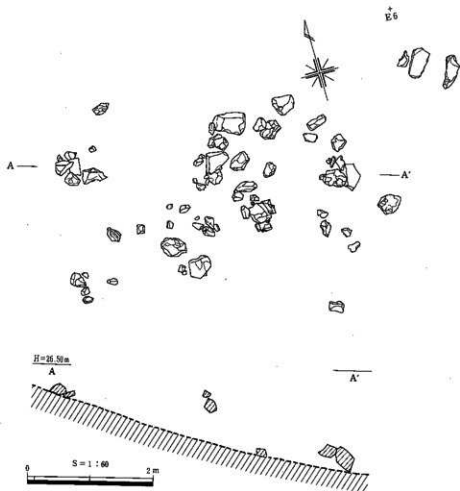
遺物は出土していないが、埋土や形態からSD02とはほぼ同時期のものと考えられ、性格は不明である。（長尾）



挿図188 寺戸第1遺跡SD02遺構図



挿図188 寺戸第1遺跡
S D03遺構図



挿図190 寺戸第1遺跡集石03遺構図

第7節 集石遺構

集石03 (挿図190、図版49)

調査区南西側のE 6・E 7グリッドにあり、標高24.3~26.1mの東側に傾斜する斜面から出土した。西側で石列に接する。斜面の下側にS S05が接する。

斜面部に10~50cm程度の安山岩の石群が、大きさ・配置ともに規則性はなく検出された。石には加工痕はみられず、いずれも自然石である。

集石にかぶる土層は、暗灰褐色土である。

掘り下げ中に、須恵器坏身Po296・302・304、甕Po316、横瓶Po322が出土した。下段テラスに実測図を載せている。また、石にはさまれるように、土師器および須恵器の小片が確認されたが、図化できなかった。

時期・性格ともに不明である。

(八時)

第8節 石列

石列01 (挿図191、図版49)

調査区中央やや北のE 5、F 6グリッドにあり、標高27.7~28.0mの崖面際に立地する。

部分的に途切れるものの、人頭大から一抱えもある
安山岩の塊石が、一部重なって列状をなしていた。

石列にかぶる土層は、暗灰褐色土である。

検出作業中に土器片が出土しているが、図化できな
かった。

出土している土器は奈良から平安時代ごろのもの
であるが、この遺構に伴うものとは考えられない。土層
断面から判断すると、この遺跡内では最も新しい時期
のものひとつであるが、正確な時期は不明である。

崖面際に積まれていたことから、崖面崩落防止のも
のと考えられる。(牧本)

第9節 土器溜まり

土器溜まり01 (神図192・193、図版49・53)

調査区の北側のF4グリッドにあり、標高31.5~31.
6mのほぼ平坦地に位置する。西側にS B03が、東側に
S S05が接する。

平坦地に土師器・須恵器が、環蓋を除き、破片になっ
た状態で出土した。範囲は2か所に分かれ、それぞれ
楕円形状を呈する。出土した標高は、31.6~31.8mで、
北側の土器溜まり中央部付近が高くなっている。

土器溜まりにかぶる土層は茶褐色土である。

図化できたものは、土師器甕Po100、須恵器環蓋
Po103、須恵器台付壺Po105、須恵器甕Po101・102・104
である。遺物は、2か所にまとめて出土した。Po103
は内側を上に向け、Po100・101・104は細片が混在した
状態で出土した。その南東側からPo102が細片で出土
した。このうち、Po105は石列、S I 01出土のものと同
結合した。

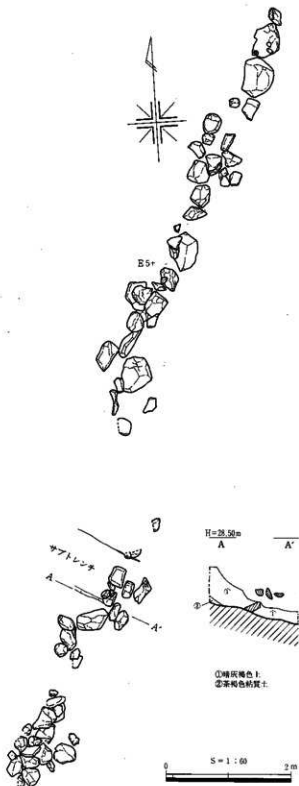
これらの遺物は、それぞれの出土地点に標高差があ
り、遺物の時期差も大きいため、一括の廃棄とは考え
にくく、何らかの遺構の切り合い関係があったことが
想定される。

出土遺物は、古墳時代後期から奈良時代ごろのもの
と考えられる。

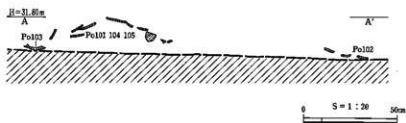
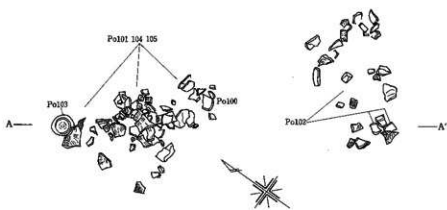
土器溜まり01の性格は不明である。(八時)

土器溜まり02 (神図194~199、図版49・53~56)

調査区の中央やや北東のF5グリッドにあり、標高28.8~29.4mの北と西から傾斜する谷部の底付近に位置す



神図191 寺戸第1遺跡石列01遺構図



押図182 寺戸第1遺跡土器溜まり01遺物出土状況図

る。東側でS102に接する。

斜面に土師器・須恵器・土製支脚・甕などが、破片状態で出土した。範囲は、不整な楕円形状を呈する。

土器溜まりにかぶる土層は、暗茶褐色土である。

図化できた遺物は、土師器が、甕Po106～133・135・140・142、底部Po139、高台環Po134、製塩土器Po136～138、高台環Po144～146、土製支脚Po147～152、甕Po153～155である。弥生土器は甕Po141である。須恵器は、皿Po156、環Po157～159、短頸壺Po160、小型壺Po161、壺Po162・163、長頸壺Po164・165、横瓶Po171、高台環Po167・169・170、甕Po166・168である。いずれも遺存状況は悪く、大部分は破片の状況で出土しており、接合したものも少なかった。

出土遺物のうち、多くの割合をしめるのは煮炊具で、甕、土製支脚、甕がこれにあたる。土製支脚は、すべては実測できなかったものの、支脚・把手の個体数からみると8個体あったものとみられる。

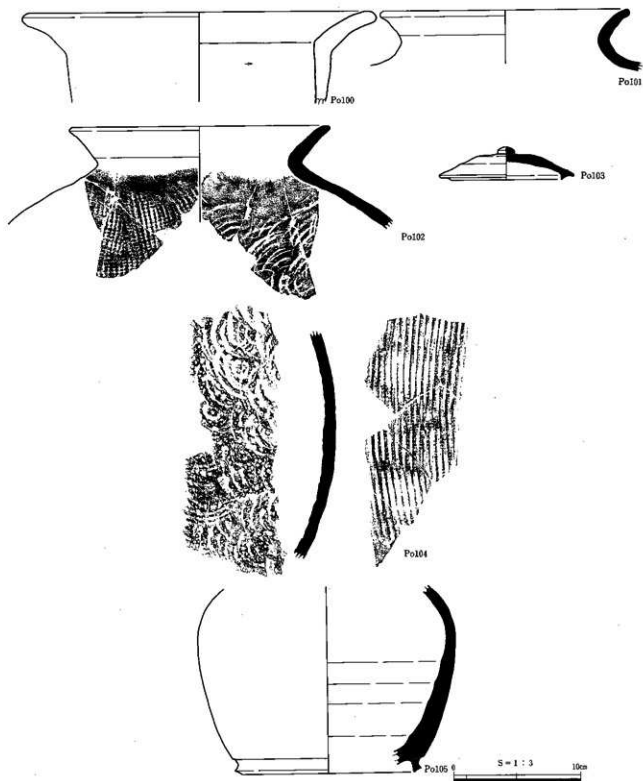
また製塩土器は、SS01のP1から出土したものと同タイプのもので、鹿藏山式^註と考えられる。

これらのなかで、確実に一括の出土としてとらえられるものは、Po106～110・112～119・123・124・126・129～133・135・139・147～154・159・161・163・165・167・168で、いずれも斜面に沿い、浅い溜まり状に集中して出土した。ただし、意図的に掘り込まれた痕跡は確認されなかった。

出土遺物は、一括の遺物として捉えているものは、奈良時代後半ごろのものと考えられる。

出土した状況から、これらの遺物は廃棄されたと考えられる。同時期の遺構は、付近にはSS01をはじめ、SS06、SB04などがあり、これらの遺構との関連が考えられる。

(八峰)



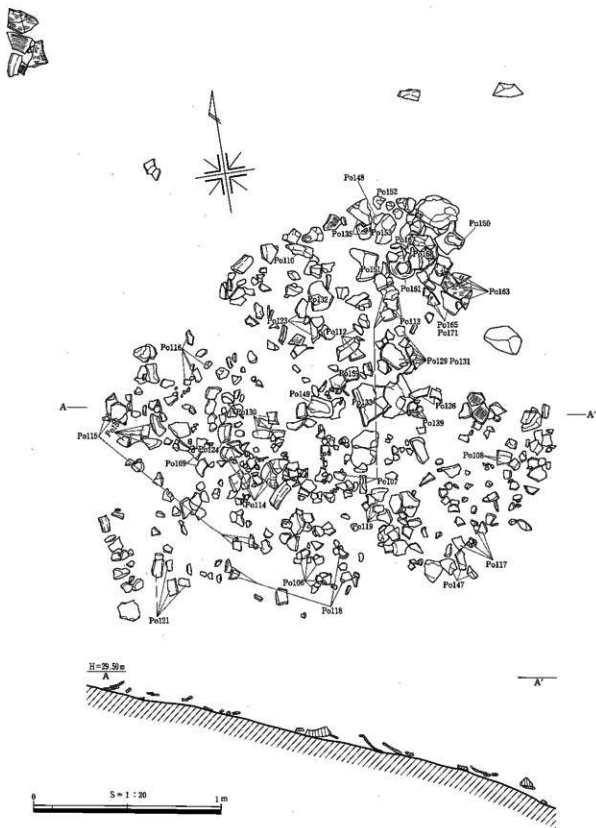
挿図193 寺戸第1遺跡土器溜まり01遺物出土実測図

第10節 遺構外遺物 (挿図200～211、図版44・49・56～62)

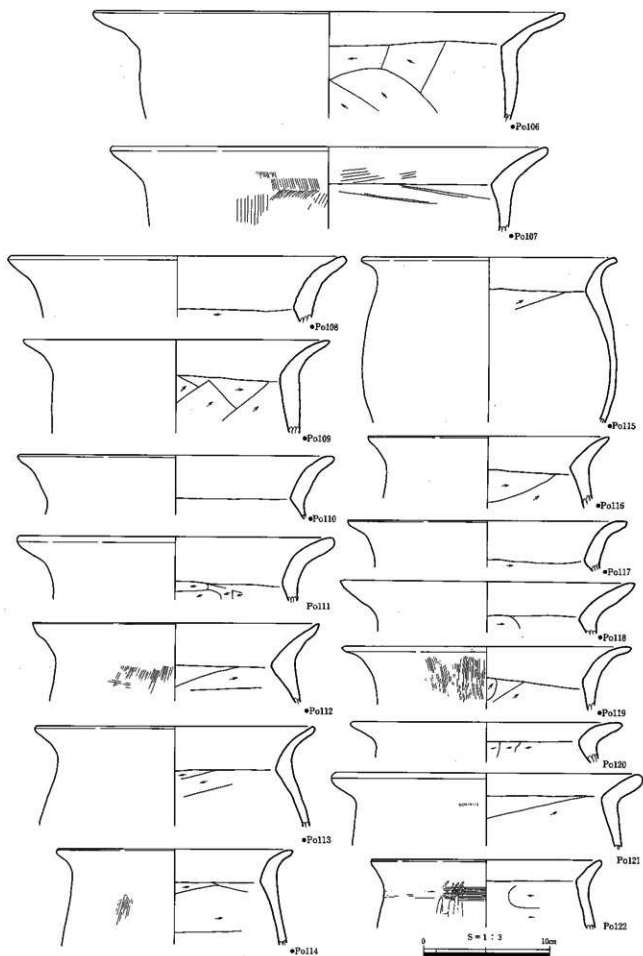
寺戸第1遺跡は、東に向かう斜面上にあり、大きく分けて上下二段のテラス部分がある。それぞれのテラスに古墳時代から奈良・平安時代ごろまでの遺構が確認されている。これらのテラス部は、遺構の検出状況から、ある程度自然地形を利用しながらも、意図的にテラス部を造り出したとみられる。遺物はそれらの遺構の検出面お

よびその上層からの出土であるが、斜面部での堆積であるため、弥生時代後期から近世にまでの時期幅の広い遺物を包含している。

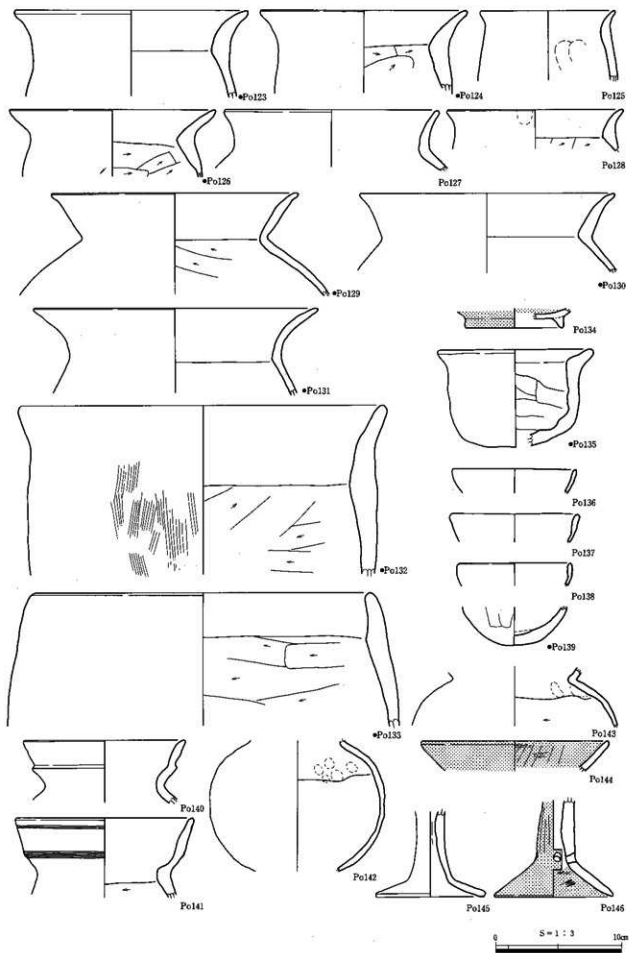
上段テラス出土遺物は、F4・F5グリッドを中心に出土した。付近はテラス部のなかでも最も落ち込みが大きく、ここに遺物が土砂とともに堆積したものと考えられる。



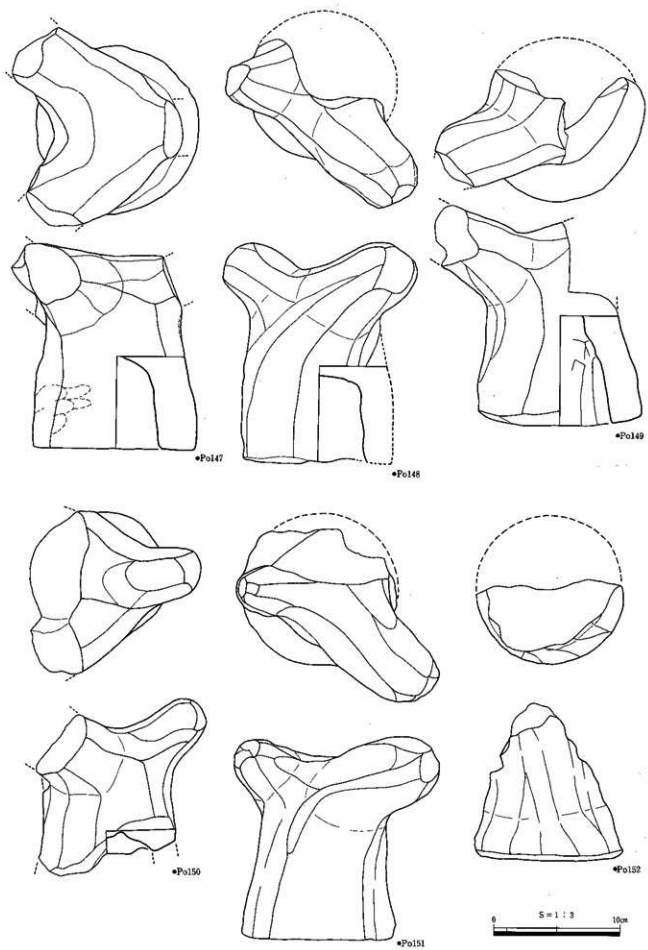
挿図194 寺戸第1遺跡土器溜まり02遺物出土状況図



挿図185 寺戸第1遺跡土器溜まり02出土遺物実測図(1)



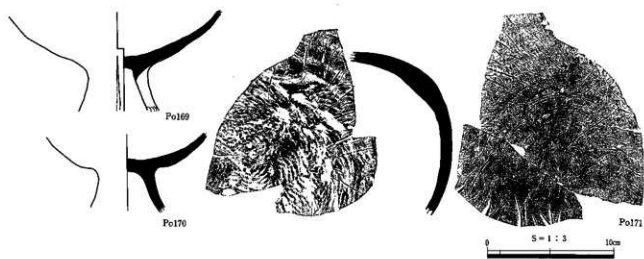
挿図196 寺戸第1遺跡土器溝まり02出土遺物実測図(2)



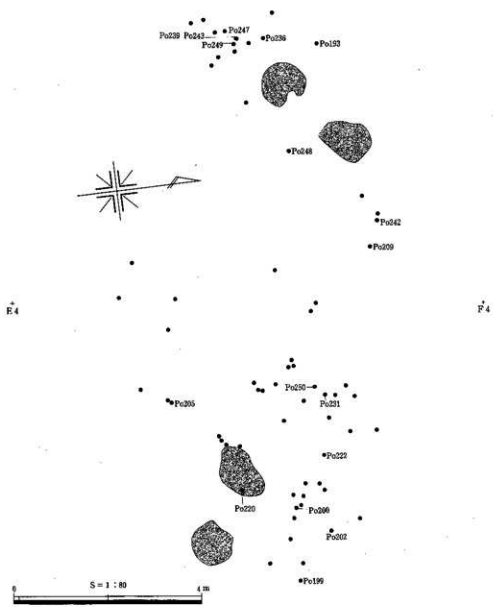
挿図197 寺戸第1遺跡土器溜まり02出土物実測図(3)



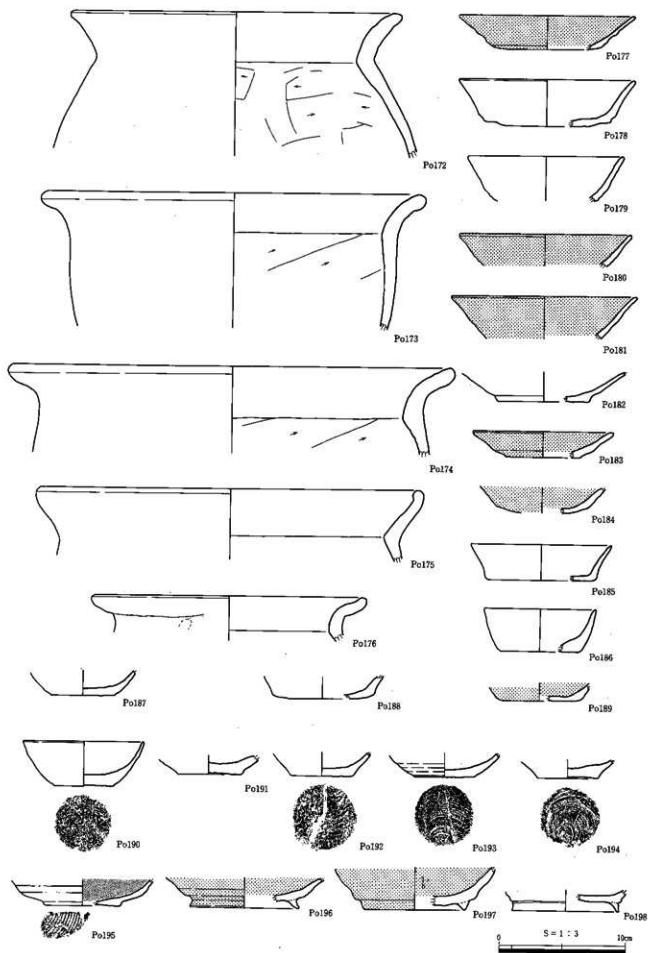
挿図198 寺戸第1遺跡土器溜まり02出土遺物実測図(4)



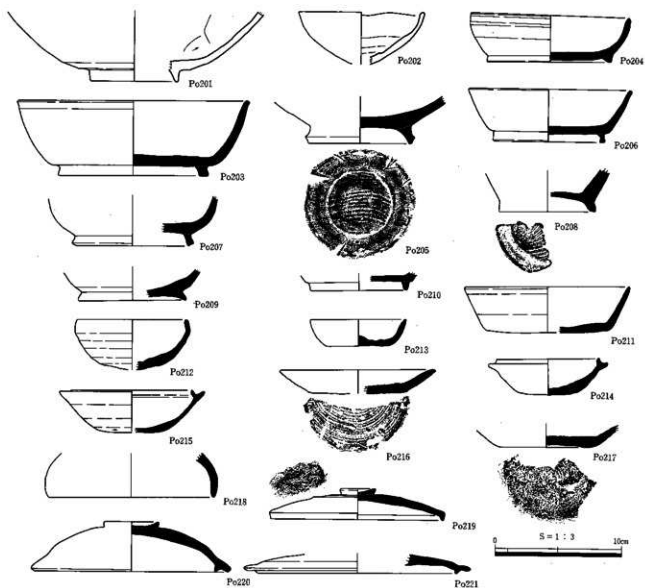
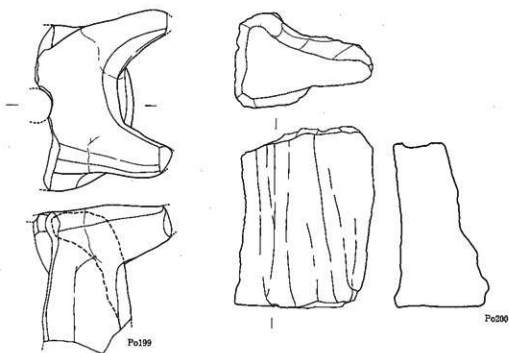
挿図199 寺戸第1遺跡土器溜まり02出土遺物実測図(5)



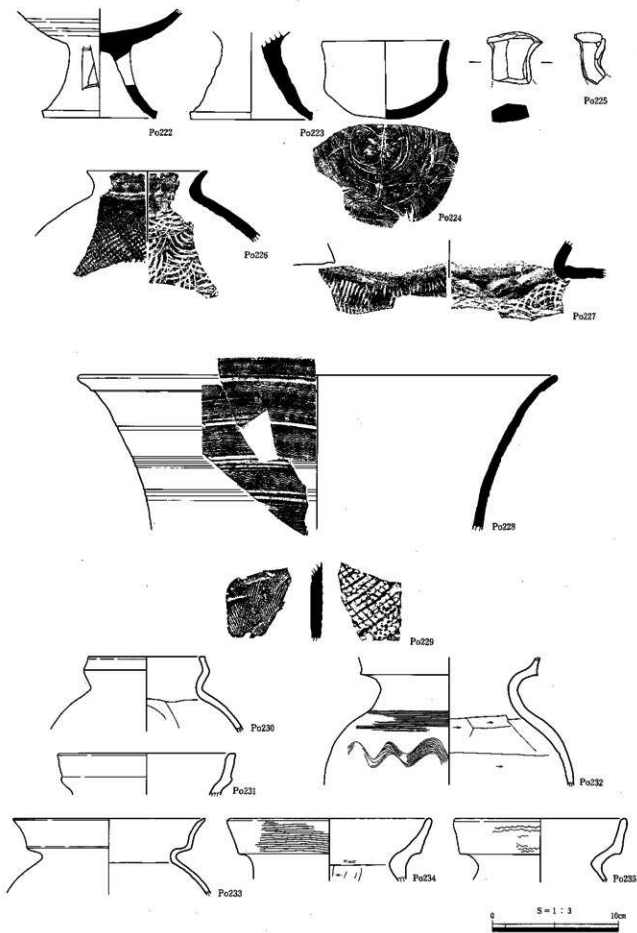
挿図200 寺戸第1遺跡上段テラス遺物出土状況図



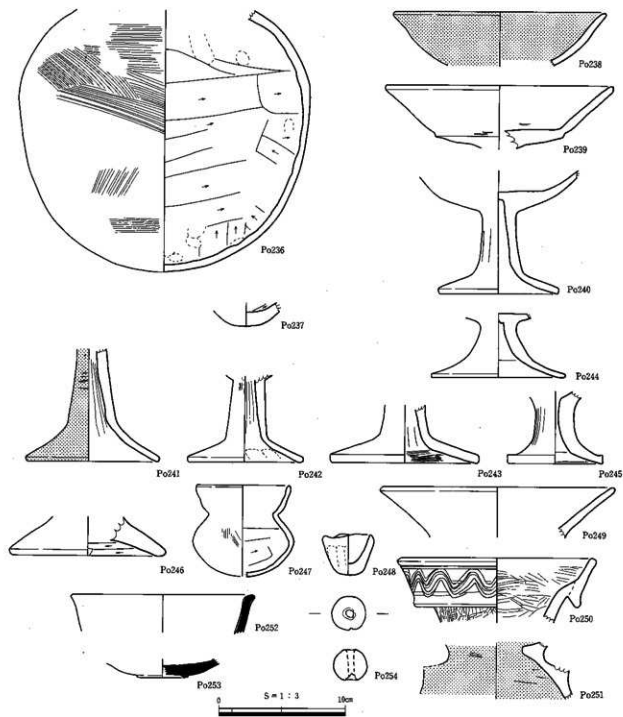
挿図201 寺戸第1遺跡上段テラス出土遺物実測図(1)



挿図202 寺戸第1遺跡上段テラス出土遺物実測図(2)



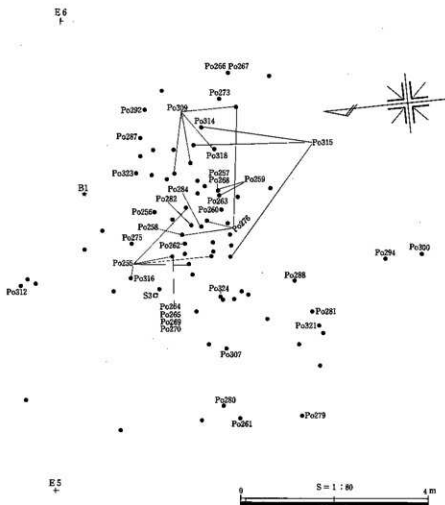
挿図203 寺戸第1遺跡上段テラス出土遺物実測図(3)



挿図204 寺戸第1遺跡上段テラス出土遺物実測図(4)

土師器についてみていく。甕Po172~176は、外面はナデ、内面は屈曲部までケズリである。土器溜まり02の甕に類似しており、奈良時代後半ごろのものとみられる。無高台の環Po177~189は、口径が比較的広く外面底部を回転ヘラ切り後ナデ。伯耆国庁の第2様式とみられる。また、Po184のように口径が比較的小さく、底部を押圧するものがあり、第2様式でも新しい様相を示す。さらに、底部外面を回転糸切りするPo190~194などがあり、これらは伯耆国庁の第3様式以降のものである。Po195は、内黒の黒色土器で、底面は回転糸切りで、無高台である。高台付の環はPo196~198で、底面はナデで、断面三角形のハの字状に開く脚がつく。伯耆国庁の第2様式とみられる。Po201のような碗状の器形もある。上製支脚Po199は内部が中空で把手もしっかりと突出している。製塩土器Po202は、焼き塩土器である。SS01のP1と同タイプとみられ、鹿嶋山式で、奈良時代から後半のものと考えられる。甕Po200も出土している。

須恵器についてみていく。Po203~210は高台付の環で、外部底面は、回転ヘラ切り後ナデと回転糸切りに大別



挿図285 寺戸第1遺跡下段テラス遺物出土状況図

される。環は、Po211・213、環身は、Po212・214・215でいずれも回転ヘラ切り。皿Po216・217は回転糸切りである。坏蓋Po218～221は、環状のつまみをもつものとなつたものがある。高坏Po222・223、椀Po224、把手Po225、横瓶Po227、甕Po226・228が出土している。このうちPo204・212・213・214～225は古墳時代後期から終末期で、中でもPo204・219は古墳時代終末期から奈良時代にあたる。他は奈良時代以降で、Po205・207・208・210・216・217は、底部に回転糸切り痕があり、Po226は器形から奈良時代中葉のものと考えられる。

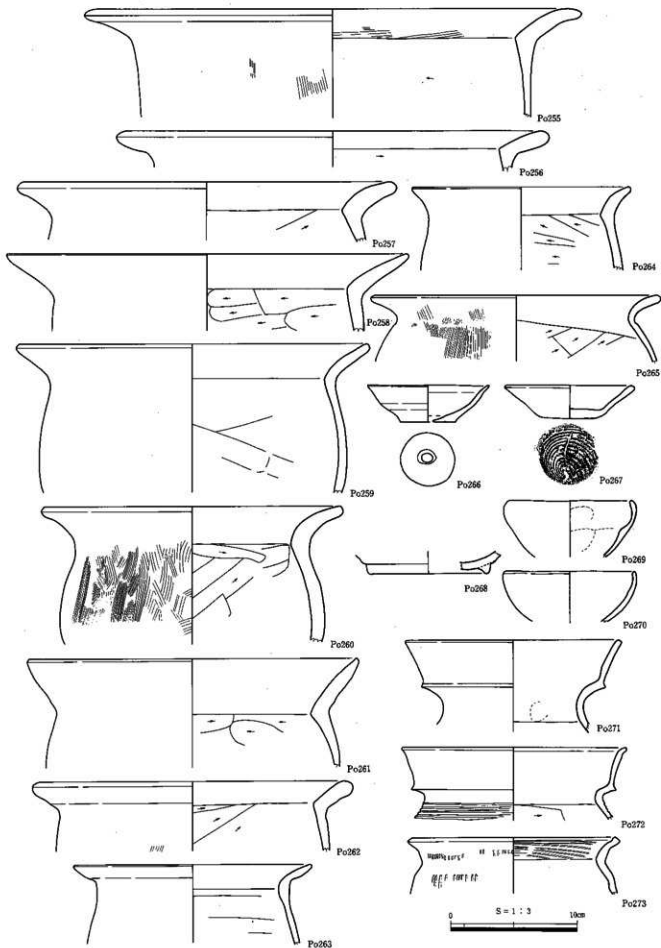
古墳時代の土器は、土師器甕Po230～232、高坏Po238～245、小型丸底壺Po247、手捏ね土器Po248、器台Po249、土玉Po254である。いずれも中期のものと考えられる。

弥生時代の土器は、壺Po234、甕Po233・235、底部237、器台250・251で、甕や器台の形態などから、弥生時代後期のものと考えられる。

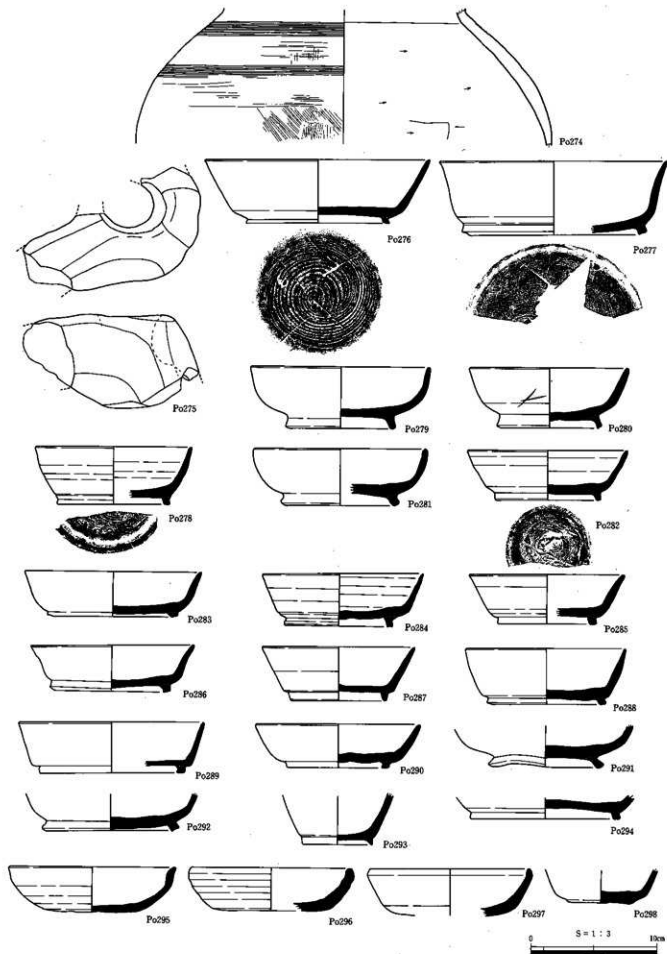
中世から近世の土器も若干出土している。Po229は勝間田系で、外面は格子のタタキ、内面はカキ目調整で、平安時代ごろと考えられる。Po252は青磁、Po253は唐津焼きで、内底に胎土目をもつ。いずれも近世の初頭ごろと考えられる。

下段テラスの遺物は、E 6・F 6グリッドを中心に出土した。やはり上段テラスから下段に至り、緩やかに落ち込む部分にあたる。上段テラスと同様、遺物が流れこんだものと考えられる。

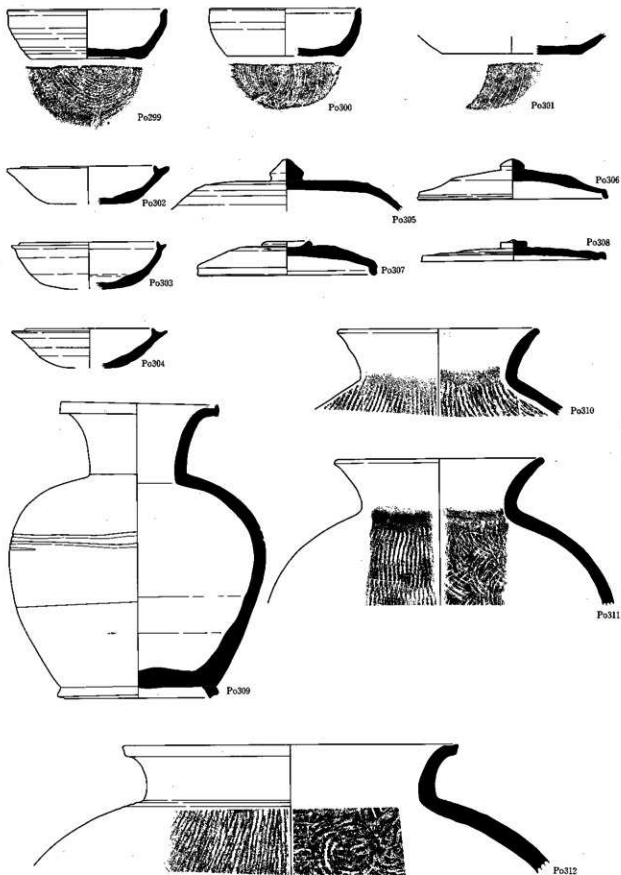
土師器についてみていく。甕Po255～265はいずれも口縁部が外反し、内面は屈曲部までケズられる。土器密まり02の甕と類似しており、奈良時代後半ごろのものとみられる。環は、Po226・267が外面底部回転糸切りで、口縁部が長くのびる。伯耆国宍粟第3様式を大きく下る。環Po266は底面に穿孔がある。Po268は断面三角形の高台



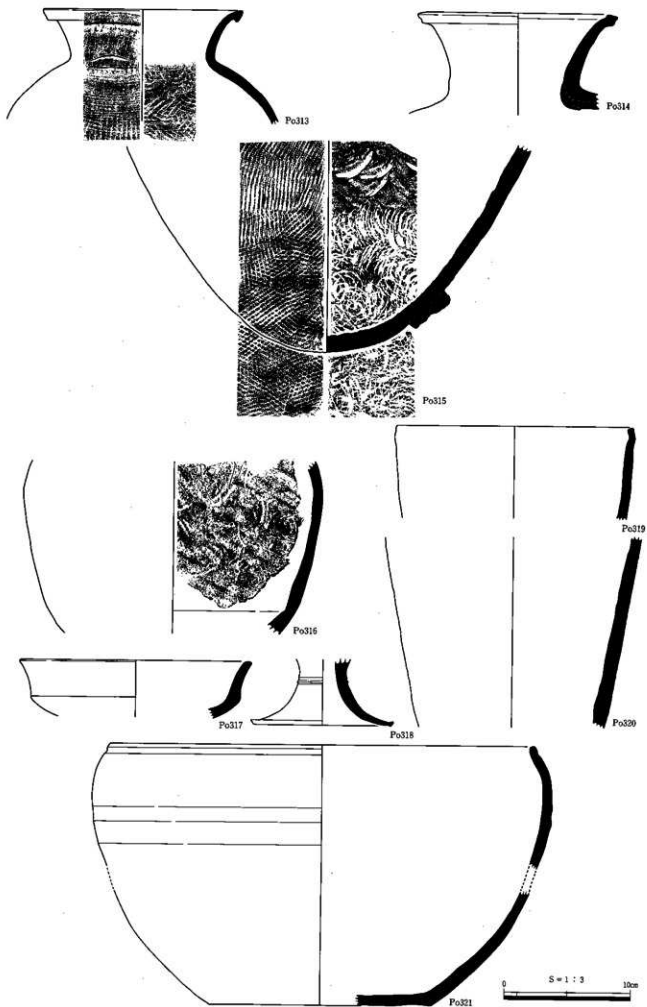
挿図296 寺戸第1遺跡下段テラス出土遺物実測図(1)



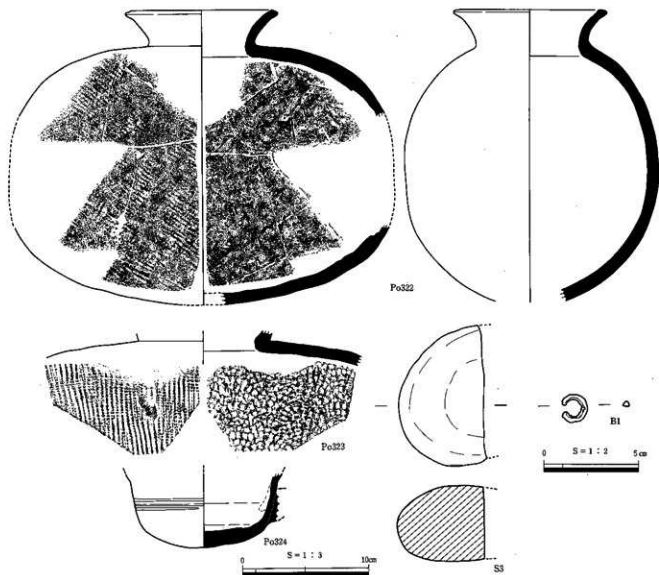
挿図207 寺戸第1遺跡下段テラス出土遺物実測図(2)



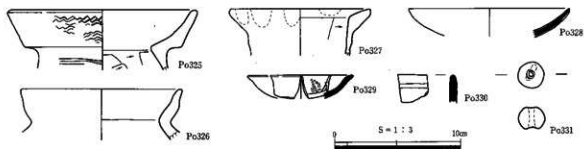
挿図208 寺戸第1遺跡下段テラス出土遺物実測図(3)



挿図208 寺戸第1遺跡下段テラス出土遺物実測図(4)



挿図210 寺戸第1遺跡下段テラス出土遺物実測図(5)



挿図211 寺戸第1遺跡遺構外遺物実測図

がつく。製塩土器Po269・270は、SS01のP1出土のものに類似する。奈良時代後半と考えられる。支脚Po275も出土している。

古墳時代の上師器は、壺Po271、甕Po272～274で、古墳時代前期ごろと考えられる。

須恵器についてみていく。高台付の環はPo276～294、環はPo295・297～301、坏身はPo296・302～304で、底部はヘラ切り、回転ヘラ切り、ナデ、回転糸切りなどである。蓋はPo305～308で擬宝珠様つまみまたは環状のつまみがつく。その他、台付長頸壺Po309、甕Po310～313・315・316、長頸壺Po314、高台付椀Po317、高環Po318、円筒土器Po319・320、鉢Po321、横瓶Po322・323、把手付椀Po324など出土している。

このうち、Po279、295～298、302～304、311～322は古墳時代後期から終末期のもので、Po279・295は古墳時代終末期から奈良時代である。

他は奈良時代以降で、外面底部糸切りが、Po276～278、281～283・286・290・291・299～301、器形でPo293、環以外ではPo308、309が奈良時代後半ごろで、これ以外を奈良時代前半ごろと考える。

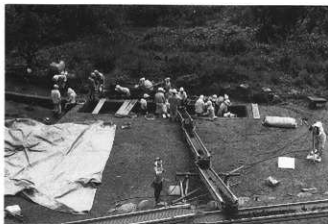
調査区内のその他の遺物は、弥生土器甕Po326・327は、弥生時代後期、白磁皿Po328は平安末から鎌倉、Po329は赤絵で草花を描いている。Po330は青磁で、外面に染め付けがみられる。いずれも近世の初頭ごろのものと考えられる。Po331は土玉である。

遺物の主体をなすのは奈良から平安時代前半ごろで、奈良時代では土師器、須恵器ともに環類の出土が目立ち、後半では、これに加え土器溜まり02にみられるように甕類などの煮炊具や製塩土器が出土する。また、平安時代前半でも土師器の環や黒色土器が出土する。

製塩土器は、付近では伯耆国庁や伯耆国分寺で出土していることから、当時の遺跡のなかでも特別な存在であったことを示すことができる。ただし遺物は平安時代後半から少なくなり、底部回転糸切りの小皿や膳間田系の陶器片などに限られる。付近にも遺構はみられず、何らかの理由でこの時期を最後に廃絶したものとみられる。さらに時期が下るものとして、青磁・赤絵・唐津焼きが出土している。これらはいずれも近世初頭のものであり、付近にこの頃の遺構の存在を想定することができる。

遺構の時期を遡るものとしては、弥生時代後期から古墳時代中期の土器や耳環がある。寺戸第2遺跡では弥生時代後期および古墳時代前期の遺構が確認されており、寺戸第1遺跡はその下側にあたることからこれらの遺物は転落した可能性を指摘することができる。ただし、寺戸第2遺跡の遺構はほとんどが古墳前期であり、古墳中期の遺構はほとんど確認されていないことから、弥生時代後期の遺構や古墳時代中期の遺構または古墳が西側の斜面上を含め付近に存在していることが考えられる。

(八時)



写真⑪ 寺戸第1遺跡作業風景3



写真⑫ 寺戸第1・2遺跡調査区風景

第6章 寺戸第2遺跡の調査

第1節 調査の概要

寺戸第2遺跡は、泊村石脇字久塚・寺戸に存在し、標高43~65mの丘陵頂部から斜面部に立地する。現況は山林・竹林となっていたが、北東側斜面部は梨畑として利用されていた。

標高59m以下の一段低くなった舌状に延びる丘陵からは、遺構は検出されなかったが、わずかに土師器が出土している。

検出された遺構は標高65mを頂点とする丘陵から斜面に集中している。遺存状態は比較的良好、竪穴住居跡9基、段状遺構4基、土坑13基、ピット群3か所である。以下、時期毎に概要を述べることにする。

縄文時代と考えられる土坑3基(SK07・12・13)のうち、落とし穴は1基(SK12)のみで、その他のものは用途不明である。SK07・13からは土器および石器(石匙)が出土している。また、検出作業中およびS I 05埋土中から石畿が計2点出土しており、この地が狩猟の場であったものといえる。

弥生時代後期には、竪穴住居跡1基(S I 07)、土坑1基(SK01)、段状遺構1基(SS03)が作られている。S I 07は遺存状態が非常に悪く、方形を呈すものと思われる。SS03は、斜面を段状に加工している。

SK01は、長方形を呈すもので、性格は不明である。

古墳時代前期には、この遺跡で最も遺構数が増す。竪穴住居跡7基(S I 01~05・08・09)、段状遺構2基(S S01・02)、土坑2基(SK08・09)が作られる。

竪穴住居跡は、平面が六角形のもの1基(S I 01)、方形のもの4基(S I 02・04・05・09)、長方形のもの1基(S I 03)である。このうち、S I 01と03は重複しており、土層の切り合いから、S I 01~03の順で作られていた。

土坑SK08は平面略方形を呈すもので、性格は不明である。SK09は、平面長方形を呈し、大量の土師器が出土している。

出土している遺物を比較すると、集落は3時期にわたって営まれたものと考えられ、S I 01・05・09、SK09が同時期、S I 02・03・04が同時期、S S01・02、SK08が同時期と考えられる。この遺跡は、1時期3基程度の小単位の住居で営まれた集落と考えられる。

S I 01が床面積40㎡(推定)と最も大きく、この時期の中心的な住居であったものと考えられる。

遺跡は南東側の丘陵上にも広がっており、今回調査した部分は集落のはずれに当たるものと推定される。

¹⁴C年代測定を行ったS I 03・S I 05で得られた結果は、S I 03が1800±70B.P.、1960±170B.P.で測定誤差を考慮すると3世紀半ば、S I 05が1990±50B.P.、1910±120B.P.でおよそ1世紀~3世紀前半ごろと考えられ、土器形式の存続期間を考える上で興味深い。

中期ではS I 06・08が見られる。¹⁴C年代測定を行ったS I 08では1350±60B.P.という結果が得られ、およそ7世紀代の年代が得られたが、土器形式から見るとこの時期とは考え難い。

その他時期が不明なものに、段状遺構1基(SS04)、不明土坑6基(SK02~04・06・10・11)がある。

(牧本)

第2節 竪穴住居跡

S 101・03 (押図214~224、図版63~65・72~74)

調査区南側のB7、C7グリッドにあり、標高63.5~64.2mのわずかに南側に傾斜する斜面に、2基の竪穴住居跡が重複して立地する。南側約5mにはS I02、西側約5mにはS I07がある。

大型の平面六角形を呈すものをS I01、一回り小さい長方形を呈すものをS I03とする。

S I01は、住居のおよそ東半分をS I03によって切られており、遺存状態はあまりよくない。復元される平面形は六角形で、南北7.42m、東西3.2m以上(復元約6.5m)を測る。床面積は21.4㎡以上(復元40㎡)である。壁高は、最も遺存状態のよい北西側で最大0.91mを測る。

壁溝は壁際を全周するものと考えられ、幅12~25cm、深さ2~9cmを測る。断面逆台形状を呈す。南側では、壁溝内に小ビットが掘り込まれている。

主柱穴は、床面上及びS I03貼床下で検出したP1~P6で、それぞれの規模はP1(61×52~75)cm、P2(60×57~72)cm、P3(52×52~73)cm、P4(70×64~62)cm、P5(63×50~70)cm、P6(83×67~50)cmを測る。主柱穴間距離は、P1~P2間から順に2.7m、2.6m、3.2m、2.6m、2.8m、2.7mで、P3~P4間が広がっている。

柱底が確認されたものは、P1・P2・P6で、淡黄褐色土または淡灰黄褐色土で根固めされている。復元される柱の直径は19~24cmである。柱は、P2では中央に立てられるが、他のものは一方の壁に寄せて立てられている。

なお、貼床除去後に検出できたビットのうちP1周辺でP7・P8、P3周辺でP9・P10、P5周辺でP11・P12と2個ずつ検出された。それぞれの規模は、P7(64×50~78)cm、P8(69×59~63)cm、P9(64×50~59)cm、P10(58×43~54)cm、P11(62×49~63)cm、P12(52×47~68)cmを測る。これらは、埋土を観察するとほとんどが単層で、主柱穴に見られるように根固めの土層は見られないことから、実際には柱は立っておらず、梁・桁間を調節するために掘り込まれたものと考えられる。

中央ビットはS I03の貼床下で検出されたP13で、不整形に二段に掘り込まれるものである。上段は(60×50以上~47)cmに掘り込み、さらに、(37×28~52)cmの楕円形に掘り込まれている。主柱穴に比べて、かなり深く掘り込まれたものである。埋土は3層に分層でき、最下層は炭化物を多量に含む。

その他、床面上および貼床下でこの住居に伴うと考えられるビットが検出されているが、このうちP14・P15は位置的に挟持柱の柱穴と考えられる。それぞれの規模は、P14(45×40~60)cm、P15(42×29~20)cmを測る。その他のものについては、用途不明である。

床面上で、中央ビット南側周辺に、焼土面が広がっている。

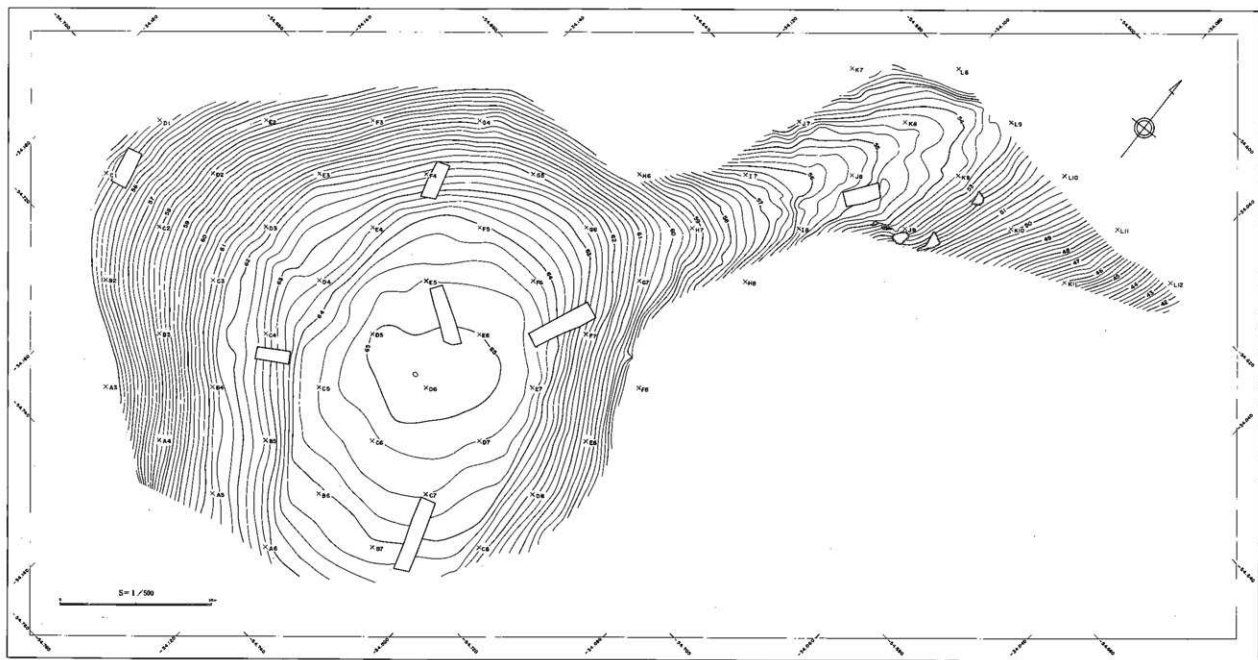
S I03は、平面長方形を呈し、南北5.56m、東西3.86mを測る。床面積は、19.1㎡である。壁高は、最も遺存状態のよい北西側で最大0.88mを測る。S I01との床面の比高差は7~18cmで、S I03の床面が一段低くなっている。

壁溝は、南側で途切れてはいるもののほぼ全周するものと考えられ、幅8~29cm、深さ2~7cmを測る。断面逆台形状を呈す。

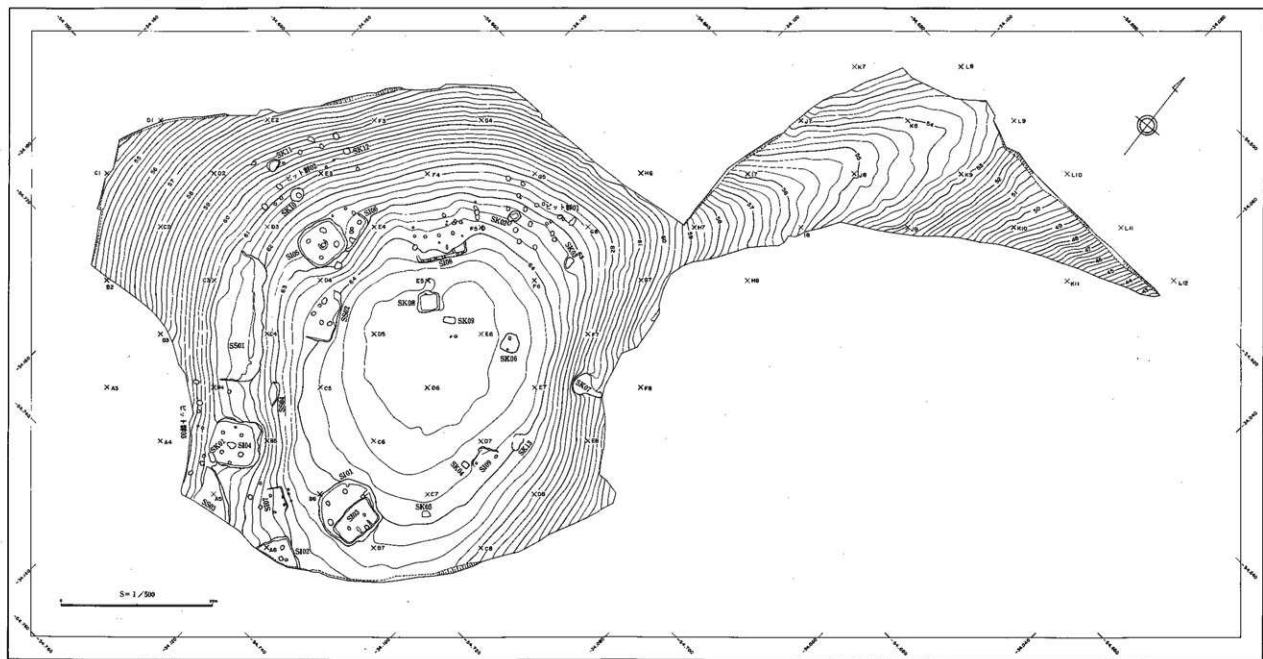
主柱穴は、P17・P18の2本で、それぞれ(34×34~36)cm、(33×26~13)cmを測る。主柱穴間距離は2.8mである。

中央ビットは、中央やや北側の不整形を呈すP19で、(90×42~16)cmを測る。埋土は、2層に分層できたが、上層の埋土は炭化物を多量に含むものである。主柱穴に比べて浅く、後述するように甔形土器が据えられていることから、S I01の中央ビットとは異なる用途であった可能性がある。

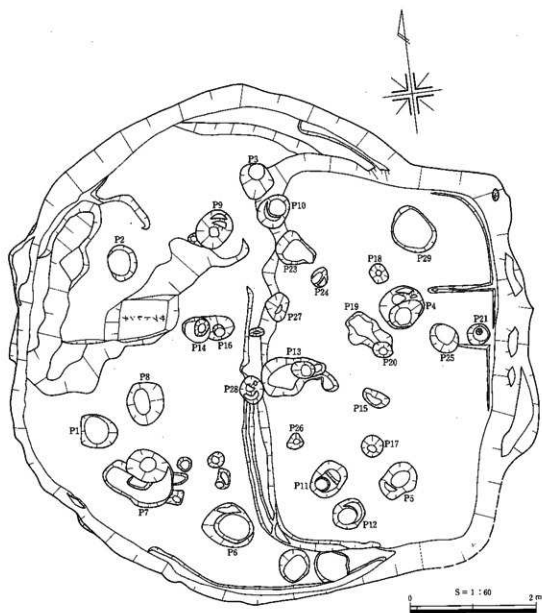
東側壁際には、長さ約1m、幅9~24cm、深さ3~10cmを測る2本の溝が中央に向かって延びている。溝に挟



擇圖212 寺戶第2遺跡調査の地形測量図



挿図213 寺戸第2道跡遺構全体図



挿図215 寺戸第2遺跡S I 01・03貼床除去後状況図

まれるように、壁溝に接して二段に掘り込まれる壁際特殊ピットP21がある。(62×44-21)cmを測る。埋土は淡灰黄褐色土単層である。

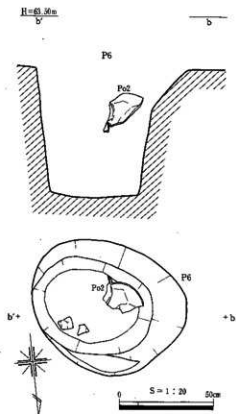
S I 01・03ともに床面全面に、粘質土を含む暗黄褐色土による貼床が施されている。S I 01では厚さは3～16cmを測り、西側が深く掘り込まれている。S I 03では厚さは5～13cmを測る。

埋土は、14層に分層でき、このうち④～⑧⑩層はS I 01埋土、①～③⑨～⑬はS I 03埋土である。切り合い関係からS I 01→S I 03の順で建てられたものと判断される。

②層以下は、S I 01・03ともに一気に堆積した状況が窺われる。S I 03埋土中・床面から炭化材片がわずかではあるが出土しており、焼失した可能性がある。なお、床面から出土した炭化物No234は、樹種鑑定の結果スギと判明した。

S I 01で関与できた遺物には、土師器壺Po 1、甕Po 2～Po16、胴部Po17、底部Po18、低脚環Po19、小型高坏形器台Po20・21、鼓形器台Po22、石鎌S 1、敲石S 2、勾玉J 1がある。

このうち、Po 2は床面・P 6内から出土しているものが接合し、Po22も床面から出土している。S 1・S 2は、



挿図216 寺戸第2遺跡S101P6内
遺物出土状況図



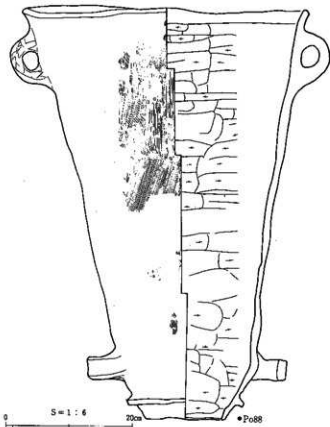
挿図217 寺戸第2遺跡S103甗形土器出土状況図

南西側壁薄土で検出された。その他のものは埋土中からの出土である。

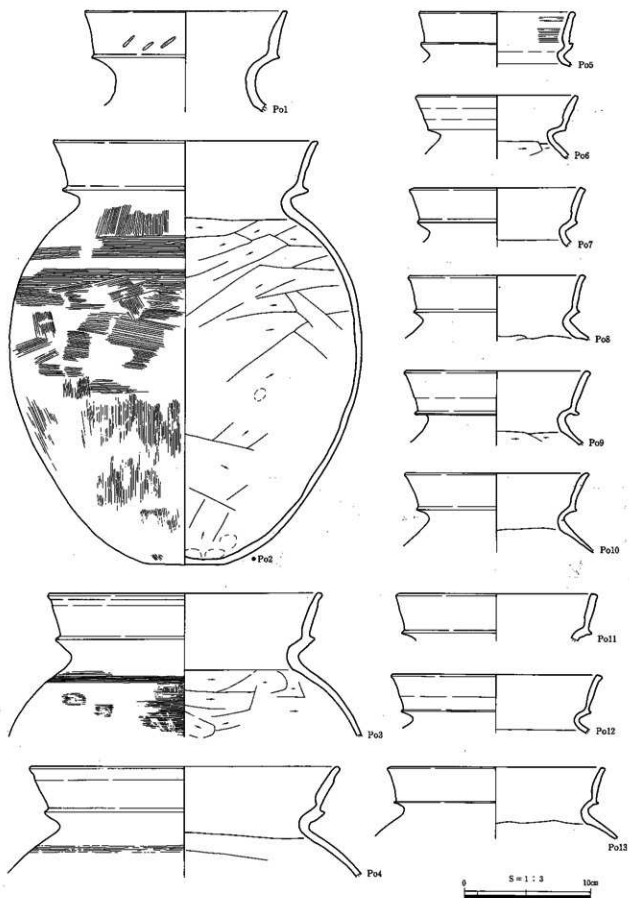
S103で図化できたものには、土師器壺Po23~Po34、直口壺Po35、甗Po36~Po74、高環Po75~Po78、鼓形器台Po79~Po81、低脚環Po82~Po86、小型器台と考えられるPo87、甗形土器Po88がある。

このうち、床面からはPo23・25・32・33・36・37・39・40・46・48・49・52・54・61・65・66・75・79・81・82・86・88が出土している。また、Po56は貼床中からの出土である。その他のものは埋土中からの出土である。

甗形土器Po88は、ほぼ完形に復元できた。出土状況は、P19上で広口部分を下にして高さ約30cm分が立ったまま出土している。内部には、狭口部分を下にして個体の約1/2が落ち込んでいたことから、もともとこの部分に広口を下にして完形のまま据え置かれ、住居の埋没(焼失?)の際に狭口部分が落ち込んだものと推定される。なお、内部から低脚環Po85が浮いた状態で



挿図218 寺戸第2遺跡S103出土遺物実測図(1)



博图219 寺戸第2遺跡S101出土遺物実測図(1)

出土しているが、出土状況を見る限り甕形土器に付随していたとは考えられない。むしろ、Po82が蓋として使用された可能性がある。

床面出土遺物から、S I 01は南谷大山編年V期、S I 03は南谷大山編年VI期古相、古墳時代前期前葉～中葉ごろのものと考えられる。

なお、S I 03の炭化物の¹⁴C年代測定値は、埋土中のもの(K S U-2753)が1800±70B.P.、床面のもの(K S U-2754)が1960±170B.P.を示しており、測定誤差を考慮すると、およそ3世紀中ごろとすることができようか。

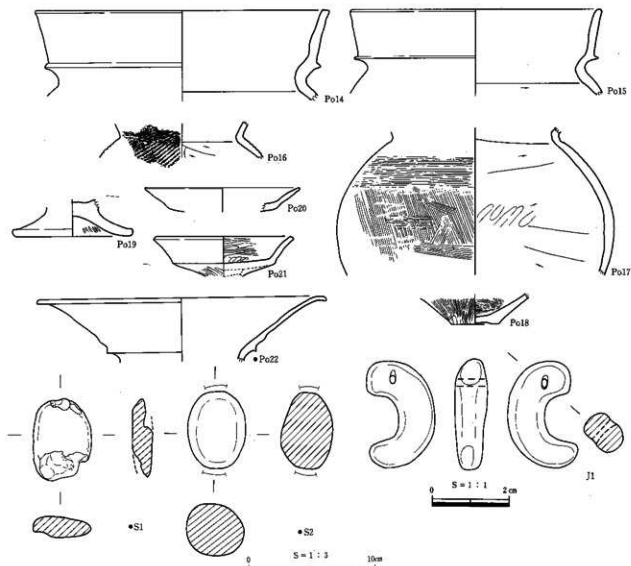
(牧本)

S I 02 (挿図225・226、図版65・74・75)

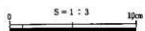
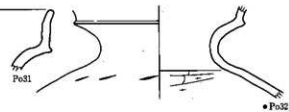
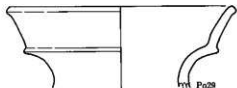
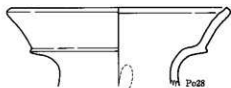
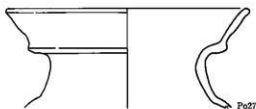
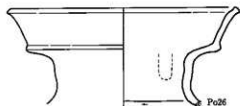
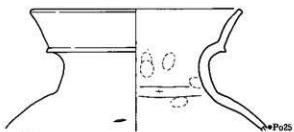
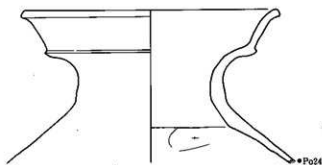
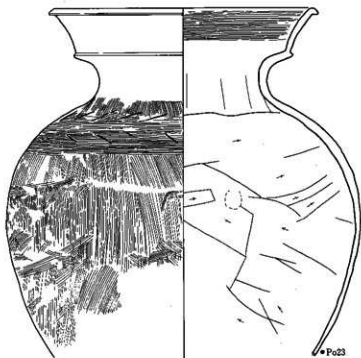
調査区南端のA 6・7、B 6・7グリッドにあり、標高62.2～62.7mの南側に傾斜する斜面に立地する。北側5mにはS I 01・03が、北西3mにはS I 07がある。

S I 02は、南側が調査区外へ延びており、遺存状態はあまりよくない。推定される平面形は方形で、南北・東西とも4.1m以上の、北側に隅をもつ住居と考えられる。床面積は10.6㎡以上である。壁高は、最も遺存状態のよい西側で、最大0.62mを測る。壁溝および胎床は確認されなかった。

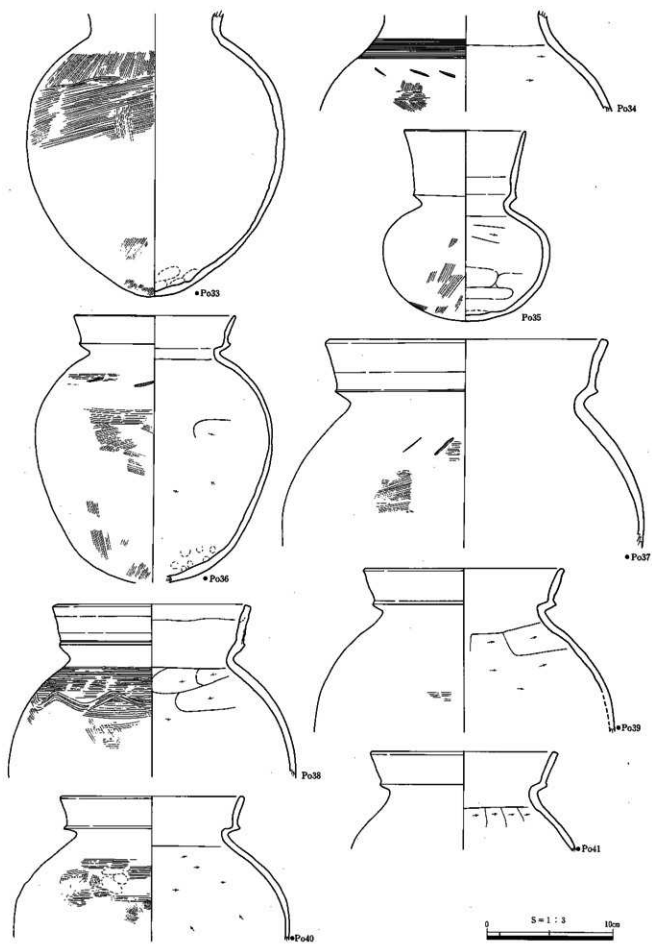
主柱穴は、底面上で検出したP 1が位置的にも深さからみても主柱穴と考えられる。また、P 3は位置的に補



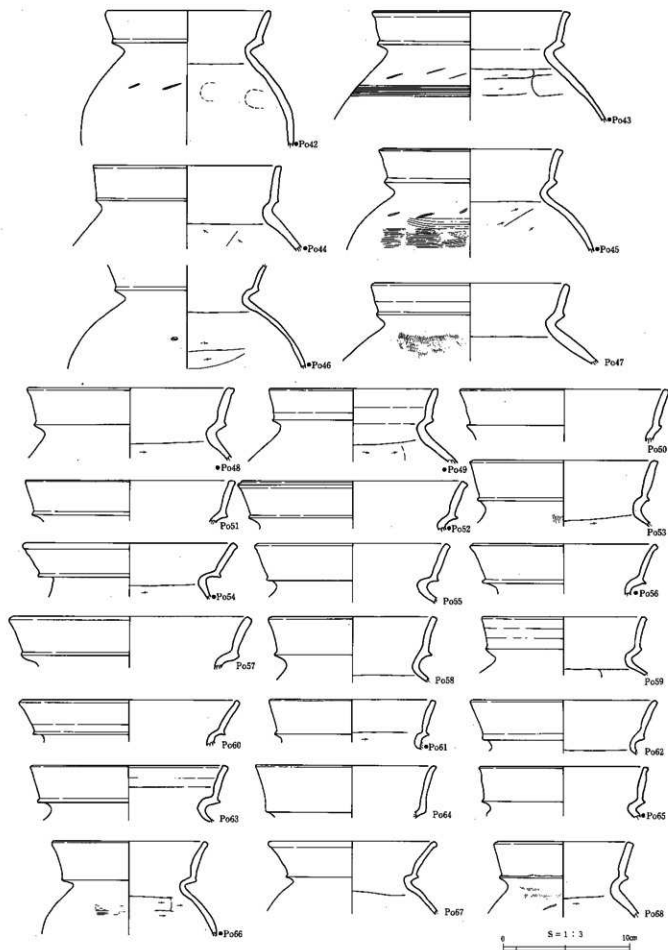
挿図225 寺戸第2遺跡S I 01出土遺物実測図(2)



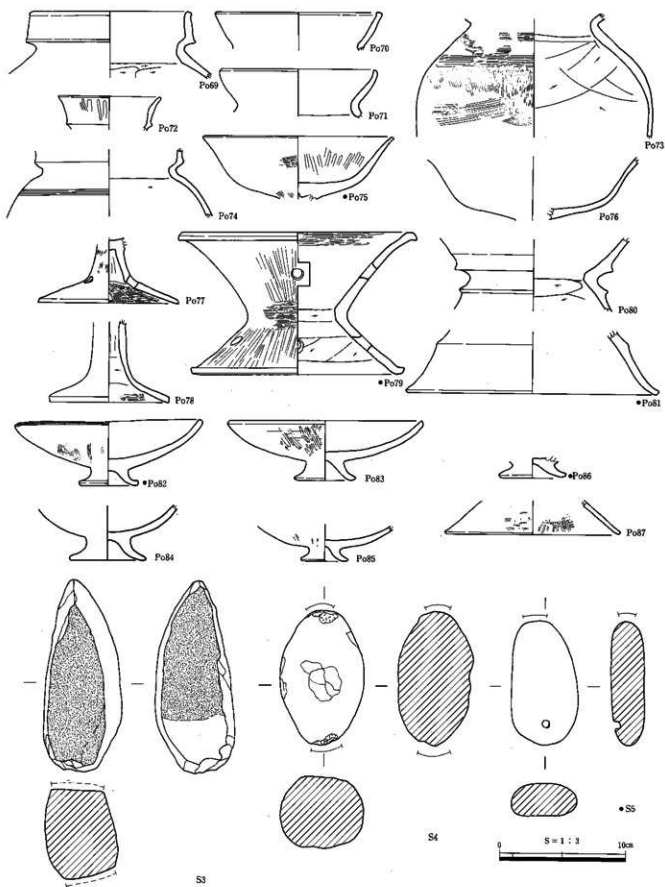
押図221 寺戸第2遺跡S103出土物実測図(2)



挿図222 寺戸第2遺跡 S103出土遺物実測図(3)



押图223 寺戸第2遺跡S103出土物実測図(4)



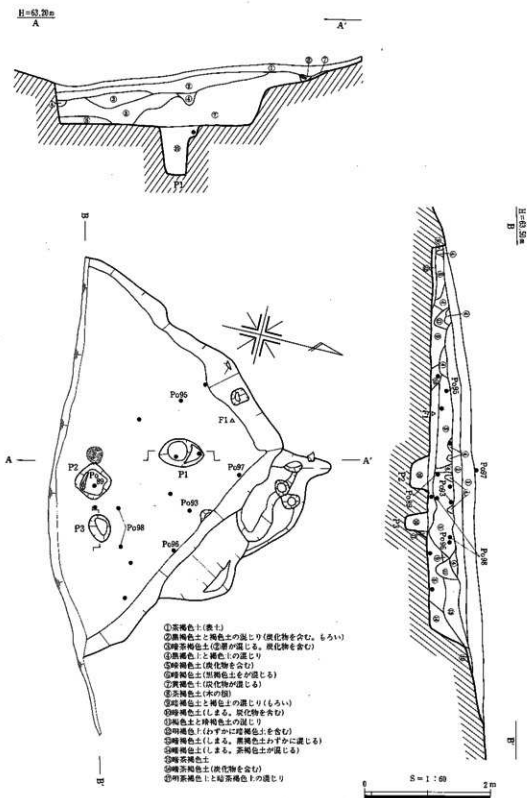
挿図224 寺戸第2遺跡S103出土遺物実測図(5)

助的な柱であったと考えられる。規模は、P 1 (68×43-83) cm、P 3 (44×32-37) cmを測る。埋土は、P 1は1層であるが、P 3は根固めされていた。

中央ピットは、中央やや北東側の方角を呈すP 2で、(49×46-30) cmを測る。

中央ピットP 2の西側に焼土面が検出されている。埋土は単層で、炭化物を含んでいた。

埋土は、12層に分層でき、この内、④・⑧・⑪層は木の根による攪乱である。他はいずれも中央付近に向かい堆積していることから、自然堆積したものと考えられる。

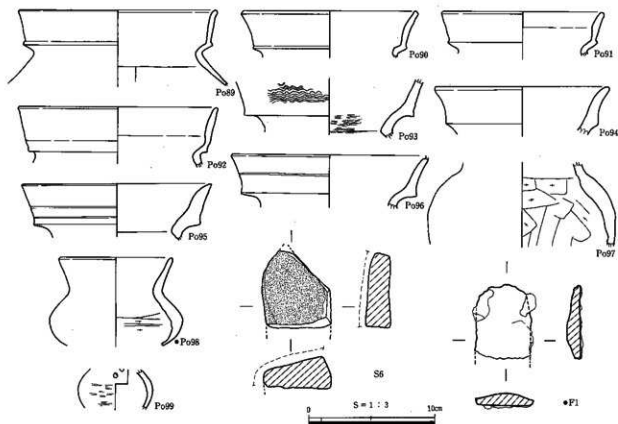


挿図225 寺戸第2遺跡S102遺構図

S I 02で図化できた遺物には、土師器甕Po89~91、弥生土器甕Po92~97、小型丸底壺Po98・99、砥石S 6、不明鉄器F 1がある。床面出土遺物はPo98・F 1で、他は埋土中からの出土である。

床面出土遺物から、南谷大山VI期古相、古墳時代前期中葉ごろのものと考えられる。

(八峠)



挿図228 寺戸第2遺跡S I 02出土遺物実測図

S I 04 (挿図227・228、図版65・75)

調査区南側のB 5・B 6グリッドにあり、標高60.8~61.9mの南西側に傾斜する急斜面のやや傾斜が緩やかになった部分に立地する。床面南端にはSK 01、南側約1mにSS 03、東側約4mにS I 07、北側約3mにSS 04、北西側約5mにS S 01がある。

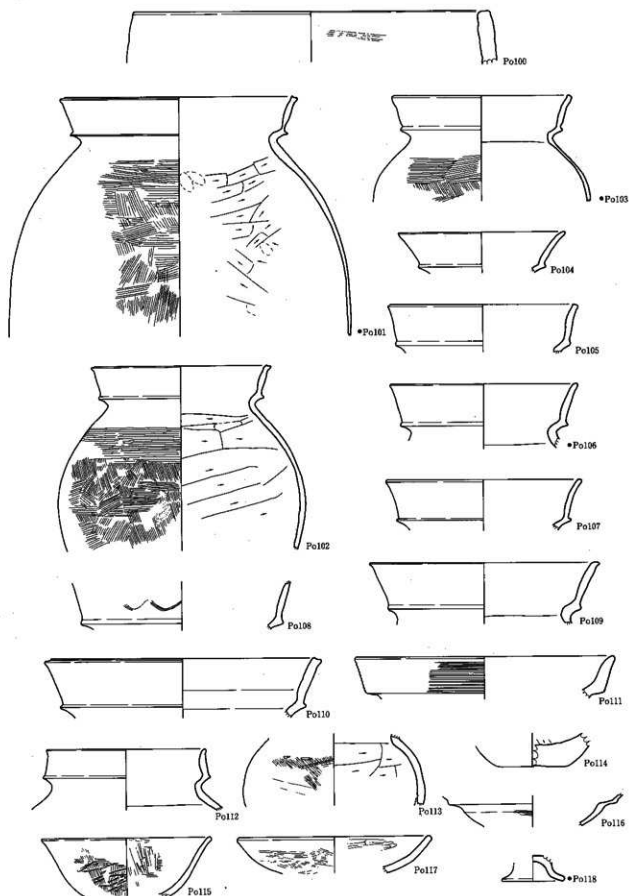
西側の壁が斜面で削られてほとんど消滅しているが、遺存状態は比較的よい。平面形はほぼ方形を呈し、東西6.0m、南北5.7mを測る。床面積は30.3㎡である。壁高は、最も遺存状態のよい東側で最大1.07mを測る。

壁溝は、西側では検出されなかった。規模は、幅6~22cm、深さ3~19cmを測り、断面は逆台形状を呈する。南側では壁溝内に小ピットが掘り込まれている。

床面全体には貼床がみられ、貼床除去後にP 11~P 16およびSK 1が検出された。

主柱穴は、P 1~P 4で、それぞれの規模はP 1 (72×68~70) cm、P 2 (54×48~85) cm、P 3 (45×42~85) cm、P 4 (65×58~56) cmを測る。主柱穴間距離は、P 1~P 4間から順に、2.5m、2.7m、2.5m、2.7mを測る。P 6・P 7は、出入りに伴うピットの可能性がある。それぞれの規模は、P 6 (26×24~13) cm、P 7は二段に掘り込まれ、上段は(40×37~48) cm、下段は(11×10~16) cmを測る。貼床除去後に検出されたP 13も出入りに伴うピットの可能性がある。規模は、(29×21以上~22) cmを測る。

中央ピットはP 5で二段に掘り込まれている。不整形に掘り込まれた上段は(125×90~33) cm、ほぼ楕円形に掘り込まれた下段は(53×25~56) cmを測る。埋土は2層に分層でき、ともに炭化物を含んでいた。



S = 1 : 3
0 10cm

挿図228 寺戸第2遺跡S104出土遺物実測図

貼床除去後、住居内北西側のP3・P4と壁溝との間でSK1が検出された。平面形は上縁部・底部とも楕円形を呈し、上縁部長軸1.64m×短軸1.21m、底部長軸1.44m×短軸0.96mを測る。深さは0.30mで、断面は逆台形状を呈する。

埋土は、褐色土と炭化物が少量混じった暗褐色土が単層で入る。

出土遺物は、土師器片が3点で、口縁部が底面からの出土、他は埋土上層からの出土である。小片のため図化できなかったが、出土遺物から、SK1は、古墳時代前期ごろのものと考えられる。

SK1は、貯蔵穴には浅く、遺物も少なく、形態も異なるため、用途は不明である。

SI04の床面全体に褐色・暗褐色・黄褐色粘質土による貼床が施されている。厚さは2~19cmで、北東側が厚い。

住居の埋土は、8層に分層できた。いずれも住居中央に向かって自然堆積したものと考えられる。

出土遺物には、図化できたものは弥生土器壺Po100、甕Po111、底部Po114、土師器甕Po101~Po110・112、胴部Po113、高杯Po115、土師器低脚環Po117・118、土師器小型丸底鉢Po116がある。

これらのうち、Po101・103・118は床面から、Po106は貼床内から、他は埋土中からの出土である。

床面出土遺物から、南谷大山編年VI期古相、古墳時代前期中葉ごろのものと考えられる。(長尾)

SI05・06 (押田229~233、図版66・75・76)

調査区中央西側のE4グリッドにあり、標高62.6~63.1mの西側に傾斜する斜面に立地する。北東約7mにS02が、南側約5mにS01がある。

南側のをSI05、北側のをSI06とする。いずれも隅丸方形を呈す。

SI05は、上層を観察するとSI06より古い。遺存状態は良好である。平面形は東西にやや長い隅丸方形を呈し、南北4.84m、東西5.44mを測る。床面積は、23.7㎡である。壁高は、最も遺存状態のよい北壁で0.53mを測る。また、北から南側に緩やかに下る礫を多く含む赤褐色の地山をカットし、住居の北半分の平坦面を作り出していた。

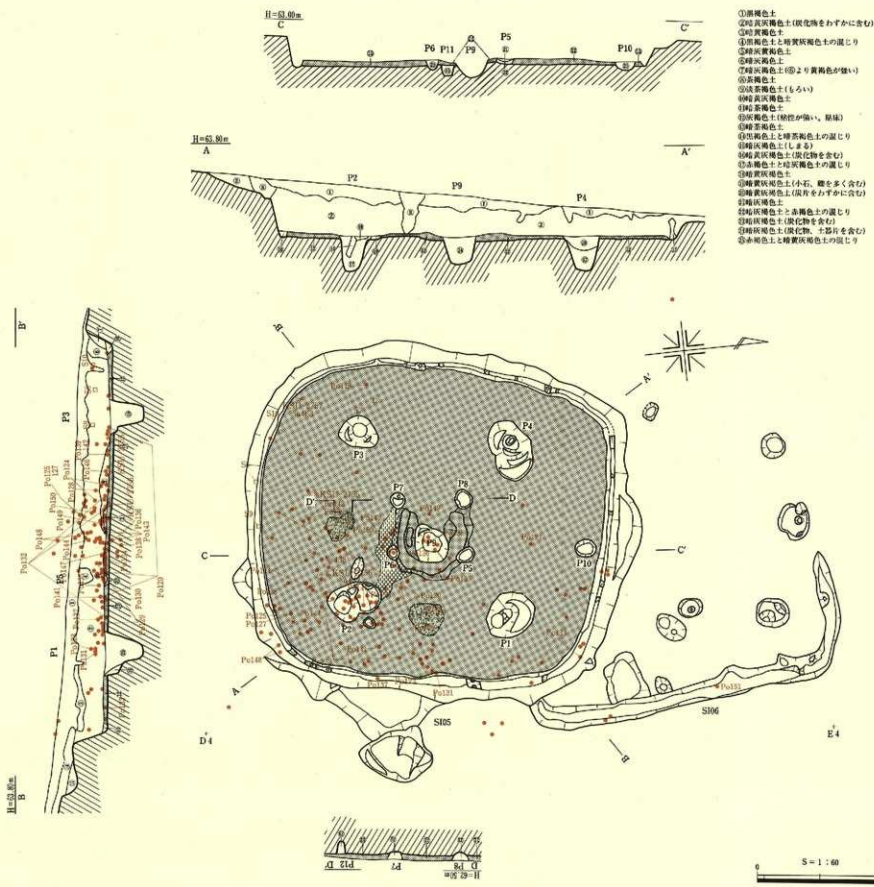
壁溝は壁際を全周しており、幅6~21cm、深さ3.9~9.9cmを測る。断面不整な逆台形状を呈す。底面は一定ではなく、所々段やピット状に掘り込まれた箇所があるが、用途は不明である。

主柱穴は、床面上及びSI05貼床下で検出したP1~P4で、それぞれの規模は、P1(83×69~65)cm、P2(85×56~57)cm、P3(58×52~55)cm、P4(97×64~58)cmを測る。主柱穴間距離は、P1~P2から順に2.5m、2.8m、2.4m、2.9mで、東西方向よりも南北方向の柱の間隔が0.3m~0.5m広がっている。柱底が確認されたものはなかった。P1~P4は、貼床除去後に範囲が広がり、柱穴を掘り込み、柱を立てた後根固めをし、貼床をしたものと考えられる。なお、貼床除去後の平面形は不整な楕円形となり、規模は、P1(98×86)cm、P2(81×70)cm、P3(76×68)cm、P4(127×90)cmである。

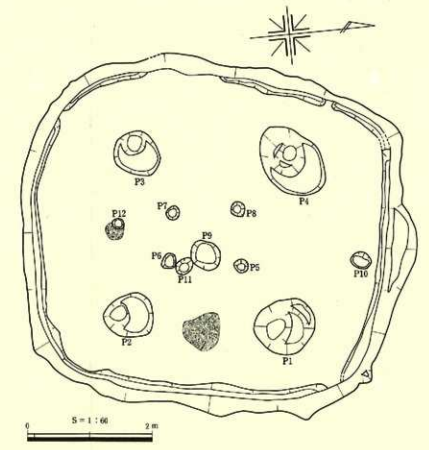
また、SI05西壁付近にP10が、貼床除去後のP2~P3の間にP12が検出された。それぞれの規模は、P10(32×28~13)cm、P12(17×16~20)cmである。性格は、P10は壁際にあることから出入りに関係する可能性がある。P12は焼土面を伴うものの性格は不明である。

中央ピットは、中央やや北側の不整形を呈すP19で、(69×58~48)cmを測る。埋土は単層で、炭化物・土器片を含む。貼床除去後の規模の変化は認められない。また、中央ピットの東西と北側を囲むように幅21~47cm、高さ2.3~5.3cmの高まりがみられた。この高まりの東側からP2にかけて炭化物を検出した。また、この高まりの縁辺で、やはり中央ピットを囲むように小ピットP5~P8を検出した。規模は、P5(30×22~7)cm、P6(22×19~17)cm、P7(26×24~14)cm、P8(39×26~9)cmで、貼床除去後、P11(29×22~14)cmを確認した。

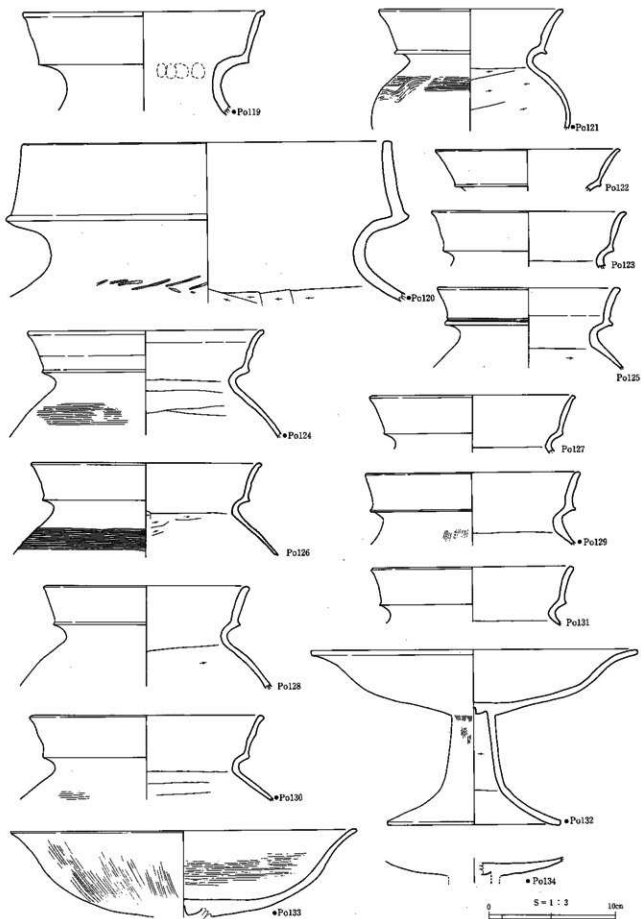
床面上では、P1~P2・P2~P3の間に、貼床除去後にもほぼ同位置に焼土面を確認した。床面全体に、灰褐色土(粘性が強い)による厚さ6~10cmの貼床が施されている。



挿図229 寺戸第2遺跡S105-06遺構図



挿図230 寺戸第2遺跡S105胎床除去後状況図



挿図231 寺戸第2遺跡S105出土遺物実測図(1)

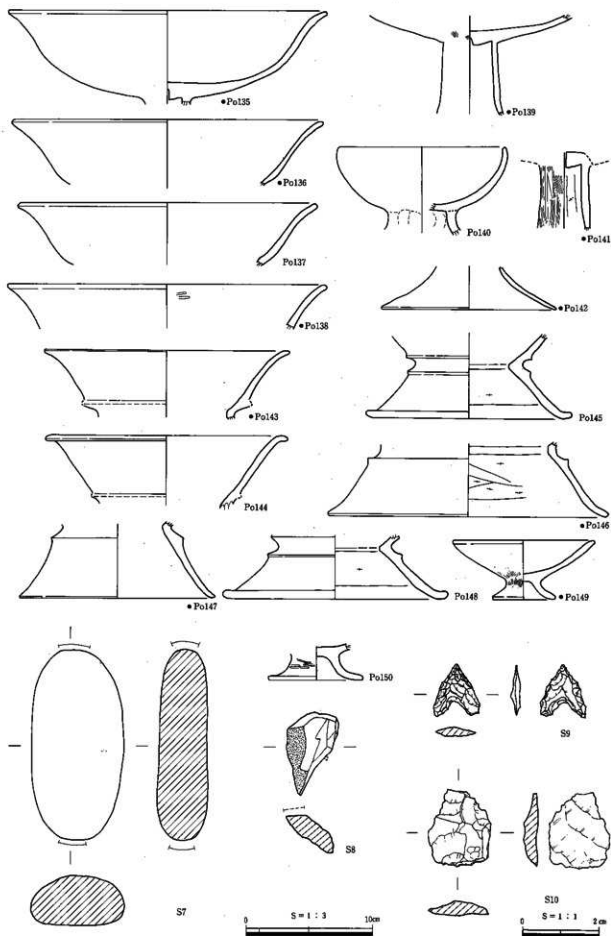


插图232 寺戸第2遺跡S105出土遺物実測図(2)

S I 06は、遺存状態はきわめて悪く、不明な点が多いが、南北1.58m、東西4.52m以上の隅丸方形か長方形を呈するものと考えられる。床面積は、残存で6.1㎡である。壁高は、最も遺存状態のよい北壁で、最大20cmを測る。

壁溝は南側で途切れているが、幅20~48cm、深さ1~10cmを測る。断面逆台形を呈する。

ビットは5個検出したが、主柱穴とみられるものは確認できなかった。それぞれの規模は、P 1 (52×36~25) cm、P 2 (38×30~20) cm、P 3 (52×46~13) cm、P 4 (60×48~31) cm、P 5 (41×40~14) cmである。

埋土は、S I 05は8層、S I 06は2層に分層できた。S I 05は、②層が短期間に堆積した様相を示す。S I 06の南側は、斜面のため流失し、その後、①層により擾乱を受けたものと考えられる。

S I 05で図化できた遺物には、土師器壺Po119・120、甕Po121~131、高坏Po132~142、鼓形器台Po143~148、低脚环Po149・150、敲石S 7、砥石S 8、石砥S 9、剃片S10である。

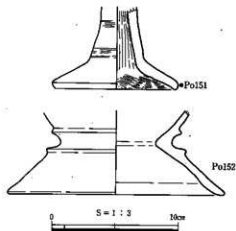
これらの遺物は住居南東隅付近に集中して出土した。遺存状態はきわめて悪く、風化が著しいものが多数を占めた。床面上の遺物は、Po119・120・121・124・129・130・132~136・139・141・142・146・147・149である。また、P 6からPo143が、P 9からPo138が出土した。

また、炭化材が出土しており、樹種鑑定および¹⁴C年代測定を行った。樹種は、No438・No463はスギ材、No442はクリ材であった。年代は、KS U-2755が1990±50B.P.、KS U-2757が1340±100B.P.、KS U-2756が1910±120B.P.であった。

S I 06で図化できたものには、土師器高坏Po151、鼓形器台Po152である。このうちPo151は、壁溝の中から出土した。Po152は周辺からの出土である。

床面出土遺物および堆積状況から、S I 05は南谷大山編年V期、古墳時代前期前葉ごろ、¹⁴C年代測定の結果では、測定誤差を考慮すると1世紀半ばから3世紀半ばごろになるうか。S I 06は古墳時代中期ごろと考えられる。

(八軒)



押図233 寺戸第2遺跡S I 06出土遺物実測図

S I 07 (押図234・235、図版66・76)

調査区南側のB 6グリッドにあり、標高62.7~63.1mの南側に傾斜する斜面に立地する。北東側約5mにはS I 01、南東側約4mにはS I 02がある。

遺存状態は非常に悪く、ビットおよび焼土面が検出されたことによって竪穴住居と判断した。平面は、南側は流失しているが残存する壁より方形と考えられる。規模は、東西2.9m、南北1.8m以上を測る。壁高は、最も遺存状態のよい北側で最大0.13mを測る。

床面上で4個のビットを検出したが、主柱穴であるのかどうか不明である。それぞれの規模は、P 1 (42×36~4) cm、P 2 (41×32~6) cm、P 3 (22×19~48) cm、P 4 (31×27~34) cmである。P 1・2は、かなり床面を掘り過ぎた段階で検出した。

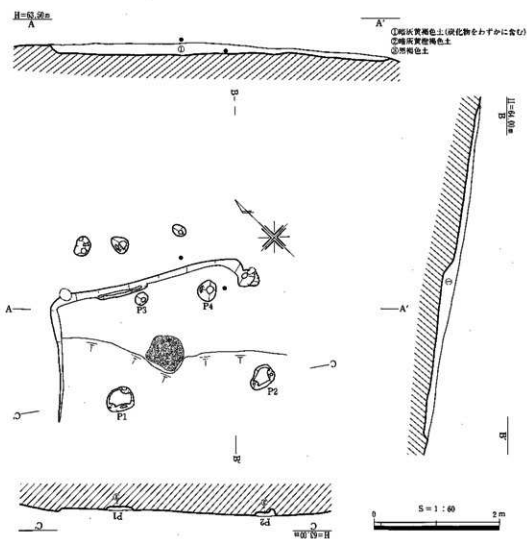
壁溝は、北側にわずかに検出された。幅8cm、深さ3cmを測る。

埋土は、暗灰黄褐色土単層である。

図化できた遺物には、弥生土器甕Po153・154がある。いずれも、埋土中および周辺からの出土である。

出土遺物から、南谷大山編年III期、弥生時代後期後葉ごろのものと考えられる。

(牧本)



挿図234 寺戸第2遺跡S107遺構図

S108 (挿図236・237、図版67・76)

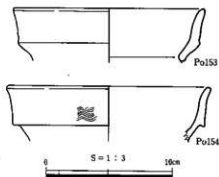
調査区中央西側の、F5・6グリッドにあり、標高63.1~64.3mの西側へ傾斜する斜面に立地する。

西側の大半を流失しており、遺存状態は悪い。検出できた東側の壁から、平面形は方形ないしは長方形を呈すると考えられる。規模は、南北6.16m、東西は検出できたピットから、3.20m以上を測り、床面積は19.8㎡以上である。壁高は、最も遺存状態状態のよい東壁で最大0.25mである。

壁溝は遺存するそれぞれの壁で検出され、北側では、床面に向かって延びている。規模は幅18~30cm、深さ4~8cmを測り、断面逆台形を呈す。

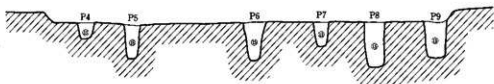
主柱穴はP1・2の2個と思われ、それぞれの規模はP1(28×22~35)cm、P2(44×43~68)cmを測る。柱穴間距離は3.70mである。

主柱穴とは別に、東側壁溝内でP4~P9を検出した。これらの内、P4・7以外は、東壁外側を挟り込むように掘り込まれており、尾根を支える構造材が立っていたものと考えられる。それぞれの規模はP4(29×21-

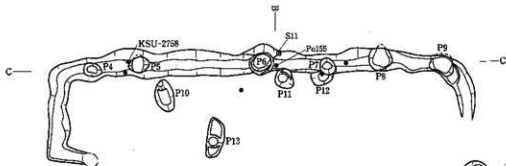
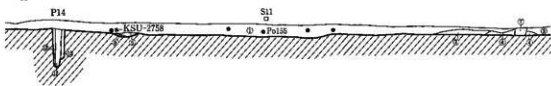


挿図235 寺戸第2遺跡S107出土遺物実測図

H=64.70m
C

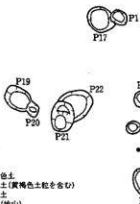


H=64.70m
A

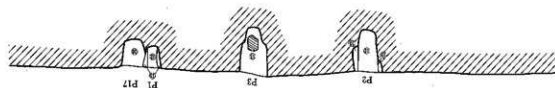


A— P14

A'—



- ①暗灰赤褐色土
- ②灰赤褐色土(黄褐色土粒を含む)
- ③灰褐色土
- ④黄褐色土(埴山)
- ⑤灰褐色土(黄褐色土粒を含む)
- ⑥灰褐色土(黄褐色土粒を多量を含む)
- ⑦灰褐色土(木の屑による擾乱)
- ⑧灰褐色土
- ⑨暗灰赤褐色土(炭小片を含む、しまりがよい)
- ⑩黄灰褐色土(⑨より淡く、炭小片を含みしまりがよい)
- ⑪灰褐色土(炭小片をわずかに含む、しまりがよい)
- ⑫灰褐色土(やや粘質)
- ⑬黄褐色土
- ⑭暗灰赤褐色土(炭小片を含む、しまりがよい)
- ⑮灰黄褐色土(炭小片をわずかに含む)



D

D
昭和19=日

S = 1 : 60
0 2m

挿図236 寺戸第2遺跡S106遺構図

26) cm, P 5 (35×27-55) cm, P 6 (39×32-62) cm, P 7 (28×24-40) cm, P 8 (40×36-71) cm, P 9 (39×25-58) cmを測る。また、南北両壁の壁溝が延びると思われる延長線上で検出された、P14・16・18・20・26も、P4～9と同様の性格を持つ可能性がある。

P1とP2の中間で中央ビットP3が検出された。平面形は上縁部、底部とも円形を呈し、(42×40-53)cmに掘り込んだ底部を、さらに(32×30-24)cm掘り込んだ二段掘りとなっている。遺物は出土していないが、ビット中央の底部から浮いた位置で、長さ27cm、幅18cm、厚さ13cmを測る直方体をなす自然石が出土している。埋土は1層で、壁溝内で検出したビットと同じである。このことから、何らかの構造物が立っていた可能性がある。

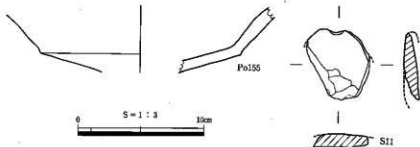
埋土は11層に分層できた。この内、④層は地山で、その上面が床面を示し、⑨-⑩層は、流失した際、もしくはその後には積したものであろう。

凶化できた遺物に高環Po155、石鏃S11がある。いずれも埋土中の出土である。

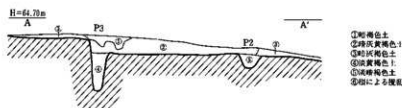
また、東側壁溝内で炭化材(Na583・584)が出土しており、Na583はヒノキと同定された。

出土遺物から、古墳時代中期ごろのものと考えられる。壁溝内出土の炭化材(KSU-2758)の¹⁴C年代測定の結果、1350±60B.P.という結果が得られた。

(原田)



挿図237 寺戸第2遺跡S108出土遺物実測図

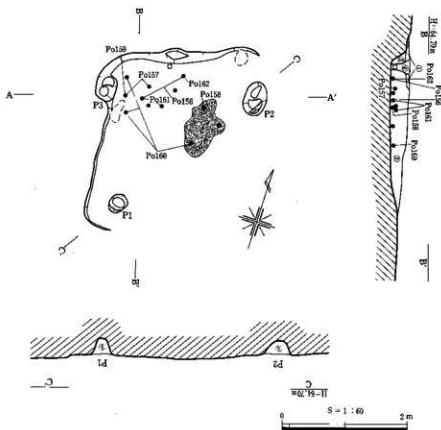


S109 (挿図238・239、図版67・76)

調査区東側のD8グリッドにあり、標高64.2-64.3mの平坦面に立地する。南西側約1mにはSK05、北東側約3mにはSK13がある。

遺存状態は非常に悪く、ビットおよび焼土面が検出されたことによって堅穴住居と判断した。平面は、東側は流失しているが残存する壁より方形と考えられる。規模は、南北2.8m、東西2.3mを測る。壁高は、最も遺存状態のよい南側で最大0.14mを測る。

床面上で3個のビットを検出したが、主柱穴であるのかどうか不明である。それぞれの規模



挿図238 寺戸第2遺跡S109遺構図

は、P 1 (31×27-27) cm、P 2 (53×34-22) cm、P 3 (41×33-79) cmである。

壁溝は、検出されていない。

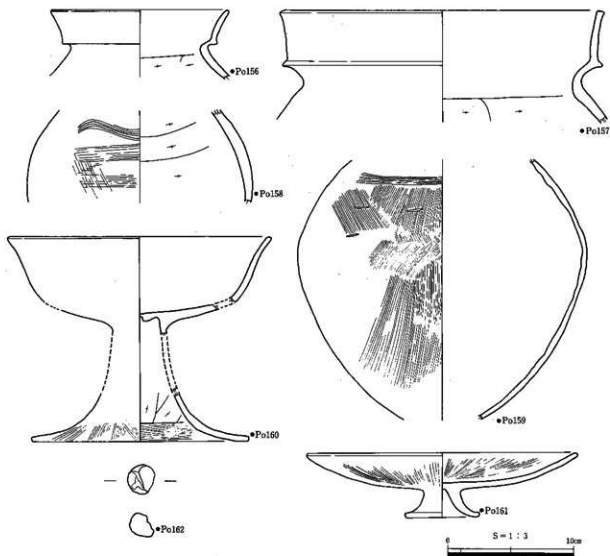
中央やや北寄り、不整形に広がる焼土面を一か所検出した。

埋土は、3層に分層できたが、②層が厚く堆積している。

図化できた遺物には、土師器甕Po156・157、胴部Po158・159、高坏Po160、低脚坏Po161、土玉Po162がある。いずれも床面の北側で検出された。離れた位置で接合するものが多く、破碎され一括廃棄されたものと考えられる。

床面出土遺物から、南谷大山編年V期、古墳時代前期前葉ごろのものと考えられる。

(牧本)

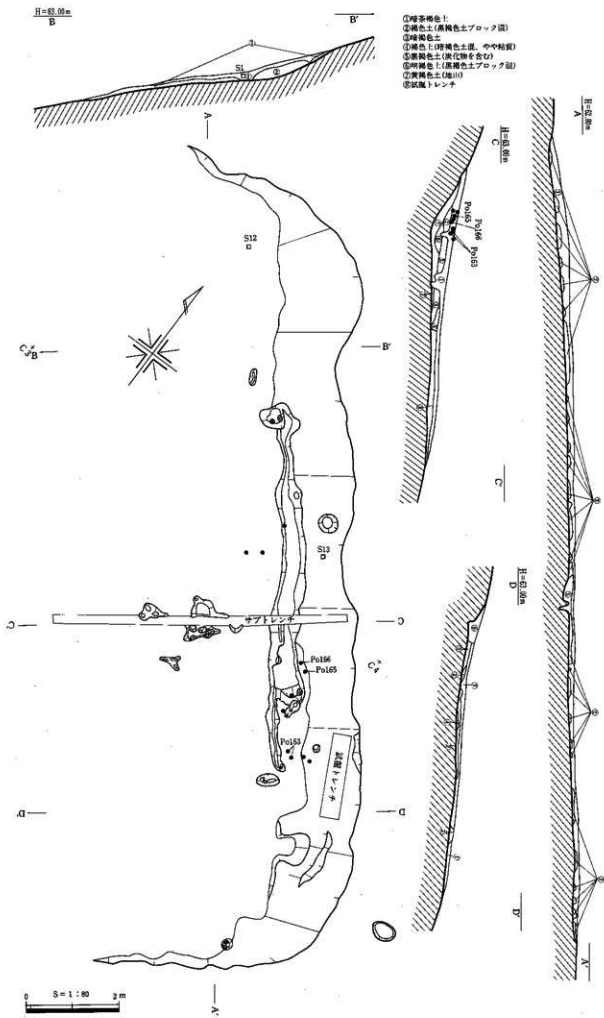


挿図239 寺戸第2遺跡S109出土遺物実測図

第3節 段状遺構

SS01 (挿図240・241、図版67・76)

調査区南西側のC4・D4・C5グリッドにあり、標高61.2~62.3mの南西側に傾斜する斜面に立地する。北側5mにS I05が、南東側5mにS I04がある。



挿図240 寺戸第2遺跡SS81遺構図

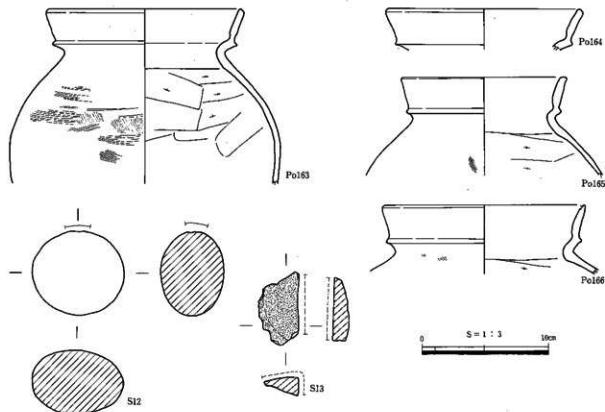
遺存状態は悪く不明な点が多いが、斜面を段状にカットし、長さ16m、幅3.8m以上の不整な長方形の平坦面を作っている。掘り込みの深さは、最大0.67mを測る。

平坦面上で、北西～南東方向に延びる溝状遺構を確認した。規模は、幅0.15～0.71m、長さ7.9mを測る。

埋土は4層に分層できた。それぞれ、斜面の下側に向い堆積しており、自然堆積と考えられる。

遺物は、土師器甕Po163～166、叢石S12、磁石S13が出土した。このうちPo163・165・166は西側斜面、S13は中央斜面、S12は北側斜面それぞれ①層から出土した。

埋土中出土遺物から、南谷大山VI期新相、古墳時代前期後葉ごろと考えられる。性格は不明である。(八時)



挿図241 寺戸第2遺跡S S01出土遺物実測図

S S02 (挿図242・243、図版68・76)

調査区中央やや西寄りのD5グリッドにあり、標高63.7～64.2mの西側に傾斜する斜面に立地する。南西側約7mにはS S01、北西側約4mにはS I05がある。

斜面を段状にカットし、長さ6.7m、幅3.3m以上のいびつな隅丸長方形の平坦面を作っている。掘り込みの深さは最大0.24mを測る。

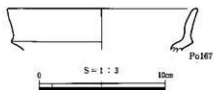
平坦面上で、5個のピットが検出された。いずれも不規則に並んでいる。それぞれの規模はP1(59×58-16)cm、P2(87×57-12)cm、P3(42×37-18)cm、P4(68×45-16)cm、P5(57×49-21)cmを測る。

埋土は、3層に分層できた。

中央やや東側の床面から土師器甕Po167が出土している。

床面出土の土器から、南谷山VI期新相、古墳時代前期後葉ごろのものと考えられる。性格は不明である。

(牧本)



挿図242 寺戸第2遺跡S S02出土遺物実測図

SS03 (挿図244・245、図版68・77)

調査区南端のA5・6、B5・6グリッドにあり、標高60.5~61.4mの南西側に傾斜する斜面に立地する。北側約0.8mにSK01、約1mにS104、東側約5mにS102、北東側約5.5mにS107がある。

南西側に傾斜する斜面を高さ約0.4m削り込み、平坦面を作っている。南側は調査区外に続いており、調査できたものは、北西~南東7.8m、北東~南西4.2mを測る。

平坦面には3個のピットがあり、それぞれの規模は、P1(42×39~31)cm、P2(45×30~17)cm、P3(50×40~20)cmを測る。

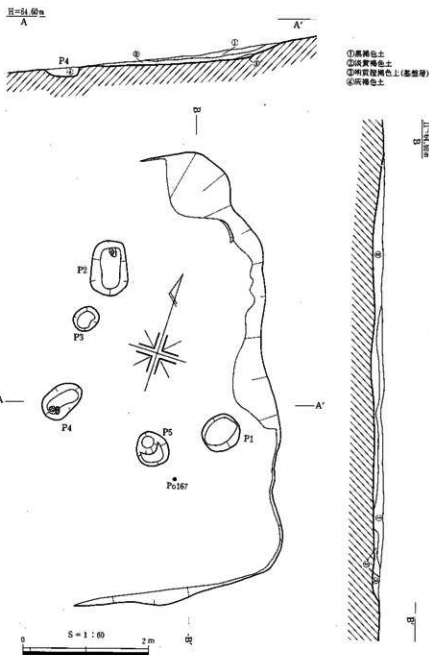
埋土は1層で、平坦面には焼土面がみられる。

図化できたものは、弥生土器甕Po168~177、小型甕Po178、脚付甕Po179、甕形土器Po180、土玉Po181である。

これらのうち、Po168・173・175・177・180は床面からの出土で、他は埋土中からの出土である。

出土遺物から、南谷大山IV期、弥生時代後期後葉ごろのものと考えられる。性格は不明である。

(長尾)



挿図243 寺戸第2遺跡SS02遺構図

SS04 (挿図246・247、図版68・77)

調査区西寄りのC5グリッドにあり、標高62.7~63.1mの南西側に傾斜する斜面に立地する。西側約3mにはSS01、南側約4mにはS104がある。

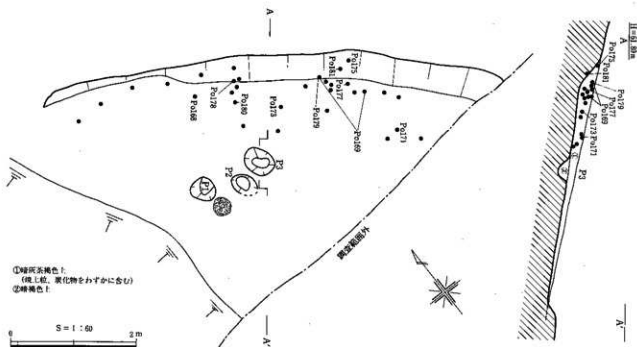
斜面を段状にカットし、長さ3.2m、幅1.2m以上のいびつな楕円形の平坦面を作っている。掘り込みの深さは最大0.31mを測る。

埋土は、2層に分層できた。①層には炭化物をわずかに含んでいる。

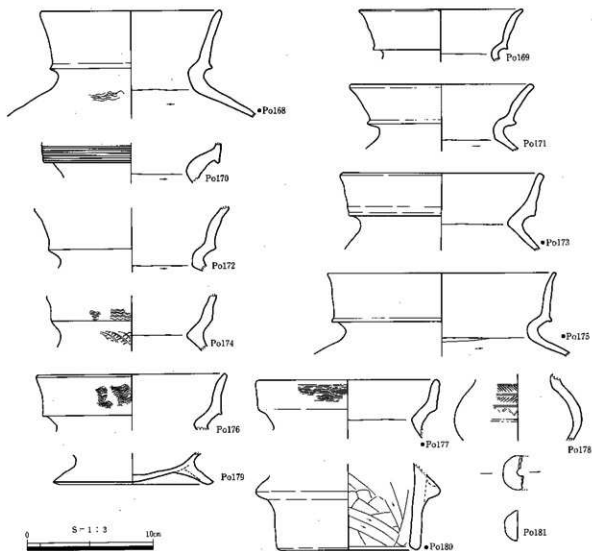
中央壁寄り埋土中で石鏃S14が出土している。

時期・性格とも不明である。

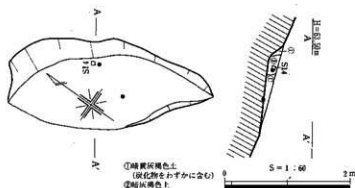
(牧本)



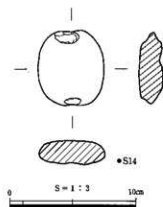
挿図244 寺戸第2遺跡 S83遺構図



挿図245 寺戸第2遺跡 S83出土遺物実測図



挿図246 寺戸第2遺跡S S04遺構図



挿図247 寺戸第2遺跡S S04出土遺物実測図

第4節 土坑・土壇

S K01 (挿図248、図版68)

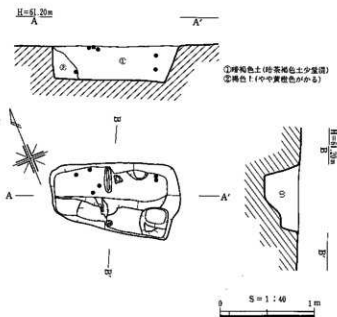
調査区南側のB5グリッドにある。標高60.8~61.9mの南西側に傾斜する急斜面のやや傾斜が緩やかになった部分にあるS I04の床面南端に立地する。上縁部全周の標高は、ほぼ60.9mである。長軸はほぼ等高線に平行である。南側約0.8mにSS03、東側約8mにS I07、北側約10mにSS04、北西側約10mにSS01がある。

遺存状態はよい。平面は上縁部・底部ともほぼ長方形を呈する。規模は、上縁部長軸1.35m×短軸0.72m、底部長軸1.19m×短軸0.33mを測る。深さは、最大0.42mを測り、断面は不整形を呈する。

埋土は2層に分層できた。

埋土中から弥生土器が出土しているが、図化できなかった。

出土遺物から、弥生時代後期ごろのものと考えられるが、性格は不明である。(長尾)



挿図248 寺戸第2遺跡S K01遺構図

S K02 (挿図249)

調査区のG6グリッドにあり、標高約63.3~63.5mの北側に向かって傾斜する斜面に立地する。ピット群01中にあり、その西端に位置する。

遺存状態は比較的良好、平面は上縁部不整形、底部長方形を呈する。規模は上縁部長軸1.71m×短軸1.33m、底部長軸0.98m×短軸0.68mを測る。深さは最大0.59mを測り、断面は東側に段をもつ不整な逆台形を呈する。

埋土は4層に分層できた。

埋土中より土器片が出土しているが、図化できなかった。

このため、時期・性格ともに不明である。(岩崎)

SK03 (挿図250、図版68)

調査区北東寄りのG7グリッドにあり、標高約62.9~63.1mの北東側へ緩やかに傾斜する斜面に立地する。西側約8.6mにSK02が位置する。

削平されているため遺存状態はあまりよくない。平面は上縁部不整形円形を呈す。底部は二段に掘り込まれる不整形である。規模は上縁部長軸約1.50m×短軸0.72m、深さは、22mを測り、断面は逆台形を呈す。

埋土は2層に分層できた。

遺物が出土していないため、SK03の時期・性格ともに不明である。(井上)

SK04 (挿図251、図版68)

調査区南東側のD8グリッドにあり、標高64.7mの平坦面に立地する。北東側約1mにはS109、南側約8mにはSK05がある。

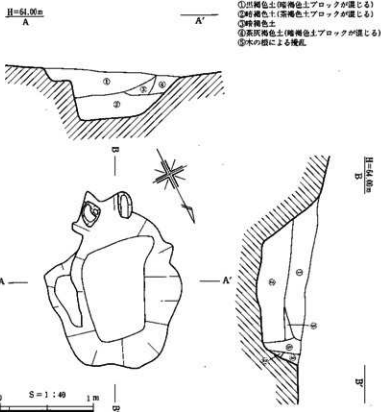
遺存状態はよく、平面は上縁部・底部ともに不整形な長方形を呈す。規模は、上縁部長軸1.0m×短軸0.6m、底部長軸0.93m×短軸0.54mを測る。断面不整形な逆台形状を呈し、深さ0.13~0.24mを測る。

底部および壁際で径約10cm前後、深さ3~10cmを測る小ピットが5個検出された。用途は不明である。

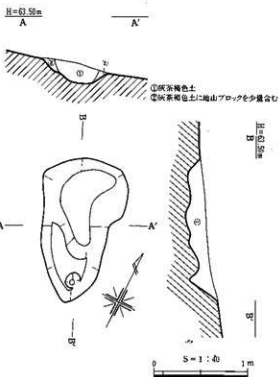
埋土は、暗灰黄褐色土単層である。

埋土中から土師器片が出土しているが、図化できなかった。

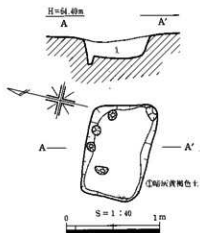
良好な土器が出土していないため、時期・性格は不明である。(牧本)



挿図249 寺戸第2遺跡SK02遺構図



挿図250 寺戸第2遺跡SK03遺構図



挿図251 寺戸第2遺跡SK04遺構図

S K 05 (押図252、図版69)

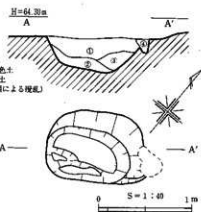
調査地西より南側のC 8 グリッドにあり、標高64.1m付近に立地する。

平面は上縁部、底部とも隅丸長方形を呈し、断面形は逆台形を呈す。規模は(1.05以上×0.73-0.36) mを測る。

埋土は3層に分層できた。

遺物は全く出土しておらず、時期・性格ともに不明である。

(原田)



押図252 寺戸第2遺跡SK05遺構図

S K 06 (押図253、図版69)

調査区中央のF 7 グリッドにあり、標高64.7mの平坦面に立地する。西側約7mにはSK09、東側約9mにはSK07がある。

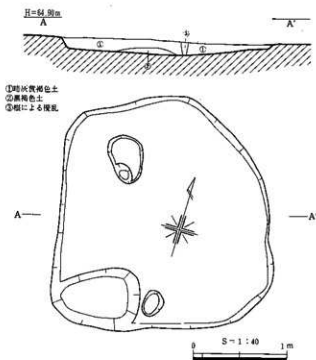
遺存状態は悪く、平面は上縁部・底部ともに不整な方形を呈す。規模は、上縁部長軸2.45m×短軸2.21m、底部長軸2.31m×短軸2.15mを測る。断面は、浅く不整な逆台形状を呈し、深さ8-15cmを測る。

底部には2個のピットが検出された。それぞれの規模は、P 1 (52×35-7) cm、P 2 (28×20-10) cmを測る。

埋土は、2層に分層できた。

遺物は全く出土しておらず、時期・性格ともに不明である。

(牧本)



押図253 寺戸第2遺跡SK06遺構図

S K 07 (押図254-256、図版69-77)

調査区中央東端のF 8 グリッドにあり、標高61.2-62.3 mの東側へ傾斜する斜面に立地する。

遺存状態は悪く、東側は流失している。平面形は、遺存する部分から上縁部、底部とも楕円形を呈すと考えられる。規模は上縁部長軸3.3m以上×短軸2.29m以上、底部長軸2.98m以上×短軸2.06m以上を測る。断面は逆台形を呈し、深さは両壁で最大0.72mを測る。

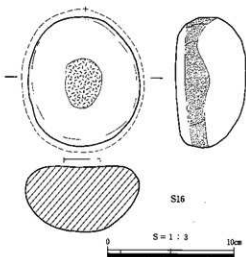
埋土は6層に分層できた。SK07は⑦層上面から掘り込まれており、⑧・①層は基盤層、⑨層は木の根によって擾乱を受けた層であることが、土層断面で確認された。

凶化できたものに縄文土器片Po189、土師器壺Po186、甕Po182-184、底部Po185、高坏Po187・188、石匙S15、擦石S16がある。

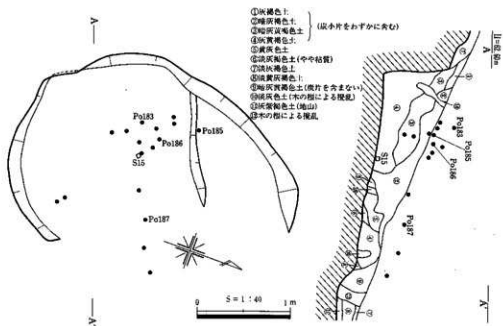
石匙は底面而出土しているが、他は検出面上もしくは埋土中から出土したもので、斜面上方から流れ込んだと考えられるものである。

出土した石匙から、縄文時代のものと考えられるが、性格は不明である。

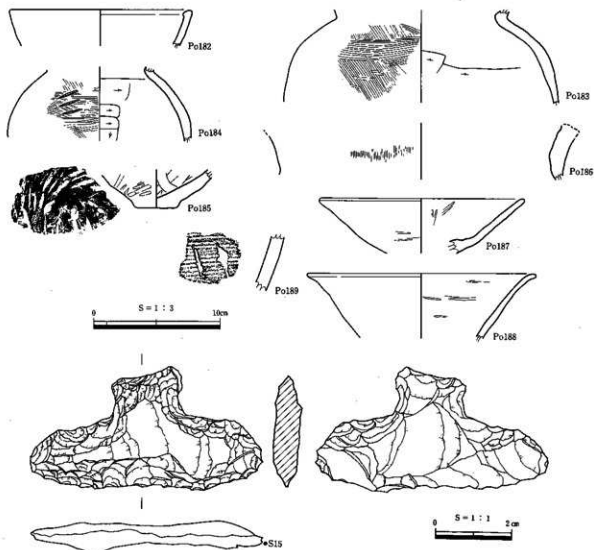
(原田)



押図254 寺戸第2遺跡SK07出土遺物実測図(1)



挿図255 寺戸第2遺跡SK07遺構図



挿図256 寺戸第2遺跡SK07出土遺物実測図(2)

SK08 (押図257・258、図版69・77)

調査区中央のE6グリッドにあり、標高64.7~64.9mの平坦面に立地する。東側約2mにはSK09、北側約4mにはSI08がある。

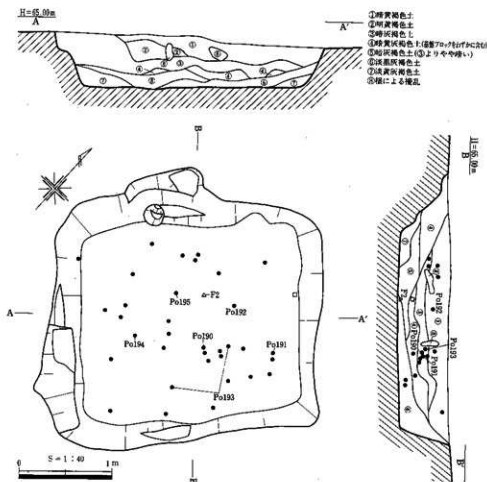
遺存状態は非常によく、平面は上縁部・底部ともに長方形を呈す。規模は、上縁部長軸2.88m×短軸2.6m、底部長軸2.31m×短軸2.09mを測る。断面逆台形状を呈し、深さ0.4~0.58mを測る。

北西壁際で(21×21~22)cmを測るビットを検出した。用途不明である。

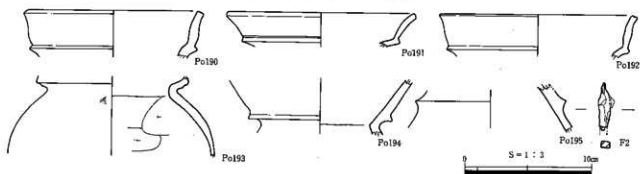
埋土は、7層に分層できた。

図化できた遺物には、土師器壺Po190~Po192、胴部Po193、鼓形器台Po194・195、鉄鍔部F2がある。いずれも、埋土中の出土である。

出土遺物から、南谷大山VI期新相、古墳時代前期前半ごろのものと考えられる。



押図257 寺戸第2遺跡SK08遺構図



押図258 寺戸第2遺跡SK08出土遺物実測図

性格は不明であるが、他の土坑と形態が異なり、柱穴等は検出されていないが、竪穴住居跡の可能性もある。

(牧本)

SK09 (挿図259-261、図版70・77・78)

調査区は中央部の平坦面状のE6グリッドにあり、標高64.8~64.9mに立地する。西側約1mにSK08が、北東約6mにSK06がある。

平面は、上縁部、底部とも不整な方形を呈す。遺存状態は良好で、垂直方向に掘り込まれる。規模は、上縁部長軸1.61m×短軸0.8m、底部長軸1.47m×短軸0.72mを測る。深さは約0.54mを測り、断面は逆台形である。

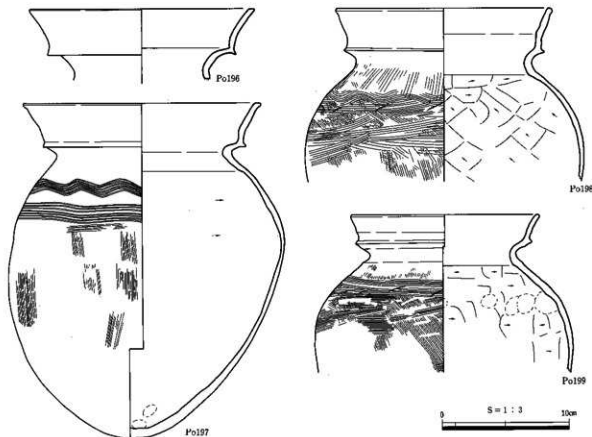
埋土は2層に分層できた。このうち遺物が密集して出土したのは、①層の下側、②層との境付近であった。①層は炭化物を含んだ層であり、中央やや南西側付近が落ち込んでいた。②層はしまっており、遺物は出土しなかった。

図化できた遺物は、土師器壺Po196、甕Po197~209、低脚環Po210・211、鼓形器台Po212・213である。甕類が多数を占めた。これらの遺物は、いずれも細片の状態で出土しており、離れた位置でも接合するものが目立った。甕類は、体部片が重なって出土するものがあり、土圧により潰されたというより投げ込まれたような様相を呈する。

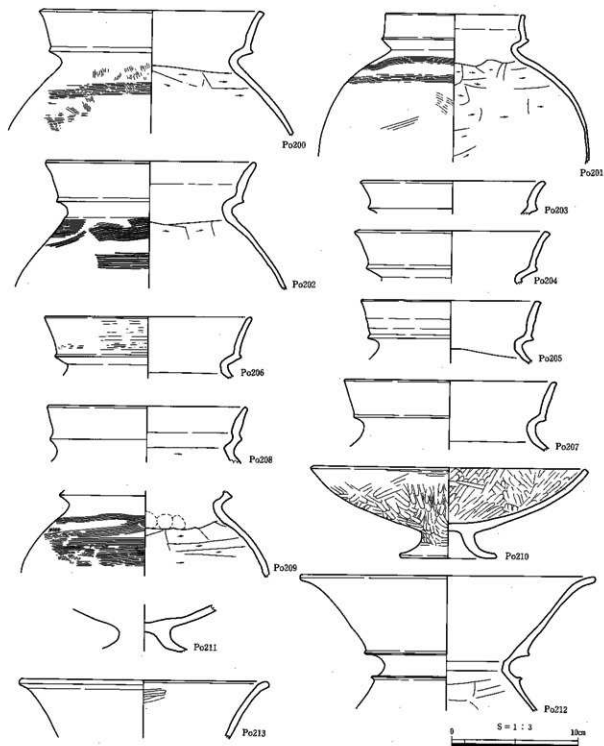
出土遺物から判断すると、SK09は南谷大山V期、古墳時代前期前葉ごろのものと考えられる。付近にはSI01・05・09等の同時期とみられる住居跡があり、これらとの関係も考えられる。

SK09は、遺物の出土状況から、廃棄土坑と考えられる。遺物の時期差もみられないことから、一時期に廃棄され埋められたと考えられる。ただし、遺構は直方体のプランの整った掘り方であり、ある程度堆積した後に廃棄されているなど、さらに検討すべき点も残る。

(八峠)



挿図259 寺戸第2遺跡SK09出土遺物実測図(1)

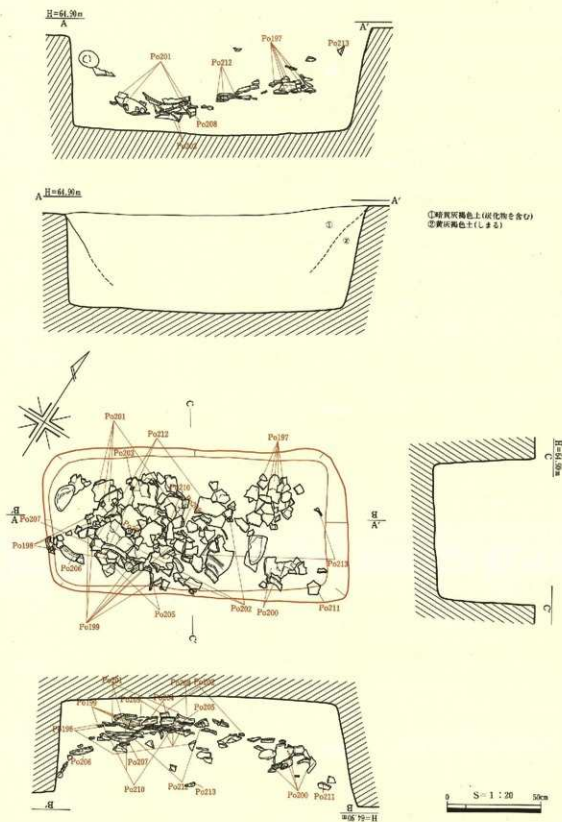


榎図288 寺戸第2遺跡SK09出土遺物実測図(2)

SK10 (榎図262、図版70)

調査区は中央西側の、E3・4グリッドにあり、標高61.1~61.6mの西側へ傾斜する斜面に立地する。

上縁部を深さ10~25cm掘り下げて二段掘りしており、平面形は、一段目が上縁部、底部とも不整な円形を呈し、規模は上縁部長軸1.86m×短軸1.66m、底部長軸1.63m×短軸1.43mを測る。二段目は上縁部、底部とも隅丸長方形を呈し、規模は上縁部長軸1.05m×短軸0.90m、底部長軸0.69m×短軸0.57mを測る。断面は逆台形を呈し、深さは最大1.40mを測る。なお、底面で自然石を検出したが、これは地山に含まれるものである。



〔時折灰褐色土(灰化物を含む)
 赤黄灰褐色土(しまる)〕

挿図261 寺戸第2遺跡SK09遺構図・遺物出土状況図

埋土は3層に分層できた。
 上層から流れ込んだと考えられる土師器片が出土しているが、図化できなかった。
 時期・性格ともに不明である。

(原田)

SK11 (挿図263、図版70)

調査区中央西寄りのE3グリッドにあり、標高約59.3~59.7mの北西側へやや急に傾斜する斜面に立地する。東側約3.5mにSK10が位置する。

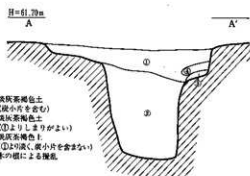
削平されているため遺存状態はよくない。平面は上縁部・底部とも不整形円形を呈し、底部の一部が約3.5cmの段差をもち、二段に掘り込まれる。規模は、上縁部長軸1.88m×短軸1.37m、底部部長軸1.55m×短軸1.15mを測る。深さは0.73mを測り、断面は長方形を呈す。

埋土は8層に分層できた。

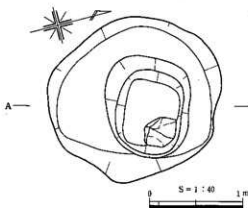
埋土中から土師器片が6点ほど出土しているが、図化できなかった。

底面からの出土遺物はなく、時期は判断できない。性格も不明である。

(井上)



- ①灰灰系褐色土 (灰片を含む)
- ②灰灰系褐色土と明茶褐色土の混じり
- ③灰灰系褐色土 (②よりしまりがよい)
- ④灰灰系褐色土 (②より灰く、灰小片を含まない)
- ⑤木の屑による埋土



挿図262 寺戸第2遺跡SK10遺構図

SK12 (挿図264、図版70)

調査区中央やや北西寄りのF4グリッドにあり、標高約59.9~60.3mの北西側へやや急に傾斜する斜面に立地する。南側約7.5mにSK10が位置する。

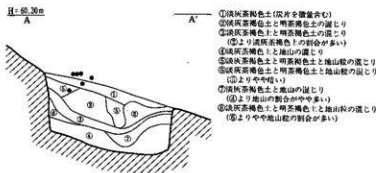
削平されているため遺存状態はよくない。平面は上縁部・底部とも円形を呈す。規模は上縁部長軸0.91m×短軸0.84m、底部部長軸0.76m×短軸0.74mを測る。深さは0.96mを測り、断面は長方形を呈す。底面に長軸0.21m×短軸0.14m、深さ0.31mを測る底面ビットを検出した。

埋土は3層に分層できた。

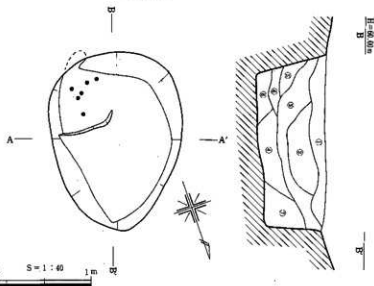
遺構検出時に土師器片を数点検出したが、いずれも図化できなかった。

時期を判断する遺物は出土していないが、遺構の形態から縄文時代ごろの落とし穴と考えられる。

(井上)



- ①灰灰系褐色土 (灰片を微量含む)
- ②灰灰系褐色土と明茶褐色土の混じり
- ③灰灰系褐色土と明茶褐色土の混じり
- ④より灰灰系褐色土の割合が多い
- ⑤灰灰系褐色土と地山の混じり
- ⑥灰灰系褐色土と明茶褐色土と地山の混じり
- ⑦よりやや暗い
- ⑧灰灰系褐色土と地山の混じり
- ⑨より地山の割合がやや多い
- ⑩灰灰系褐色土と明茶褐色土と地山の混じり
- ⑪よりやや地山の割合が多い



挿図263 寺戸第2遺跡SK11遺構図

SK13 (挿図265・266、図版71・78)

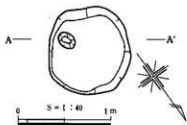
調査区は中央東側の、E8グリッドにあり、標高63.9~64.1mの東側へ傾斜する斜面に立地する。

上面で土師器が出土したことから、サブトレランチで掘り下げ、遺構の検出を試みたが、輪郭

H=61.00m



- ① 灰赤褐色土と明茶褐色土の混じり
 ② 灰赤褐色土と明茶褐色土の混じり
 ③ 灰赤褐色土と明茶褐色土の割合がやや多い
 ④ 灰赤褐色土と明茶褐色土と
 黒山粒の混じり



挿図264 寺戸第2遺跡SK12遺構図

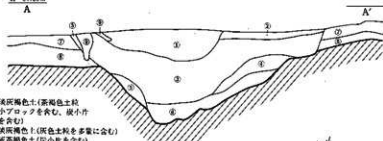
が掘られないため、ベルト部分を残して、輪郭が掘られる深さまで全体を掘り下げた。結果、正確な規模は不明であるが、(2.66×1.36-0.99)mを測り、上縁部、底部とも不定形を呈し、断面不整なV字状をなす土坑を検出した。埋土は6層に分層でき、⑦・⑧層は基盤層である。

上層から土師器甕Po214、鼓形器台Po215が、埋土下層から縄文土器Po216が出土した。

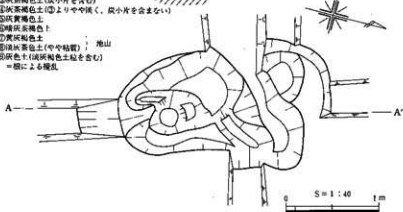
埋土下層出土の縄文土器から、縄文時代後期と考えられるが、性格は不明である。

(原田)

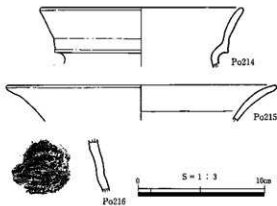
H=64.20m



- ① 灰赤褐色土(茶褐色土粒
 小アロクを含む、炭小片
 を含む)
 ② 灰赤褐色土(灰色土粒を多量に含む)
 ③ 灰赤褐色土(炭小片を含む)
 ④ 灰赤褐色土(②よりやや固く、炭小片を含まない)
 ⑤ 灰赤褐色土
 ⑥ 暗灰茶褐色土
 ⑦ 黄褐色土
 ⑧ 黒山土(中々粘り)；地山
 ⑨ 灰色土(灰赤褐色土粒を含む)
 = 層による擾乱



挿図265 寺戸第2遺跡SK13遺構図



挿図266 寺戸第2遺跡SK13出土遺物実測図

第5節 ピット群

ピット群01 (挿図267・269・270、図版71)

調査区のG5・6グリッドにあり、標高62.2-63.8mの北西に向かって傾斜する斜面に立地する。ピット群の広がりには東西×南北で、11×12mである。西側にはS I 08が位置する。

総数26個検出されている。平面は不整形を呈するものが多い。また、P1・2は人為的に立てられたと考えられる石をもつ。規模等は挿表11を参照されたい。

埋土は、大きく分けて黒褐色土が入るものと灰茶褐色土が入るものとに分けられる。P1-10、P21-26が前者、P11-20が後者である。

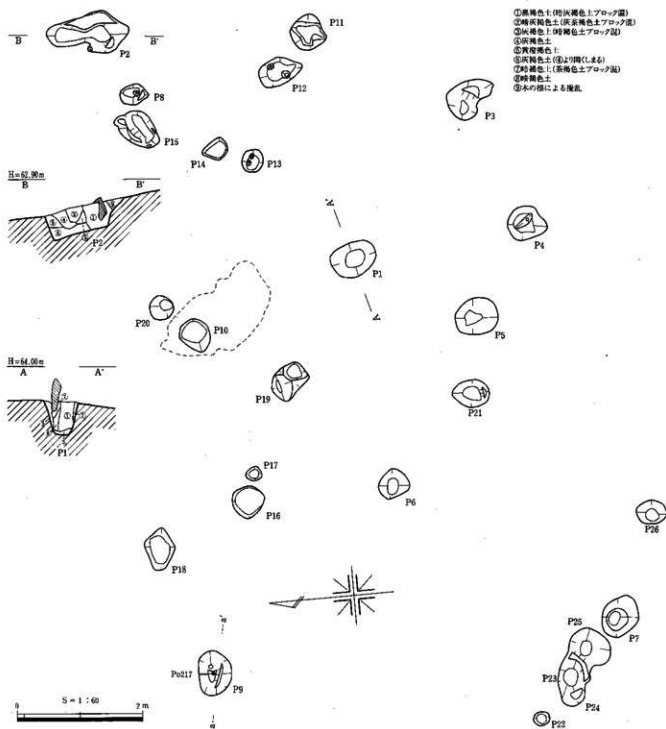
出土遺物は、図化できたものに、P9の埋土上層から出土した土師器甕Po217がある。またP1・8・10・17・19の埋土中より土器片が出土しているが、図化できなかった。

出土した遺物より南谷大山VI期新相、古墳時代前期後葉ごろのものと考えられるが、性格は不明である。

(岩崎)

ビット 番号	縦 (m) 長軸×短軸-深さ	備考	ビット 番号	縦 (m) 長軸×短軸-深さ	備考	ビット 番号	縦 (m) 長軸×短軸-深さ	備考
P 1	73×52-57	石、土器	P 10	52×45-39	土器片	P 19	62×45-24	土器片
P 2	133×68-42	石	P 11	51×51-24		P 20	39×38-25	
P 3	73×56-42		P 12	70×44-22		P 21	60×45-27	
P 4	55×55-39		P 13	37×33-17		P 22	27×23-13	
P 5	70×61-58		P 14	37×32-16		P 23	52×42-66	
P 6	49×41-52		P 15	67×50-36		P 24	38×(22)-26	
P 7	69×56-58		P 16	48×48-28		P 25	69×51-74	
P 8	46×35-23	土器片	P 17	22×21-30	土器片	P 26	46×39-39	
P 9	73×52-70	礎	P 18	77×49-35				

挿表11 寺戸第2遺跡ビット群01-一覧表



挿表267 寺戸第2遺跡ビット群01遺構図



P5



P1



P6



P4



P2



P3



P7

E3



P11



P12



P10



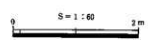
P8



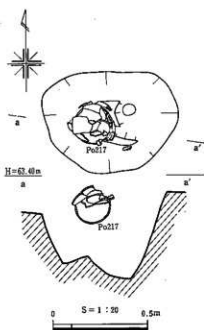
P9



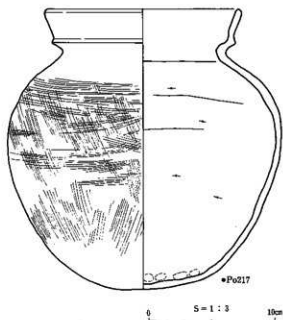
P15



挿図268 寺戸第2遺跡ビット群02遺構図



挿図269 寺戸第2遺跡ピット群01
P 9内土器出土状況図



挿図270 寺戸第2遺跡ピット群01P 9内出土遺物実測図

ピット群02 (挿図268)

調査区中央西寄りのE 3、F 3・4グリッドにあり、標高約59.0～61.3mの北西側から西側にかけてかなり急に傾斜する斜面に立地する。このピット群の周辺にはS K10、11、12の各遺構がそれぞれ位置する。

総数13個検出されている。不整形を呈するものがほとんどで、大きさ・深さはさほど大きくない。規模等は挿表12を参照されたい。

埋土は6層に分層できた。ピット内の埋土はすべて、分層できた埋土のいずれかが、単層で入る。

ピット内からは遺物が出土していないため、時期・性格は不明であるが、周辺から甕Po230・237・238、高坏Po257・260、低脚环Po262、鼓形器台Po266、須恵器环蓋Po273、須恵器甕Po274が出土している。(井上)

ピット番号	規 模 (cm) 長軸×短軸-深さ	備考	ピット番号	規 模 (cm) 長軸×短軸-深さ	備考	ピット番号	規 模 (cm) 長軸×短軸-深さ	備考
P 1	53×41-36		P 6	112×54-34		P 11	45×35-52	
P 2	38×38-40		P 7	64×53-45		P 12	71×46-24	
P 3	44×37-60		P 8	46×40-42		P 13	91×62-57	
P 4	74×49-53		P 9	42×36-42				
P 5	82×79-28		P 10	85×58-64				

挿表12 寺戸第2遺跡ピット群02一覧表

ピット群03 (挿図271)

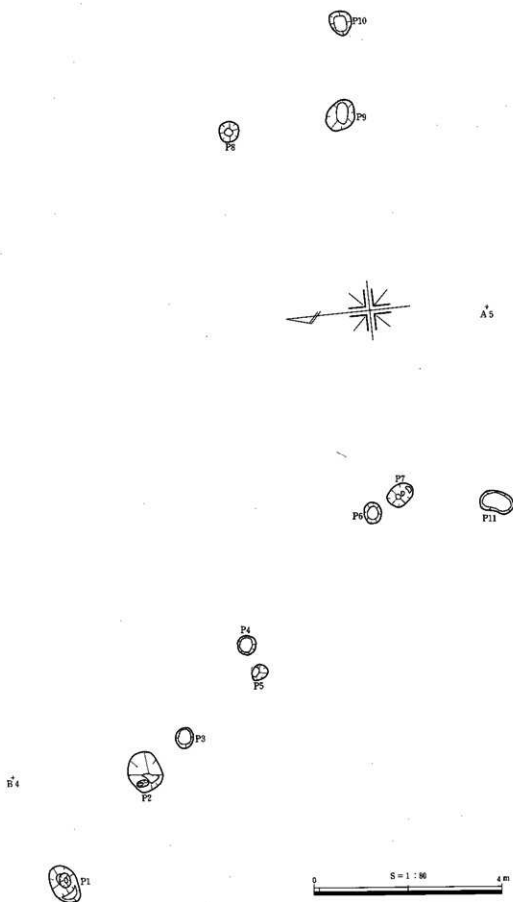
調査区南端のB 4～6グリッドにあり、標高60.0～63.3mの南東側に傾斜する斜面に立地する。

P 1・2・7・9・11は不整な楕円形、P 3～6・8・10は不整な円形を呈す。S I 04の西側～南側に直線状にP 1～P 7・P 11が、S I 07の南側にP 8～P 10がある。いずれも建物跡にはならず、不規則である。それぞれの規模は、挿表13を参照されたい。

埋土はいずれも単層であった。

P 5から土師器片が出土したが図化できなかった。

時期の特定はできないものの、周囲の遺構は古墳時代前期ごろのものであり、このピット群も同様な時期のも



挿図271 寺戸第2遺跡ピット群03遺構図

のと考えられる。

それぞれ S I 04、S I 07の南側に位置しているが、規則性も認められず性格は不明である。

(井上)

ピット 番号	縦 長軸×短軸-深さ	備考	ピット 番号	縦 長軸×短軸-深さ	備考	ピット 番号	縦 長軸×短軸-深さ	備考
P 1	84×55-49		P 5	35×28-30		P 9	68×55-61	
P 2	82×80-53		P 6	44×35-29		P 10	33×25-21	
P 3	43×37-23		P 7	57×45-66		P 11	72×39-28	
P 4	38×35-22		P 8	42×39-39				

挿表13 寺戸第2遺跡ピット群03一覽表

第6節 遺構外遺物 (挿図272~275、図版78)

遺構外、主に西側斜面のC 2・3、D 2・3グリッドから遺物が出土している。図化できたものには、土師器壺Po218~Po226、土師器甕Po227~Po250、弥生土器甕Po251~Po254、弥生土器底部Po255、土師器高坏Po256~Po261、低脚坏Po262、小型器台Po263、鼓形器台Po264~Po266、鉢形土器Po267、甕形土器Po268、土玉Po271・272、縄文土器深鉢と思われるPo269・Po270、須恵器环蓋Po273、須恵器甕Po274、石皿S17、敲石S18、砥石S19、扁平蛤歯石斧S20、磨製石斧S21、石鏃S22がある。

その他、図化できなかったが、常滑焼きと考えられる土器片も出土している。

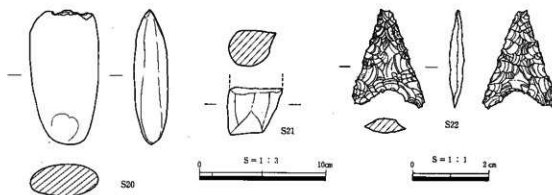
このうち、縄文土器Po269は糸底地に半截竹管文を二段に施すもので、口縁部には刻み目が入る。土師器Po226の内面には、光沢をもつ炭化物が付着している。須恵器Po274は、壺口縁部の破片と思われるが、陶色編年I期に遡る可能性がある。

石器のうち、S17・18はアブライト、S19は流紋岩質凝灰岩、S20・21は無斑晶安山岩、S22は黒曜石製である。S20・21ともかなり風化が進んでおり、全体が白っぽくなっている。

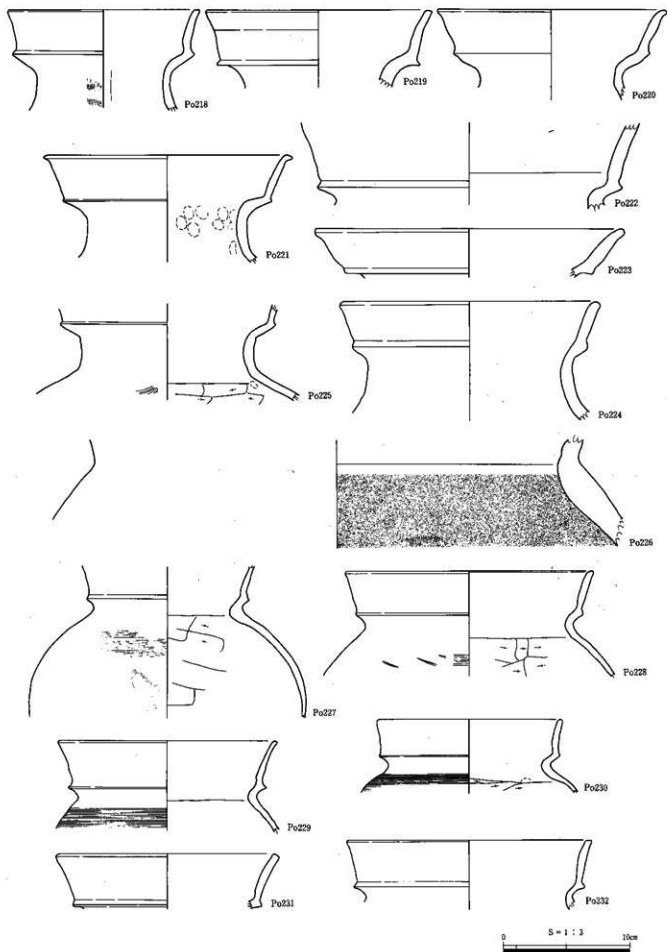
これらは、縄文時代前期 (Po269)、弥生時代後期中葉から後葉 (Po251~Po255・Po264・Po267)、古墳時代前期 (Po218~Po224・Po227~Po250・Po256・Po263・Po265・Po266・Po268)、古墳時代中期 (Po266・Po257~Po261・Po274)、奈良時代 (Po273) に分けることができる。

概ね、当遺跡の遺構の時期と重なるものが大半を占め、これらは丘腹上の平坦面に展開する遺構から転落したものと考えられるが、縄文前期まで遡る可能性がある遺物がある他、中世以降まで下る遺物も含まれていることから、寺戸第2遺跡が、さらに時期幅が広がる遺跡であったものと考えられる。

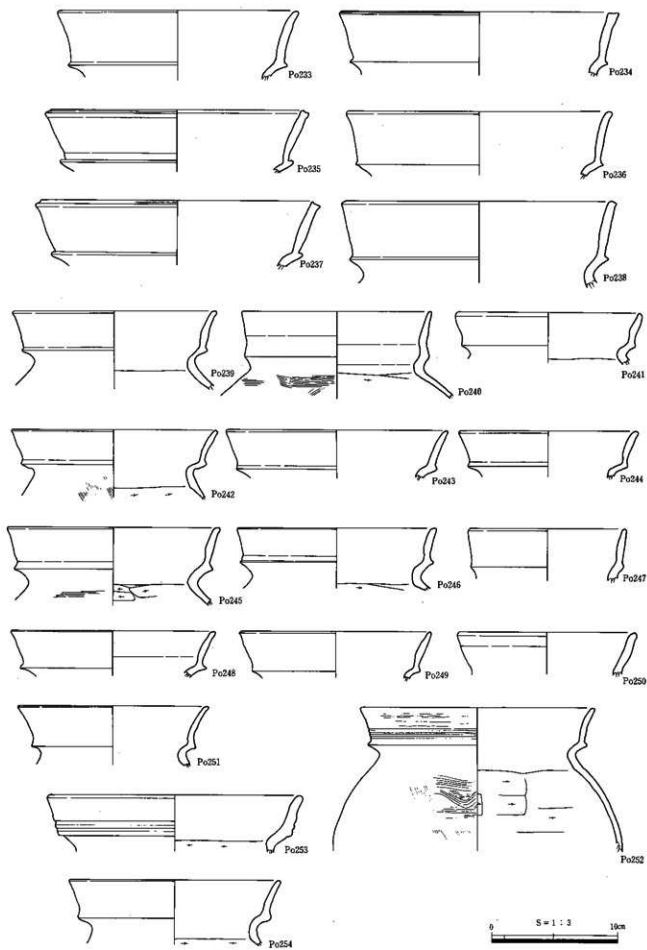
(牧本)



挿図272 寺戸第2遺跡遺構外遺物実測図(1)



挿図273 寺戸第2遺跡遺構外遺物実測図(2)



挿図274 寺戸第2遺跡遺構外遺物実測図(3)

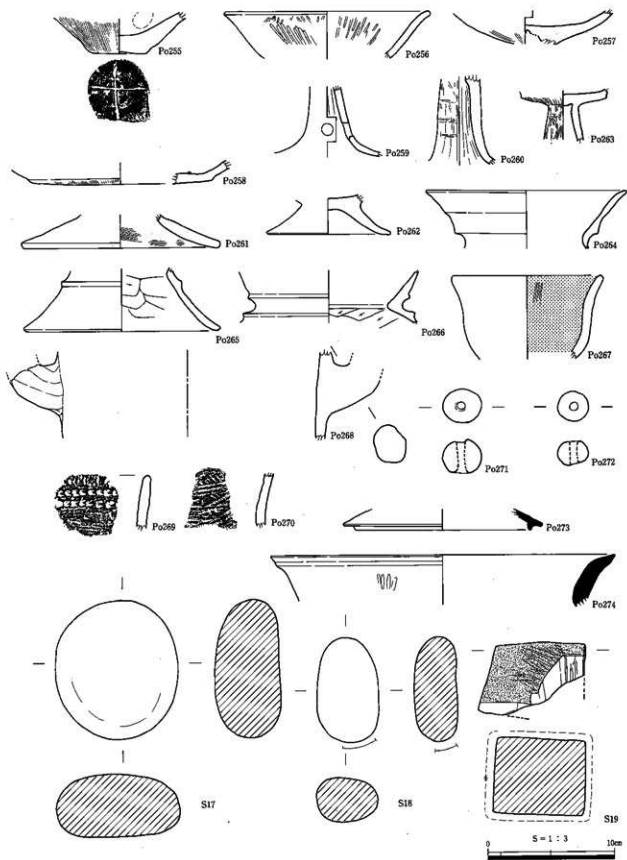


插图275 寺严第2道跡遺構外遺物実測图(4)

第7章 石脇第1遺跡の調査

第1節 調査の概要

石脇第1遺跡は、海岸より1km程南の、平野に向かって北向きに突出した丘陵中程の広い平坦面にある。調査区はこの平坦地の南端付近で、寺戸第2遺跡と谷を隔てた南西側にあたる。調査区は不整な菱形で、いくつかの平坦部からなる。標高は、調査前で東側約49m、西側約34mを測り、約15m程の高低差がある。調査区の中央部には生活道が走り、斜面は梨畑として利用され、灌漑用のコンクリート製の貯水施設が2か所みられた。

平坦部は4つあり、それぞれの段から遺構が確認できた。最上段テラスは、調査区の北側で、段を失い斜面となる。上段テラスは調査区北側でさらに幅が広くなり調査区外の平坦地に続く。中段テラスは最も広い段で、北側はさらに延びる。斜面部は果樹が栽培されていたため、遺構の遺存状態はよくないが、中段テラスは耕作の影響が少なく、比較的遺存状態はよかった。下段テラスの西側は崖となる斜面の際付近で、南端から遺構が確認できた。遺構の遺存状況が極端に悪いことから、中段テラスから続く斜面を、耕作のためにカットしたとも考えられる。

今回の調査により確認された遺構は、竪穴住居跡14基、段状遺構4基、溝状遺構2条、土坑1基、横列2基、ピット群3か所である。このうち、主体となるのは古墳時代中期の集落跡である。

遺構としてはみられないが、弥生時代を遡る遺物として、S I 02 堀土からサヌカイトの木葉形尖頭器が、S D 01の埋土から縄文土器深鉢片が出土している。

弥生時代の遺構は、S I 09・10、S K 01で、いずれも弥生時代後期後半である。遺存状態は悪く、遺構の形態もはっきりしないものが多いが、中段テラスの中央から北端付近にかけてみられる。

古墳時代の遺構は、2ないし3時期にわかれる。S I 04・08は古墳時代前期で、比較的遺物も少ない。古墳時代中期前半は、最も遺構数・遺物数ともに多い時期で、S I 01・02・03・06・07・13・14、S S 01・04がみられる。S I 01・02・07は大型の住居跡で、主軸方向も近く、ほぼ等間隔で並んでいる。S I 01・02は2回以上の建て替えもみられる。S I 13も大型であるが、最上段テラスに位置し、軸も若干異なる。S I 01・07は焼失住居と考えられる。

このうち、S I 01・13から陶質土器高環、S I 13からは須恵器窯滓が出土しているなど、朝鮮半島との関係を窺わせる遺物がみられる。S I 02からは随形土師器2点をはじめ、多くの遺物、特に高環が多くみられる。S I 13では、土師器高環環部に陶質土器高環が据えてあり、祭祀的な出土状況であった。

これらの住居跡において、古墳時代中期後半ごろにはS I 05がみられる。主軸は東に傾き、規模も小さい。同時期の遺構は他になく、古墳時代中期から後期を境として、付近からは住居はみられなくなる。

調査区の北側には、中段テラスがさらに広がる様相を呈することから、古墳時代中期の集落は、さらに北側に広がり、かなり大規模な集落を形成していたものと考えられ、今回の調査は集落の南端の部分にあたるものと考えられる。

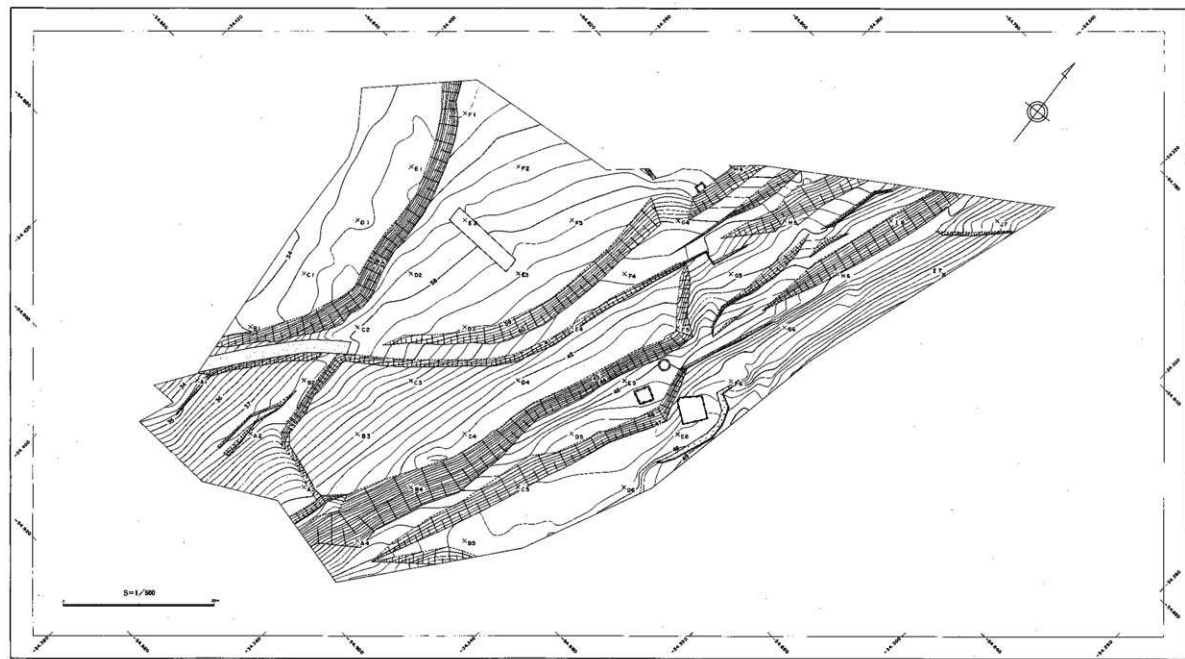
この他、中段から上段テラスにかけて欄跡を含むピット群がある。ピット中から土師器片が出土しており、古墳時代以降の遺構と考えられる。

また、遺構には伴わないものの、耳環、勾玉等が出土しており、付近に古墳の存在が想定できる。

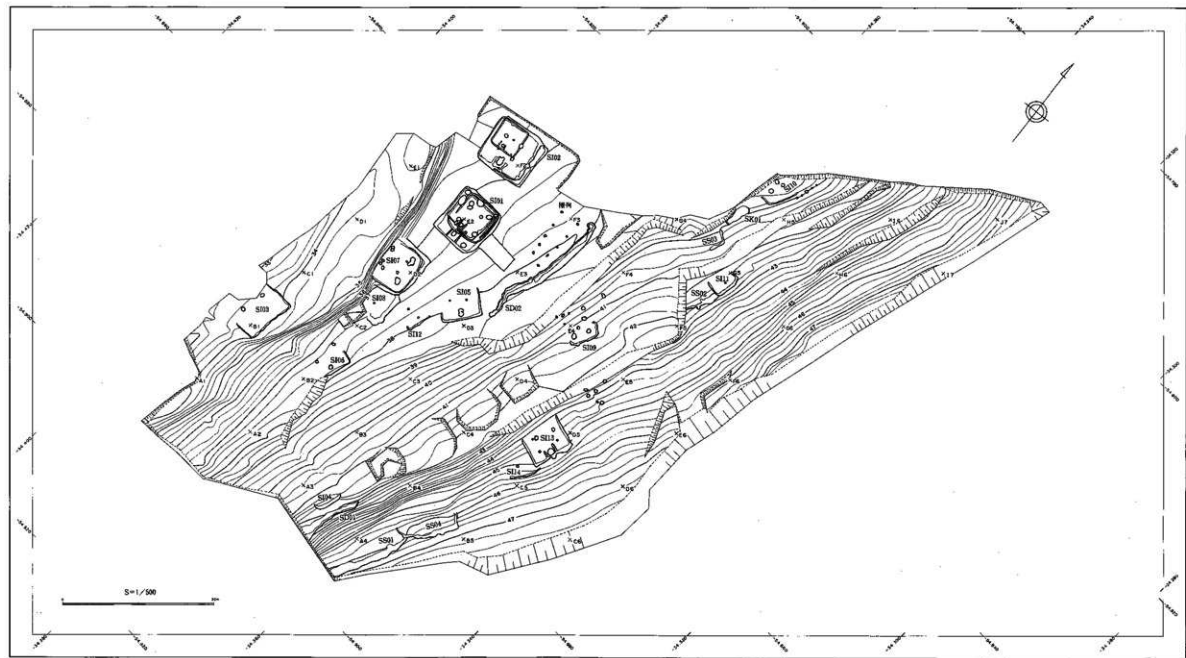
平安時代後期から中世にかけて、中段テラスから上側の斜面にかけて有脚環や瓦質土器土鍋片等が出土しており、当時の生活の痕跡がうかがえるが、遺構は確認できなかった。

近世以降は、S S 03から近世陶磁器片が出土しており、江戸時代の遺構と考えられる。遺構外からは寛永通宝が1点出土している。

(八帖)



神田276 石島第1遺跡調査前地形測量図



標図277 石廬第1遺跡遺構全体図

第2節 竪穴住居跡

S 101 (押図278-283、図版80・88-90)

調査区北西側のE2・3、F2・3グリッドにあり、標高36.9-37.3mの平坦面に立地する。南側約3.5mにはS 107、北側約4mにはS 102がある。

S 101は、貼床やビット・壁溝の検出状況などからみて、S 101-1からS 101-3へ2回の建て替え、S 101-3からS 101-4・5への大幅な拡張があったものと考えられる。遺存状態は非常に良い。なお、平成7年度治村試掘調査のため、住居の中央部分約3分の1は、すでに床面まで掘り下げられていた。以下、新しい順に記述する。

S 101-4・5は、ビットのみの建て替えで、床面を同じくする。平面形は長方形を呈する。規模は南北6.93m、東西5.75m、床面積は32.8㎡である。残存壁高は、最も遺存状態の良い東壁で最大0.92mを測る。壁溝は、南側で一部途切れるもののほぼ全周する。幅14-23cm、深さ4-11cm、断面皿状から逆台形状である。

S 101-5の主柱穴はP 1-P 4の4個で、それぞれの規模はP 1 (37×32-73) cm、P 2 (54×45-90) cm、P 3 (59×33-67) cm、P 4 (59×38-81) cmである。主柱穴間距離はP 1-P 2間から順に2.9m、1.7m、2.8m、1.8mである。

S 101-4の主柱穴はP 5・6と貼床除去後に検出されたP 25・30と考えられ、それぞれの規模はP 5 (27×26-51) cm、P 6 (29×26-69) cm、P 25 (49×49-58) cm、P 30 (28×24-46) cmである。主柱穴間距離はP 25-P 5間から順に3.2m、2.5m、3.0m、2.6mである。

P 12・P 13は壁際特殊ビットと考えられる。P 12は上縁長方形、下縁楕円形の二段掘りで、西側に1条、東側に2条の溝をもち、底面からは丸石が出土した。P 13は不整形を呈し、埋土中から高環Po32が出土した。

また、P 8底面から石材、P 7から高環Po44、P 9底面から高環Po36の脚部・42・47、小型壺Po52、椀Po60が出土した。埋土は、P 9は1層、P 7は高環を境にして互層状に堆積しており、これらのビットは土器を入れるとすぐに埋め戻されたものと考えられる。P 10・14は形態等から貯蔵穴と考えたい。

住居の北側大半に、5cm程度の厚さで貼床が施され、床面上で焼土面を3か所検出した。

S 101-1～-3は貼床除去後に検出された。S 101-1→S 101-2→S 101-3の順で、ほぼ同規模での建て替えである。

S 101-1は、平面形は隅丸方形を呈する。規模は、南北5.46m、東西5.17mで、床面積は約23.4㎡である。壁溝は東側で一部途切れるものの全周する。幅12-21cm、深さ4-9cm、断面逆台形状を呈する。

主柱穴はP 16-19で、それぞれの規模はP 16 (80×50-91) cm、P 17 (65×58-67) cm、P 18 (52×49-75) cm、P 19 (61×58-70) cmである。主柱穴間距離は、P 16-P 17間から順に、2.8m、2.9m、2.8m、2.9mを測る。

P 22はこの時期の中央ビットである。形態は上部不整形、下部不整形の二段掘りを呈する。埋土は1層で、土師器壺Po11・12・15および弥生土器壺Po22を含む。

S 101-2は南北4.70m、東西4.33mで、平面形は方形を呈する。床面積は壁溝の途切れる部分を復元して考えると、約16.8㎡である。壁溝は南東隅で途切れるものの、全周する。幅11-24cm、深さ3-11cmを測り、断面逆台形状を呈する。

主柱穴は切り合い状況、深さ・形態等から、P 24、P 29の二本柱と思われる。それぞれの規模はP 24(50以上×40以上-77) cm、P 29 (56×56-76) cmで、主柱穴間距離は1.1mである。

S 101-3は比較的残りが悪く、北側と西側半分は壁溝が残っていないが、一辺5m程度のややいびつな方形を呈するものと推定される。主柱穴はP 23、P 28と考えられ、規模はP 23 (35×25以上-52) cm、P 28 (36×31-57) cmである。

P21はこの時期の壁際特殊ピットである。平面形は隅丸方形を呈し、両脇に溝をもつ。西側の溝には小穴が並び、その中には炭化物が入るものもあった。前面には幅15cm、深さ10cm前後の長方形の掘り込みが検出され、板状のものが斜めに差し込まれていたと思われる。

埋土は16層に分層できた。①～④・⑬層はS I 01-4・5の埋土、⑤～⑩・⑭～⑮層はS I 01-1～3の埋土である。このうち⑤～⑨層は貼床で非常によく締まる。③・④層は炭化物を多量に含んでおり、S I 01-5は焼失したものとする。同様に⑩層も炭化物を含むことから、S I 01-3段階でも一度焼失した可能性がある。

壁際特殊ピットP13・21の脇で検出された炭化材Na621・615の樹種はクリであった。また、P8・10・12～14内から炭化物がまとまって検出された。樹種は、P8のNo427、P14のNo466・467ともにスギであった。特にP14では、板状の炭化材がピットの長辺に平行して検出された。ピット内埋土の中層から底面にかけて検出されており、このピットは半ば埋まった状態であったと考えられる。P10・13では炭化物は底面についており、開いていたものと思われる。

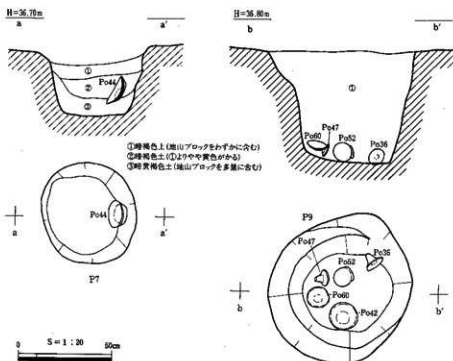
出土遺物は、壺Po1～Po3、甕Po4～Po26、弥生土器底部Po27～29、高坏Po30～Po51、小型壺Po52、小型丸底壺Po53～Po55、小型無頸壺Po56、手捏ね土器Po57・64・65、低脚坏Po58、鼓形器台Po59、椀Po60～Po62、皿Po63、甕形土器Po66、須恵器坏身Po67、小型椀Po68、口縁部Po70、坏Po71、陶質土器高坏Po69、砥石S1・2、敲石S3～S5、側面に砥面のある台石S6を図化した。

多くの遺物が、住居の北東側下層から床面で比較的にまとまって出土した。また、南東側では上層で出土しており、後世の流れ込みと考えられる。

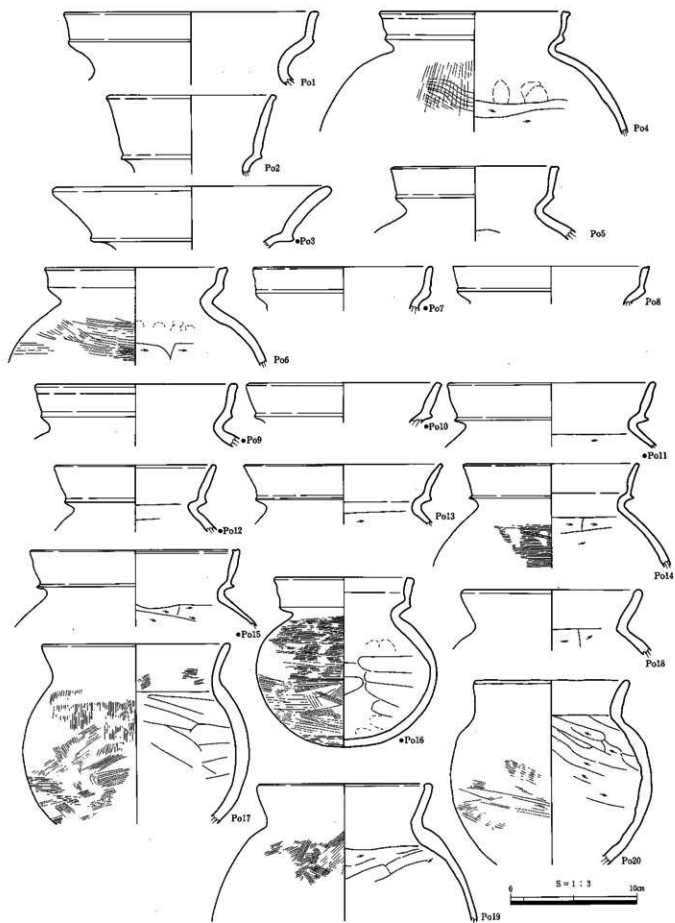
Po69はほぼ完成のまま、北東側土器群のなかで出土したが、出土状況で特にかわった点はみられなかった。外面ケズリ調整で中実の脚をもち、全体にシャープな印象をうける。胎土分析では、または朝鮮半島の御耶地方のものに非常に近いという結果であった。しかし、国内外とも同じ形態のもの出土例がないため、その生産地・搬入経路等を考えるうえでも、今後の資料研究が待たれる。

出土遺物から、S I 01は南谷大山編年Ⅶ～Ⅷ中間期、古墳時代中期前半ごろのものと考えられる。

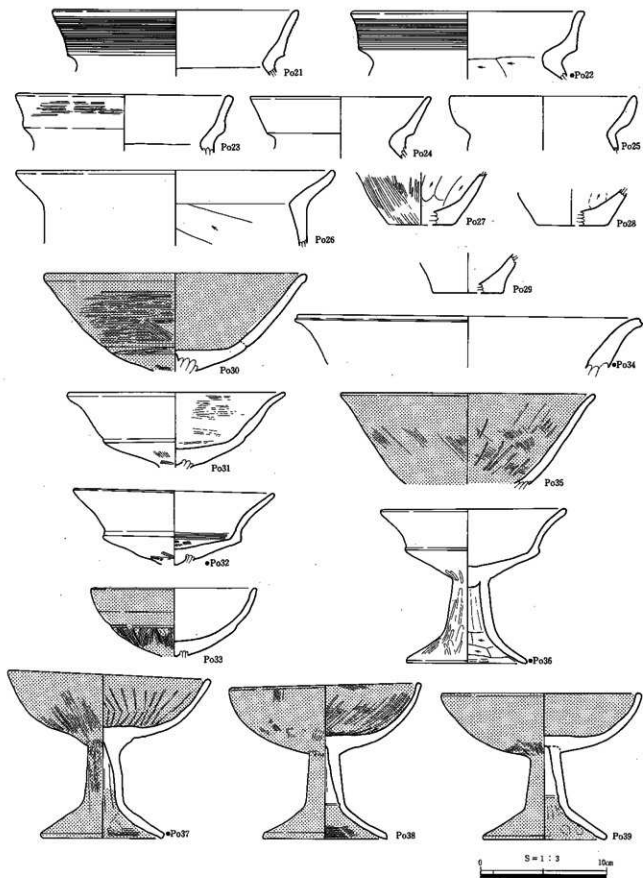
なお、P8・14内出土の炭化物について¹⁴C年代測定を行ったところ、P8のBeta-107732はB.P.1630±50、P14のBeta-107733はB.P.1590±60、Beta-107734はB.P.310±50であり、Beta-107734を除いて考えると、5世紀前半から中ごろという結果が得られ、土器の年代観と合う資料である。(岩崎)



挿図278 石籠第1遺跡S I 01 P7・P9内遺物出土状況図



挿図200 石屋第1遺跡S101出土遺物実測図(1)



榑園281 石島第1遺跡S101出土遺物実測図(2)

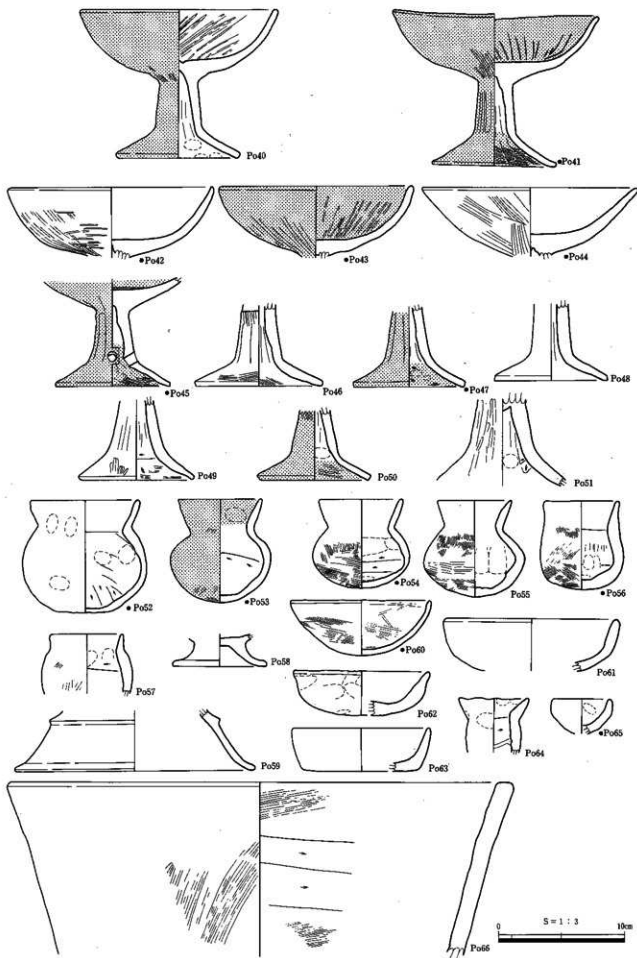
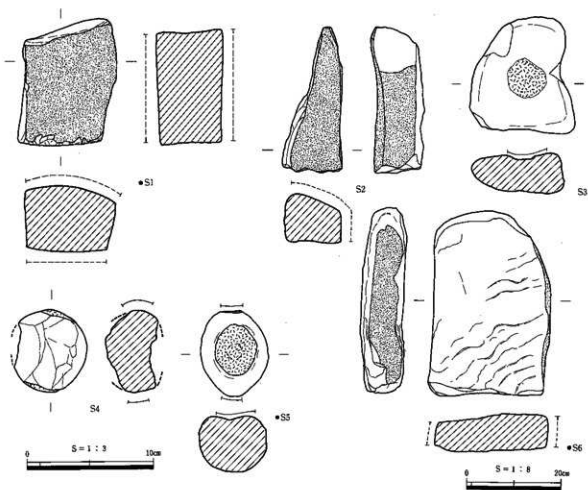
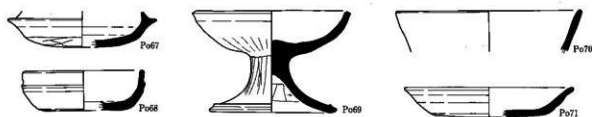


插图282 石胎第1遺跡S101出土遺物実測図(3)



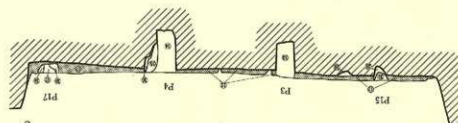
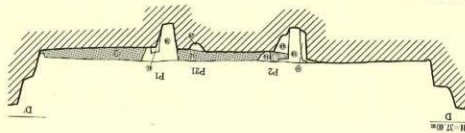
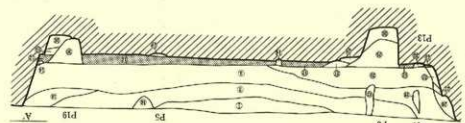
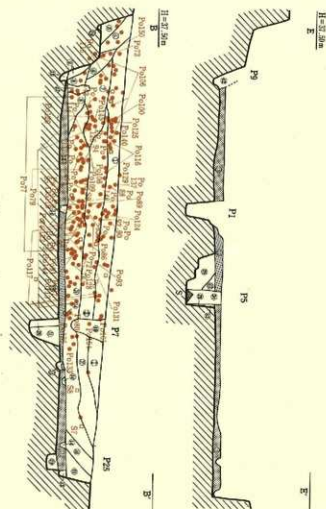
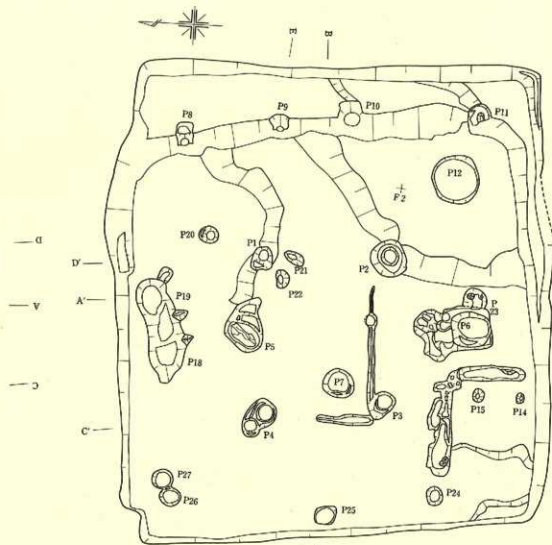
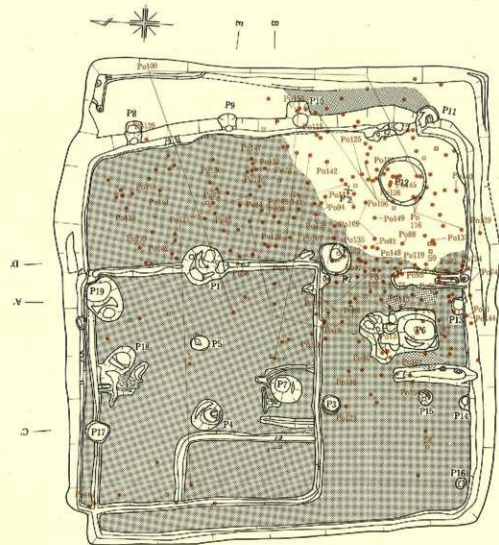
挿図283 石脇第1遺跡S101出土遺物実測図(4)

S102 (挿図284~290、図版81・82・91・92)

調査区北西側のF2・3・G2・3グリッドにあり、標高36.5~37.4mの平坦面に立地する。南側4mにS101がある。遺存状態は良く、少なくとも2回の建替えがみられる。以下古いものから順次記述する。

S102-1は、東側面が一部残っている程度であった。遺存状態は非常に悪い。北西隅に住居の隅が突出しているが、この部分についてはS102-1の北西隅をそのままS102-2の北西隅として利用したものと考えられる。規模は、東西5.8m、南北5.9mを測り、床面積は、4.0㎡以上である。残存壁高は、最も遺存状態の良い南東壁で59cmを測る。壁溝は、わずかに北東壁付近に残るのみで、幅6~17cm、深さ4cmを測り、断面U字状を呈す。柱穴は確認できなかった。南東側で一部貼床を検出した。遺物はいずれもS102-3のものと考えられる。

S102-2は、S102-3の北西側にある。壁溝の遺存状態は非常に良く、S102-3の壁溝に切られていた。



- ①暗灰褐色土(土まる、炭化物少量混)
- ②暗灰褐色土(炭化物を含む)
- ③暗灰褐色土(褐色土ブロックを多く含む、炭化物を含む)
- ④褐色土
- ⑤暗褐色土(炭土やヤニ等混)
- ⑥暗褐色土(炭褐色土ブロック少量混)
- ⑦暗褐色土(炭化物を含む)
- ⑧暗褐色土+褐色土の混じり
- ⑨暗褐色土+褐色土の混じり
- ⑩暗褐色土+炭化物をわずかに含む
- ⑪暗褐色土
- ⑫暗褐色土+暗褐色土の混じり(縦横)
- ⑬暗褐色土(炭土が混)
- ⑭暗褐色土(炭土が混)
- ⑮暗褐色土(炭土が混)
- ⑯暗褐色土(土まる)
- ⑰暗褐色土+褐色土ブロック混)
- ⑱暗褐色土(土まる)
- ⑲暗褐色土
- ⑳暗褐色土(暗褐色土ブロックを含む)
- ㉑暗褐色土
- ㉒暗褐色土+褐色土の混じり
- ㉓暗褐色土+褐色土の混じり(炭化物を含む)
- ㉔暗褐色土+褐色土の混じり
- ㉕暗褐色土+褐色土の混じり(褐色土ブロック混)
- ㉖暗褐色土(炭化物を含む)
- ㉗暗褐色土+褐色土の混じり
- ㉘暗褐色土
- ㉙暗褐色土+褐色土の混じり(土まる)
- ㉚暗褐色土
- ㉛暗褐色土+暗褐色土の混じり
- ㉜暗褐色土+暗褐色土の混じり(炭化物を含む)
- ㉝暗褐色土+褐色土の混じり
- ㉞暗褐色土+褐色土の混じり(褐色土ブロック混)
- ㉟暗褐色土(炭化物を含む)
- ㊱暗褐色土+褐色土ブロック混)

0 1 2m
S=1:50

挿図244 石籠第1遺跡S102遺構面

平面は方形で、規模は、東西・南北とも3.6mを測り、床面積は、12.6㎡である。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で67cmを測る。壁溝は、南東隅付近でとぎれる部分があるもののほぼ全周し、幅6~20cm、深さ7~12cmを測り、断面U字状を呈す。土層を観察したところ壁溝はP1に切られていた。

主柱穴はP4・5で、東西2本柱と考えられる。規模は、P4(52×47-65)cmで、貼床除去後さらに北西にもう一つの柱穴(30×29-60)cmがあった。主柱穴間距離は1.2mであった。S102-3の柱穴としても使用されたと考えられる。P5は(23×19-55)cm、貼床除去後は(67×39-51)cmで、底から地山の石が出土した。柱穴を掘り下げた後、柱を立て、㊸・㊹層を埋め、最後に床を貼った様子が確認できた。

壁際特殊ビットはP7で、南壁際の中央付近にある。規模は(53×44-55)cmである。平面は楕円形である。住居の南壁中央付近に位置し、両脇に幅6~15cm、深さ6~9cmの仕切り溝があり、東に偏った位置にある。また、北側にも板を打ち込んだような痕跡がみられた。

ベッド状遺構を住居の南西隅に確認した。規模は、壁溝から判断すると、長さ2.1m、幅0.9mで、高さについてはS102-3の段階で削られているとみられ、不明である。

S102-3は、遺構の最終的な段階で、遺存状態は良好であった。規模は、東西約6.0m、南北約5.9mで、床面積は、34.3㎡である。残存壁高は、最も遺存状態の良い南東隅で91cmを測る。壁溝は南東隅でわずかに途切れるもののほぼ全周する。幅5~31cm、深さ6~9cmを測り、断面U字状だが、東側では一部袋状を呈する。主柱穴はP1~P4で、それぞれの規模はP1(71×64-61)cm、P2(48×55-55)cm、P3(31×29-62)cm、P4(52×47-65)cmを測る。主柱穴間距離は、P1~P2から順に、2.0m、2.4m、1.9m、2.5mを測る。このうちP2は貼床除去後、(57×54-52)cmとなり、柱穴を掘った後柱を立て、㊸層を埋め、最後に床を貼った様子が確認できた。

壁際特殊ビットはP6で、南壁際の中央付近にある。規模は(77×70-65)cmで、二段にわたり掘り込まれ、上縁は方形、下縁は楕円形を呈す。住居の南壁中央付近に位置し、両脇に仕切り溝がある。幅21~29cm、深さ12~18cmで、北側には不整形の掘り込みがみられた。周囲の貼床には灰色の粘土が混じっていた。

住居の東壁に添ってP8(38以上×25-61)cm、P9(29以上×28-48)cm、P10(42以上×39-49)cm、P11(38以上×34-45)cmが確認された。埋めた東側の壁が崩れないように施されたものと考えられる。その他、南壁に添ってP13(26×19-10)cm、P14(25×15-13)cm、P16(18×16-12)cmが、北壁付近にP17(51×37-15)cmがあった。

埋土は18層に分層できた。㊸・㊹層はS102-1のもので、固くしまっていたことから、意図的に埋められたものと考えられる。

焼土面はP18の南側1か所のみであった。炭化物が含まれていたのは全てビット中の土で、少量であった。

貼床は㊸層で、基盤層を含み、よく締まっていた。貼床は南東部では施されず、ここは固い粘土層である。貼床を除去したところ、P18-19が一つになった。また、西壁付近にP24(31×25-9)cm、P25(33×29-18)cm、P26(35×28-26)cm、P27(35×30-30)cmを確認した。住居の南西隅に溝状の掘り込みが確認されたが、用途は不明である。S102-2の床面とS102-3の床面は同一でS102-2のP5も貼床上面で確認できていることから、住居を拡張した際には床はそのまま利用し、壁溝のみ埋めたと考えられる。

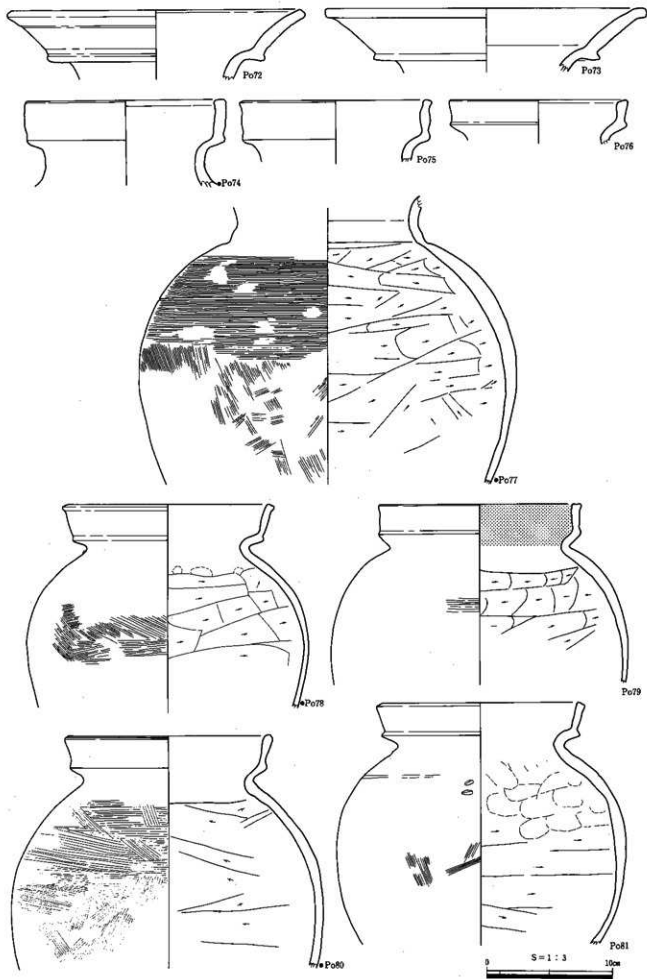
出土遺物は、図化できたものに土師器壺Po72~77、甕Po78~95・101、直口壺Po96~100・102~106、高坏Po107~143、小型丸底壺Po144~147・150、隠彩土器Po148・149、椀Po151、胴部片Po156・157、砥石S7、木葉形尖頭器S8、不明鉄器F1、鉄鏝F2がある。

高坏が多く出土しており、図化できなかったものはその他に33個体にはばる。弥生土器は、甕Po152~155である。これらの遺物は住居跡の南東隅付近を中心に、㊸㊹層それぞれから出土しており、これらの遺物は比較的短期間に廃棄されたものと考えられる。

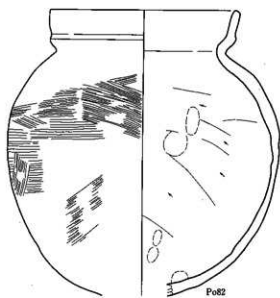
また、Po97の直口壺からは種子と思われる炭化物が出土したが、細片で同定は不可能であった。

時期は、南谷大山編年Ⅷ~Ⅷ中前期、古墳時代中期中葉ごろと考えられる。

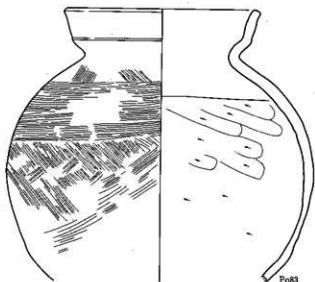
(八峠)



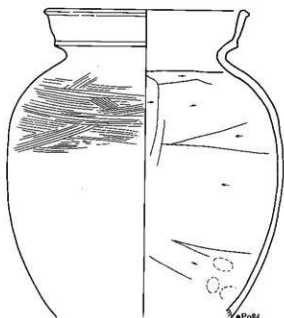
挿図285 石籠第1遺跡S102出土遺物実測図(1)



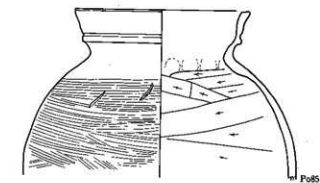
Po82



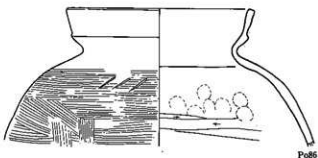
Po83



Po84



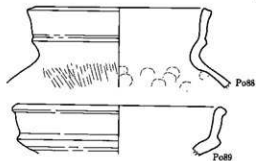
Po85



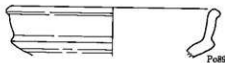
Po86



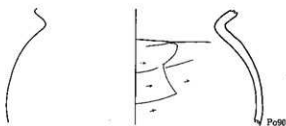
Po87



Po88



Po89



Po90

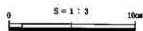
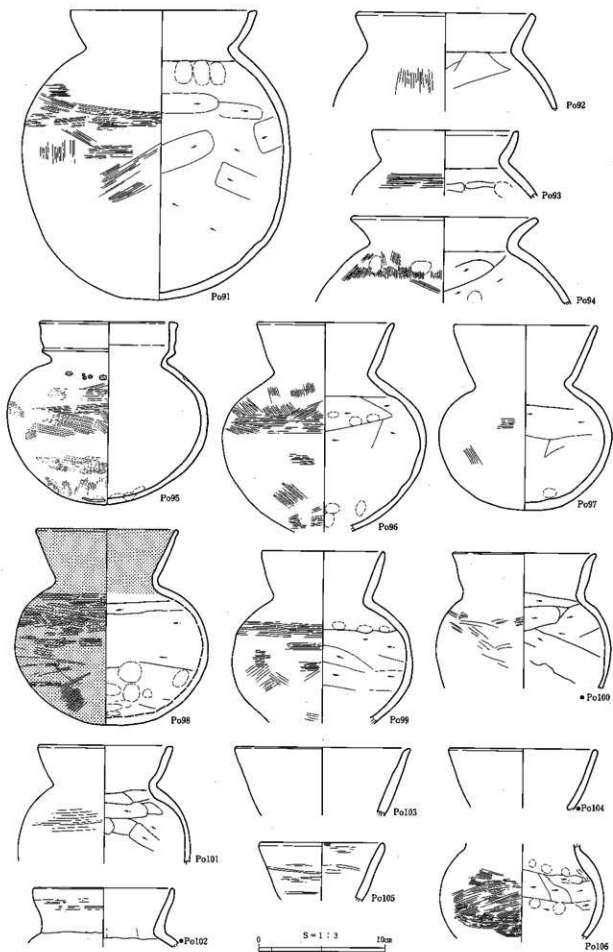


插图286 石鹼第1遺跡S102出土遺物実測図(2)



挿図287 石胎第1遺跡S102出土遺物実測図(3)

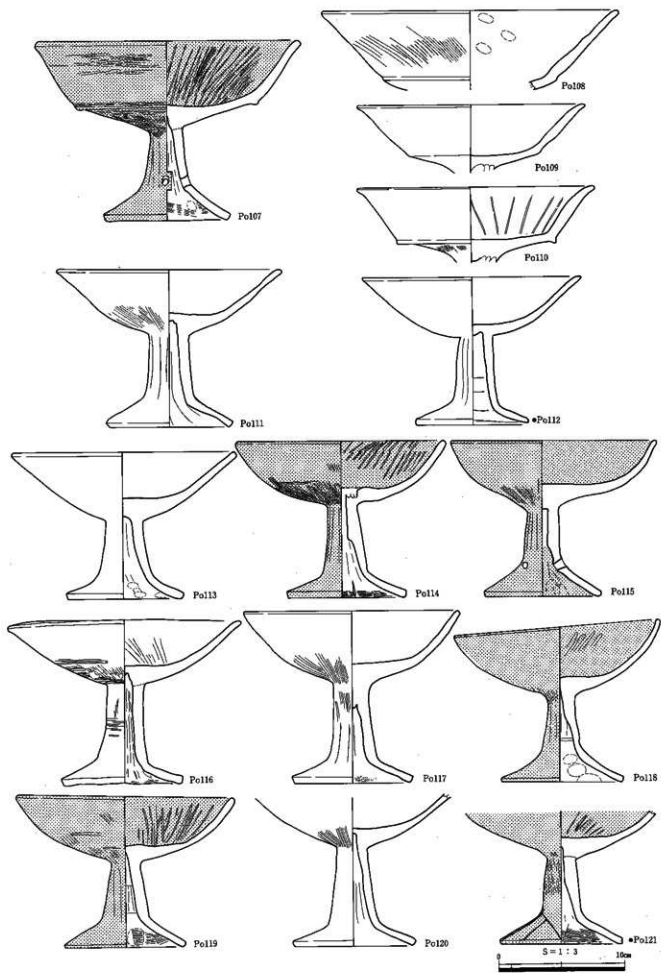
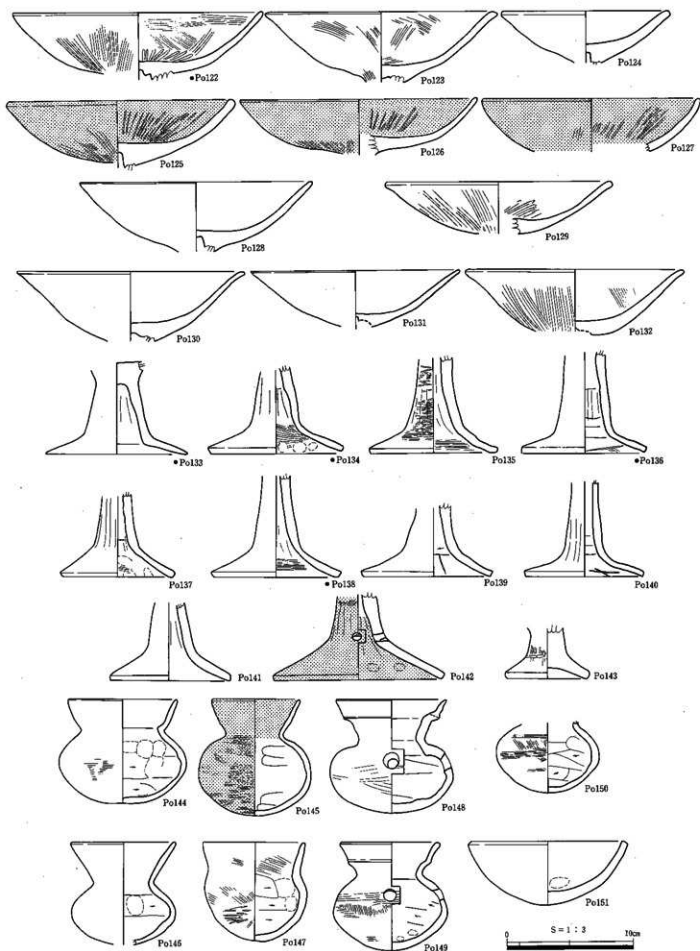
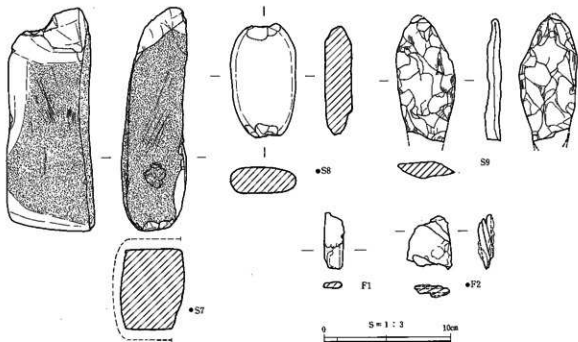
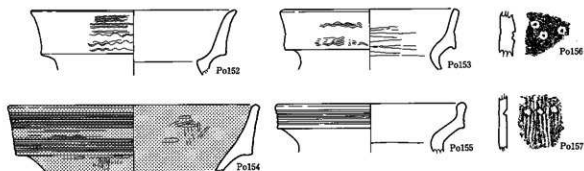


插图288 石胎器1遺跡S102出土遺物実測図(4)



挿図249 石胎第1遺跡S102出土遺物実測図(5)



挿図290 石籠第1遺跡S102出土物実測図(6)

S103 (挿図291~293、図版83・92・93)

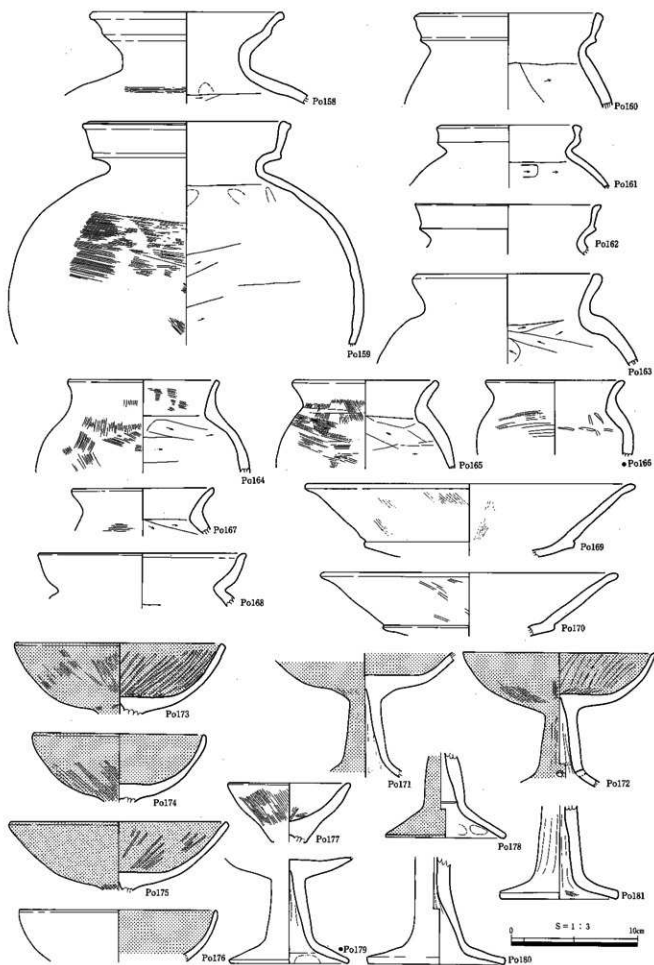
調査区南端やや西寄りのB1・2、C1・2グリッドにかけての標高約34.2mのはほぼ平坦面に立地している。東側約9mにはS106が位置している。

形態は、耕作による削平を受けているため、遺存状態があまりよくないことに加え、西側も流失していて不明瞭である。残存する壁から平面形は、方形を呈すと考える。規模は、東西4.48m以上、南北6.92mを測り、床面積は25㎡以上である。残存壁高は、最も遺存状態のよい東壁で最大38cmを測る。主柱穴と考えられるビットはP1・2の2個で、S103は2本柱の住居であったと考える。それぞれの規模は、P1(56×45-24)cm、P2(52-48-22)cmを測り、主柱穴間距離は2.66mである。壁溝・中央ビットは、認められなかった。床面は、わずかながら西側に向かって緩やかに傾斜している。

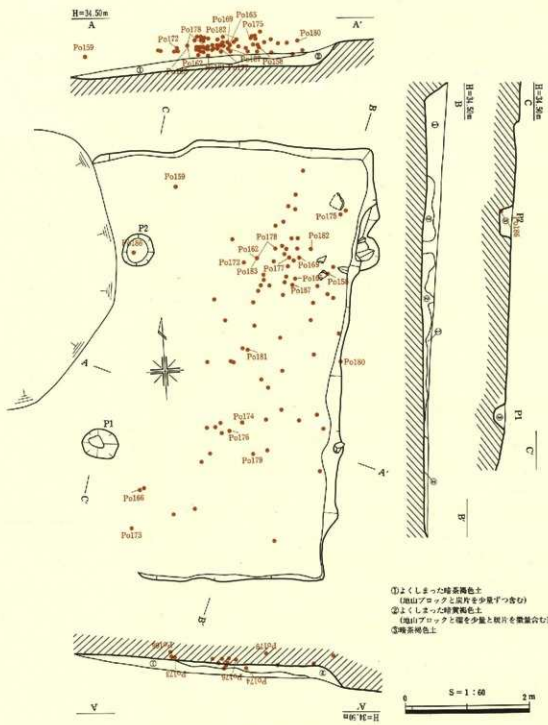
埋土は3層からなるが、上部はかなり削平を受けているものと考えられ、確認できたものは下層の堆積土である。底面付近では、よくしまった地山とともに多数の礫が含まれていた。

遺物は、図化できたものに土師器壺Po158、甕Po159~168、高環Po169~Po185、小型丸底壺Po186・187、磨製石斧S10がある。このうち床面からはPo166、Po179、P2内からPo186が出土している。その他はいずれも埋土中から出土しているものである。

S103の時期は、出土遺物から南谷大山編年Ⅶ~Ⅷ中間期、古墳時代中期中葉ごろと考える。(井上)

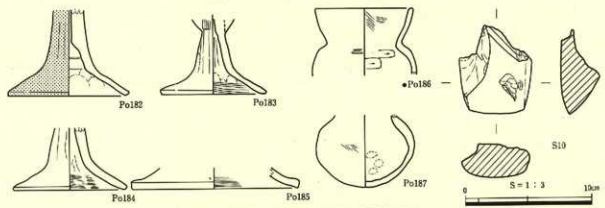


禅图201 石胎第1遺跡 S103出土遺物実測図(1)



- ①よくしまった特赤褐色土
(埋山ブロックと瓦片を少量ずつ含む)
- ②よくしまった特黄褐色土
(埋山ブロックと瓦を少量と破片を少量含む)
- ③暗赤褐色土

挿図282 石籠第1遺跡S103遺構図



挿図283 石籠第1遺跡S103出土遺物実測図(2)

S I 04 (押図294・295、図版82・93)

調査区の最も南側のA4グリッドにあり、標高41.0～42.8mの西側へ傾斜する急斜面に立地する。周辺は、耕作等の掘削によりかなり削平され、南東コーナー部分のみ検出できた。東側には、S D01が接している。

平面形は、遺存する壁から隅丸方形を呈すものと思われる。規模は東西0.67m以上、南北3.2m以上を測る。床面積は、1.7m以上である。壁高は、最も遺存状態のよい東壁で最大0.51mである。

柱穴は検出できなかった。壁溝は、壁際を全周するものと思われ、幅14～25cm、深さ4～5cmを測り、断面逆台形を呈す。

埋土は3層に分層でき、①③層は炭化物をわずかに含む。④層は、壁溝埋土である。

出土遺物には、図化できたものに埋土中出土の土師器壺Po188・189、高坏Po190がある。そのほかに、円礫が出土している。

出土遺物より、南谷大山編年V期、古墳時代前期前半のものと考えられる。(牧本)

S I 05 (押図296・297、図版82・93)

調査区中央部のD3・E3グリッドのテラス東側で、標高37.7m～38.4mの西向きに緩やかな斜面に立地する。南側1mにS I12が、北側3mにS D02がある。

遺存状態は悪く、壁溝も西側では確認できなかった。平面形は方形とみられ、規模は、東西3.7m以上、南北5.0mで、床面積は18.8m²以上である。残存壁高は、最も遺存状態のよい北東隅付近で最大28cmを測る。壁溝は、東壁および北壁付近でよく遺存していた。幅5～10cm、深さは最大で6cmで、断面U字状を呈す。

主柱穴は、P1・P2で、南北2本柱と考えられる。規模は、P1(22×19～40)cm、P2(32×27～14)cmで、P5(40×37～27)cmはP1の、P6(22×19～13)cmはP2の補助柱穴と考えられる。主柱穴間距離は、2.0mである。その他、壁際にP7(26×22～11)cm、P8(30×25～13)cmを、中央付近にP9(44×38～24)cm、P10(29×23～5)cmを確認した。P11(71×60～39)cmは、S I05に伴うものかは不明である。

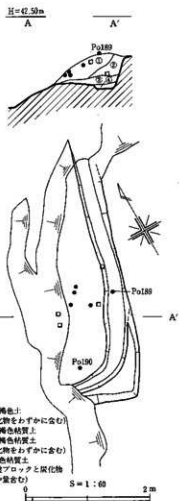
焼土面は、主柱穴の中央付近で確認できた。不整な方形の範囲で、良く締まっていた。北東隅付近ではもろい焼土の塊が出土した。

壁際特殊ビットは、P3・P4で、東西に並んだ状態で確認した。いずれも二段に掘り込まれ、P3は(58×55～42)cm、P4は(67×45～25)cmで、西側に不整な掘り込みがある。

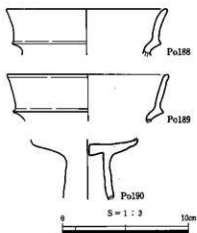
埋土は4層に分層できた。④層以外はおろく、土器片が混入していた。

出土遺物は、土師器壺Po191・192、壺Po193、高坏Po194～196、須恵器坏身Po197、遮Po198である。これらの遺物はいずれも①③④層からで、床面からは若干浮いた状態のものが多かった。

時期は、南谷大山編年Ⅷ～Ⅸ期、古墳時代中期後葉ごろと考えられる。

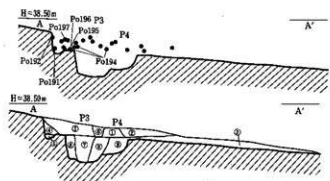


押図294 石籠第1遺跡S I 04遺構図

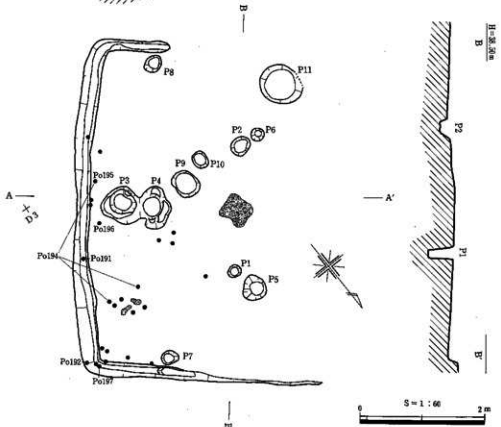


押図295 石籠第1遺跡S I 04出土遺物実測図

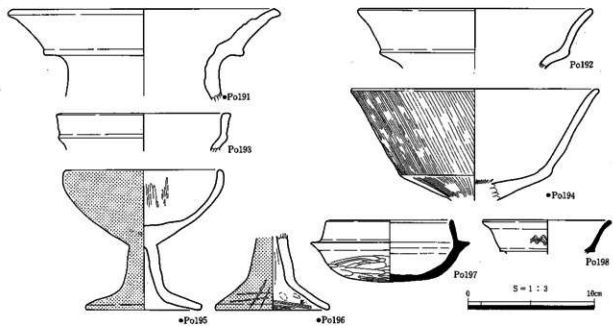
(八峰)



- ①暗褐色土(土器片を含む)
- ②暗褐色土(①より柔らかい)
- ③暗褐色土
- ④褐色土(粘りが強い)
- ⑤暗褐色土(L.まる)
- ⑥赤褐色土
- ⑦暗褐色土(灰化物を含む)
- ⑧暗褐色土(黄粘土アロップ混)
- ⑨暗褐色土



挿図296 石籠第1遺跡S105遺構図



挿図297 石籠第1遺跡S105出土遺物実測図

調査区中央南側のC2・3グリッドにあり、標高37.1~37.9mの西側へ緩やかに傾斜する斜面に立地する。周辺は、農道建設のため上半部はかなり削平されている。西側約8mにはS I 03、北側約5mにはS I 08がある。

平面形は、遺存する壁から方形または長方形を呈すものと思われる。規模は東西2.7m以上、南北5.1mと推定される。床面積は12.5m²以上を測る。壁高は、最も遺存状態のよい東壁で最大0.39mである。

床面上で5個のピットを検出したが、主柱穴と思われるものは位置的に(36×34-22)cmを測るP2だけで、その他のものは検出できなかった。壁溝は、壁際を全周するものと思われ、幅14-18cm、深さ2-5cmを測り、断面逆台形を呈す。

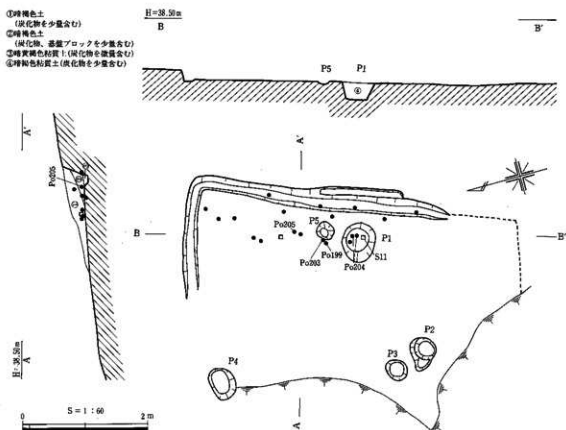
また、P1は壁際特殊ピットである。(64×55-30)cmを測る。通常の壁際特殊ピットと異なり、両側には溝をもたないタイプである。埋土は炭化物をわずかに含む④単層である。ピット内から高環Po204、敲石S11が出土している。

その他のピットの規模は、P3(33×32-10)cm、P4(51×39-7)cm、P5(28×24-4)cmである。埋土は2層に分層でき、いずれも炭化物をわずかに含む。自然堆積したものと考えられる。③層は、壁溝埋土である。

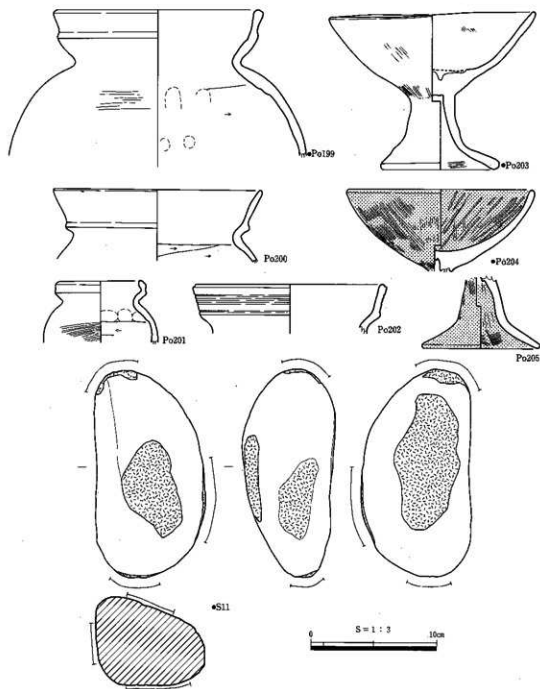
出土遺物には、図化できたものに土師器甕Po199-201、弥生土器甕Po202、高環Po203-205、敲石S11がある。このうち、床面P5西側から甕Po199、高環Po203が重なるようにして、また、P1内から高環部Po204、敲石S11が出土している。その他のものは埋土中の出土である。

床面・ピット内出土遺物より、南谷大山編年Ⅳ期、古墳時代中期後半のものと考えられる。

(牧本)



挿図298 石籠第1遺跡S106遺構図



挿図299 石籠第1遺跡S106出土遺物実測図

S107 (挿図300~303、図版83・84・93~95)

調査区中央西側のE2・D2グリッドにあり、標高36.8~37.4mの平坦面に立地する。北側約3.5mにはS101がある。S107は、ほぼ同じ規模でS107-2からS107-1へ、最低1回の建て替えがあったものとする。西側は後世に削り取られているが、遺存状態はよい。

S107-1は、平面形は方形または長方形を呈する。規模は、南北5.90m、東西4.9m以上、床面積は現存する部分で29.8㎡である。残存壁高は、最も遺存状態のよい東壁で最大0.85mを測る。壁溝はほぼ全周するものと思われるが、S107-2の壁溝と重なっていて掘りすぎてしまい、規模については正確に捉えることができなかった。断面は逆台形状で、壁体の痕跡がみられた。支柱穴はP1~P4の4個で、それぞれの規模は、P1(43×

34-69) cm, P 2 (38×34-67) cm, P 3 (37×34-53) cm, P 4 (42×40-44) cmである。主柱穴間距離はP 1-P 2間から順に2.6m, 3.0m, 2.5m, 2.9mである。P 6・P 7はP 1・P 2が建て替えられたものと考えられる。

P 5は壁際特殊ピットで、規模は(70×70-22) cmを測り、平面形はいびつな隅丸方形である。

床面のほぼ全面には、貼床が施されている。また、住居のほぼ中央に2か所、不整形に広がる焼土面が検出された。

埋土中に多量の炭化物・焼土を含み、焼土層も検出されたことから、S I 07-1は焼失住居と考える。

P 2-P 3間では、わずかではあるが炭化材が焼土に埋まるように検出された。樹種は特定はできなかったが、No642はミツマタ、No643はサワグルミに組織構造が類似しているということであった。

遺物は、ほとんどが下層・焼土層から床面での出土である。土師器壺Po207-Po213・216・218・219・221-227・231、胴部Po525、底部Po233、高環Po234-Po243・245、鼓形器台Po250-Po252、椀Po253、小型高環形器台Po254、低脚環Po255、手押ね土器Po257、須恵器脚部Po259、須恵器通Po260、敲石S12・13、擦石S14を図化した。

このうちPo260は、S I 01の上層出土遺物と接合している。床面からはPo224・234・235が出土した。

床面出土遺物から、S I 07-1は南谷大山編年Ⅱ期、古墳時代中期後半ごろと考えられる。C年代測定では、Beta-107735はB.P.1450±60、Beta-107736はB.P.1540±60で、6世紀中-7世紀前半ごろという結果が得られたが、土器の編年観とは合致しない。

S I 07-2は、S I 07-1の貼床除去後、20cm前後掘り下げた後に検出された。埋土中に焼土粒・炭化物片が含まれ、焼土層が検出されたことより、S I 07-1と同様焼失住居と思われる。平面形は隅丸方形または隅丸長方形を呈する。規模は、南北5.76m、東西4.9m以上、床面積は現存する部分で27.3㎡である。残存壁高は、検出面から最大1.1mを測る。壁溝は、残存する部分で全周する。幅17-28cm、深さ5-8cm、断面U字状を呈す。

主柱穴はP10-P12で、南西のピットは検出できなかった。それぞれの規模は、P10(49×48-63)cm、P11(55×44-41)cm、P12(48×38-50)cmである。主柱穴間距離はP10-P11間が3.8m、P12-P10間が3.8mである。

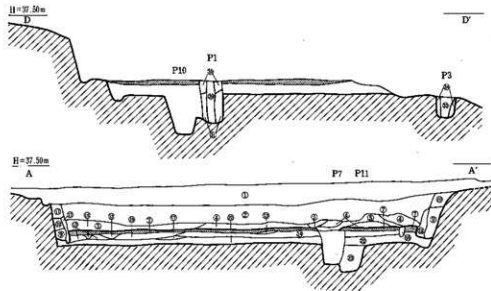
P13はこの時期の中央ピットである。平面形は上縁部不整形長方形で、断面三段に掘られている。ピットの北側には高環Po246がおかれ、南側には約60×80cmの範囲で小指頭程度の小石が検出された。また、ピット内埋土はほぼ1層で、炭化物・焼土を含むが、壁面・底面は赤化してはいない。S I 07-2は焼失住居であることから、これは焼け落ちの焼土であり、P13は住居廃絶時には開いていたものと考えられる。

出土した遺物は多くはない。土師器壺Po206、壺Po214・215・217・220・228・229、胴部Po232、高環Po244・246・247、鼓形器台Po248・249、小型丸底壺Po256、甔形土器Po258、石皿S15、刀子F3を図化した。

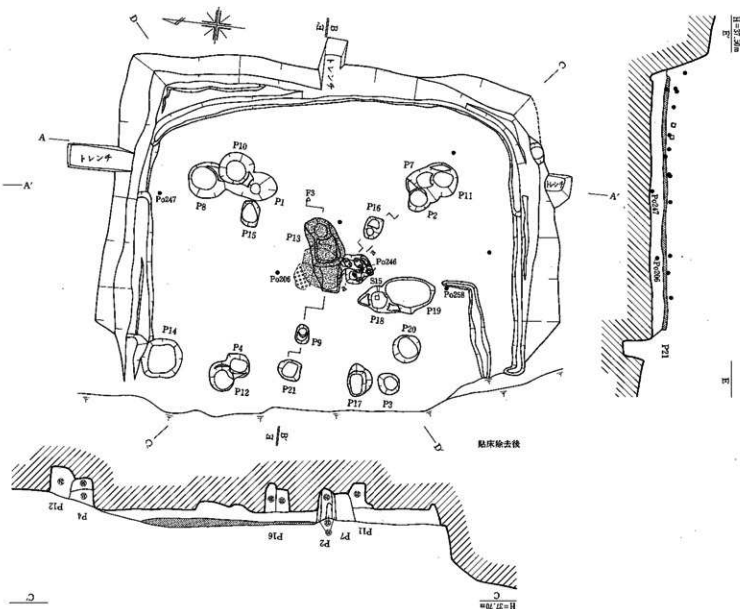
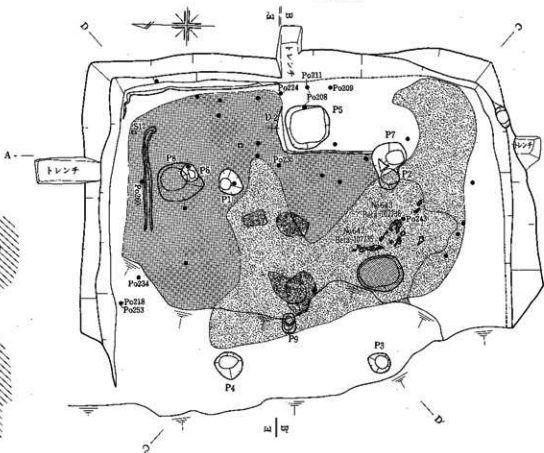
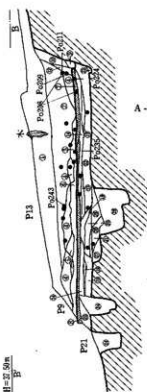
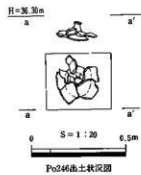
このうち床面からは、Po246・247・258が出土している。また、P18にはS15が埋められていた。

埋土は22層に分層できた。①層は耕作土、②-⑫層はS I 07-1、⑬-⑳層はS I 07-2の埋土である。このうち④-⑥層、⑬-⑱層は大量の炭化物・焼土を含む。④-⑥層はよく締まった焼土層で、焼け落ちの焼土である。また、⑬層は壁板の痕跡、⑱・⑲層は裏込めの土と思われる。

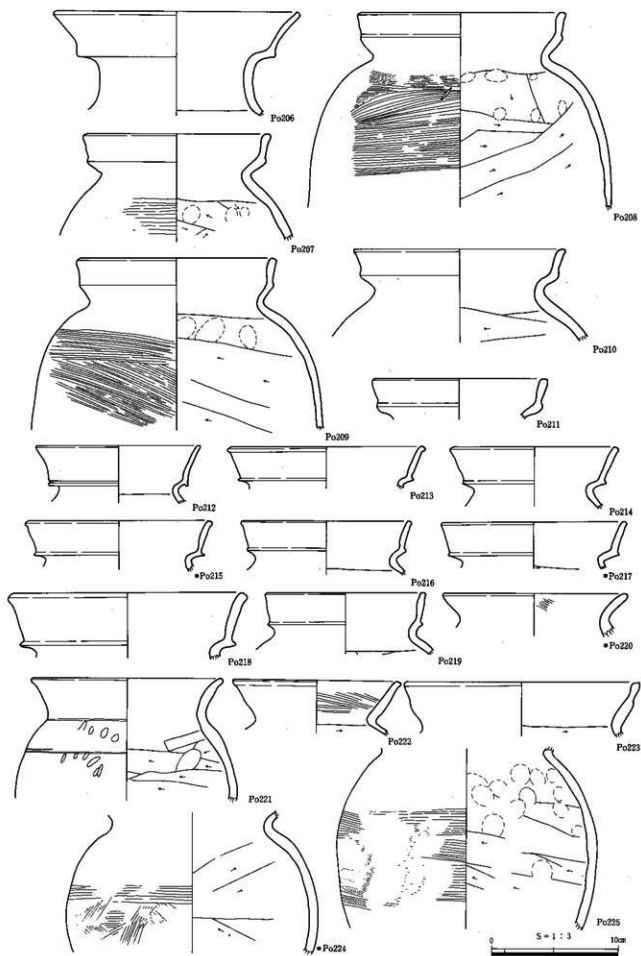
出土遺物から、S I 07-2は南谷大山編年Ⅱ期新相、古墳時代前期後葉ごろと考える。S I 07-2の埋土が比較的厚く、遺物にも2段階程度の時期差が見られることから、S I 07-2廃絶後S I 07-1が営まれるまでに、かなりの時間がたったものと思われる。(岩崎)



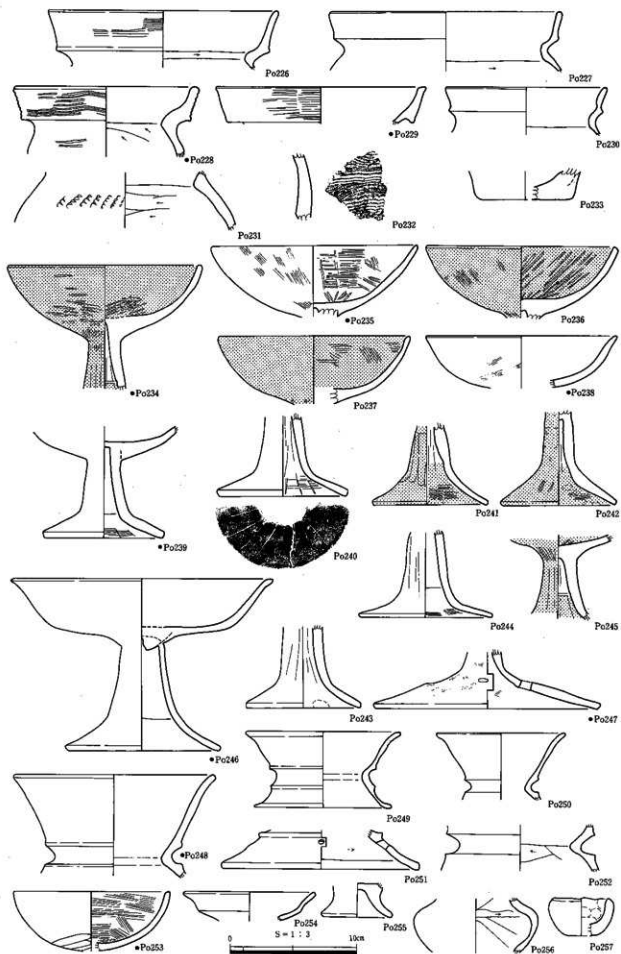
- ①暗灰褐色土=耕作土
- ②暗灰褐色土(焼土粒を少量含む)
- ③暗灰褐色土(焼土粒、炭化物を少量含む)
- ④暗褐色土(焼土粒、炭化物を少量含む)
- ⑤暗褐色土(焼土粒、炭化物を含む)
- ⑥暗褐色土(焼土粒、炭化物を含む)
- ⑦灰褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ⑧灰褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ⑨暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ⑩暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ⑪暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ⑫暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ⑬暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ⑭暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ⑮暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ⑯暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ⑰暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ⑱暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ⑲暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ⑳暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㉑暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㉒暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㉓暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㉔暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㉕暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㉖暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㉗暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㉘暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㉙暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㉚暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㉛暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㉜暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㉝暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㉞暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㉟暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㊱暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㊲暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㊳暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㊴暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㊵暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㊶暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㊷暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㊸暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㊹暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㊺暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㊻暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㊼暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㊽暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㊾暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)
- ㊿暗褐色土(焼土粒、炭化物を多く含む)



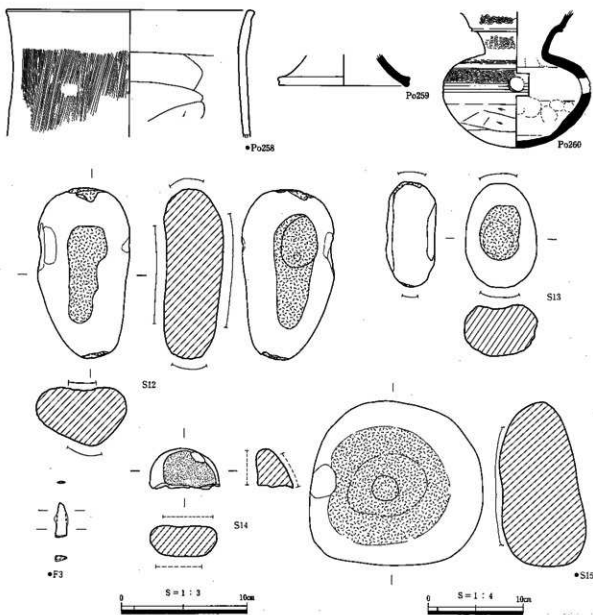
挿図300 石島第1遺跡S107遺構図



挿図301 石胎第1遺跡S187出土遺物実測図(1)



挿図302 石器第1遺跡S107出土遺物実測図(2)



挿図303 石胎第1遺跡S107出土遺物実測図(3)

S108 (挿図304・305、図版84・95)

調査区中央西側のD2・3グリッドにあり、標高37.2~37.6mの平坦面に立地する。北側はS107により切られる。

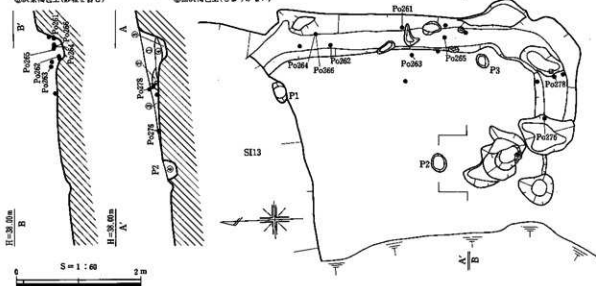
遺存状態は比較的悪く、住居の南側は木の根により攪乱をうけ、西側は後世に削り取られている。平面形は隅丸方形または隅丸長方形を呈するものと思われる。規模は南北5.0m以上、東西1.4m以上、床面積は残存する部分で10.3㎡である。残存壁高は、最も遺存状態のよい東壁で最大0.40mを測る。壁溝は幅30~50cmと広く、深さ1~6.5cmで、断面逆台形状を呈す。

主柱穴は、S107に切られるP1と思われるが、これに対応するビットは検出できなかった。規模は(33×21~49)cmである。

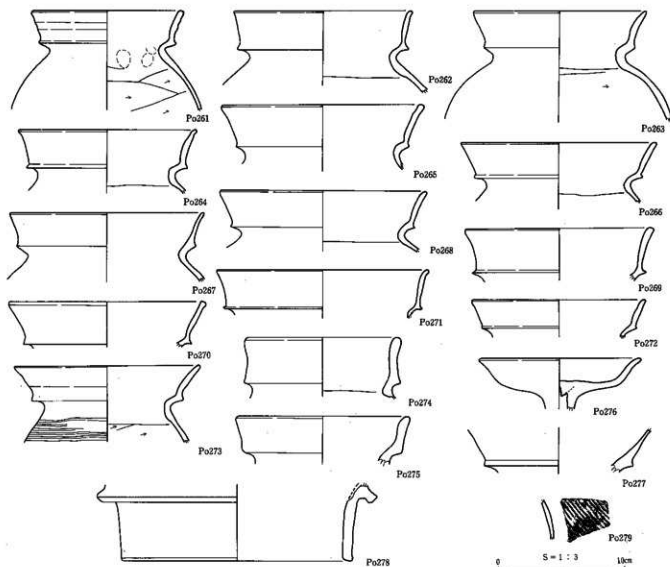
中央ビット、特殊ビット、焼土面等は検出されなかった。

埋土は5層に分層でき、自然堆積したものと考えられる。このうち③層には砂粒が含まれる。

- ①堆積褐色土(粘土ブロックをわずかに含む)
- ②堆積褐色土(粘土ブロックを多量に含む)
- ③灰茶褐色土(砂粒を含む)
- ④堆積褐色土(土器を含む)
- ⑤堆積褐色土(灰土層を多量に含む)
- ⑥堆積褐色土(しまりが少ない)



押図304 石廬第1遺跡S106遺構図



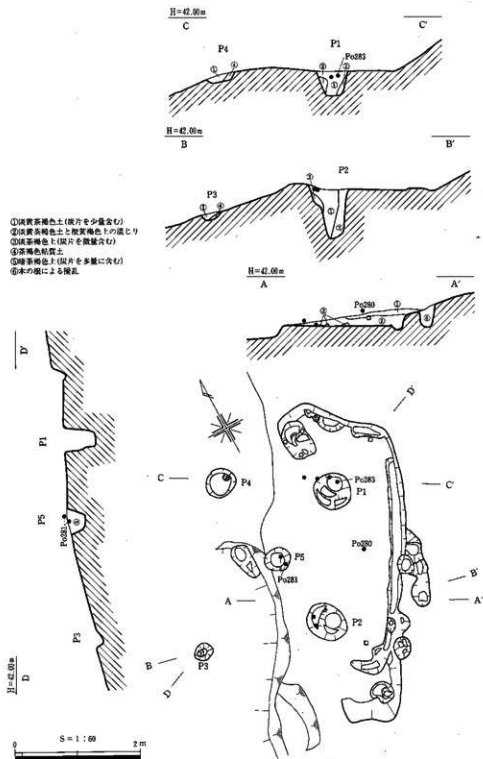
押図305 石廬第1遺跡S108出土物実測図

遺物は、土師器甕Po261～272、弥生土器甕Po273～275、胴部Po279、高环Po276、鼓形器台Po277、甕形土器Po278を図化した。

ほとんどの遺物が壁溝上の④層および床面付近から出土している。このうちPo279は、外面に叩き調整がみられる。

出土遺物から、南谷大山編年V期、古墳時代前期前半ごろのものと考えられる。

(岩崎)



挿図308 石籠第1遺跡S109遺構図

S 109 (押園306・307、図版84・95)

調査区中央やや東寄りのE 5、F 5グリッドにかけての標高約41.5mの西側へ緩やかに傾斜する斜面上に立地している。北側約18mにS S03が、西側約8mにはS D02がそれぞれ位置している。

形態は、耕作による削平を受けているため、遺存状態があまりよくないことに加え、西側も流失していて不明瞭である。遺存する壁から平面形は、隅丸方形を呈すと考える。規模は現存するもので、東西2.34m以上、南北3.98mを測り、床面積は6.48㎡以上である。残存壁高は、最も遺存状態のよい南東壁で最大34cmを測る。壁溝の規模は、幅20～26cmで、深さは最大14cmを測り、断面U字状を呈す。なお、この壁溝付近・壁溝内では木の根による攪乱をかなり受けている。主柱穴と考えられるピットはP 1～P 4の4個で、それぞれの規模は、P 1 (58×58-55) cm、P 2 (66×54-84) cm、P 3 (32×26-15) cm、P 4 (48×46-16) cmを測り、主柱穴間距離はP 1～P 2間から順に1.5m、1.56m、2.32m、1.26mである。

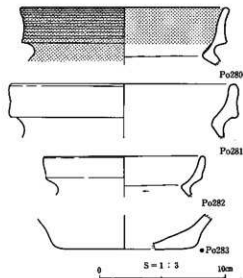
中央ピットはP 5で、規模は(43×38-30) cmである。

埋土は5層からなる。

遺物は、図化できたものに弥生土器甕Po280～283がある。このうちP 1内からPo283が出土している。その他はいずれも埋土中から出土しているものである。

出土遺物から判断して、南谷大山編年Ⅲ期、弥生時代後期後半ごろと考える。

(井上)



挿図307 石輪第1遺跡S 109出土遺物実測図

S 110 (押園308・309、図版84・95)

調査区北側隣のI 4グリッドにあり、標高37.2～38mの西向き斜面上に立地する。西側は調査範囲外である。南側2mにS K01がある。

遺存状態は悪く、斜面側の肩はトレンチ状の穴で切られている。そのため、形態は不明である。規模は、残存値で東西2.0m、南北4.0mで、床面積は推定で11.2㎡である。壁高は、東壁で最大42cmである。

壁溝は、トレンチ状の梨穴に切られているものの南北方向に約3m、幅15～21cm、深さ7～9cmを測り、断面U字状を呈する。両端にピットがあり、遺存状態は悪い。

柱穴は5個確認できた。主柱穴と考えられるのはP 1・P 2で、南北2本柱と考えられる。主柱穴間距離は、1.7mを測る。規模はP 1 (43×40-56) cm、P 2 (55×50-73) cmである。

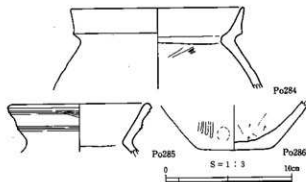
P 3 (60×50-14) cmは、位置的に中央ピットと考えられる。

埋土は2層であった。貼床は確認できなかった。

出土遺物は、弥生土器甕Po284・285、底部Po286である。いずれも埋土中からの出土である。

時期は、Po284・285から、南谷大山編年Ⅲ期、弥生時代後期後半ごろと考えられる。

(八峠)



挿図308 石輪第1遺跡S 110出土遺物実測図

S I 11 (挿図310、図版85)

調査区北東側のG4・G5グリッドにあり、標高41.2~41.7mの西向きの斜面に立地する。南側でSS02を切る。

遺存状態は悪く、とくに斜面の下側は削られている。

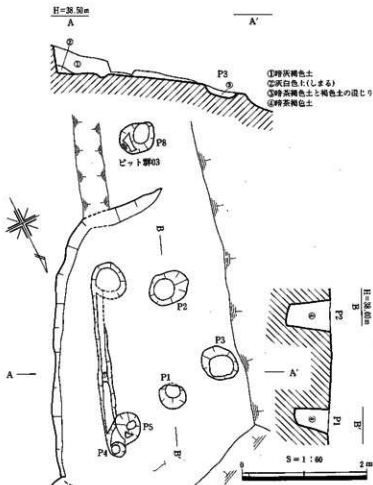
形態は方形になると考えられる。規模は、東西2.0m以上、南北3.1mで、床面積は推定で6.2㎡を測る。残存壁高は、最も遺存状態のよい東壁で最大37cmを測る。壁溝は、東側で一部途切れる。幅10~16cm、最大の深さ20cmで、断面U字状を呈す。

検出された柱穴はP1(25×22-12)cmのみであるが、本来の主柱穴は、東西2本柱と考えられる。床面上で焼土面をP1の西側で検出した。楕円形で、よく締まっていた。

埋土は①層のみで、遺構の西側は現代の擾乱層があり、それを除去したところ遺構が確認できた。

遺物は、埋土中から土師器片が出土したが図化できなかった。

時期は、出土遺物から古墳時代と考えられる。(八峠)



挿図309 石籠第1遺跡S I 10遺構図

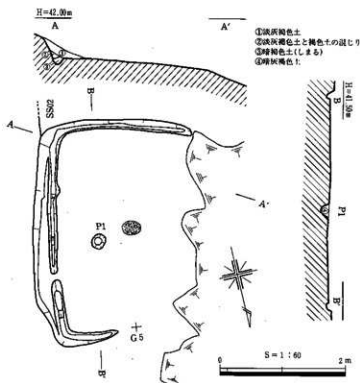
S I 12 (挿図311、図版85)

調査区中央部のD3グリッド、テラスの東側で、37.8~38.2m西向きの緩やかな斜面に立地する。北側1mにS I 05、西側約2mにS I 07・08がある。

遺存状態はきわめて悪く、わずかに壁溝と柱穴を検出した。そのため形態は不明である。規模は、残存値で東西2.6m、南北3.3m、床面積は推定で8.6㎡である。壁溝は、最大幅21cm、深さは最大で3cmを測る。

主柱穴は、P1・P2の2本柱で、規模は、P1(35×30-17)cm、P2(36×29-32)cmである。主柱穴間距離は、1.7mを測る。

遺物はなく、時期は不明である。(八峠)



挿図310 石籠第1遺跡S I 11遺構図

S I 13 (神岡312~316、図版85・86・95・96)

調査区東側のD5・6グリッドにあり、標高44.5~45.5mの緩やかに西側に向かって傾斜する斜面に立地する。南にはS I 14が接している。S I 13-2からS I 13-1へ建て替えがあったものと思われる。

S I 13-1は、西側は流失してはいるが、遺存状態はよい。平面形は、南北に長い長方形を呈するものと考えられる。規模は、南北5.54m、東西4.13m以上、床面積は残存する部分で22.0㎡である。残存壁高は、最も遺存状態のよい東壁で最大0.83mを測る。壁跡は西側以外で検出された。幅9~18cm、深さ3~8cmを測り、断面V字状を呈す。

主柱穴はP1~P4の4個で、それぞれの規模は、P1(33×31-86)cm、P2(39×26-93)cm、P3(54×46-62)cm、P4(44×38-81)cmを測る。主柱穴間距離は、P1~P2間より順に2.8m、1.9m、2.7m、1.7mである。

P5は壁際特殊ビットである。形態は上部隅丸方形、下部不整形の二段掘り、で、両脇と前面北側に溝をもつ。内部からは、いずれも完形ではないが、壺Po289・Po295、高環Po304・Po311が出土した。この特殊ビット付近では、暗褐色土をほんのわずかに含む地山が、踏み締まった状態で検出された。住居の出入りの可能性がある。

また、SK1は大きさや位置から、貯蔵穴と考えられる。その他のP6~P9は用途は不明である。

住居のほぼ中央には、約75×60cmの範囲で4cm程度のくぼみがあり、焼土面が検出された。その西側にもドーナツ状の焼土面がみられる。

埋土は10層に分層できた。このうち⑤・⑥・⑦層に焼土粒・炭化物が含まれることから、S I 13-1は焼失したものと考えられる。

床面の西側約3分の2には、地山ブロックを多量に含む暗褐色土により貼床がほどこされている。厚さは数cm~30cmで、西側にいくほど深くなる。

貼床除去後にはP10~P14が検出された。P13・14を主柱穴とするS I 13-2があったものと思われるが、S I 13-1をつくる段階でほとんど壊されているため、規模・形態は不明である。主柱穴の規模は、P13(48×54-69)cm、P14(44×42-74)cmを測る。埋土は締まりがなく、柱材は抜き取られたものと思われる。また、P12からは完存の高環部Po306が出土している。

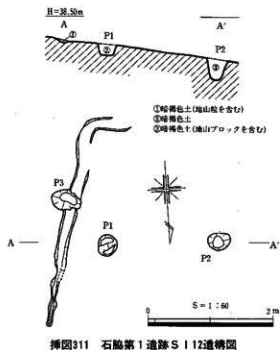
遺物は、壺Po288~Po302、高環Po303~Po314、陶質土器高環Po316、須恵器口縁部Po317、砥石S16、壺状鉄器F4、耳環B1を図化した。ほとんどの遺物が埋土中層から下層で出土している。

このうち、F4とB1は埋土上層の②~③層で出土しており、後世の流れ込みと考える。また、壁際特殊ビットの北側床面上で、高環部Po305の中にPo316が納められた状態で出土した。Po316の坏部内には鉄錆が付着している。

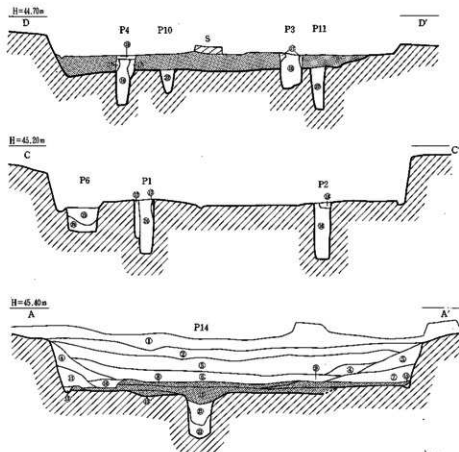
さらに、P7南西側床面で須恵器窯跡で見られる発泡したスラグ塊が出土した。大きさは20cm程度で非常に軽く、径5mm前後の円孔が多くみられ、和鋼博物館に金属学的調査をお願いした。詳しい報告は特論9を参照されたい。周辺床面からも、少量ではあるが同質のスラグ塊と思われる小片が検出されている。

出土遺物から、S I 13-1、-2ともに南谷大山編年Ⅷ~Ⅸ中間期、古墳時代中期中葉ごろと考えられる。

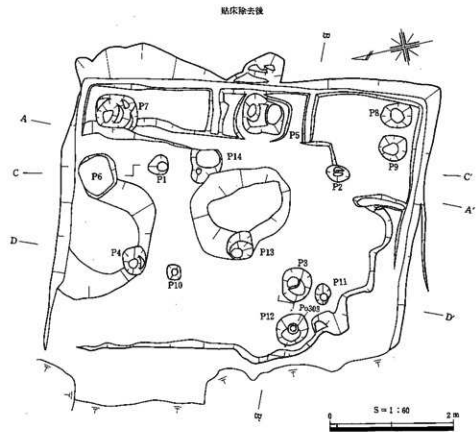
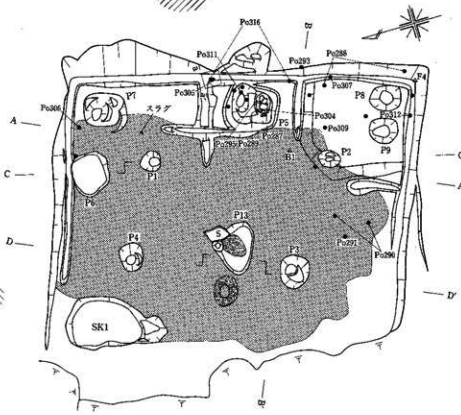
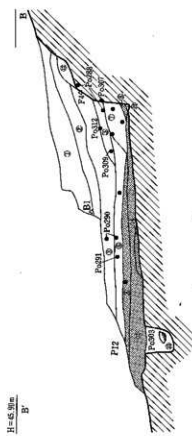
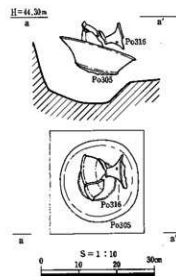
(岩崎)



神岡311 石輪第1遺跡S I 13遺構図

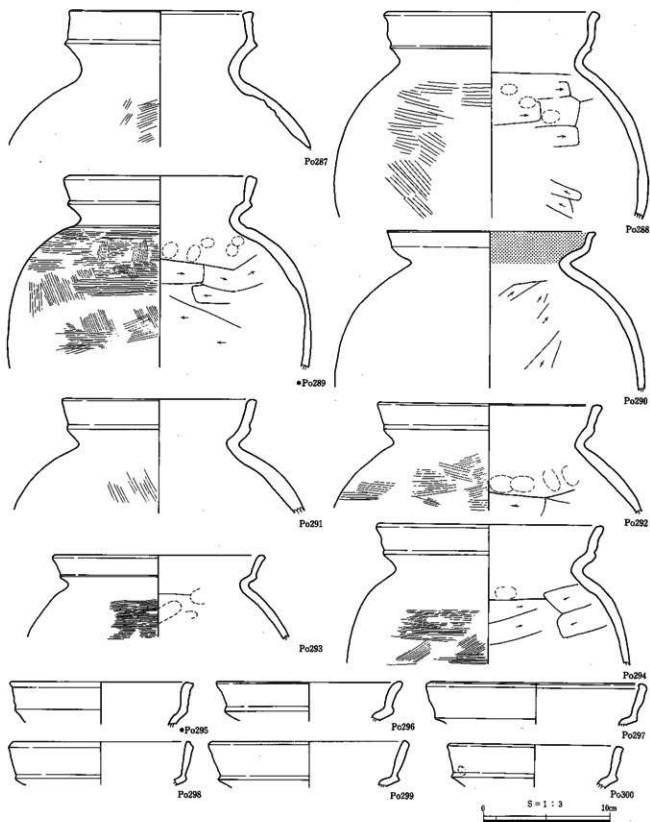


- ①黄褐色土
- ②暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ③暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ④暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ⑤暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ⑥暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ⑦暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ⑧暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ⑨暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ⑩暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ⑪暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ⑫暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ⑬暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ⑭暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ⑮暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ⑯暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ⑰暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ⑱暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ⑲暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ⑳暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㉑暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㉒暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㉓暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㉔暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㉕暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㉖暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㉗暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㉘暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㉙暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㉚暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㉛暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㉜暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㉝暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㉞暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㉟暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㊱暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㊲暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㊳暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㊴暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㊵暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㊶暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㊷暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㊸暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㊹暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㊺暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㊻暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㊼暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㊽暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㊾暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ㊿暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)



挿図312 石船第1遺跡S113透視図

挿図313 石船第1遺跡S113 床面遺物出土状況



挿図314 石胎第1遺跡S113出土遺物実測図(1)

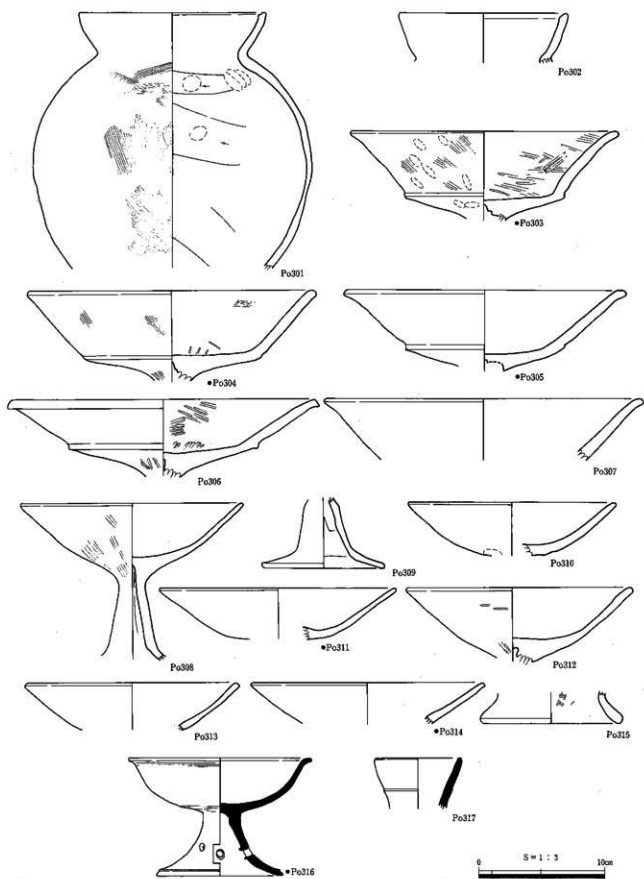
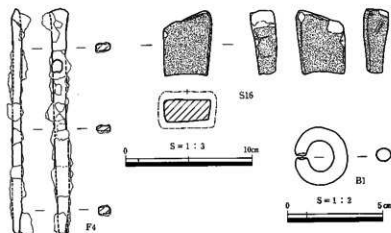


插图315 石胎第1遺跡S113出土遺物実測図(2)



挿図316 石籠第1遺跡S113出土遺物実測図(3)

S114 (挿図317・318、図版86・96・97)

調査区の東側D5グリッドにあり、標高45.0~45.4mの西側に向かって緩やかに傾斜する斜面に立地する。北側はS113と切り合い関係にある。南側と西側は擾乱を受けている。

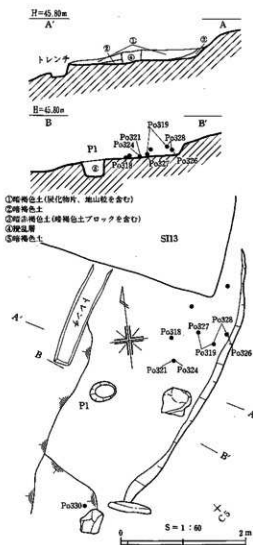
遺存状態は悪く、平面形は隅丸方形と推定される。規模は、南北4.4m以上、東西1.8m以上、床面積は残存する部分で、6.37㎡である。残存壁高は、最も遺存状態のよい東壁で最大0.30mを測る。検出できたピットはP1のみで、規模は(43×32-20)cmである。

埋土は3層に分層でき、自然堆積したものと考えられる。このうち①層には炭化物片が少量含まれる。S113との切り合い関係は、土層では観察できなかったが、貼床等は認められなかったことから、S114が先行するものと考えられる。

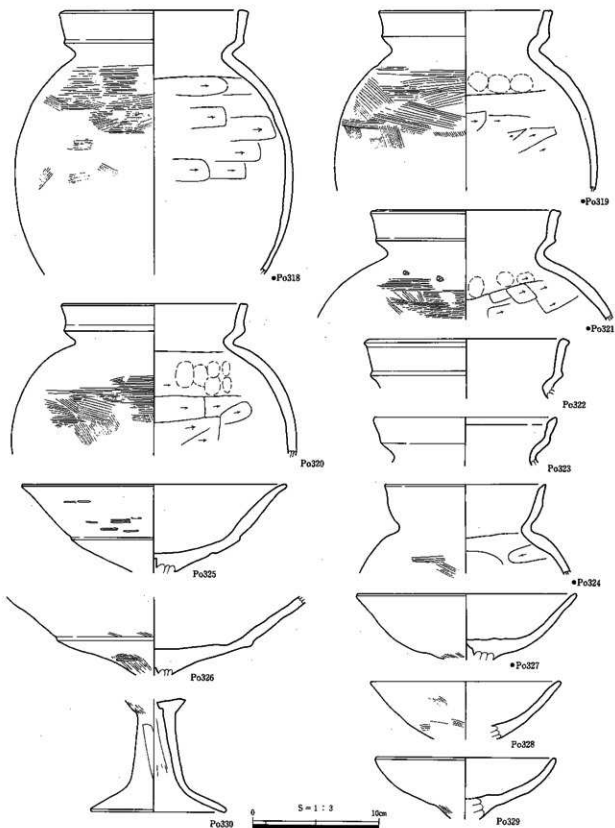
遺物は比較的多く、ほとんどの遺物が住居の北側半分の床面付近で出土している。壺Po318~Po324、高環Po325~Po330を図化した。

このうちPo324は、S113のP9内出土の遺物と接合している。

出土遺物から、南谷大山編年Ⅶ~Ⅷ中間期、古墳時代中期中葉ごろと考えられる。(岩崎)



挿図317 石籠第1遺跡S114遺構図



挿図318 石船第1遺跡S114出土遺物実測図

第3節 土 坑

SK01 (挿図319・320、図版86・97)

調査区北側のH5グリッドにあり、標高39.8m～40.3mの西向き斜面上に立地する。2m北にS I 10、1m南にS S 03がある。

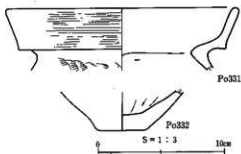
遺存状態は悪く、東側は削られている。形態は不整な楕円形を呈すと考えられる。規模は、残存値で東西1.2m、南北3.3mである。深さは、最も遺存状態のよい北側で最大11cmを測る。

床面でピットを9個確認したが、規則性は認められない。規模は、P 1 (28×23-35) cm、P 2 (26×22-14) cm、P 3 (25×24-37) cm、P 4 (26×24-46) cm、P 5 (28×25-25) cm、P 6 (19以上×23-29) cm、P 7 (28×25-27) cm、P 8 (28×26-27) cm、P 9 (19以上×23-21) cmであった。埋土は2層に分層できた。ピットは全て単層であった。

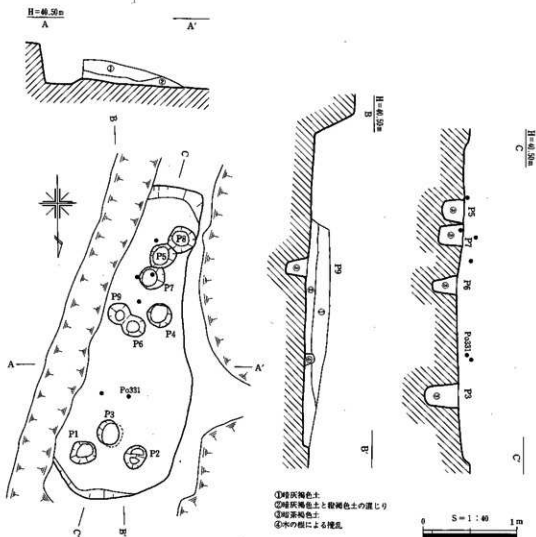
遺物は弥生土器甕Po331および底部Po332が出土した。Po331は中央やや北側の埋土下層から、Po332は埋土中からの出土である。その他南側のピット周辺から土器の細片が出土したが図化できなかった。

時期は、南谷大山編年Ⅲ期、弥生時代後期後半ごろと考えられる。性格は不明である。

(八峙)



挿図319 石鳥第1遺跡SK01出土遺物実測図



挿図320 石鳥第1遺跡SK01遺構図

第4節 段状遺構

SS01 (挿図321~323、図版86-97)

調査区南側際近くの、A5、B5グリッドにかけての緩やかに西側へ傾斜する標高約45.8mの斜面に立地している。西側約7mにSD01が、同じく西側約9mにSI04があり、北側にはSS04が接している。

形態は、西側へ傾斜する斜面を深さ約0.38m削り込み、平坦面を作っている。規模は南側が調査区外に続いているため全体の規模は不明確であるが、現存する部分で南北約11m以上、東西約4.4m以上を測る。

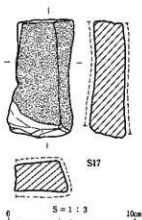
平坦面には10個、それ以外に3個を加えた計13個のピットが検出された。これらの規則性は認められない。なお、これらの規模等については挿表14を参照されたい。

埋土は5層からなる。

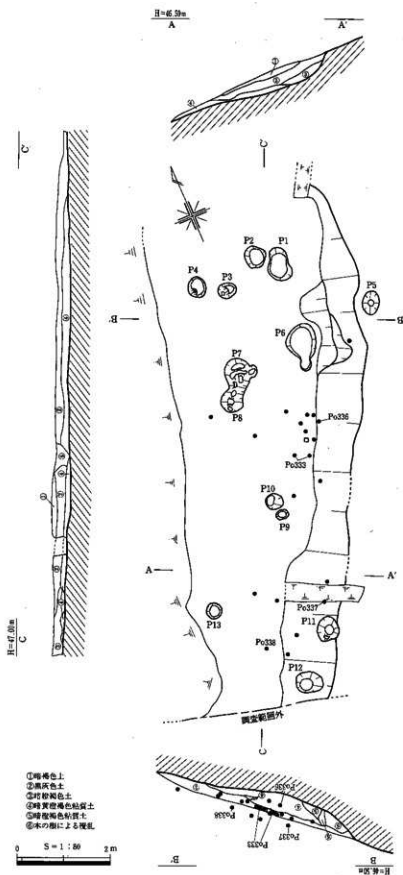
遺物は、固化できたものに土師器甕Po333-334、高坏Po335-338、砥石S17がある。これらはすべて埋土中出土である。その他に、固化できなかった高坏脚部がピット内から出土している。

出土遺物から判断して南谷大山編年Ⅷ~Ⅸ中間期、古墳時代中期中葉ごろのものとする。

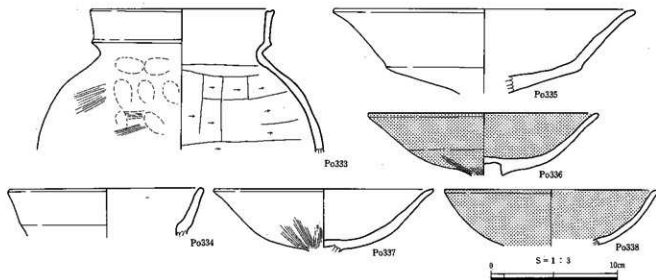
性格は不明である。(井上)



挿図321 石籠第1遺跡SS01
出土遺物実測図(1)



挿図322 石籠第1遺跡SS01遺構図



挿図323 石島第1遺跡SS01出土遺物実測図(2)

ピット 番号	規 長軸×短軸-深さ	横 (cm)	備考	ピット 番号	規 長軸×短軸-深さ	横 (cm)	備考	ピット 番号	規 長軸×短軸-深さ	横 (cm)	備考
P 1	72×40-23.2			P 6	100×64-19.9			P11	50×46-43.8		
P 2	44×44-17.2			P 7	68×58-34.5			P12	58×44-33.0		
P 3	40×32-22.3			P 8	56×46-25.2			P13	34×32-27.3		
P 4	44×38-16.0			P 9	26×20-14.6						
P 5	50×36-31.6			P10	38×34-26.2						

挿表14 石島第1遺跡SS01ピット一覧表

SS02 (挿図324、図版87)

調査区北東側のG5・G6グリッドにあり、標高40.8-41.9mの西向きの斜面に立地する。北側をS I11に切られる。

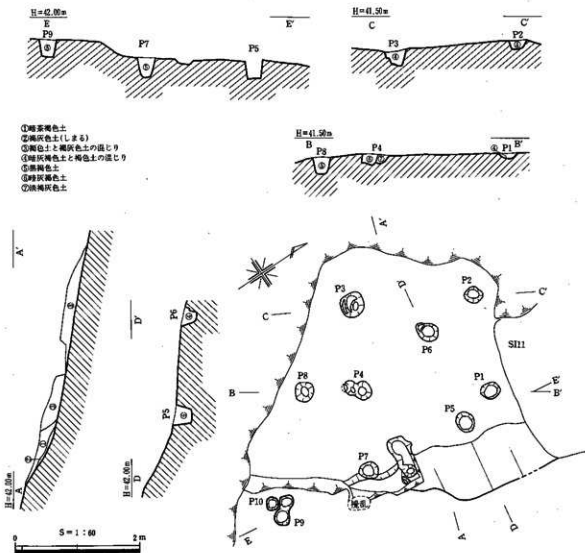
遺存状態は悪く、北東側の肩の一部のみ検出されたため全体の形態は不明である。壁溝は無く、ピットは10個確認したが、掘立柱建物跡の可能性もある。規模は、残存値で東西4.3m、南北6.6mを測る。残存壁高は、最も遺存状態の良い北東壁で最大42cmを測る。

柱穴は10個確認できた、P1～P4とP5～P10でそれぞれ建物があった可能性がある。規模は、P1 (30×25-10) cm、P2 (27×25-18) cm、P3 (43×38-31) cm、P4 (48×27-15) cmで、1間×1間の掘立柱建物跡または竪穴住居跡があったものとみられる。柱穴間距離は、P1～P2から順に、1.6m、1.9m、1.4m、2.0mを測る。さらに、P5 (33×27-33) cm、P6 (38×28-23) cm、P7 (31×30-29) cm、P8 (30×27-32) cmで、P8がずれるものの、1間×1間の建物跡も考えられる。柱穴間距離は、P5～P6から順に、1.6m、2.2m、1.6m、1.7mを測る。

埋土は3層に分層できた。ピット内は④～⑦層で、P1～P4は④⑥⑦層、P5～P8は⑤層で、埋土も2基の建物跡で分けることができる。なお、P9・10は、埋土がP5～P8と同一であるが、底面の標高が違うため、南側に建物跡のあったことも考えられる。

遺物は、土師器片が出土したが図化できなかった。時期は古墳時代以降と考えられる。

(八峠)



挿図324 石籠第1遺跡 S503遺構図

S503 (挿図325、図版87)

調査区北側の G5・H5 グリッドにあり、標高40.2~40.4mの西向きの斜面に立地する。1m北にSK01が、斜面の上、東側3~4mにはSI11がある。

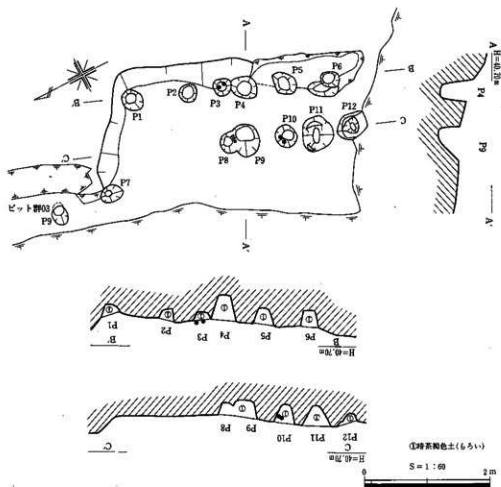
遺存状態は非常に悪く、周囲に架穴や擾乱穴があり、ビットおよび北から東側にかけての肩を一部検出した。形態は不整な長方形で、西側と南側は崖となっている。規模は、残存値で東西2.0m、南北3.7m。残存壁高は、最も遺存状態のよい北東壁で最大31cmを測る。

ビットは12個確認できた。P1~P6、P8~P12が直線状にあり、柵跡状の遺構があったものと考えられる。P7については不明で、あるいはビット群03に含まれるかもしれない。それぞれの規模は、P1 (33×29-21) cm、P2 (28×27-27) cm、P3 (28×27-24) cm、P4 (42×36-53) cm、P5 (43×33-31) cm、P6 (30×24-30) cm、P7 (37×26-15) cm、P8 (32×22-23) cm、P9 (52×38-32) cm、P10 (37×33-28) cm、P11 (57×49-36) cm、P12 (44×39-24) cmである。

埋土は全て単層で、非常にもろかった。地山もこの付近は黄褐色土で、もろくくずれやすかった。

遺物はP3・P10から磁器片が出土し、接合したが、図化できなかった。時期は近世以降と考えられる。性格は不明である。

(八峠)



挿図325 石鳥第1遺跡SS03遺構図

SS04 (挿図326・327、図版87)

調査区南東側のC5グリッドにあり、標高44.8-46.2mの西向きの斜面に立地する。3-4m北側にはSI14があり、南側はSS01と接している。西側は急な崖となる。

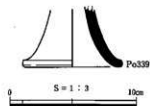
東側の肩の部分については、遺存状態は比較的良い。形態は不整な長方形であるが南北方向の状態が悪く、範囲については不明瞭な要素をもつ。規模は残存値で、東西2.3m、南北7.9mを測る。残存壁高は、最も遺存状態の良い東壁中央付近で最大52cmを測る。

ビットは2個確認できたが、いずれも浅く、P2は遺構の肩を切っていた。規模は、P1 (67×58-28) cm、P2 (69×57-24) cmであった。

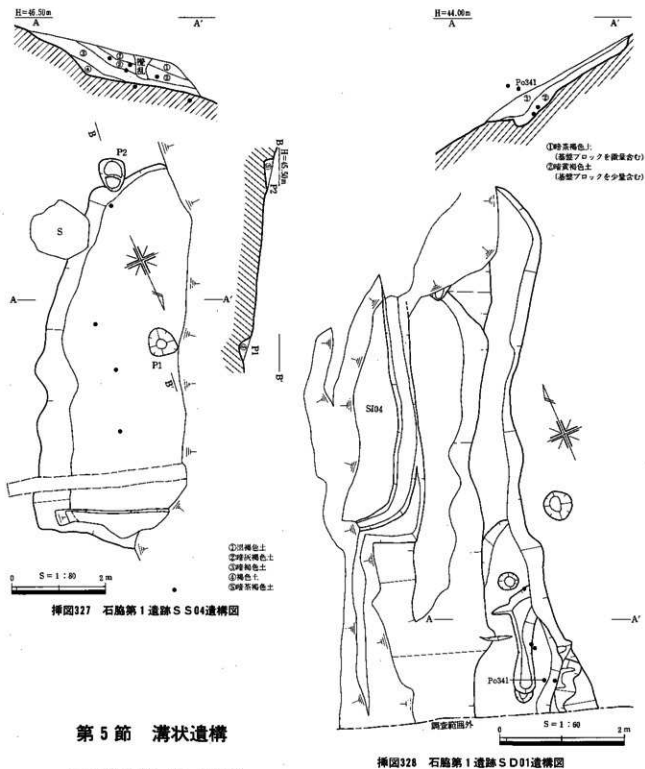
埋土は4層で、いずれも斜面に沿った状態で堆積していた。

出土遺物は、須恵器高坏Po339で、埋土中②層からの出土である。

時期は、古墳時代後期ごろと考えられる。性格は不明である。(八時)



挿図326 石鳥第1遺跡SS04出土遺物実測図



挿図327 石胎第1遺跡 S S64遺構図

挿図328 石胎第1遺跡 S D01遺構図

第5節 溝状遺構

S D01 (挿図328・329、図版86)

調査区の最も南側のA・B 4グリッドにあり、標高41.9～42.8mの西側へ傾斜する急斜面が緩やかに変換する箇所立地する。周辺は、耕作のためにかなり削平され、さらに、南側は調査区外へ伸びている。西側にはS I 04が接している。

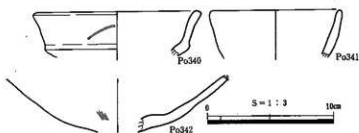
遺存状態は悪く、西側立ち上がりは削平されている。西側斜面の傾斜変換点付近を南北方向に走る。規模は長さ8.3m以上、幅0.4～1.1m以上、深さ36～85cmを測る。南側調査区際では、底面をさらに掘り込んでいる。東側でピットが2個検出されたが、伴うものかどうか不明である。

また、南側では、埋土中で焼土面が検出されている。

埋土は2層に分層できた。いずれも基盤ブロックをわずかに含む。

出土遺物には、図化できたものに土師器甕Po340、直口壺Po341、高坏Po342がある。高坏Po342は底面上からの出土で、その他のものは埋土中の出土である。

出土遺物より、南谷大山編年Ⅶ～Ⅷ期、古墳時代中期後半ごろのものと考えられる。(牧本)



挿図329 石籠第1遺跡SD01出土遺物実測図

SD02 (挿図330～332、図版86・97)

調査区中央北側のE4・F4グリッドにあり、標高38.0m～38.5mの緩やかな北西向きの斜面、テラスの西側に立地する。西側にはピット群01、2m南にはS105がある。

遺存状態は比較的良好だが、遺構の範囲が明確に検出できなかった。遺構は東側の斜面に沿って緩やかに湾曲し、南北方向で途切れている。規模は、最大幅1.2m、長さは18.9mである。深さは、最も遺存状態の良い西側中央付近で最大45cmを測る。

埋土は3層に分層できた。この内①層は斜面の下まで堆積が続いている。遺構は、①層の下、③層の上面から掘り込まれている。

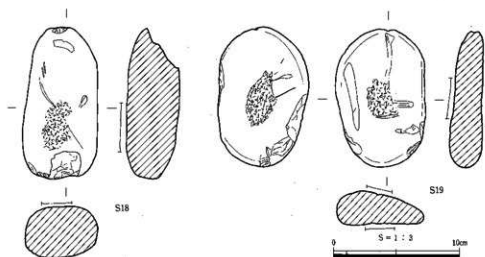
出土遺物は、弥生土器甕Po343～347、弥生土器底部Po351、土師器甕Po348～351・357、小型丸底壺Po353、高坏Po354、須恵器銅部片Po355、縄文土器片Po356、瓦質土鏝Po358・359、敲石S18、石錘S19である。

Po343は埋土中、他は付近も含めた範囲からの出土である。①層から瓦質の鏝が出土しており、この溝はそれ以前に掘られたものと考えられるが、時期を特定できる遺物に欠ける。

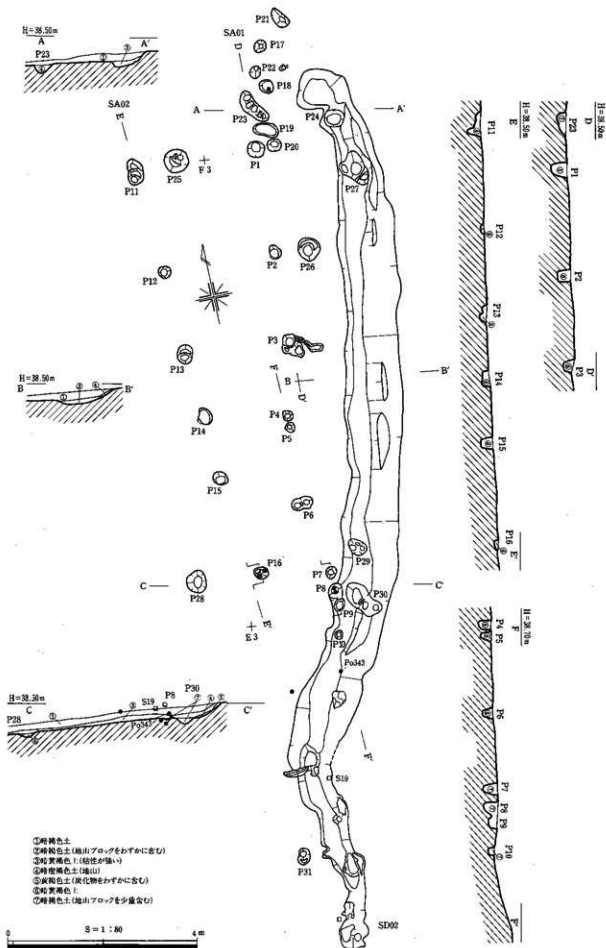
遺物の時期は、Po343～347が南谷大山編年Ⅱ～Ⅲ期、弥生時代後期後半ごろ、Po348～350が南谷大山編年Ⅴ～Ⅵ期、古墳時代前期前半ごろと考えられる。Po354は10～11世紀ごろ、Po357は奈良から平安時代、Po358・359は鎌倉時代と考えられる。

遺構の時期は、弥生時代以降、鎌倉時代以前と考えられる。性格は不明である。

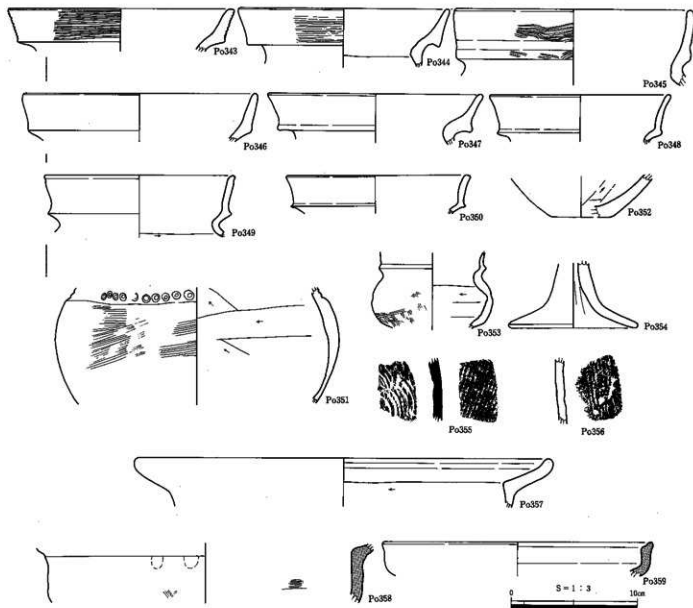
(八峠)



挿図330 石籠第1遺跡SD02出土遺物実測図(1)



坪岡331 石籠第1遺跡SD02、SA01・02、ビット群01遺構図



挿図332 石廊第1遺跡SD02出土遺物実測図(2)

第6節 柵 列

SA01 (挿図331、図版87)

調査区中央北側のF3グリッドの東側、SD02の最大1.5m西側で、南側はSD01に一部切られる。標高37.9~38.0mの平坦地に立地する。

南北方向にP1~P10が並ぶが、P1~P3に対し、P4~P10はやや西側にずれている。主軸は、P1~3がN-3°-E、P4~10がN-1°-Eで、いずれも南北方向に対し若干東西に振れる。

柱穴の径は17~46cm、深さは13~34cmで、遺存状態は比較的よい。柱穴間距離は、P1~2が2.3m、P2~3が2.0m、P4~6が1.9m、P6~7が1.6m、P7~9が0.7m、P9~10が0.6mを測る。これらの柱穴はいずれが対応するものか判別が難しいが、P4・5、P6、P8・9などから建て替えも考えられる。

埋土はいずれも単層で、P1が⑤層、P2~6が⑥層、P7~10が⑦層である。⑥層はSA02のP11~16と同

じである。P 8から土師器片が出上しているが図化できなかった。

時期は、出土遺物および切り合いからS D02より古い。性格は不明である。

(八時)

ビット 番号	規 長軸×短軸-深さ	横 (cm)	備考	ビット 番号	規 長軸×短軸-深さ	横 (cm)	備考	ビット 番号	規 長軸×短軸-深さ	横 (cm)	備考
P 1	37×34-33			P 5	21×20-26			P 8	34×29-31		土器片
P 2	28×26-28			P 6	46×27-28			P 9	28×23-13		
P 3	29×29-23			P 7	28×22-34			P 10	20×17-13		
P 4	23×21-30										

挿表15 石屋第1遺跡SA01ビット一覧表

SA02 (挿図331、図版87)

調査区中央北側のF 4グリッドの西側、S D03の1.5～4 m西側で、標高37.7～38.0の平坦地に立地する。

南北方向に並び、主軸はN-4°-Wで、南北方向に対し若干東西に振れる。

柱穴の径は23～40cm、深さは8～27cmで、遺存状態は比較的よい。柱穴間距離は、P11～12から順に、2.1m、1.9m、1.4m、1.3m、2.1mで、南に向かい柱穴間距離は短くなる傾向にある。ただしP16については柱穴間距離も異なり、主軸からやや外れていることから、SA02とは異なる遺構とも考えられる。

埋土はいずれも⑥層の単層で、SA01のP 2～6と同じである。遺物は出土していない。SA01とともに2列の溝があったとも考えられるが、不明である。

(八時)

ビット 番号	規 長軸×短軸-深さ	横 (cm)	備考	ビット 番号	規 長軸×短軸-深さ	横 (cm)	備考	ビット 番号	規 長軸×短軸-深さ	横 (cm)	備考
P11	35×34-26			P13	40×32-18			P15	30×28-27		
P12	26×24-8			P14	36×31-17			P16	30×23-12		

挿表16 石屋第1遺跡SA02ビット一覧表

第7節 ビット群

ビット群01 (挿図331、図版87)

調査区中央北側のF 3・F 4グリッド、標高38.0m～38.3mの緩やかな北西向きに斜面に立地する。S D02の西側にある。

31個のビットを検出した。径は20～40cmが多く、深さは8～34cmで、遺存状態は比較的よかった。このうち、P 1～10、P11～P16は軸は異なるものの南北方向に並んでおり、それぞれ構列になると考えられる。その他のビットは、P17～23がS D02北端付近、P25・26・28がSA01・02周辺、P24・27・29・30がS D02の中、P31がS D02南端付近から検出できた。

ビット中の埋土は単層で、⑦層であった。いずれも①あるいは③層の下から掘り込まれており、S D02以前に掘られたものと考えられる。

遺物は、P18から土師器片が出したが図化できなかった。時期は、古墳時代以降で、S D02より古いものとも考えられる。

(八時)

ビット番号	縦	横 (cm)	備考	ビット番号	縦	横 (cm)	備考	ビット番号	縦	横 (cm)	備考
	長軸×短軸-深さ				長軸×短軸-深さ				長軸×短軸-深さ		
P17	27×23-33		土器片	P22	26×24-10			P27	68×60-31		
P18	33×25-27			P23	99×29-22			P28	48×44-10		
P19	55×26-17			P24	43×36-19			P29	43×30-12		
P20	31×27-23			P25	50×48-28			P30	91×45-24		
P21	47×25-16			P26	48×47-12			P31	35×22-20		

挿表17 石鳥第1遺跡ビット群01一覽表

ビット群02 (挿図333)

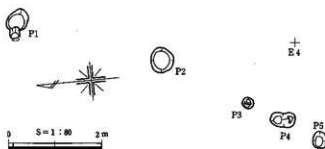
調査区北東側のF5グリッドにあり、標高40.2m～41.1mの西向きの斜面に立地する。S I 09の北および西側にある。ビット群02の西側は崖になっており、その際で確認した。

5個のビットを検出した。径は20～50cm、深さは19～32cmで、遺存状態は比較的良好だった。これらは、北東～南西方向に並んだ状態で検出された。柱穴間

距離は、P1～P2から順に、3.2m、2.0m、0.7m、1.0mであった。

埋土はいずれも暗茶褐色土の単層であった。遺物は出土せず、時期・性格ともに不明である。

(八峠)



挿図333 石鳥第1遺跡ビット群02遺構図

ビット番号	縦	横 (cm)	備考	ビット番号	縦	横 (cm)	備考	ビット番号	縦	横 (cm)	備考
	長軸×短軸-深さ				長軸×短軸-深さ				長軸×短軸-深さ		
P1	63×44-23			P3	24×22-23			P5	37×27-26		
P2	53×50-19			P4	53×27-32						

挿表18 石鳥第1遺跡ビット群02一覽表

ビット群03 (挿図334)

調査区の最も北側のI5・J5グリッドにあり、標高38.8～39.2mの西向きの斜面に立地する。S I 10の北東またはSK01とS I 10の周辺にある。P1～P5の西側は梨穴による擾乱である。

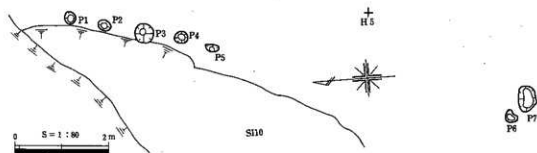
9個のビットを検出した。径は20～50cm、深さは13～75cmで、遺存状態は比較的良好だった。P1～P5は南北方向に並んでおり、柱穴間距離は、P1～P2から順に0.7m、0.8m、0.8m、0.7mで、ほぼ等間隔であった。

埋土はいずれも淡茶褐色土の単層であった。遺物は出土せず、時期・性格ともに不明である。

(八峠)

ビット番号	縦	横 (cm)	備考	ビット番号	縦	横 (cm)	備考	ビット番号	縦	横 (cm)	備考
	長軸×短軸-深さ				長軸×短軸-深さ				長軸×短軸-深さ		
P1	27×23-14			P4	27×26-16			P7	52×40-39		
P2	28×22-13			P5	30×18-15			P8	31×25-24		
P3	43×41-13			P6	26×20-20			P9	59×48-75		

挿表19 石鳥第1遺跡ビット群03一覽表



挿図334 石脇第1遺跡ピット群03遺構図

ピット群04 (挿図335)

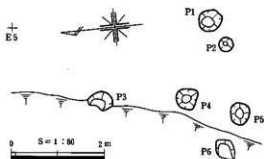
調査区中央東側のE5グリッドにあり、標高42.9m-43.6mの西向きの斜面に立地する。S113の北側にある。

6個のピットを検出した。径は20-50cm、深さは23-42cmで、遺存状態は比較的良好であった。なお、P6は、崖の斜面で検出された。柱穴はとくに規則性は認められなかった。

埋土はいずれも暗茶褐色土の単層であった。

P6から土師器片が出土したが図化できなかった。時期は、遺物から古墳時代以降と考えられるが、性格は不明である。

(八峠)



挿図335 石脇第1遺跡ピット群04遺構図

ピット番号	規 模 (cm) 長軸×短軸-深さ	備考	ピット番号	規 模 (cm) 長軸×短軸-深さ	備考	ピット番号	規 模 (cm) 長軸×短軸-深さ	備考
P 1	52×46-23		P 3	48×41-31		P 5	55×33-42	
P 2	30×28-30		P 4	44×43-32		P 6	40×38-33	

挿表20 石脇第1遺跡ピット群04一覽表

第8節 遺構外遺物 (挿図336、図版97)

遺構外出土遺物は、図化できたものは、弥生土器甕Po360-363、土師器甕Po364、弥生土器碗Po365、土師器高台付碗Po366、須恵器甕片Po367、砥石S20、石鎌S21、勾玉J1、寛永通宝C1である。

時期は、弥生土器がPo360-Po362が南谷大山編年Ⅱ期、Po363が南谷大山編年Ⅲ期、弥生時代後期後半から終末と考えられる。

土師器は、Po364が南谷大山編年Ⅳ期、古墳時代中期後半ごろと考えられる。

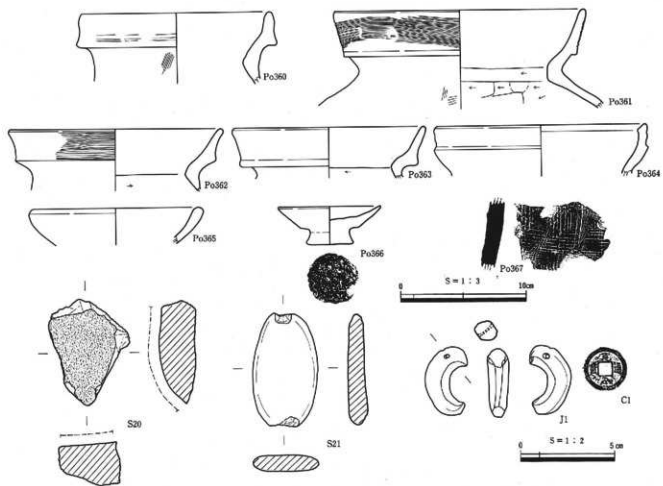
また、Po366は底部が糸切りで、12-13世紀と考えられる。

いずれの遺物も、石脇第1遺跡の遺構の時期に当てはまるものである。

このうち、勾玉J1は、S113出土の耳環とともに、古墳または祭祀に関わる遺物として注目されるが、周辺には中期古墳は認められない。

また、石鎌が出土していることから、石脇第1遺跡の集落の人々は漁撈にも携わっていたものと推察され、集落の性格を考える上でも重要な遺物である。

(八峠)



挿図336 石胎第1遺跡遺構外遺物実測図



写真33 発掘調査参加者

第8章 遺構・遺物の検討

第1節 古墳時代の土器について

平成8・9年度に行われた国道9号改築工事に関する調査で検出された遺構のうち、古墳時代前期から古墳時代中期については、良好な一括資料が見られ、従来の土器編年の空白時期を再考する資料が提供できると考える。

ここでは、この時代の土器について、まず編年の基本とする南谷大山編年の問題点を指摘した上で、個々の土器がはらむ問題について、若干の考察を行うこととする。

1. 南谷大山編年の問題点

天神川下流域では、弥生時代後期から古墳時代中期にかけて、比較的長期にわたる遺跡として羽合町南谷大山遺跡がある。この遺跡での編年案は、連続した編年ではないこと、南谷大山Ⅴ期を細分化できること、空白期間の捉え方に間違いがあり、Ⅴ期とⅥ期に空白期間があると考えた方がよいと思われること、庫内の後の遺跡との併行関係の検討が曖昧で、大山Ⅴ期を青木Ⅴ・Ⅵ期の新段階、大山Ⅴ期を青木Ⅴ期併行と考えた方がよいことなどが問題点として挙げられる。

以上の問題点を踏まえ、土器を概観してみる。なお、遺跡名については略号を用いたものがあり、石橋第3遺跡森木地区はIW3、石橋第3遺跡緑地地区はIW3 k、寺戸第2遺跡はTD2、石橋第1遺跡はIW1、小沢ワラ畑遺跡はKWとする。

2. 古墳時代前期の土器の検討

南谷大山Ⅴ期併行では、TD2 S I 01・S I 05・S I 09・S K 09、IW3 k S I 02がある。壺(1)は口縁端部が外反する。壺(2-6)は、シャープな作りで口縁部は高く立ち上がり、端部は平坦面をもつ。胴部は丸みをもち不明瞭な平底を呈す。胴部外面肩部はタテ後コハケで、下半はタテハケである。内面は右方向ケズリである。外面肩部には、波状文が施されるものもある。高杯(7-9)は、胎土が浅黄褐色で、端部が外反し、大型でやや深い皿状の杯部をもつ。鼓形器台(13)は口径23cm前後と大型で、器高も高い。器壁が薄くシャープな作りである。低脚杯は、大型品・小型品(10)があり、大型でやや深い杯部をもつ(11)と皿状杯部をもつ(12)である。口径20cm前後と大型である。また、胴部を裝飾した脚付短頸壺(14)もこの時期のものである。

南谷大山Ⅴ期古墳併行では、TD2 S I 03がある。この遺構は、TD2 S I 01を切り込んで作られており、明らかに後出する。壺(15-16)は、やや器壁が厚くなり、口縁端部が外方へ折れる。口縁部下端の突出度は鈍くなっている。胴部は球形に近い倒卵形を呈すものと考えられる。外面肩部タテ後コハケで、刺突文が施される。胴部内面右方向ケズリである。直口壺(17)は、罎形形の胴部をもつ。皿曲部の縁は明瞭ではない。複合口縁壺(18-19)は、口縁部の立ち上がりが低くなり、端部は平坦面をもつ。口縁部下端は鈍い。胴部は丸味を帯び、完全に丸底を呈す。胴部外面肩部から中位付近までコハケ、下半はタテハケである。内面上部右方向ケズリ、底部付近は指押えである。大型品(20)は内面ハケ目調整である。また、単純口縁の(21)がある。高杯は、短頸の大型有段杯部をもつ(23)、皿状杯部をもつ(22)がある。(22)は小型化している。鼓形器台は、小器型(27-28)と圃地器型(26)がある。(26)は、円形の透かしをもつ。口径は19cmと小型化している。低脚杯(24・25)は形勢的には変化はないが、口径15cm前後と小型化している。また、甌形土器(29)は形勢的には南谷大山Ⅴ期のものと大きな変化はないが、器高が低く、狭口部の立ち上がりも低くなっている。

なお、TD2 S I 03のものは、南谷大山Ⅴ期のものととは器形・手法にヒアタスがあり、この間に、もう一形式を設定することができると考える。

南谷大山Ⅴ期新併行ではIW3 S I 05がある。壺(30)は、外傾する複合口縁をもつ。口縁部下端の縁が鈍くなる。複合口縁壺(31-32)は、口縁部下端の突出度が鈍くなり、布留系土器の影響を受けたと考えられる。端部が内方へ肥厚するもの(32)もある。胴部外面の縦ハケが見えなくなり、横ハケの範囲が広くなる。また、布留系壺(33)は、口縁端部が内方へ肥厚するものとの割合は小さく、端部も平坦面をもつ。高杯には、深い皿状杯部の(34)、有段杯部の(35)がある。(34)は口径16cm前後と小型化しているが、やや深くなっている。低脚杯(36-37)も、口径15cm前後と小型である。鼓形器台(38-39)は端部が外反し、口径・脚径17cm前後と小型化している。

3. 古墳時代中期の土器の検討

古墳時代中期は、南谷大山Ⅶ-Ⅸ期に相当すると考えられるが、Ⅶ期に相当する遺構は検出されていない。また、Ⅶ期とⅧ期の間には空白期間が認められる。この時期は、初期須恵器が出現する時期と考えられ、石橋第1遺跡でこの時期の良好な資料が見られる。

南谷大山Ⅶ-Ⅸ期中期には、IW1 S I 01・02・13がある。複合口縁壺は、外傾するもの(40)と直立する(41-42)ものがある。いずれも口縁部下端の縁が退化している。壺には複合口縁壺(44-47・52・53)、短く立ち上がる(49・54)、外反する(48)、布留系壺(50-51)がある。複合口縁壺は端部が外方へ肥厚し、口縁部下端の突出部は鈍い。球形の胴部を呈すと思われる。外面は粗い横一斜方向ハケ目、内面肩部指押えが明瞭に残る。布留系壺は、口縁部は内方へ肥厚し、球形の胴部をもつ。その他単純口縁の(56-57)がある。高杯は、有段杯部をもつ(58-61・66)、皿状杯部をもつ(62・63・65)、筒状杯部をもつ

つ(64・67・68)がある。筒状環部のもの脚部は細く、脚部高6.6-7.3cm程度と高い。有段高環には、橙色胎土で赤色塗彩される(58)、黄橙色胎土で外反する口縁をもつ(66)に分けることができる。直口壺(43)は、口縁部が高く、球形胴部をもつ。小型丸底壺(69・70・76・77・79・80)は、口径が胴部径を上回らない。その他、内外面ハケ目調整される甗(74・81)、無須蓋(73・78)、須蓋器を模倣した土埴器(71・72)がある。また、この時期注目されるものとして、陶質土器高環(75・82)がある。

この時期はさらに細分可能で、S I 02・13では筒状環部の高環が見られず、S I 01より若干時期的には違える可能性がある。

南谷大山西側併行では、I W 1 S I 06・07、I W 3 S I 02がある。甗(92-94)は、口縁部下端が受け口状に退化している。また、高環(95-96)は環部は筒状で、脚部も5.5cm程度と短くなっている。甗(97)は湾曲した深い底部をもつ。須蓋器(98)は、球形化した胴部をもつ。高環(99)は、扁平な環部に把手がつく。

この時期も細分可能であり、小浜ワラ畑II期(83-91)が古相を示すものと考えられる。

以上、従来の編年に対して考えてみたが、天神川下流域では、長瀬高浜遺跡をはじめとし、良好な資料が蓄積されており、今後、これらの遺跡を含めた一連の編年作業を進めていく必要がある。

4. 甗形土器について

次に、個別の土器がはらわ間題点についてみてみたい。まず、甗形土器についてであるが、特に寺戸第2遺跡S I 03からは、原位置を保つ状態でほぼ完全に復元できる資料がある。住居のほぼ中央の、わずかに掘りこぼめられたピット上に、広口甗を下にした状態で出土している。広口甗から高さ約1/2が出たまま出土し、この中には、狭口甗も落ち込んでおり、住居廃絶時には完形のまま立った状態で置かれたものと推定される。

器高67.3cm、広口径46.2cm、狭口径12.8cmを測る。広口側に縦面に1対、狭口側に横面に1対の把手が付けられ、谷若氏によるI-A-aに分類できる²⁷⁾。狭口部外面にはスガが付着し、底部外面は狭口部から上約1/2が二次焼成を受けて、器壁が荒れている。S I 03は焼失住居の可能性があり、焼失時に火を受けた可能性もあるが、狭口部は広口側に落ち込んだ状態で出土しており、火災に遭って火を受けたものとは考え難い。むしろ、使用時に火を受けて変化したと考える方が妥当であろう。

鳥取県内の整った住居跡での出土例のうち、明らかに床面出土の44例を見ると、中央ピット付近で検出されるもの、壁際で検出されるものが多く、前者が15例(34%)、後者が7例(16%)確認できた。

良好に残っていたものうち、南谷大山遺跡B S I 20、今地遺跡S I 01で出土したものを見る限り、広口を下にして置かれたものであることがわかる。その他、横倒し状態で検出されたものも、広口を下にして置かれたものと考えられる。また、2個体以上組み合わせて出土しているものもあり、青木遺跡H S I 32では住居中央で3個体、吉谷上ノ原山遺跡S I 02では北壁際で2個体、宇代寺中遺跡S I 01では中央ピット上で2個体、小俣物師遺跡6号住居址では北東柱上で2個体、長瀬高浜遺跡S I 220では中央ピット上で2個体が出ている。いずれも、異なる形式のもので、大小の差が認められ、長瀬高浜出土例では、大型の甗形土器の狭口側に、小型のもの広口側を組み合わせて出土している。また、宇代寺中出土例では、中型の完形に復元できるものと、大型の広口のみを組み合わせている。

甗形土器の出土例を見ると、多くは住居廃絶時には立っていたと推定され、複数が出土している場合は大小組み合わせられて用いられた可能性は高いものの、使用時の状態ではなく、管段の甗形土器の置き方であると考える。

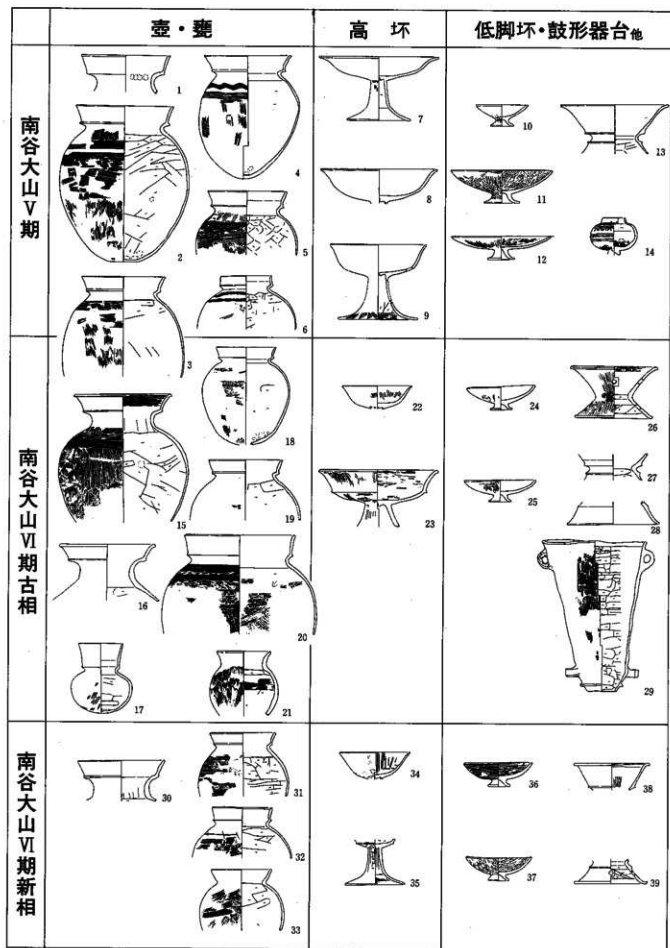
従来、甗形土器の使用法については、様々な検討が行われてきた。このうち使用形態としては、大きく①狭口を下にする、②広口を下にする考えがある。寺戸第2遺跡出土例を見る限り、直接火を受ける使用方法が考えられ、②のような使用の仕方が考え難くなり、さらに、垂下させてい使用法も考慮しなければならぬ。いずれにしても、使用方法は今後の研究に期待したい。

5. 陶質土器について

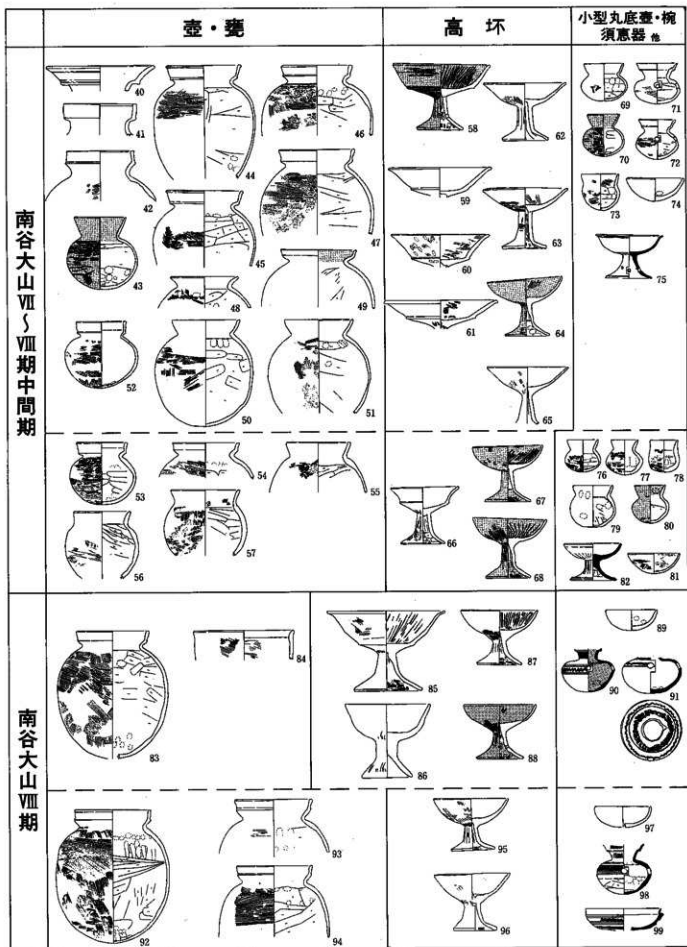
さて、石橋第1遺跡S I 02・13からは多量の土器とともに陶質土器2点が出土している。S I 01のPo69は、筒状の環部に、中央の脚部が接続するものである。口縁端部は鋭くカットされ、環底部外面にはシボリ目様の調整が見られる。脚部外面は縦方向のケズリが施される。調整等から見ると、土師器と共通する。胎土分析により、伽耶産であることが判明した。

また、S I 13のPo316は、口縁端部が外反する浅い筒状を呈す環部に、大きく開く脚部が接続するものである。環部外面にはカキ目が施され、脚部には3方に円形透かしが施される。環・脚部は別々につくられたもので、環外面底部の接続面には、刻み目が施されている。胎土分析では伽耶産の可能性はあるものの、びたりと合う測定結果ではないために産地不明とされたが、器形的には伽耶地方の陶質土器と考えるとよいであろう。

現在のところ、県内の陶質土器出土例は、6世紀代と考えられる淡江町塔ヶ平遺跡の新羅系古付長原産の他には見つからないが、長瀬高浜遺跡出土のものもその可能性がある。いずれも、胎土分析がなされておらず産地は不明であるが、長瀬高浜遺跡出土のものも、石橋第1遺跡のものとはほぼ同時期であり、この遺跡の集落の性格を考える上でも重要な資料である。共存する遺物は、退化した複合口縁をもつ甗、筒状環部を呈す高環などであり、明かに古墳時代中期の所産である。S I 01出土土質化材の¹⁴C年代測定では、5世紀中頃の年代値が得られており、S I 02・13は同時期かやや遅る可能性があるが、ある程度の目安はつくものと考えられる。



挿図337 石胎地区土師器編年表(1)



挿図338 石胎地区土師器編年表(2)

これらがこの時期、直接朝鮮半島からこの地にもたらされたものか、国内のどこかを經由してもたらされたものかは不明であり、今後、朝鮮半島鳥獣物の流通経路を探る研究が待たれるところである。

4. 地形土師器について

ここで地形土師器とするものは、須恵器を模して作られた胴部中～上半に成形の段階から穿孔されているものを指す。今回の調査で、石島第1遺跡S102から地形土師器が2個体出土した。

県内では4遺跡5個体が確認されており、形態は高瀬遺跡出土のように直口壺形のもの、他の遺跡のように口縁部に段をもつ須恵器を模したものとする。後者の形態は初期須恵器を模したものともみられるが、長瀬高浜遺跡1号墳から出土した初期須恵器の底に比べると、段をもつ口縁部を除き、むしろ小型の直口壺に類似する。調整は、外面ハケ目・ナデ、内面ケズリ、口縁部ハケ目またはナデで、これは土師器の技法であり、波状文もみられない。また、赤彩されているものが多く、石島第1遺跡出土の4は赤橙色の胎土を用いており、祭器としての役割が考えられる。これらの遺物は共存遺物から5世紀中葉以降に出土しているようである。

須恵器模倣土師器は、畿内、北陸、中部、関東など東日本で多く出土しており、須恵器の器種に先駆けて模倣されたとする指摘があるように、須恵器が手に入りにくい状況に応じたものと考えられ、関東では5世紀中葉以降に段口縁をもつ模倣土師器が土師器の壺・杯に先駆けて出土している。

石島第1遺跡からは、S101とS113から陶質土器の高杯が出土しており、これらの遺物は同時期とみられるが、S102のPo148は、つくりが精巧で穿孔孔を上から斜め下方で、長瀬高浜1号墳出土の初期須恵器に類似する。胎土も赤橙色で在地のものと明らかに異なっており、搬入品の可能性がある。これがどこで作られたかは非常に大きな問題であり、可能性としては畿内または朝鮮半島が考えられるが、類例はなく、出土例の増加を待ちたい。

(牧本・八村)

1. TD S 105Po19	16. TD 2 S 103Po24	31. 1W 3 S 105Po29	46. 1W 1 S 113Po289	61. 1W 1 S 113Po296	76. 1W 1 S 101Po264	91. KWS 107Po68
2. TD 2 S 101Po2	17. TD 2 S 103Po35	32. 1W 3 S 105Po34	47. 1W 1 S 102Po46	62. 1W 1 S 102Po111	77. 1W 1 S 101Po265	92. 1W 3 S 102Po66
3. 1W 3 S 102Po159	18. TD 2 S 103Po36	33. 1W 3 S 105Po19	48. 1W 1 S 102Po94	63. 1W 1 S 102Po116	78. 1W 1 S 101Po266	93. 1W 3 S 102Po289
4. TD 2 S K06Po197	19. TD 2 S 103Po39	34. 1W 3 S 105Po116	49. 1W 1 S 113Po250	64. 1W 1 S 102Po118	79. 1W 1 S 101Po267	94. 1W 1 S 107Po208
5. TD 2 S K06Po198	20. 1W 3 S 101Po3	35. 1W 3 S 105Po119	50. 1W 1 S 102Po91	65. 1W 1 S 113Po308	80. 1W 1 S 101Po263	95. 1W 3 S 102Po253
6. TD 2 S K06Po201	21. 1W 3 S 101Po2	36. 1W 3 S 105Po121	51. 1W 1 S 113Po301	66. 1W 1 S 101Po36	81. 1W 1 S 101Po260	96. 1W 1 S 106Po203
7. TD 2 S 105Po132	22. TD 2 S 103Po75	37. 1W 3 S 103Po122	52. 1W 1 S 102Po95	67. 1W 1 S 101Po37	82. 1W 1 S 101Po369	97. 1W 1 S 102Po71
8. TD 2 S 105Po135	23. 1W 3 S 101Po21	38. 1W 3 S 103Po125	53. 1W 1 S 101Po16	68. 1W 1 S 101Po37	83. KWS 107Po68	98. 1W 1 S 107Po260
9. TD 2 S 109Po160	24. TD 2 S 103Po82	39. 1W 3 S 103Po128	54. 1W 1 S 101Po6	69. 1W 1 S 102Po144	84. KWS 107Po43	99. 1W 3 S 102Po74
10. TD 2 S 105Po149	25. TD 2 S 103Po83	40. 1W 1 S 102Po72	55. 1W 1 S 101Po19	70. 1W 1 S 102Po145	85. KWS 107Po48	
11. TD 2 S K09Po210	26. TD 2 S 103Po79	41. 1W 1 S 102Po74	56. 1W 1 S 101Po20	71. 1W 1 S 102Po148	86. KWS 107Po53	29はS=1/18
12. TD 2 S 109Po161	27. TD 2 S 103Po80	42. 1W 1 S 113Po287	57. 1W 1 S 101Po17	72. 1W 1 S 102Po147	87. KWS 107Po50	その他はS=1/8
13. TD 2 S K06Po212	28. TD 2 S 103Po81	43. 1W 1 S 102Po98	58. 1W 1 S 102Po17	73. 1W 1 S 102Po147	88. KWS 107Po52	
14. 1W 3 S 101Po164	29. TD 2 S 103Po88	44. 1W 1 S 102Po84	59. 1W 1 S 113Po205	74. 1W 1 S 102Po151	89. KWS 107Po66	
15. TD 2 S 103Po23	30. 1W 3 S 103Po88	45. 1W 1 S 102Po78	60. 1W 1 S 113Po203	75. 1W 1 S 113Po215	90. KWS 107Po67	

表21 石島地区土師器編年表対照表

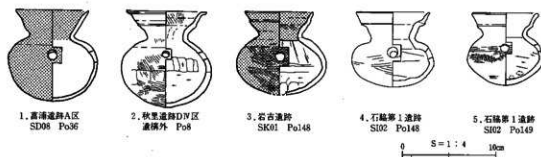


図339 鳥取県内出土地形土師器一覽

遺跡名	遺構名	調査	製作遺物	器等	時期
1 高瀬遺跡	A区	外→ナデ 内→ナデ	土師器壺・壺・甕・高杯・小型丸底蓋、須恵器壺(ベンケウタ)等	外周部・口縁部内外面に赤彩	古墳前期 古墳時代中期前半
2 秋葉遺跡	D区 遺構外	外→ハケ目・ナデ 内→ケズリ・ハケ目・ナデ	—	口縁部内面に赤彩	古墳時代中期前半
3 若古遺跡	S K01	内→ハケ目・ナデ 外→ケズリ・ハケ目・ナデ	土師器壺・壺・甕・高杯、須恵器壺	外周部・口縁部内外面に赤彩	古墳前期 古墳時代中期後半
4 石島第1遺跡	S102 Po148	外→ハケ目・ナデ 内→ケズリ・ナデ	土師器壺・壺・甕・高杯・小型丸底蓋	胎土赤橙色	長瀬高浜第一号墳 古墳時代中期中葉
5	Po149	外→ハケ目・ナデ 内→ケズリ・ナデ	—	胎土赤橙色 胎土赤橙色に 敷色	—

表22 鳥取県内地形土師器一覽表

第2節 古墳時代集落の様相

石路第1遺跡をはじめ石路第3遺跡森末地区(以下、石路第3森末)、寺戸第2遺跡では、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての集落が調査された。なかでも石路第1遺跡はこれまで調査例の少ない古墳時代中期中葉の集落跡であり、大型の竪穴住居跡がみられ、住居内から陶質土器が出土するなど、当時の集落のありかたを考えるうえでも重要な資料である。以下、時期ごとに集落の変遷について若干の考察をおこなう。

1. 集落の立地

石路第1遺跡は、南北にのびる丘陵の西に面した斜面の中腹、標高34~49m前後にあり、現在の水面とこの比高差は約25mある。丘陵の先端部までテラス状の緩斜面が続き、現在は畑畑になっているが、集落が広がっていくものと考えられる。遺跡の北西側には水田が広がる。今回の調査地は、集落のほぼ南端にあたるものと考えられる。南には、土師器・須恵器などの散布地である石路第2遺跡がある。寺戸第2遺跡は標高43~65mの尾根上に立地し、石路第3森末は南側斜面に立地する。

2. 集落の変遷

治村内での縄文時代の様相は明らかになっていないが、今回の調査区内で木葉形尖頭器や縄文土器などが出土し、石路第3遺跡では縄文時代晩期の住居跡や落とし穴がみつかり、この近辺には、縄文時代から人がいたようである。

〈弥生時代後期後葉(南谷大山Ⅲ~Ⅳ期)〉

弥生時代後期後葉には、石路第1遺跡にS I09・S I10の2棟の竪穴住居が見れる。規模はS I09・S I10とも一辺4m程度で、平面形は隅丸方形を呈する。寺戸第2遺跡にはS I07がある。一辺2.9mを測る方形の小型住居である。

〈古墳時代前期前葉~後葉(南谷大山Ⅴ~Ⅵ期)〉

石路第1遺跡では、南谷大山Ⅴ期はS I04・08、南谷大山Ⅵ期はS I07-2がある。またS I01-1も、このころのものと思われる。いずれも平面形は隅丸方形を呈する。後世に擾乱をうけているため全体像ははっきりしないが、弥生時代には斜面の上方にあった住居が、古墳時代前期には下段の広いテラス部分に降りてきた様子が見られる。これらのテラス層は当時の地形を表していると思われる。集落をつくるにあたり、この時期にある程度の宅地造成がおこなわれているようである。

寺戸第2遺跡では、南谷大山Ⅴ期には3棟の住居がみられ、このうちS I01は平面多角形で床面積40㎡と大型である。南谷大山Ⅵ期も同様に3棟の住居がある。また、テラス状遺構3基はこの時期の新相を示すもので、古墳時代前期には寺戸第2遺跡が拠点的な集落であったと考えられる。

石路第3森末では、南谷大山Ⅵ期古に一辺約5.5mの方形住居S I01が、南谷大山Ⅵ期新に一辺約3.8mの小型のS I05がつくられる。各時期とも一棟ずつの集落であるが、近辺に同時期の遺構も存在するであろう。

〈古墳時代中期中葉(南谷大山Ⅶ~Ⅷ中間期)〉

集落は南谷大山編年Ⅶ期に一時断絶する。この時期の天神川流域では、南谷大山遺跡など丘陵上の遺跡では極端に集落の規模が縮小し、低地の長瀬高浜遺跡で大規模な集落が営まれている。南谷大山Ⅶ~Ⅷ中間期になると、石路第1遺跡に再び集落が出現する。長瀬高浜遺跡で集落が縮小し、天神川周辺の遺跡で小規模な集落が営まれる時期である。

この時期は石路第1遺跡の全盛期で、住居はS I01・02・03・13・14がある。床面積は、ほとんどの住居で最大時には30㎡以上あり、比較的規模の大きな住居で構成されている。また、住居の平面形は方形または長方形に画一化されている。特殊ビットはS I01・02が南側、上方にあるS I13が東側にある。またS I03はもたない。遺物はS I01・13で陶質土器、S I02では初期須恵器を模倣した土師器が出土している。

〈古墳時代中期後葉(南谷大山Ⅷ・Ⅷ期)〉

この時期には、寺戸第2遺跡、石路第3森末でも再び集落が営まられる。いずれの遺跡も住居1~2棟程度と小規模である。石路第1遺跡でも南谷大山Ⅷ期に2棟、南谷大山Ⅷ期に1棟みられるだけである。すべての住居で整齊特殊ビットは東壁に位置し、前期まであった両側の仕切り溝はなくなる。住居の規模は一辺5m程度と小さくなる。一方寺戸第2遺跡、石路第3森末では一辺6m以上のものがみられ、寺戸第2遺跡では古墳時代中期ごろとされるS I06は平面隅丸方形を呈する。

3. 石路第1遺跡の様相

石路第1遺跡は、古墳時代中期中葉を中心とした集落であり、主な特徴として次の2点があげられる。

(1)古墳時代中期中葉の、方形プランの大型住居で構成された集落

(2)陶質土器、須恵器由来のスラグ、初期須恵器模倣土師器の出土

石路第1遺跡の今回の調査範囲内の住居は、古墳時代中期中葉には、大型の方形または長方形プランを呈する。住居間距離は4m程度とやや近接して並んでおり、人口過密な集落だったようである。平面形が規格化された住居であること、住居間距離もほぼ一定でテラス面に並んでいることなどから、規格的につくられた集落であると思われる。この時期には、寺戸第2遺跡や石路第3遺跡でもまだ集落が形成されていない。周辺遺跡にさきかけてこの地に計画的に形成された集落が出現したのは、その立地的な特徴によるものと思われる。集落のすぐ下を石路川が流れており、北西にはわずかながらも平野が広がる。石路川が交通路として機能していたかどうかは分からないが、海岸線は入り江状に入り込んでいたものと思われる。時代は下がるが近

辺には中世毛利氏水軍の基地になった泊城があり、近世には船番所がおかれていたことなどからも、海上交通の要衝であるといえる。また、今回の調査では農耕具は出土していないものの、平野部では水田などが営まれていたと考えられ、農産物も十分得られていたものと思われる。

中期後葉になると寺戸第2遺跡、石橋第3森末、小浜ワラ畑遺跡でも集落が営まれる。石橋第1遺跡では集落の規模が縮小している。

(2)については、石橋第1遺跡以外に、鳥取県内でこの時期の渡来系と考えられる遺物が出土しているのは、倉吉市不入岡遺跡と淡江町塔ヶ平遺跡のみである。不入岡遺跡ではオンドル状遺構をもつ住居から甌と長胴甕が出土しており、渡来人が住んでいたと考えられている。塔ヶ平遺跡は福岡古墳群の近辺にあり、六世紀代新羅系とされる古付長胴甕が採集されている。今回石橋第1遺跡で出土した陶質土器は、胎土分析の結果、伽耶地方産の可能性が大きい。一般的に、住居跡から陶質土器や初期須恵器が出土する場合、渡来人などの須恵器工人の住む集落か、畿内の勢力と結びついた集団がいたと思われる地域が考えられる。また溝などの祭祀関係の遺構から、韓式系土器や初期須恵器と、胴部穿孔の小型壺、小型九底壺、高環形土器などが共存して出土する例がある。S102では須恵器模倣の土師器と大量の高環形土器がセットで出土しており、なんらかの祭祀的な行為に伴う一括廃棄と思われる。

石橋第1遺跡では須恵器窯に由来すると思われるスラグが出土していることから、須恵器製作集団の存在を考えると異なってくる。天神川下流域の砂丘地にある長瀬高浜遺跡でも初期須恵器が多数出土しているが、器形が陶色等の底層資料と異なるため、山陰地方に初期須恵器窯の存在が考えられている。しかし、石橋第1遺跡では陶質土器2点の他に大陸・朝鮮半島色の遺物・遺構がみられず、初期須恵器の出土もない。須恵器模倣の土師器も胎土が特異であり、搬入品の可能性がある。また、現在までにこの近辺に窯跡があるという報告はみられないため、積極的に須恵器製作工人や渡来人がいたとは考えにくい。

一方不入岡遺跡の例を考えると、山陰地方は環日本海地域として直接大陸や朝鮮半島の文物が流れ込んでくる可能性も考えられる。しかしスラグの存在は非常に不自然であり、もし陶質土器とともに搬入されたものであればその理由・目的は何なのか理解し難い。また、S113出土の高環については、胎土分析からは産地がはっきりしないため、窯跡がある可能性も全くないわけではない。今後の調査研究に期待したい。

以上みてきたように、石橋第1遺跡は渡来系の遺物を持つことから他地域と交流していたようである。また集落も規格的であり、この地域の中心的・先進的な集落であるといえる。古墳時代中期中葉には石橋第1遺跡を核として、周辺の小浜ワラ畑遺跡・石橋第3森末などで小規模な集落が形成されていったものと考えられる。また、古墳時代の一般的な集落では、主に倉庫として使用されたと考えられている掘立柱建物群を伴うことが多い。大栄町上種第5・6遺跡などでは、掘立柱建物がある程度かたまって検出されている。しかし、石橋第1遺跡では集落全体を調査されなかったこともあり、掘立柱建物はみられなかった。

この集団のものと考えられる同時期の古墳は、いまのところ周辺にはみられない。しかし、S113の埋土上層からは耳環と鬘状鉄器、遺構外からは勾玉等が出土しており、同じ丘陵の上に古墳があった可能性がある。また、西側の谷をはさんで横穴式石室をもつ石橋3・4・5号墳があり、その丘陵上には前期の前方後円墳である尾尻古墳が位置しており、この近辺に墓地もあるはずである。

4. 寺戸第2遺跡の性格

寺戸第2遺跡では、標高60m以上の丘陵頂部で集落が検出された。弥生時代後期から古墳時代中期ごろまで続き、古墳時代前期にはこの周辺で拠点的な集落になる。丘陵の斜面部は急峻で、水稲耕作に不便であり、いわゆる広義の高地性集落である。同様に高地性集落と考えられている集落は、東郷湖畔の雨谷大山遺跡などがある。これらの集落は、弥生時代の瀬戸内地方で多くみられる防衛的高地性集落とは異なり、武器類がほとんど出土せず、古墳時代前期を頂点に比較的長期継続する。また、S101・S04から石鏃が、遺構外からは土玉が出土しており、農業以外にも漁撈を行っていたものと思われる。

5. いわゆる特殊ピットについて

鳥取県内では弥生時代・古墳時代の堅穴住居跡から、中央ピット・特殊ピットと呼ばれる、柱穴とは考えられないピットが検出される。その位置的な特徴から、住居の中央に位置するものを中央ピット、おもに壁際中央にあり祭祀用と考えられるものを特殊ピットと呼んでいる。

中央ピットは、弥生時代前期から古墳時代まで広く西日本一帯でみられるものである。弥生時代前期に四国・福岡県に出現し、中期に西日本全域に普及するが、後期には滋賀県・四国地方・福岡県を除く九州地方で急減する。古墳時代前期になると大阪府・滋賀県・九州四国地方で衰退する一方、北陸地方に波及し、兵庫県・鳥取県・岡山県では存続する。用途については、例え、特に二段掘りや壘を伴うと思われるものは貯蔵穴、それ以外に堅穴のほかに、炭化物を伴う例や柱痕跡がみられるものもあることから多様な機能が考えられている。

一方、県内で特殊ピットと呼んでいるピットは、県外では貯蔵穴とされていることが多いようである。しかし、古墳時代中期後半ごろから、深さ10cm程度と浅くほとんど形骸化したものも現れるため、必ずしも貯蔵穴として使用されていたわけでは

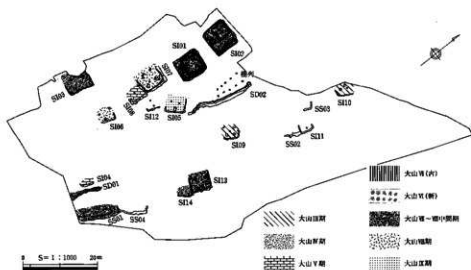


插图340 石胎第1 遗址集落平面图

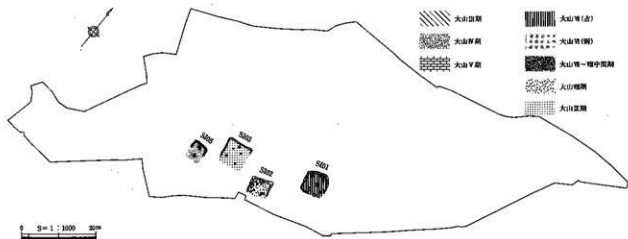


插图341 石胎第3 遗址森林地区集落平面图



插图342 寺戸第2 遗址集落平面图

ない。また黒内ではみられないが、特に粘土貼りの場合は作業用ビットとして報告されている。鳥取県内、住居中央にあるビットについて最初にまとめたものは「福市遺跡の研究」(1969)であろう。ここで「中央 P i t」、「住居中央にある特殊 P i t」という用語が使用され、その性格は「神の依りたもう神聖な柱をたてた穴」とされた。次いで青木遺跡(1976-78)では、中央部にあった特殊ビットが、弥生時代終末期-古墳時代前期ごろに壁際中央部に移動し、形態も円形から方形に変化するとされた。しかし1980年代には、中央ビットと特殊ビットの用途は異なるものと考えられるため、同じ性格のものとして捉えることを疑問視する動きができた。

上種第5遺跡・第6遺跡(1985)では、「床面中央のビット」・「壁際中央のビット(以下、特殊ビットと呼称する)」というように呼び分け、同じ性格のものとして扱ってよいかどうかについては疑問が残るとしている。また、特殊ビットの位置を住居の出入口部に想定した。湖山第1遺跡(1989)では、竪穴住居内の柱穴以外のビットと土壌を総称して特殊ビットとし、A:いわゆる特殊ビット(=中央ビット・壁際中央にある特殊ビット)、B:貯蔵穴の形態をもつもの、C:その他の3つに分類した。中央ビットと壁際中央の特殊ビットは、その性格の違いを指摘しながらも「いわゆる特殊ビット」と一括しており、青木遺跡と同様に中央から壁際への時期的な変遷が想定されている。南谷大山遺跡(1994)ではその位置に着目し、中央にあるものを中央ビット、主に壁際中央に寄って高環等の遺物を伴うことのあるものを特殊ビットとしている。

特殊ビットの用途・性格は、青木遺跡ではビット内より手掘り土器、小型丸底釜、滑石製勾玉などが出土しており、南谷大山遺跡では底面に小石が敷かれたBSI13-3などがあることより、偶然と祭祀用と考えられている。上種第5遺跡では、壁際特殊ビットは住居の出入口部で、覆がされていることから、家屋の一部として作用していたのではなく、家屋を構築するにあたっての建築儀礼的なものと考えられている。

特殊ビットは、おもに古墳時代中期にみられる。竪穴壁際の中央に位置しており、二段掘りのもの、両脇に仕切り溝をもつものなどがある。ここでは今回調査された遺跡を中心に、中部地区の壁際中央部分の特殊ビットの変遷についてみる。

壁際に固定された特殊ビットがみられるようになるのは、南谷大山Ⅵ期ごろで、寺戸第2遺跡と石橋第3遺跡でそれぞれ一例ずつみられる。いずれも深さは30cm程度で平面円形を呈する。寺戸第2遺跡のものは二段掘り仕切り溝をもつ。上種遺跡群でも出現当初は段掘りをするものの比較的浅く、両側の仕切り溝をもたないようである。しかしⅦ期の新しい段階には方形プランで深く二段掘りし、仕切り溝をもつようになる。一方、西部地区の青木遺跡では古墳時代初期にすでに出現している。

南谷大山Ⅶ期からⅧ期になるまでは、石橋第1遺跡5棟、小浜ワラ畑遺跡1棟の竪穴住居があり、ほとんどが壁際特殊ビットをもつ。石橋第1遺跡では、上段方形または隅丸方形、下段は円形から隅丸方形を呈し、両側に仕切り溝をもつ。小浜ワラ畑遺跡は楕円形二段掘りで、仕切り溝はもたない。深さは深いものが多く、柱穴程度である。上種遺跡群や夏谷遺跡でもほとんどすべての住居で壁際特殊ビットがみられる。上種遺跡群では、前段階に引き継ぎ方形プランで両側に仕切り溝をもつものが多い。夏谷遺跡は、円形のものが多い。また、不入岡遺跡の渡来人の住居とされるSI03でも、貯蔵穴の他に隅丸方形の壁際中央の特殊ビットをもつ。

南谷大山Ⅷ期、石橋第1遺跡周辺では円形または楕円形一段で深さも30cm前後と比較的浅く、仕切り溝をもたないものになる。夏谷遺跡でも段掘りするものはみられなくなり、特殊ビットをもたない住居がでてくる。上種遺跡群は方形プランを守り続け、仕切り溝をもつものもある。

南谷大山Ⅷ期には、上種遺跡群でも退化傾向にある。平面形が非方形になり、壁際特殊ビットをもたないものがみられるようになる。

東伯耆地方では古墳時代前期中ごろには壁際特殊ビットが出現する。上種遺跡群では方形プランⅠ流で両側に仕切り溝をもつものが多い。これに対し、夏谷遺跡や石橋第1遺跡では円形プランが主流であるが、段掘りするものは上段部方形-隅丸方形、下段部円形-隅丸方形のものが多い傾向にある。南谷大山遺跡では南谷大山Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ期にみられるが、方形・二段掘り・仕切り溝をもつものは皆無で円形・楕円形のものしかない。この方形と円形の違いは、上種遺跡群でもⅧ期には非方形のものが主流になることから時期的な違いということもできるが、基本的には地域差であると考えられる。青木遺跡では平面方形のものがほとんどであり、上種遺跡群は西伯耆より近いので方形プランが多いものと思われる。古墳時代中期後半までは多くの住居でみられた壁際特殊ビットであるが、以後衰退していくようである。南谷大山Ⅷ期以降の様相はよくわからないが、青木遺跡では青木Ⅷ期まで続き、東伯耆地方でも古墳時代後期前半にかけて消滅していくものと思われる。

次に、特殊ビットの性格を考える材料となり得るものを、いくつか挙げておく。

小浜ワラ畑遺跡の特殊ビットは、SI05・07で検出された。SI05は建て替えがあり、それに伴って壁際特殊ビットもつくられられている。P19には、埋奉鹿殿の枕のようにV字状に組んだ石材の上に高14cmがおかれている。SI07の壁際特殊ビットからは高環が出土しているが、焼失住居であるにもかかわらず、ビットの埋土には炭化物や焼土が含まれないため、焼失段階には埋め戻されていた可能性がある。一方、主柱穴内にあるP6は内部に大量の炭化材が落ち込んでおり、開いた状態にあったことがわかる。底面は傾斜しており、貯蔵穴とは考えにくいものである。

石橋第1遺跡の特殊ビットは、SI01・02・05・06・07・13で検出された。建て替えが確認されたSI01・02では、特殊ビットも複数検出されている。SI01P21・SI02P7はビット前面に板が差し込まれていた痕跡がある。また、段掘りされて

いるものもあり、蓋の存在が予想される。壁際特殊ピット内には石や土器が入ることがあり、S I 06では完存する高環部と
殿石が出土しているほか、S I 01・13でも完存ではないが高環や裏が出土した。

ピット内土層の堆積状況を見てみると、S I 13(焼失住居)では水平に堆積しているが、下部1/3は炭化物をほとんど含ま
ず、この上層から遺物が出土している。このピットは埋められたのではなく、開いていたものと思われる。S I 01でも
焼失したときの炭化物が含まれたものがある。S I 01・02では柱根のような堆積状況を示したものがあ

S I 01では壁際中央部の特殊ピット以外に、住居の3つのコーナー部分に深さ50cm前後の用途不明のピットP 7～9がある。
P 7・9からは完存する高環、高環部、小型丸蓋釜、椀などが出土した。土層は単層または水平堆積で、ピット内に土器な
どを入れてから再び埋め直したものと考えられる。土器を埋めるという行為が行われたのは住居の築造時、廃絶時、存続期間
のいずれかはっきりしないが、ピット内埋土の上層が5cm程度の厚さでよくしまっており住居築造時のものと思われる。この
場合地鎮など建築儀礼的な意味合いを想定できるが、ピット底面から出土した高環脚部と床面出土の環部が接合しており、問
題が残る。これと同じ位置にあるピットは、上種第1遺跡²⁰や夏谷遺跡からも検出されている。夏谷遺跡では補助柱・住居内土
壁と報告されている。遺物の出土状況などは分からないが、なかには祭祀的な性格をもつピットがある可能性がある。S I 13
では、貼床除去後に検出されたP 12から、完存する高環部が出土した。このピットは住居の存続期間中にはまったく機能
しないため、祭祀的なものと考えられる。

以上みてきたように、小浜ワラ畑遺跡S I 07P 6、石橋第1遺跡S I 01P 7～9、S I 13P 12は、壁際中央部分にはないが
祭祀的な性格をもつものと思われる。湖山第1遺跡でもS I 15、S I 24、S I 02で柱六間や柱六脇に遺物を含むピットが存在し、
調査者は特殊ピットの可能性があるとしている。特殊ピットは広く祭祀用に使われるものであるとすると、これらのピ
ットも特殊ピットということができる。

壁際中央にある特殊ピットは祭祀的な用途に供されたものと考えられているが、祭祀の内容についての詳しい考察は今のと
ころみられず、前述したように、上種第5遺跡で建築儀礼的なものとされている程度である。壁際中央の特殊ピットは住居の
建て替えに伴いつくりかえされる傾向にある一方、これをもたない住居もある。遺跡ごとにも、上種遺跡群や夏谷遺跡で
は、特に古墳時代中期後半まではほとんどの住居が特殊ピットをもつものに対し、長瀬高浜遺跡や南谷大山遺跡ではこのピ
ットをもつ住居の割合が非常に低い。特殊ピットをつくるという祭祀体系をもっていた集団と、そうではない集団があったと
思われる。ピットの形態も、方形プランを指向する遺跡と円形プランの遺跡とがあるが、使用状況はどちらも同じであらう。

このピットの使用状況は、土層の観察から、焼失住居では炭化物を含むため開いた状態にあったと考えられるものがある。
また、段掘りや蓋の存在が推定されるにもかかわらず柱穴のような堆積状況を示すものもある。一方、特に段掘りしないピ
ットの中には、単層のものなど埋め戻された可能性のあるものもある。小浜ワラ畑遺跡S I 05P 19は明らかに埋め戻した後に上
部の施設をつくっており、住居の存続期間中にあったとすれば、住居構造の一部として機能することはできない。また、古墳
時代中期後半には浅く形骸化されたものが現れることなどから、実際には機能しておらず、必ずしも必要なものではないと
思われる。また、遺物は高環などの祭祀的な遺物が出土するものもあれば、なにもないこともある。

以上より、どの住居の壁際中央部分のピットでも、同じことが行われていたかどうか疑問が残る。しかし多くの場合、住居
構造の一部として機能していたものではないことは確かであり、祭祀的なものであることは間違いないであろう。また、両脇
の仕切り溝については、祭祀的な空間を仕切るためのものと考え、ここには例えば板や櫓の足のようなものの存在が推測され
る。

また、壁際中央部分にない祭祀的な遺物を含むピットについては、今後の事例の増加を持って、従来の特殊ピットと性格の
違いがみられたり、その位置が比較的固定されるようであれば、特殊ピットの一つの形態として分類していく必要があるだろ
う。

(岩崎)

遺構名	形 態	規 模 (m)	床面積 (㎡)	壁高 (m)	土柱穴 (本)	遺 物	時 期	備 考
S101	隅丸方形	5.71×5.33	30.2	0.65	4	土師器武口蓋・壺・甕・高杯・鉄製器台・低脚杯・瓢・須恵器壺・甕・石珠・磁石	古墳時代前期後半	特殊ビット、中央ビット
S102	方形	4.88×4.66*	23.1 21.6†	0.5	4	土師器壺・直口蓋・高杯・陶・須恵器高杯・鉄製器・磁石	古墳時代中期前半	竪穴で得た、惣持特殊ビット、焼土面、貯蔵穴2基
S103	方形	6.3×5.38†	11.3†	0.68	4	土師器壺・高杯・鉄製器台・陶	古墳時代中期後半	特殊ビット
S104	方形	5.1×4.6.1	23.1	0.27	2	土師器壺	奈良時代	奈良時代
S105	方形	3.8×3.7.1	14.4†	0.38	2	土師器壺・甕・高杯・鉄製器台・低脚杯・須恵器壺・磁石	古墳時代前期後半	

挿表23 石籠3遺跡森末地区聖穴住居跡一覽表

遺構名	形 態	規 模 (m)	床面積 (㎡)	壁高 (m)	土柱穴 (本)	遺 物	時 期	備 考
S101	楕円形	7.0 - 6.5	不明	-	9	なし	縄文時代?	
S102	円形	4.86 - 5	18	0.74	4	土師器壺・銅付知照香・磁石	古墳時代前期前半	中央ビット、焼土面

挿表24 石籠3遺跡掃子地区聖穴住居跡一覽表

遺構名	形 態	規 模 (m)	床面積 (㎡)	壁高 (m)	土柱穴 (本)	遺 物	時 期	備 考
S101	方形	4.75 × 1.7†	7.3†	0.1	不明	土師器・小型丸底蓋・須恵器壺	奈良時代	
S102	隅丸方形	4.47 × 6.1	18.8†	0.42	2	土師器壺・肥土・須恵器白付壺・甕・土師長頸壺・壺・土瓦	奈良時代後半	

挿表25 寺戸第1遺跡聖穴住居跡一覽表

遺構名	形 態	規 模 (m)	床面積 (㎡)	壁高 (m)	土柱穴 (本)	遺 物	時 期	備 考
S101	六角形	7.42 × 3.2† (6.5)	21.4† 26.4	0.91	6	土師器壺・甕・低脚杯・小型丸底蓋器台・鉄製器・石珠・磁石、刀子	古墳時代前期前半	中央ビット、焼土面
S102	方形	4.17 × 4.1†	10.6†	0.62	4†	土師器壺・小型丸底蓋・甕・生土器壺・磁石・不明鉄器	古墳時代中期前半	中央ビット、焼土面
S103	長方形	5.56 × 3.86	19.1	0.88	2	土師器壺・直口蓋・甕・高杯・鉄製器台・低脚杯・小型器台・鉄製土壺	古墳時代中期前半	中央ビット、惣持特殊ビット、焼土住居?
S104	方形	6 × 5.7	30.3	1.07	4	土師器壺・高杯・低脚杯・小型丸底蓋・土師器壺・甕	古墳時代前期前半	不明土瓦
S105	隅丸方形	4.84 × 5.44	23.7	0.53	4	土師器壺・甕・高杯・鉄製器台・低脚杯・鉄石・磁石・石珠・銅片	古墳時代前期前半	中央ビット、焼土面、炭化材
S106	隅丸方・長方形	1.58† × 4.52†	6.1*	0.2	不明	土師器高杯・鉄製器台	古墳時代中期前半	
S107	方形	2.9 × 1.8†	不明	0.15	不明	生土器壺	奈良時代中期後半	
S108	方・長方形	6.16 × 3.2†	19.8*	0.23	2	土師器高杯・石珠・直方卒の自然石	古墳時代中期	中央ビット
S109	方形	3.8 × 2.3	不明	0.14	不明	土師器壺・高杯・低脚杯・土瓦	古墳時代前期後半	焼土面

挿表26 寺戸第2遺跡聖穴住居跡一覽表

遺構名	形 態	規 模 (m)	床面積 (㎡)	壁高 (m)	土柱穴 (本)	遺 物	時 期	備 考
S101-1	隅丸方形	5.5×5.2	23.4	-	4	土師器壺・小型壺・甕・高杯・小型丸底蓋・小型無蓋壺・手揉ね土器・低脚杯・鉄製器台・甕・高脚土壺・須恵器高杯・小型壺・陶製土壺高杯・生土器壺壺・磁石・磁石・石右	古墳時代中期前半	中央ビット
S101-2	方形	4.7×4.3	16.8	-	2	生土器壺		惣持特殊ビット、焼土?
S101-3	方形	一辺約5	25	-	2	生土器壺		惣持特殊ビット、貯蔵穴、焼土面、焼土住居
S101-4	長方形	6.9×5.8	32.8	0.92	4	生土器壺		
S101-5	長方形	6.9×5.8	32.8	0.92	4	生土器壺		
S102-1	方・長方形	5.9×5.8	47	0.59	不明	土師器壺・直口蓋・甕・高杯・小型丸底蓋・須恵器高杯・陶・須恵器高杯・磁石・木製器具類器・鉄珠・不明鉄器	古墳時代中期前半	惣持特殊ビット、ベツツ法遺構
S102-2	方形	3.6×3.6	12.6	0.67	2	土師器壺		惣持特殊ビット、焼土面
S102-3	方形	6.0×5.9	34.3	0.91	4	土師器壺・甕・高杯・小型丸底蓋・陶製器	古墳時代中期前半	
S103	方形	4.48† × 6.92	25.1	0.38	2	土師器壺・甕・高杯・小型丸底蓋・陶製器	古墳時代中期前半	
S104	隅丸方形	0.67† × 3.2†	1.7†	0.53	不明	土師器壺・高杯・陶	古墳時代前期前半	
S105	方形	3.7† × 5.0	18.8†	0.28	2	土師器壺・甕・高杯・須恵器高杯・陶	古墳時代中期後半	焼土面、特殊ビット、焼土面
S106	方・長方形	2.7† × 5.1	2.5†	0.39	不明	土師器壺・甕・生土器壺・高杯・磁石	古墳時代中期後半	惣持特殊ビット
S107-1	隅方長方形	3.9×4.9†	29.8*	0.85	4	土師器壺・高杯・鉄製器台・陶・小型器台・低脚杯・手揉ね土器・須恵器壺・磁石・陶片	古墳時代中期後半	惣持特殊ビット、焼土面、焼土住居
S107-2	隅丸方・長方形	5.8×4.9	27.3	1.1	(4)	土師器壺・甕・高杯・鉄製器台・小型丸底蓋・低脚土壺・石珠・刀子	古墳時代前期後半	惣持、焼土住居、中央ビット
S108	隅丸方・長方形	5† × 1.4†	10.3†	0.4	?	土師器壺・高杯・鉄製器台・低脚土壺・生土器壺	古墳時代中期前半	
S109	隅丸方形	2.34† × 3.98	6.48†	0.34	4	生土器壺	奈良時代前期後半	中央ビット
S110	隅丸方形	2† × 1.4†	11.2†	0.42	2	生土器壺	奈良時代前期後半	中央ビット
S111	方形	2† × 3.1	6.2†	0.37	2	土師器片	奈良時代	焼土面
S112	方形	2.6† × 3.2†	8.6†	-	2	なし	不明	
S113	長方形	5.5×4.1†	22.1	0.83	4	土師器壺・高杯・陶製土壺高杯・磁石・須恵器高杯・直器・スラグ	古墳時代中期前半	惣持特殊ビット、貯蔵穴、焼土面、焼土住居
S114	隅丸方形	4.4† × 1.8†	5.37†	0.3	不明	土師器壺・高杯	古墳時代中期前半	

挿表27 石籠第1遺跡聖穴住居跡一覽表

第3節 石脇8号墳出土埴輪について

石脇8号墳から出土した埴輪には、普通円筒埴輪(以下円筒埴輪に省略)、朝顔形埴輪、壺形埴輪が見られる。これらの大半は周縁内に転落した形で検出したのであり、古墳築造当初に墳丘に樹立されていた姿を復元できる資料ではない。よって、ここでは個々の埴輪を観察し埴輪の形態分類を試みることで、そこから引き出される情報を簡単にまとめてみたい。

1. 出土した埴輪の概要

今回出土した埴輪の概要について、器種ごとに見ていくことにする。まず、円筒埴輪であるが、今回出土したものの大半を占めるのである。ほとんどが破片での出土であり、完形に近い状態で出土したものは2点であった。これも含め、基部から口縁部まで復元できる資料は6点しかなかったが、円筒埴輪は全て「2条3段」であるといえる。これは、すべての埴輪の共通項として挙げられる点に、タガの突出度がしっかりしていること、基部に近いほど器壁をうすくする「底部再調整」が見られることから判断できる。「2条3段」である器形を含めたこれらの共通項は、川西地輪編年のV期にあたる山陰地方の特徴を示すものであり、これは、石脇8号墳から出土した他の遺物の時期とも相違ないものである。次に朝顔形埴輪であるが、今回出土したもののうち朝顔形埴輪と認められるものはわずかしかな。実測できたものは5点にすぎない。墳丘に樹立されていた点数が5点であるわけではなく、実際に朝顔形埴輪と考えられる破片も出土しているが、その出土量は他の埴輪と比べ極端に少なく、当初から個体数は少なかったことが予想される。壺形埴輪は、円筒埴輪に次ぐ出土量をみたものである。倉吉市を中心とした東伯耆に見られる器形で、この周辺地域以外では、岡山県森山に1例確認できるものである。今回の出土は東伯耆でも東原にあたる場所での出土であると同時に、壺形埴輪出土例の東原にもあたる。円筒埴輪と同様に破片での出土であり、完形に近い状態で出土したものは1点のみで、これの他に基部から口縁部まで復元できたものはなかった。

2. 埴輪の分類基準

以上述べてきたように、今回出土したそれぞれの埴輪は、量的、質的にも資料として良否なものではないことが言える。しかし、それぞれの個体に残された調整技法は明確に読み取れるので以下の4点において分類を試みることにした。

①外面1次調整ハケメの方向(1～7に細分類)

②内面調整の手法

③外面2次調整の有無(1～9に細分類)

④底部再調整の有無

以上の視点から分類したものが附表28・29である。なお、分類項目①・③の細分類の内容は、この表末に付記した。

3. 円筒埴輪について

分類項目に従って円筒埴輪を見た場合、大きくは2種類(A・A'類及びB・C類)に分類できる。これは、調整技法の点のみならず、赤色塗彩の有無、黒斑の有無といった外見上の違いの点からも断言できたい。まず、A・A'類の円筒埴輪であるが、これらはいずれも外面1次調整に左上方向のハケメを施しており、内面調整も同様に左上方向のハケメを基本としている。外面2次調整、底部再調整については全個体で確認できたわけではないが、確認できたものについてみると、いずれも第2段外面にB種ヨコハケ⁸⁶を施し、ナゲを基本とした底部再調整を施している。これらA・A'類は同一工人集団によって作製されたと考えられる。この集団内工人各個については、分析資料が少ないため細かくは検討できないが、少なくともA'類のように第2段タガ部付近内面にヨコハケを施しているものはA類製作用工人と区別できるものかもしれない。

次に、B・C類の円筒埴輪であるが、器形を復元できたものが1点であるため、口縁部付近のみでの分類であり、詳細な検討はできなかった。これらはいずれも外面1次調整タテハケを基本としているものである。2段目まで復元できたものが少ないため明らかにできないが、このB・C類には2次調整ヨコハケは施されていないと考えられ、A・A'類とは異なっている。また、内面調整においてヘラズリが顕著なこともA'類とは大きく異なる点である。このことと、赤色塗彩、黒斑が認められることから、B・C類はA・A'類とは別の工人集団が製作したものと推察され、A類とA'類の違いのように、B類とC類の内面調整の差異は、工人差によるものと考えたい。

4. 朝顔形埴輪について

朝顔形埴輪は点数が少ないため分類するには至らないが、基本的にA・A'類円筒埴輪と調整技法の点で近いものが見受けられる。実際に、基部から3段目まで復元できたPol18は、A類円筒埴輪と底部再調整の技法を除けば何等変りもないものである。比較材料が量的に乏しいため、ここで工人集団にまで言及することは早計であるが、朝顔形埴輪を製作した集団は、A・A'類円筒埴輪を製作した集団であった可能性が高いのではなからうか。また、この中における工人各個の差異は、口縁部外面に施される顕著なヨコハケの有無にその一端が現れていると捉えたい。

5. 壺形埴輪について

最後に壺形埴輪であるが、これはA・A'類円筒埴輪と朝顔形埴輪の両方に調整技法の点で近いものが考えられるように、B・C類円筒埴輪に近いものが見受けられる。まず外面調整であるが、B・C類円筒埴輪がタテハケを基本としているように、壺形埴輪にも口縁部にタテハケが多く認められる。内面調整についても、B・C類円筒埴輪と同様にヘラズリが顕著に施され

ている。この内面調整ヘラケズリは、単に器形の違いから生じる調整技法であるかもしれないが、プロポーショナルに類似する朝顔形埴輪の内面調整にハケメが施されていることを考えれば、この壺形埴輪にハケメが施されても構わないと言えるため、内面調整ヘラケズリは、B・C類円筒埴輪調整技法と共通項として捉えたい。更に、調整技法以外でも赤色塗彩、黒斑が認められる点で共通しており、工人集団はB・C類円筒埴輪を製作した集団と同一であったのではなかろうか。この壺形埴輪を調整技法を基に細分した場合、全てにわたってではないが少なくともD-Fの3類に分類できる可能性はある。D類は内面ヘラケズリ横方向でE類は縦方向である。また、F類は1点しか確認できないが、右上方向のハケメが顕著なものである。これらは、それぞれ工人差による違いから現れるものであろう。

8. まとめにかえて

以上、おおまかではあるが石籠8号墳から出土した埴輪の分類を試み、製作工人集団も併せて推察してみた。その結果、円筒埴輪には少なくとも2製作工人集団が関与し、それぞれが朝顔形埴輪または壺形埴輪の製作も行っていた可能性があることを示唆した。また、胎土分析結果では、ここで同一集団によるものではないかと考えた、B・C類円筒埴輪と壺形埴輪にも胎土の違いが現れており、胎土の面からでは今回出土した埴輪が大きく3群に分かれることが指摘されている。この手法等の差異と胎土の違いは、石籠8号墳の埴輪製作に携わった工人集団が複数あったという根拠にもなり得るが、これには、周辺地域の古墳で出土した埴輪の検討が必要であり、特に、壺形埴輪と他の埴輪との比較が重要となってくると思われる。そうすることで、地城色が極めて強い壺形埴輪の性格を追求できると同時に、埴輪製作工人集団の在り方も明らかになってくるであろう。(原田)

遺物番号	出土位置	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	外周		内周	断面	備考	分類
						1次	2次				
Ps56	3区	壺	29.8	37.5	21.2	1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps57	4区	壺	34.6	36.6	16.3	1	○	2	○	A	赤色塗彩
Ps58	5区	壺	27.2	35.7	17.9	1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps59	3区	壺	27.1	35.2	14.9	1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps60	3区	壺	25.3	34.7	17.2	1	○	3	○	A	赤色塗彩
Ps61	3区	壺	25.4	33.6		1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps62	4・5区	壺	24.4	32.9		1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps63	4区	壺	24.8	32.9		1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps64	4・5区	壺	27.8	32.5		1	○	2	○	A	赤色塗彩・黒斑
Ps65	4・5区	壺	29.9	31.9		1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps66	1区	壺	27.8	31.9		1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps67	4区	壺	28.1	31.1		1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps68	5区	壺	28.5	31.7		1	○	1	○	A	赤色塗彩・黒斑
Ps69	6区	壺	31.6	31.9		1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps70	3区	壺	29.6	31.6		1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps71	2区	壺	28.2	31.6		1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps72	6区	壺	30.0	31.6		1	○	2	○	A	赤色塗彩
Ps73	5区	壺	28.8	31.4		1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps74	5区	壺	28.1	31.5		1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps75	5区	壺	28.6	31.4		1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps76	4区	壺	29.6	31.4		1	○	2	○	A	赤色塗彩
Ps77	4区	壺	25.0	31.7		1	○	1	○	A	赤色塗彩・黒斑
Ps78	6区	壺	29.9	31.4		1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps79	3区	壺	27.3	31.7		1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps80	5区	壺	30.0	31.9		1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps81	2区	壺	29.1	31.9		1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps82	1区	壺	23.1	30.9		1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps83	2区	壺	28.0	30.9		1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps84	2区	壺	24.0	30.9		1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps85	2区	壺	26.0	30.8		1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps86	2区	壺	25.3	30.8		1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps87	6区	壺	30.0	31.0		1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps88	6区	壺	29.8	30.8		1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps89	4区	壺	24.1	30.6	17.9	1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps90	4・5区	壺	26.8	30.6	16.2	1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps91	2区	壺	25.9	30.8	18.9	1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps92	4・5区	壺	25.2	30.7	17.6	1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps93	2区	壺	22.9	30.7	17.9	1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps94	1区	壺	22.9	30.7	22.5	1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps95	4・5区	壺	19.4	30.8	18.5	1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps96	5区	壺	16.2	30.7	18.1	1	○	○	○	A	赤色塗彩
Ps97	4・5区	壺	17.1	30.5	15.3	1	○	1	○	A	赤色塗彩
Ps98	1区	壺	12.7	30.6	1	○	○	○	○	A	赤色塗彩
Ps99	2区	壺	9.7	30.8	1	○	○	○	○	A	赤色塗彩
Ps100	5区	壺	16.9	30.8	1	○	○	○	○	A	赤色塗彩
Ps101	2・4・5区	壺	24.7	41.7	19.6	2	-	3	-	B	赤色塗彩・黒斑
Ps102	6区	壺	28.0	31.8		2	-	3	-	B	赤色塗彩・黒斑
Ps103	4区	壺	30.0	31.9		2	-	4	-	B	赤色塗彩
Ps104	1区	壺	29.8	31.6		2	-	4	-	C	赤色塗彩

挿表28 石籠8号墳埴輪一覧表(1)

外周調整

- 1: 左上ハケメ
- 2: タテ(器脚)+左上ハケメ
- 3: 左: (器脚)+右コハケメ
- 4: タテ(器脚)+右コハケメ
- 5: タテ+右コハケメ
- 6: 右上+右コハケメ
- 7: 右コハケメ

内面調整

- 1: 左上ハケメ+タテ
- 2: 左上+右コハケメ+タテ
- 3: 左コハケメ
- 4: タテ+右コハケメ
- 5: タテ+右コハケメ+タテ
- 6: 右上+右コハケメ+タテ
- 7: 右上+右コハケメ+タテ
- 8: 右コハケメ+タテ
- 9: 右上ハケメ+タテ

挿表29 石籠8号墳埴輪一覧表(2)

第4節 古代の遺構について

今回の調査のうち、石碕第3遺跡森末地区（以下森末地区）、同様り地区（以下同様り地区）、寺戸第1遺跡は、それぞれ近接し合う遺跡で、奈良から平安時代末期の遺構がまとめて検出され、当時の歴史を考える貴重な資料を得ることができた。

1. 遺跡の概要

森末地区は南向きの斜面に立地している。当該期の遺構は、竪穴住居跡1基、掘立柱建物跡6基、溝状遺構6条であるが、このうち、掘立柱建物跡SB01は築行き3間・4.4m×桁行き4間・7.0mを測り、主軸方向はN-80°-Eとほぼ東西を向く。柱穴掘り方は円形で1m程度と大型のもので、奈良時代のS I04を掘り込むように作られている。SB02-05は、SB01の上方の斜面部にあり、主軸方向をSB01にそろえるようにして建てられている。遺存状態は悪く、不明な点が多い。SB06も南側半分が取り除かれていたが、築行き1間×桁行き3間以上を測るものと推定される。主軸方向はN-68°-EでSB01と軸がずれる。いずれも、遺物が出土していないため、正確な時期は不明である。

溝状遺構は、断続的に検出されているが、SD04・05はほぼ一直線に並び、さらにSD06はSD05から直角に東方向へ折れて調査区外へ延びている。これから推定される範囲は、一辺約54m（約半町）の方形区画であるが、北辺のSD02、東辺のSD03は直線とはならず、他の辺とも平行とはならないため、実際はいびつな方形となる。これらの溝内には、複数のピットが掘り込まれ、さらに、SD02・03・05からは瓦片がまとめて出土していることから、数々にわたって建て替えられた瓦葺き等が存在していたものと推察される。

この溝状遺構と掘立柱建物の軸は平行ではなく、西辺のSD04・05はほぼ南北方向を走るのに対し、SB01は若干ずれている。掘立柱建物は、地形に制約されて建てられたものと考えられる。

この遺跡の南側には、古代山陰道が走っていたものと推定され、道路を見下ろすような立地にあることが特筆されるが、方形区画の南・東辺を復元すると、現在の道路を横断してしまうことになり、現在大きく北東へ折れている道路も、当時はほぼ直線に東に延びていたものと推定される。

同様り地区は、森末地区の北東側上方の丘陵上に立地する。この地区では、築行き1間×桁行き4間を測るSB01がある。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、近接する石碕8・9号墳の周溝内から平安時代ごろの回転糸切り磁の皿、須恵器類が出土しており、この時期に近いものと推定される。

寺戸第1遺跡は、丘陵に挟まれた東側に傾斜する谷に立地する。このため、建物跡は斜面をカットした平地面に作られている。この時期の遺構は、竪穴住居跡2基（S I01・02）、掘立柱建物跡3基（SB02-04）、段状遺構4基（S S01・02・05・06）、溝状遺構1条（SD01）、不明土坑3基（S K01・02・06）、ピット群02、土器溜まり2か所である。このうち、S I02は、隅丸方形を呈するものであるが、周辺の遺構のあり方から掘立柱建物の可能性もある。掘立柱建物跡のうち、SB02は築行き2間以上×桁行き3間以上を測るものである。SB03は、大半が調査区外へ延びており正確な規模は不明であるが築行き2間×桁行き1間以上を測る、大型の掘立柱建物である。SB04は2基重複し、SB04-2→04-1の順で建て替えられたものと考えられる。いずれも築行き2間×桁行き4間を測るが、SB04-1が一回り大きくなっている。段状遺構のうち、S S01のP1内からは、完形の須恵器環とともに完形の2個体を含む計4個体の製塩土器（焼塩土器）が出土している。土器溜まり2か所からは大量の土師器、須恵器とともに、移動式竈、土製支脚、製塩土器が破壊されたような状況で検出された。

2. 遺物・時期

森末地区の遺構の時期は、掘立柱建物については出土遺物がないが、SB01近くのS I02周辺のピット内から平瓦Po75が出土している。

また、溝状遺構内、特にSD05内から多量の瓦片とともに、勝間田焼系の格子目印きをもつ須恵器片Po182、蛇の目輪刺きの白磁片Po176が出土している。瓦については、平瓦は、凹面に桶状型の痕跡が明確に残り、全面布目円底をもち、凸面粗いナデ調整である。非常に焼きのよい須恵質のもの、焼きが甘いものがあり、布目にも大小2種類が観察できる。わずかではあるがSD05内出土のものに備線部に布目円底が認められるものがあり、一枚作りであったものと考えられる。しかし、S I02周辺ピット内から出土したものは、溝状遺構出土のものと同様の特徴は共通するが、側縁部の切り離し角度が鋭角になっており、桶巻き作りであった可能性がある。

丸瓦は平瓦と同様の調整であるが、確認されたものはすべて須恵質のものであった。端部は強いナデによって玉縁を意図した作りとなっている。軒丸瓦もわずかに2点検出されたが、瓦当文様は剥離のため不明である。

溝状遺構の底面にはピットが多数重複しており、複数回建て替えられた瓦葺きの層であった可能性があるが、瓦の出土量はあまり多くなく、部分的に葺かれたものと思われる。特に、丸瓦としたものは厚板瓦として用いられたものと考えられる。

遺物が示す年代、特に白磁は晩唐期に相当するものと思われ、12世紀代と考えられる。また、勝間田系須恵器についても同様の時期が考えられる。これらは、遺構の廃絶期のもので、創建された時期はこれより遡るものと思われる。

また、瓦から推定される時期については、溝状遺構から出土しているものは最も遡って平安時代末期ごろと考えられるが、SB01周辺の瓦は、桶巻き作りの可能性があり、溝状遺構のものより若干遡る時期と考えられる。しかも、SD02-1及び遺

横外からは、奈良から平安時代と考えられる遺物も出土しており、最も遡ってこの時期には施設が整っていた可能性がある。

一方、寺戸第1遺跡は、奈良から平安時代にかけてのもので、3時期に分けることができる。1期では、須恵器環蓋が小型で宝珠状のつまみをもち、端部内面にかえりをもつ時期である。TK46-TK48併行期と考えられ、白鳳期（7世紀末）に相当するものと思われ、S101が相当する。2期では、S102・SB04・S05・土器溜り02で須恵器、土師器類が大量に出土している。須恵器類のうち重はかえりが消失し、扁平天井部になるもので、高台環は高台が底面部につく時期である。TK53併行期と考えられ、奈良時代後半ごろ（8世紀後半）と考えられる。この時期には、製埴土器（焼埴土器）も検出されており、遺跡の性格を考える上でも興味深い。3期は、須恵器の底面が回転糸切り未調整になる時期と考えられ、赤色塗彩された回転土師器も出土している。平安時代ごろ（9世紀後半）のものと考えられる。この時期の遺構ははっきりしないが、検出された層位を考慮すると、SS02・SB02、SB03が相当するものと考えられる。

3. 地名

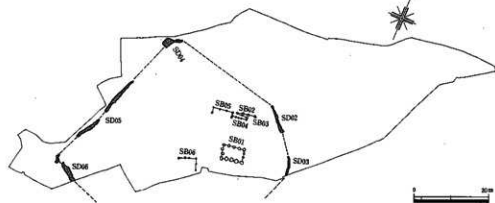
さて、これらの遺跡が立地する泊村石脇は、周辺の小浜・筒地とあわせて大正年間まで「久津賀村」（くづかそん）と呼ばれていた。また、寺戸第1遺跡の南西側の丘陵には「久塚」（くづか）という小字名が残っている。延喜式には古代山陰道に「笏賀駅」の存在が記載されており、興味深い資料である。従来、この「笏賀駅」の比定地には、河村郡笏賀郷が推定され、現在の泊村石脇地区に駅家が置かれていた可能性が高いと思われる。

4. 遺跡の性格について

以上のように、森末地区では、瓦葺き堀の方形区画内に、瓦葺きの獨立柱建物があったと考えられ、遺物には良好な資料は見られないものの、何らかの官衙施設であった可能性がある。出土遺物から推定される年代は、奈良・平安時代から12・13世紀ごろと考えられ、長期間存続していたものと推定される。周辺には、古代山陰道が走っていたと推定され、官衙施設でも、遺存する地名・遺跡の立地等からすると駅家の可能性が高いが、中核まで駅家としての機能を果たしていたかどうか疑問となる。

また、因田国境に立地していることから、「剽」である可能性もあり、さらに、石脇地区には鎌倉時代初期に藤原冷泉宮領の「白書因笏賀庄」が置かれており、荘園経営施設の可能性もある。いずれにせよ、出土遺物に良好なものなく森末地区の遺構の性格については、今後さらに検討を加えなければならないが、森末地区周辺が古代交通の要衝であったことはほぼ間違いないところであろう。

掘り地区でも、平安時代ごろと推定される獨立柱建物がある他、寺戸第1遺跡では獨立柱建物と、堅穴住居がある。出土遺物は、7世紀末から9世紀後半を示すもので、文献に現れる駅家の時期と整合する。この遺跡は、立地的に不利な条件にも関わらず、大型の建物が並んでいると推定され、さらに、赤色塗彩されたいわゆる回転土師器、写影の製埴土器（焼埴土器）などが出土しており、全くの一般集落とは考え難い。獨立柱建物跡のうちSB04は主軸方向がN-86°-Eと、森末地区SB01と一致するなどの共通点も見いだされることから、森末地区と何らかの関係があったことが指摘されよう。（牧本）



挿図343 石脇第3遺跡森末地区古代遺構配置図

第5節 鳥取県内出土の製塩土器について

1. 古墳時代

県内では3遺跡で出土例がある。これらは因幡地方・東伯耆地方で、西伯耆地方での出土は確認されていない。近年鳥取市西大路遺跡で新たに2点出土した。いずれも平底で、粟谷遺跡と同形器とみられる。報告では、兵庫県但馬地域との類似を指摘している。西大路土器遺跡S K41出土のもは、完形で、体部は内湾し、脚は舌状に張り出す。住居内のピットから口縁部を上に向け、古墳状態で出土している。長瀬高浜遺跡S I 81のもは備瀬瀬戸系で、色調は黒褐色である。出土位置は不明であるが、古墳時代前～中期の遺物と共に出土している。この時期の製塩土器については、出土遺跡が少なく、様相は不鮮明である。ただし、現時点では因幡では但馬との関係が、東伯耆では瀬戸内との関係がうかがえる。

2. 奈良～平安時代

古代の製塩土器は、山陰では内田律雄氏により、六連式(円筒形)と鹿嶋山式(逆円錐形)の2種類の焼塩土器と、煎煎用の玄界灘式製塩土器が確認されている。近年、製塩土器の出土が相次ぎ、現時点では県内13遺跡を載えている。

六連式は、山口県の六連島遺跡から出土した焼塩土器の名称で、中国・九州地方に広く分布する。県内では、因幡因守・因幡因守寺・伯耆因守寺から出土例があるとされている。しかし、出土資料の増加に伴い、これまでの六連式や鹿嶋山式とは異なる形態を呈する器形(以下、椀形焼塩土器と呼称する。)がみられる。

この椀形焼塩土器が出土している遺跡は、鳥取市秋草遺跡、岩吉遺跡、古市遺跡、都家町山ノ上通山遺跡などで、現段階では因幡地方からの確認である。口縁部から体部にかけて内湾し、底部にいたる。口縁部はカットされたものと丸くおわるものとあり、概して器壁は厚い。外面には指頭瓦痕が顕著で、波状の口縁もあり、形状は多様である。内面に布目痕があるものともあり、布目にも粗いものと細とみられる細かきものもある。出土遺跡の位置や性格から焼塩土器と考えられる。

逆円錐形の焼塩土器は、先端は尖り気味で内面に段もち、口縁部は短く屈曲し、直立または内傾する。器壁は薄く、口径約10cm、器高約5cmと小型で、明瞭ではないが内面に段があり、わずかではあるが外面も屈曲するものもみられる。段をもつ意図は明らかではないが、これが容器として使用されたとすれば、段は本来外面までおよび、移動の際に紐で固定する際、すべらなくなるためとも考えられる。寺戸第1遺跡から出土しているものは、いずれも内面に布目は観察せず、手摺りによる成形である。鳥根県の鹿嶋山遺跡出土のもの、内面に布目はないが、口縁部は直立し波状で、特徴的な形態である。

逆円錐形の焼塩土器は、九州・中国・畿内・北陸にそれぞれ形を異にしながら分布している。一概にはいえないが、やや大型で器壁が厚く、器高が口径を上回る砲弾形のもの、内面に段もち、器壁が薄く口径が器高を上回る浅い逆円錐形のものに分けられる。前者は瀬戸内を中心に平城京・長岡京にもあり、後者は、福岡・大分・鳥根・石川で認められる。寺戸第1遺跡出土の焼塩土器もこれにあたる。北九州では森田分類II-b類、亀田分類B 2類、小田分類N-b類、鳥根の鹿嶋山式、大分の手崎遺跡出土、石川の寺家遺跡出土の焼塩土器がそれぞれ類似する。これらの時期は、福岡の浜田遺跡は7世紀後半代、鳥根の鹿嶋山式は7世紀代、大分の手崎遺跡は8世紀後半、鳥取の寺戸第1遺跡は8世紀中～後半頃、石川の寺家遺跡は10世紀で、時期が下るにつれて北九州付近から日本海側に沿って影響が及んだものと推察される。

県内の焼塩土器の変遷は、伴発物の時期から考えると、逆円錐形が早くからみられ、続いて椀形が主流となり、器壁は厚く、内面に布目をもつものや口縁部をカットしたり内側に肥厚させるものが多くなるようである。円筒形焼塩土器は、明確な時期の特定ができないが、鳥根では、鹿嶋山式と六連式が同じ遺跡から出土するが、時期的には鹿嶋山式が若干遡るとあり、ここではとりあえず逆円錐形と椀形に重なる幅広い時期としてとらえておきたい。ただし、ほとんどのものは口縁部のみの断片で、可能性としては、円筒形、椀形、厚い逆円錐形状があり、底部もはっきりとしておらず、また、固めに形差のある可能性もあり、これらの問題も含めながら今後の課題としたい。ここでは、県内における奈良～平安時代の焼塩土器は、北九州を中心とする日本海側を通じた形勢変化の影響を受けながら、存地独自の形勢として変化していったと考えたい。

玄界灘式製塩土器は、煎煎過程で使用されたとみられるもので、北九州を中心に分布する。陰田小犬田遺跡・陰田畑畑遺跡から須恵器手法で作られた土師器製が出土している。ただし、陰田小犬田遺跡からは他にも須恵器手法で作られた土師器焼成の重杯が出土しており、早針に製塩土器とも言い難いが、鳥根では玄界灘式に類似する土師器製が出土しており、煎煎土器の可能性はある。県内には、製塩遺跡は確認されていないが、新砂丘により覆われているものと推測される。

時期は、寺戸第1遺跡は須恵器時代から8世紀中～後半頃、秋草遺跡では須恵器の室・hと共伴し、8世紀末～9世紀前半、岩吉遺跡では、S X 01から延長2年(923)の墨書のある題籤軸が出土しており、時期幅はあるが8世紀末～9世紀前半頃と考えられる。その他は時期は不明であるが、周辺の遺構の時期等から、8世紀後半～9世紀前半にかけて出土するようである。

製塩土器の出土する遺跡の性格であるが、焼塩土器の出土遺跡は、これまで指摘されているとおり、いずれも単身もしくは区分寺などからの出土が目立つ。秋草遺跡からは上坂中から須恵器蓋・杯・土師器製が出ており、hの底部に墨書がみられる。岩吉遺跡では、S X 01留り状遺構からコンテナ約1/2輪の製塩土器が出土しており、墨書土器・題籤軸・小椀・人形・糸巻・下駄等出土している。また、遺構外から須恵器の底部に「塙」の可能性のある墨書土器が1点みられる。陰田小犬田遺跡からは、「脛」と墨書された須恵器をはじめ、丹塗土師器・漆付着土器・円面硯・木簡が出土している。

県内の焼埴土器出土地の性格は、因幡・伯耆の国庁・国分寺をはじめ、岩吉遺跡・古市遺跡の部衙または庄園関係の推定地、秋風遺跡・米子城跡6遺跡の「津」としの役割、寺戸第1遺跡・陸田小犬田遺跡の山陰道の沿線、製鉄遺跡の陸田小犬田・陸田広瀬遺跡、銀山真教寺遺跡などの主要産業地・遺付近などが考えられる。九州では焼埴土器の出土する遺跡について、古代の道、あるいは官衙との関係が指摘されている。これをそのまま当てはめることはできないが、遺跡の性格をみれば、食用、祭用、工業用など、塩を特別に必要とする当時の主要な施設であったといえることができる。

寺戸第1遺跡は、古代山陰道に面し、谷を隔てた石碕第3遺跡森末地区からは伯耆間の物置駅と推定される建物跡や溝跡が今回の調査で確認されている。また製埴土器の近くからも同時期の土器留まり02や掘立柱建物跡S B02・03等があり、出土状況も、ピット中で、上向きの須恵器の下に充存の焼埴土器を入れてあり、祭祀的な意味合いが強い。この遺跡は当時の主要な施設であり、食用または祭祀用に塩が必要であり、焼埴土器は特別な意味をもっていたものと考えられる。(八時)

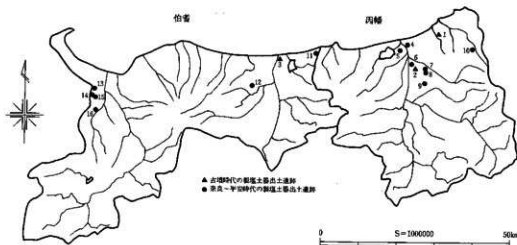


図344 鳥取県製埴土器出土遺跡一覧

遺跡・遺跡名	遺跡名	部屋の特徴・点数	外周調整	内周調整	その他	時期
1 高谷遺跡04	遺跡外	焼形 1点	縦ハケ	縦ハケ		古墳時代前-中期
2 内八郎土器遺跡01	S11E	コップ形 2点	縦ハケ	ウズリ縁ナデ		古墳時代中期後半
"	S K41	焼形 1点	ナデ・横ミガキ	ナデ・横ミガキ	二次焼成・儀付者	"
"	S D50	コップ形 1点	ナデ	ナデ	二次焼成	"
"	遺跡遺跡5	コップ形 1点	ナデ	ハナ後ナデ	二次焼成	"
3 鳥取西河原遺跡 03	S141	焼形留り品 1点	平行タナキ	ナデ		古墳時代前期後半

表30 鳥取県古墳時代製埴土器一覧

遺跡・遺跡名	遺跡名	部屋の特徴・点数	外周調整	内周調整	その他	時期
4 秋風遺跡04	B11区 S K07	焼形 1点	縦横圧成・ナデ	ナデ	二次焼成・儀付者	8 C末-9 C前半
5 石倉遺跡09	S D03	焼形 1点	縦横圧成	布目	二次焼成	8 C末-9 C前半
"	S D-X	焼形 1点	口縁ホット	布目縁ナデ	"	9 C前半
"	S X01	焼形 2点	工具によるナデ	ウズリ	"	8 C末-9 C前半
6 古市遺跡	遺跡外	11-12点	縦横圧成	工具によるナデ		"
7 田嶋岡の跡	同遺跡内	1点	縦横圧成	布目有・無	二次焼成	8 C前半-9 C
8 因幡岡分寺	同遺跡内	1点	縦横圧成・ナデ	布目?	二次焼成	8 C代
9 山ノ上山山遺跡	遺跡外	5-6点	縦横圧成・ナデ	布目有・無	二次焼成	8 C後半-9 C
10 銀山真教寺遺跡	焼形トレンチ内	2点	ナデ?	布目?		9 C前半?
11 寺戸第1遺跡	S S01 P1	4点	縦横圧成	ナデ	二次焼成	8 C中-後半
"	土器留まり02	"	"	"	"	"
"	発倉野上段テラス	1点	"	"	"	"
"	発倉野下段テラス	2点	"	"	"	"
12 伯耆国分寺跡	遺跡外	13点	縦横圧成・ナデ	縦横圧成・ナデ		奈良-平安時代
13 水子城跡6遺跡	遺跡外	1点	縦横圧成	ナデ	二次焼成	奈良-平安時代
14 陸田小犬田遺跡	遺跡外	不明	縦横圧成	縦横圧成	二次焼成	8-9 C
15 陸田広瀬遺跡	遺跡外	3点	縦横圧成	布目有・無		9 C後半
16 塩成遺跡	テラス状遺跡付	縦・内腔形? 16-20点	縦横圧成	同心円状器具		8 C後半-9 C

表31 鳥取県奈良・平安時代製埴土器一覧

註・参考文献

- (1)小林達夫編『縄文土器大観』1～4小学館 1989
- (2)船島取県教育文化財団「南谷大山遺跡II 南谷29号墳」1994
- (3)田辺昭三「須恵器大成」角川書店 1981
- (4)白村教育委員会「白村内遺跡発掘調査報告書」1996
- (5)白村「白村誌」1989
- (6)角川書店「角川日本地名大辞典31鳥取県」1982
- (7)谷若倫郎「山陰系『コシキ彩土器』の垂下方法」『愛媛考古学』9 愛媛考古学協会 1986
- (8)『平成8年度理恵文化財保護技術研修会資料』鳥取県埋蔵文化財センター 1996
- (9)船島取県教育文化財団「南谷大山遺跡 南谷ヒシリ遺跡 南谷22・24・28号墳」1993
- 01 大栄町教育委員会「今地遺跡発掘調査報告書」1981
- 02 鳥取県教育委員会「青木遺跡発掘調査報告書」II 1978
- 03 吾郷信一「吉谷上ノ原山遺跡」米子市教育委員会 1992
- 04 船島取県教育文化財団「鶴田荒神ノ峯遺跡 鶴田壇ヶ谷遺跡 宇代横平遺跡 宇代寺中遺跡」1996
- 05 倉吉市教育委員会「後文遺跡群発掘調査報告書II」1986
- 06 船島取県教育文化財団「長瀬高浜遺跡群」1996
- 07 米田文孝「山陰型壺形土器の再検討—分布とその機能について—」『関西大学考古学研究紀要4』関西大学考古学研究室 1984
- 08 東森市立「飯考—山陰における古墳時代大形壺形土器を中心にして—」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会 1986
- 09 杉井健「山陰型壺形土器と山陰地方」『古文化談義』第33集九州古文化研究会 1993
- 10 亀田修一「中国・四国地方」『陶質土器の国際交流』大谷女子大学資料館編集 柏倉房 1989
- 11 船島取県教育福祉振興会「葛窪遺跡」1994
- 12 船島取県教育福祉振興会「秋玉遺跡」1996
- 13 鳥取県教育委員会・鳥取市遺跡調査団「岩吉遺跡III」1991
- 14 酒井清治「渡来人の移住と模倣土器」『季刊考古学』24号 山岡園出版 1988
- 15 竹宮亜也子「鳥取県倉吉市不入間遺跡検出の竈について」『古文化談義』第35集九州古文化研究会 1995
- 16 中原齊「鳥取県」『弥生・古墳時代の大陸系土器の諸問題』第II分冊 第21回埋蔵文化財研究集会 1987
- 17 清水真一「鳥取県長瀬高浜遺跡出土の初期須恵器とその時期」『古文化談義』第15集九州古文化研究会 1985
- 18 大栄町教育委員会「上種第5遺跡発掘調査報告書」1985
- 19 大栄町教育委員会「上種第6遺跡発掘調査報告書」1985
- 20 山陰考古学研究所「山陰の前期古墳文化の研究I」1978
- 21 宮本長二郎「堅穴住居の壁内施設」『季刊考古学』第32号 雄山閣 1990
- 22 鳥取県教育委員会「青木遺跡発掘調査報告書III」1978
- 23 船島取県教育文化財団「湖山第1遺跡」1989
- 24 大栄町教育委員会「上種第1遺跡発掘調査報告書」1978
- 25 倉吉市教育委員会「夏谷遺跡発掘調査報告書」1995
- 26 『底部調整』と表現される手法と同一である。しかし、底部（基部）の調整はこれ以外にも行われているので、底部を上にして歪みを修正する作業を、ここでは「底部再調整」と呼ぶことにする。
- 04 川西宏行「内跡埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻2号 1978
- 05 近藤義郎編「森山原四つ塚古墳群」八束村 1992
- 06 横田賢次郎 森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について—形式分類と編年を中心として—」九州歴史資料館研究論集4集 1978
- 07 日野尚志「信書国の駅路について」『研究論文集』第38巻第2号 佐賀大学教育学部 1991
- 08 中林保「因幡・信書の町と街道」富士書店 1997
- 09 鳥根県教育委員会「門遺跡」1996
- 10 内田律雄「3 鳥取県・鳥根県」『日本土器製塩研究』近藤義郎編 青木書店 1994
- 11 黒内内の製塩土器—一覧表は、基本的に報告書、または註釋文獻によるが、6. 古市遺跡、9. 山ノ上通山遺跡、10. 銀山真教寺遺跡、13. 広瀬ヶ平遺跡、16. 陰田広畑遺跡、17. 福成早里遺跡については、未報告資料であるため、本報告とは異なる。
- 12 山中章「古代宮都の『製塩土器』小考」『杉山信三先生米寿記念論集』平安京歴史研究1993
- 13 「製塩」土器質納形壺h(連)の復元を参考にした。逆円錐形の製塩土器(口縁部は平坦)の場合、交互だけでなく可能性として合わせ口の向きも考えられる。
- 14 大社町教育委員会「熊鷹山遺跡」1984
- 15 森田勉「焼塩査考」『太宰府考古学論叢』下巻 吉川弘文館 1983
- 16 亀田安「北九州市内出土の製塩土器について」『研究紀要』第6号 北九州市教育文化事業河塚埋蔵文化財調査室 1992
- 17 小田和利「製塩土器からみた律令集落の様相」『九州歴史資料館研究論集21』1996
- 18 田中裕介「手崎遺跡・大部遺跡」大分県教育委員会 1992
- 19 石川県埋蔵文化財センター「寺家遺跡発掘調査報告」I 1986
- 20 玄海灘式土器については、鳥根県で出土例がある。近年、鳥取県西部でも製塩土器の出土が相次ぎ、陰田遺跡群では、六邊式の製塩土器の他に玄海灘式土器の可能性のある須恵器手法の土器群の出土を報告している。『陰田遺跡群』鳥取県教育文化財団 1996
- 21 宮本正二「製塩土器の分布と流通」『考古学研究』27巻2号 1980
- 22 船島取県教育委員会「栗谷遺跡発掘調査報告書II」1989
- 23 船島取県教育福祉振興会「西大路土居遺跡発掘調査報告書」1992
- 24 船島取県教育福祉振興会「西大路土居遺跡発掘調査報告書II」1997
- 25 船島取県教育文化財団「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書IV」1982
- 26 船島取県教育福祉振興会「秋玉遺跡」1996
- 27 船島取県教育福祉振興会「岩吉遺跡発掘調査報告書IV」1997
- 28 船島取県教育文化財団「米子城跡6遺跡」1996

調査年度	調査地点	調査内容	調査結果	調査方法	調査者	調査機関	調査期間	調査費用	調査成果	調査報告	調査備考
1973	701	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
1974	702	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
1975	703	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
1976	704	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
1977	705	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
1978	706	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
1979	707	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
1980	708	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
1981	709	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
1982	710	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
1983	711	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
1984	712	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
1985	713	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
1986	714	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
1987	715	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
1988	716	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
1989	717	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
1990	718	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
1991	719	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
1992	720	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
1993	721	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
1994	722	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
1995	723	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
1996	724	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
1997	725	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
1998	726	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
1999	727	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
2000	728	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
2001	729	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
2002	730	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
2003	731	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
2004	732	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
2005	733	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
2006	734	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
2007	735	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
2008	736	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
2009	737	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
2010	738	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
2011	739	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
2012	740	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
2013	741	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
2014	742	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
2015	743	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
2016	744	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
2017	745	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
2018	746	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
2019	747	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
2020	748	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
2021	749	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10
2022	750	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10

挿表33 石巻第3道筋木地区出土土器観察表(2)

遺物番号	遺物名	出土位置	出土時期	種類	材質	長さ (cm)	最大径 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	形製上の特徴	備考	実測者番号
S 101	J 1	25	壇上中	勾玉	石化した蛇紋石	2.9	1.0	0.9	5.4	C字状を呈す。前後内凹。縁部両側穿孔。変形壊れ。		野崎92
S 101	S 1	293	壁溝内	石鏝	凝灰岩山吹	6.3	4.7	1.60	△63.5	平歯内凹形。断面長方形を呈す。両側を打ち欠くものか。両面一塵欠。		山本C15
S 101	S 2	285	壁溝内	磨石	片岡石安山岩	6.15	4.7	4.10	170	磨石を呈す。前後内凹。両面に磨面。		中塚11
S 103	S 3	47	壇上中	磨石	流紋岩岩塊	15.5	6.2	7.2	850	平面不整形六角形。断面長方形を呈す。主な断面は2面あり。よく使われている。		野崎17
S 103	S 4	65	壇上中	磨石?	アブライト	11.0	6.7	5.7	520	変形を打ち欠いて楕圓形にしている。前後内凹形を呈す。両面に磨面あり。		植田116
S 103	S 5	196	床面	磨石	アブライト	9.95	5.45	2.7	253	扁平六角形を呈す。一方面に磨面あり。		中塚3
S 102	S 6	102	壇上中	磨石	凝灰岩山吹	6.2	5.50	2.50	△105	扁平。一方を欠く。主な断面は2面あり、よく使われている。		中塚10
S 105	S 7	507	壇上中層	磨石	アブライト	15.2	7.53	4.0	700	扁平六角形を呈す。両面に磨面あり。		中塚7
S 105	S 8	346	壇上中層	磨石	凝灰岩山吹	6.8	4.0	2.9	△40.4	楕圓形あり。断面は2よく使われている。		野崎10
S 105	S 9	345	壇上中層	石鏝	無垢長安山岩	1.3	2.5	0.25	0.2	小形の円形無垢石鏝。		野崎4
S 105	S 10	248	壇上中層	削片	無垢長安山岩	2.08	1.7	0.4	0.9	無垢長安山岩削片。磨面あり。		野崎3
S 108	S 11	976	壇上中層	石鏝	凝灰岩	5.6	4.7	1.1	△30.4	扁平不整形内凹形を呈す。一方端を打ち欠く。裏面磨面。		植田120
S 501	S 12	231	壇上中層	磨石	アブライト	7.45	6.7	5.15	305	平面・断面ともに楕圓形を呈す。両面に磨面あり。		中塚12
S 501	S 13	230	壇上中層	磨石	流紋岩	5.2	3.1	1.2	△25.6	楕圓形あり。断面は2面あり、よく使われている。		山本C130
S 504	S 14	978	床面	石鏝	安山岩	6.0	3.3	1.9	89	平歯内凹形。断面長方形を呈す。両側を打ち欠く。		植田118
S K07	S 15	823	床面	石鏝	無垢長安山岩	3.0	6.15	0.85	14.4	楕圓形あり。断面。		野崎6
S K07	S 16	680	壇上中層	磨石	アブライト	10.3	8.9	5.2	798	平面・断面ともに楕圓形を呈す。平面に磨面あり。両面に磨面あり。		野崎2
遺物外	S 17	547	壇上中層	石鏝	アブライト	11.4	9.9	5.1	974	平面内凹形。断面内凹形を呈す。上面に磨面あり。		植田115
遺物外	S 18	607	D 7	磨石	アブライト	8.5	5.1	3.6	280	平面長方形。前後内凹形を呈す。一方面に磨面あり。		野崎8
遺物外	S 19	1	K・L10	磨石	流紋岩岩塊	8.4	5.6	6.1	△380	ほぼ立方体を呈す。主な断面は5面あり。断面に磨面あり。約1/3欠。		中塚9
遺物外	S 20	339	D 8	磨石	無垢長安山岩	10.9	5.5	2.7	△348	小形で扁平。多少欠。		植田119
遺物外	S 21	491	G 6	磨石	無垢長安山岩	3.9	4.3	3.1	△57	磨石型磨石。		野崎87
遺物外	S 22	261	G 5	石鏝	凝灰岩	2.6	1.88	0.4	1.2	円形無垢石鏝。欠陥部を欠く。		野崎1

挿表57 寺戸第2遺跡出土土器類表(5)

遺物番号	遺物名	出土位置	出土時期	種類	材質	長さ (cm)	最大径 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	形製上の特徴	備考	実測者番号
S 102	F 1	174	床面	不明磁器		6.1	5.5	1.2		磁器を呈す。		山本C132
S KON	F 2	731	壇上中層	鉄釘		△3.8	1	1.0		鉄線瓦片形。断面方形。		野崎6

挿表58 寺戸第2遺跡出土土器類表

遺物番号	遺物名	出土位置	出土時期	種類	材質	長さ (cm)	最大径 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	形製上の特徴	備考	実測者番号
S 102	F 1	174	床面	不明磁器		6.1	5.5	1.2		磁器を呈す。		山本C132
S KON	F 2	731	壇上中層	鉄釘		△3.8	1	1.0		鉄線瓦片形。断面方形。		野崎6

挿表59 寺戸第2遺跡出土金属器類表

遺跡名	遺物番号	取上位置	出土位置	種類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	形態上の特徴	備考	実測者番号
S 101	S 1	6	床面	磁石	無彫長方形山石	10.6	7.4	5.4	790	両端を欠く。両側面の砥面を2箇所持つ。		野崎54
S 101	S 2	221	埋土下層	磁石	平花両面研	12.8	4.8	3.9	233	欠損しており、三角部状を呈す。砥面は2面有り、大抵使い込まれている。		山本く187
S 101	S 3	219	埋土下層	磁石	安山岩	9.4	8.3	3.3	400	扁平な半整形を呈す。中央に敲打による凹面有り。		野崎177
S 101	S 4	210	埋土下層	磁石	安山岩	6.7	5.4	△4.1	300	大きく欠損している。先端部凹面を呈す。両端部敲打面有り。		野崎107
S 101	S 5	669	船体跡	磁石	安山岩	6.9	5.4	4.4	240	両端部を呈す。両端部敲打面有り。中央部敲打による凹面有り。		野崎178
S 101	S 6	1065	床面	白石	安山岩	39.8	25.0	8.6	16.3kg	扁平で角の取れた長方形を呈す。両側面に砥面が1箇所あり。		松本171
S 102	S 7	518	床面	磁石	洗砂岩	18.0	5.25	6.3	870	両端部を呈す。両側面は両側面と平面の3面あり。両側面の2面はよく使い込まれている。平面の砥面には擦痕が残る。		野崎56
S 102	S 8	516	床面	石鏡	安山岩	9.1	5.2	2.1	165	長條形を呈す。両端部を打ち欠く。		山本く188
S 102	S 9	485	埋土中	水磨砂山鏡	サマイト鏡	10.0	4.5	1.2	65.5	両端部を欠損する。刃部の加工は粗い。		野崎179
S 103	S 10	118	埋土上層	磨製石斧	玄武岩	7.1	5.85	3.1	120	基部欠損。刃部は鋭利となる。		野崎37
S 106	S 11	441	F 1 内	磁石	安山岩	16.8	8.5	7.4	1620	半整形凹形を呈す。両先端部・平面部に敲打面がある。		野崎176
S 107	S 12	596	埋土下層	磁石	無彫長方形山石	13.7	7.4	4.6	760	半整形凹形を呈す。両端部・両側面に敲打面有り。平面部には敲打による凹面がある。		山本く207
S 107	S 13	412	埋土下層	磁石	角閃石安山岩	8.4	5.7	4.0	260	長條形を呈す。両端部・平面部に敲打面がある。中央部は敲打面は凹面となる。		野崎175
S 107	S 14	460	埋土中	磁石	安山岩	3.1	5.33	2.5	62.5	半整形している。端面は凹面になっている。		山本く186
S 107	S 15	827	F 1 内	玄武岩	角閃石安山岩	17.4	15.80	8.9	4850	扁平な凹形を呈す。中央部に敲打面がある。		野崎183
S 113	S 16	906	埋土下層	磁石	磨製花崗岩	5.2	3.8	1.7	58.0	半整形している。扁平な長方形を呈す。上左角部は4面有りよく使い込まれている。		野崎186
S 01	S 17	22	埋土上層	磁石	磨製花崗岩	9.4	5.3	2.9	220	半整形を呈す。両先端部は3面有り。よく使い込まれている。		野崎73
S D02	S 18	559	埋土中	磁石	無彫長方形山石	12.3	6.9	4.3	490	長條形を呈す。先端部・平面部に敲打面。一方端を欠く。		野崎61
S D02	S 19	585	遺構上層	石鏡	無彫長方形山石	11.2	7.3	2.8	360	扁平な凹形を呈す。一方端を欠く。平面部敲打面あり。		野崎58
遺構外	S 20		調査区一帯	磁石	磨製花崗岩	8.3	6.2	3.2	185	大きく欠損している。砥面はよく使い込まれている。		野崎27
遺構外	S 21	100	F 3 G	石鏡	角閃石安山岩	9.3	5.3	1.6	95	扁平な半整形凹形を呈す。両端部を打ち欠く。		野崎35
遺構外	J 1	88	G 3 G	勾玉	蛇紋石	3.6	1.3	1.0	11	じ字状を呈す。複数個取り。両面穿孔。		野崎185

挿表66 石鏡第1遺跡出土石器観表

遺跡名	遺物番号	取上位置	出土位置	種類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	形態上の特徴	備考	実測者番号
S 102	F 1	434	埋土下層	不明鏡器	4.5	1.3	0.5		板状を呈す。		野崎180
S 102	F 2	687	床面	鉄鏡器	4.3	3.4	0.9		板状のものが3枚付着している。		野崎237
S 107	F 3	712	船体中	刀子	2.8	0.8	0.5		刀子等先端部。刃部はやや湾曲する。断面三角形を呈す。		野崎237
S 113	B 1	863	埋土上層	耳環	3.1	2.7	0.7	23.8	じ字状を呈す。全面磨光が施される。		野崎65
S 113	F 4	929	埋土下層	磨製鉄器	19.1	2.1	1.6	49.8	刃部僅かに中広がり。断面は狭くなる。断面長方形を呈す。		野崎180
遺構外	C 1	466	F 6	青水晶透	2.29		0.12	1.9			野崎114

挿表67 石鏡第1遺跡出土金属器観表

むすびにかえて

平成8年度及び9年度にかけて、国道9号改築工事に伴う発掘調査を行ってきましたが、このうち、石鏡第3遺跡森末地区、同操り地区、寺戸第1遺跡、寺戸第2遺跡、石鏡第1遺跡の調査によって、弥生時代から中世にかけての集落及び官衙施設をはじめとする遺構、遠く朝鮮半島との関係が窺われる陶質土器が出土するなど、当時の泊村の歴史のみならず、国内の歴史を考える上でも大変貴重な成果を挙げることができました。

ここに関係各位のご協力により、発掘調査報告をまとめることができました。本報告書は、事実記載に力点を置き、報告の責を果たすよう努めたつもりであります。本報告書に収めた内容が、この地域の研究の一助となれば幸いです。

最後に、調査の実施及び報告書の作成にあたり、指導、協力、助言をいただいた各位に、深く感謝申し上げます。